

いよ語り伝えたいこと

— 三鷹戦時下の体験 —

三鷹市

三鷹市非核都市宣言

過ぐる第二次世界大戦において、広島、長崎に対する原子爆弾の投下により、人類史上かつてない惨禍を受けた我が国は、憲法で恒久平和を高らかに宣言し、平和を愛するすべての国の人々の公正と信義に信頼して安全と生存のための努力を今日まで続けてきた。

しかしながら、核を保有する諸国は、核のない平和な社会を実現しようとする全世界の人々の声を無視し、依然として核軍備の増強を続けている。

ここに三鷹市は、核戦争に勝利はなく、人類の滅亡のみあることを銘記し、我が国の核に対する国是ともいうべき「持たず・つくらず・持ち込ませず」の非核三原則が、平和を愛するすべての国の原則となることを希求し、非核都市を宣言する。

昭和 57 年 3 月 31 日 三鷹市議会議決

いまを新たな“戦前”にしないために

戦争という大きな嵐のなかで押しつぶされていった一人一人の小さなしかし大切な想いがある。いまこそ語り伝えたい、現在を新たな戦前にしないために……。

- 表紙 -

新川交差点近くに残るプラタナスの木

二十年五月二十五日の空襲で木の中心部が焼け外側だけで生き続けています。今も春には多くの葉をつけます。

いまを新たな“戦前”にしないために

戦争という大きな嵐のなかで押しつぶされていった一人一人の小さなしかし大切な想いがある。いまこそ語り伝えたい、現在を新たな戦前にしないために……。

……何年たっても忘れる事のできないあの戦死公報。どうしても消えることなく私は一生心に抱いて、年老いた今でも一日として忘れたことはありません。ほんとうに戦争はこわい。

「戦死の公報」より

……空襲警報解除になって帰って見ると、家はあとかたもなく燃え尽きていました。姉が持ち出した畳付きの下駄も落としながら逃げたらしく黒焦げでした。

「戦時下に過ごした青春時代」より

……女手一つで育てて来た息子を軍国の母なるが故に、涙一つも見せずに見送って来たのです。明日からは何をたよりに生きてらよいのか判りません。家へ帰るまでは決して泣きません。家へ帰ったら独りで思いきり泣かせていただきます。母親なんですから。

「一兵士の述懐」より

いま語り伝えたいこと

「いま語り伝えたいこと 三鷹戦時下の体験」復刻版の発行にあたって

平成十七年（二〇〇五年）の今年には、戦後六〇年の節目の年に当たります。戦争を体験した人々も多くはこの世を去り、遠い過去の歴史と受け止められる傾向が見られます。けれども、私たちが暮らすここ三鷹にも確かに戦争があつたという事実を忘れてはなりません。三鷹にも幾度も空襲があり、何軒もの家が焼失し、そのたびに人々は身を守るために防空壕に逃げ込みました。食料不足で遠くまで食べ物を買出しに行ったり、食糧等の配給をもらうために長い行列ができた年月がありました。

こうした、ともすると風化しつつある戦争の記憶を次の世代に語り継ぐため、昭和六十一年（一九八六年）、「いま語り伝えたいこと」が発行されました。この本の中では、戦争当時の三鷹の様子が、そこで暮らしていた人の言葉で語られています。いつ、爆弾が自分の上に降ってくるかわからないという不安の中で暮らしていた日々の様子が、鮮やかに伝わってきます。

本を発刊するにあたっては、井上五郎さん（平成十三年七十七歳で残念ながら御逝去）を委員長とする六名の編集委員をはじめ多くの方々のご尽力がありました。貴重な写真をお持ちの方を探し出し、当時の話を聞き、編集され、この本を作られたことに対して、改めて心からの敬意を表します。

この本を手にとってお読みいただくことで、皆さんに「平和」の尊さを、今一度考え、再確認していただければ幸いです。

す。二度と戦争を起こさないために、平和を願う私たち一人ひとりの気持ちと行動が大切です。

三鷹市では昭和五十七年（一九八二年）に「非核都市宣言」が市議会で議決され、平成四年（一九九二年）に「三鷹市における平和施策の推進に関する条例」が制定され、一貫して平和のための取り組みを行っています。

私たちの周辺で戦争の記憶を残すものが次第に少なくなる中、大沢の調布飛行場近くに当時の門柱があります。平成十五年（二〇〇三年）に歴史的な資料として保存され、説明のプレートが設置されました。新川交差点近くにあった、当時空襲で焼け傷を受けたプラタナスは、仙川公園に移植され平和の像の隣で今は元気にその葉を広げています。

この復刻版の発行と併せて、今年には三鷹に残る戦跡を題材にしたビデオ「そして六〇年〜三鷹のまちは戦場だった〜」も作成し、今も三鷹に残る戦争の記憶を映像として残しました。

二十一世紀のこれからを真に戦争のない世紀とするため、引き続き努力していくことをお誓いし、復刻版の発行の言葉としたいと思います。

二〇〇五年（平成十七年）八月

三鷹市長

消原慶子

序

昨年（昭和六十一年）の十月、国連総会は昭和六十一年（西暦一九八六年）を「国際平和年」と定めました。この意義深い年に「いま語り伝えたいこと」が刊行できましたことを心からうれしく思います。ご承知のよう（昭和六十一年）三月、市議会において非核都市宣言が可決され、この宣言の主旨に沿って、各種非核・平和事業に取り組んできております。この記録集もその一環として、戦争の記憶を後世に語り伝えたいと考え、企画したものであります。

戦争が終って四十年たったいまでは、あの頃の苦しさや悲しみを体験した人、肉身を失った遺族としてやり場のない憤りにも耐えてきた先輩たちも少なくなってきました。

あの頃から見れば、いまは別世界のような平和で不自由のない毎日を送っていますが、それはすべて平和だからこそだと思えます。

それだけに当時、明日の生命もわからない中で、着るもの、食べるものすべてが手に入らない、働き手はほとんど戦地に送られる、子供たちは勉強どころではないといったような不安な毎日を過ごしてきたこと、空襲下のこと、そして最後には世界で唯一の原爆を落された日本のこと、そうした時代の三鷹の庶民の暮らしを綴られたこの記録は、これからの世代に残す平和のための貴重な文獻で

あるといえましょう。

この記録の編さんに当って頂いた六人の編集委員の皆さんのひたむきなご努力と取材や資料の提供に御協力賜った市民の皆さんのお陰でこの記録を世に送ることができ、ほんとうに有難うございました。

昨年八月八日、市の平和祈念講演会にお招きした早乙女勝元先生が、色紙に書きしるされた言葉を紹介し、序にかえます。

その火を消すな

毎日 毎日 たき木を くべろ

昭和六十一年三月

三鷹市長 坂本貞雄

刊行にあたって

井上 五郎
三鷹戦時下の記録編集委員長

この度、坂本市長さんから戦時下の記録集編集の依頼を受けた私達六人のスタッフは、このことを是非やっておかねばならないと考えておりましたので、一同、よろこんでお引き受けいたすことになりました。

三鷹市内における戦争体験を、どの方向から記述し、どなたからお話をお聞きしたらよいか大変心配でした。

三鷹市内の体験に限定ということになると現在十六万市民の中から当時の人口約四万人の記憶を掘りおこすこととなり、年齢も高く取材難を予想しながら広報で呼びかけました。

ところが案ずるより産むがやすしの譬えのとおり、幸いにして積極的にご協力を申し出られた方、是非これだけは後世に伝えて欲しいと、各職域、地域等からのご投稿を得てようやくまとめることができました。

三鷹市における戦争体験というと、飢餓と爆撃との戦い、いや銃後の女と食生活の戦いであったと

言えましょう。

戦後四十年、くるしみに耐えた体験と、戦争にたいする反省が徐徐にうすれてゆくなかで、或る一部の事実をつたえて、此れが何をものがたっているかを、知っていただけたら幸いでありませう。

今、ここに、スタッフと市担当職員に代り多数の方々のご協力に感謝と御礼を申し上げる次第でございます。

編集方法及び凡例

- 一、『いま語り伝えたいこと』は、第二次世界大戦における三鷹市内での戦災の状況（空襲、生活等）を市民の体験を通して記録しようとするものである。
- 一、本書の編集については、市内外の学識者・編集経験者六名からなる「三鷹戦時下の記録編集委員会」がこれにあたった。
- 一、体験記録の収集については、市報・チラシ等により、広く市民に寄稿を呼びかけるとともに、当時の事情に詳しい方々に依頼し行つた。
- 一、体験記録中の人名・地名については、原文のまま掲載した。
- 一、用字用語については、歴史的仮名づかい及び旧字体は、原文のままとし、旧字体にはルビを付した。
- 一、空襲・戦災・軍事等の戦時用語で、難解と思われるものには、各体験記録の後に注釈を施した。
- 一、各体験記録中の共通の固有名詞（戦闘機等の名称）の表現は統一した。
- 一、戦争名は原文のままの表現とした。
- 一、聞き取りによる原稿は、取材者の氏名を明記した。なお、編集委員会による直接聞き取りについては、省略した。

一、寄稿者の年齢は、昭和二十年当時の年齢とした。

一、体験記録中、同じ事柄についての記述で、日時、被害件数等で異なる表現がなされている部分が

あるが、原稿のままとし、訂正は行わなかった。

一、年齢をあらわす「歳」については略字の「才」を用いた。

目次

市民の見た戦争（体験記録編）

空襲の思い出

生き埋めになった防空壕

金川富美子・・・ 下連雀二丁目・・・・・・当時二十四才・・・・・・・・・ 3

消防団員として

西田 賞・・・・ 下連雀二丁目・・・・・・当時三十七才・・・・・・・・・ 6

戦時中の思い出

渡辺鉄次郎・・・・ 下連雀三丁目・・・・・・当時三十七才・・・・・・・・・ 10

三鷹駅前の小さな検査場

船木藤太郎・・・・ 三鷹駅北側（当時）・・・・・・当時三十六才・・・・・・・・・ 13

空襲

吉野 泰平……………野崎……………当時二十一才……………

調布飛行場

佐伯時太郎……………大沢五丁……………当時三十七才……………

取材者 榛澤茂量

大沢でただ一軒全焼の我が家

伊東 峯吉・イト……………大沢四丁目……………当時四十二才・三十六才……………

取材者 榛澤茂量

終戦四十年を迎えて

島田 惣八……………中原四丁目……………当時二十七才……………

明星学園での戦時体験の断片

原田満寿郎……………明星学園教師(当時)……………

当時の生活

当時の日記から ～恋人たち～

生田 テル……………井の頭一丁目……………当時二十一才……………

終戦の詔勅が下る迄

43

33

29

25

23

17

我が家の明暗人生……	福島 きん……	下連雀三丁目 ……	当時三十三才 ……	49	
戦時下の回想	小峰みさを……	牟礼一丁目 ……	当時二十才 ……	56	
古くなつていく記憶	大関 律子……	上連雀五丁目 ……	当時二十一才 ……	61	
警備召集と野崎の火災	小高 艶子……	牟礼二丁目 ……	当時三十一才 ……	67	
「三鷹駅前での戦争体験」座談会	六戸 利武……	野 崎 ……	当時二十五才 ……	73	
天文台と戦争	山本 誠・伊藤 孔介・池上 忠雄・寒川 礼子	蔵田まつ子・相賀 しず・五十嵐優三……	下連雀三丁目 ……	75	
戦時下の子育て	藤井 茂……	大沢天文台勤務(当時) ……	取材者 榛澤茂量 ……	当時二十一才 ……	88
食べ物と子供	相賀 しず……	下連雀三丁目 ……	当時三十一才 ……	92	

榛澤	はつ……	大沢一丁目	……	当時三十才	……	95
祈りの血文字						
井上	治子……	深大寺	……	当時十九才	……	102
学びやで						
井上スマ子……	深大寺	……	当時十才	……	……	108
戦時下に過した青春時代						
井上	まき(当時・中原)高橋	文子(当時・野崎)	……	……	……	112
戦死の報らせ						
白石	重雄……	中原二丁目	……	当時三十九才	……	118
戦死の公報						
麻生	サキ……	中原三丁目	……	当時三十四才	……	122
戦時中の思い出	昭和十三年～二十一年					
鈴木	ヒロ……	深大寺	……	当時二十三才	……	126
戦時でのお産について	助産婦として過ごした戦中戦後					
滝田	妙子……	新川六丁目	……	当時四十才	……	132
戦時下の尼寺で						
長沢	祖川……	北野四丁目	……	……	……	137

戦時下の幼稚園	140
三鷹幼稚園	
戦時下の学校	142
佐藤 茂	
野 崎	
当時二十四才	
戦時下の青年団活動	150
高橋 喜助	
牟礼二丁目	
当時二十七才	
町会長だった義父の苦勞	157
黒川田鶴子	
深 大寺	
当時二十八才	
戦時下に町長として生きて	159
高橋 勝義	
新川三丁目	
当時四十六才	
第二次世界大戦末期の三鷹町役場での業務の一部	167
石田 太郎	
(当時町役場勤務)	
当時三十才	
町役場職員として体験したことども	172
栗山 巍	
(当時町役場勤務)	
当時三十四才	
三鷹を中心とした空襲と医療事情	180
日華時変と太平洋戦争時の思い出	
平嶺 辰美	
下連雀三丁目	
当時四十一才	

応召した梵鐘のこと等

福井英昭……………大沢二丁目……………

農作物の供出

峯岸徳太郎……………大沢六丁目……………当時四十四才……………

農家の暮らし

伊藤美太郎……………北野一丁目……………当時四十一才……………

軍事施設（市内の軍・軍需工場・土地買収・防空壕）

一兵士の述懐

本間 紅……………大沢高射砲陣地（当時）……………

調布飛行場

海老沢竹貞・キン……………大沢五丁目……………当時四十五才・四十二才……………

電波探知基地

伯母 豊・玄之助……………大沢一丁目……………当時十三才・当時十一才……………

取材者 榛澤茂量

帝都防空作戦

取材者 榛澤茂量

206

203

199

194

191

187

山本 茂男……………	当時二十九才……………	取材者 榛澤茂量……………	208	
二四四戦隊				
川田静二郎……………	当時二十五才……………	取材者 榛澤茂量……………	216	
大日本航空中央航空研究所				
大日本航空株式会社(研究所の前身) 社史より……………			219	
中島飛行機三鷹研究所				
宮田栄次郎……………	大 沢……………	当時二十九才……………	取材者 榛澤茂……………	223
無我夢中だった学徒動員				
中村 義一……………	当時十四才……………	取材者 榛澤茂量……………	227	
私の学徒動員				
鈴木 静子……………	当時十二才……………	取材者 榛澤茂量……………	229	
忘れ難い二十年				
金子トシ子……………	当時十四才……………	取材者 榛澤茂量……………	230	
三鷹戦時下の記録				
金子 義雄……………	上連雀八丁目……………	当時二十七才……………	232	
東京帝国大学文学部勤労報国隊				
菱刈 隆永・黒住 武……………	中島飛行機三鷹研究所勤務(当時)……………	当時四十一才・二十四才……………		

	取材者 榛澤茂量	236
新川本町の強制買収			
	大木 秋男・海老沢 清 中原三丁目 当時五才・十三才
	取材者 榛澤茂量		
ふるさと三軒屋			
	竹内 幸助・キヨ 深大寺 当時四十一才・四十才
	取材者 榛澤茂量		
防空壕			
	榛澤 藤雄 大沢五丁目
防空壕			
	榛澤 ミツ 大沢五丁目 当時三十四才
屋敷の下に防空壕			
	指田 要輔 大沢二丁目 当時三十四才
	取材者 榛澤茂量		
巨大防空壕			
	川口 三八 仙川二丁目 当時十二才
	取材者 榛澤茂量		
野川公園の松と中島知久平			
	村越惣十郎 当時三十五才 取材者 榛澤茂量
第一大隊東部一九〇三部隊			
			255
			252
			249
			247
			245
			243
			240
			236

本間 誠・内山勝広……取材者 高畑キヤ子・榛澤茂量……

258

資料編

1、学校日誌に見る戦時下の三鷹

- (1) 昭和二十年度の三鷹第二国民学校の学校日誌から …… 265
- (2) 明星学園の学校日誌から …… 271
- (3) 学徒動員日誌 …… 282
- (4) 保護者への ”お知らせ“ …… 287
- (5) 戦線への慰問文と戦線からの返礼 …… 290

2、当時の新聞記事から …… 295

3、カルタに見る戦争と平和

- (1) 愛国コドモカルタ …… 301
- (2) 三鷹平和カルタ …… 304

4、その他

(1) 戦時下の学校系統図 309

(2) 戦時下の町内会 310

(3) 武蔵野新聞連載記事から 312

(4) 米軍機から投下された伝単 321

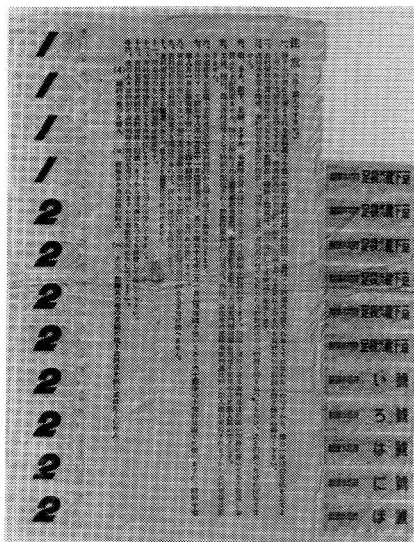
5、年 表 324

6、被災地図 332



[昭和19年当時の三鷹全景]





衣料切符



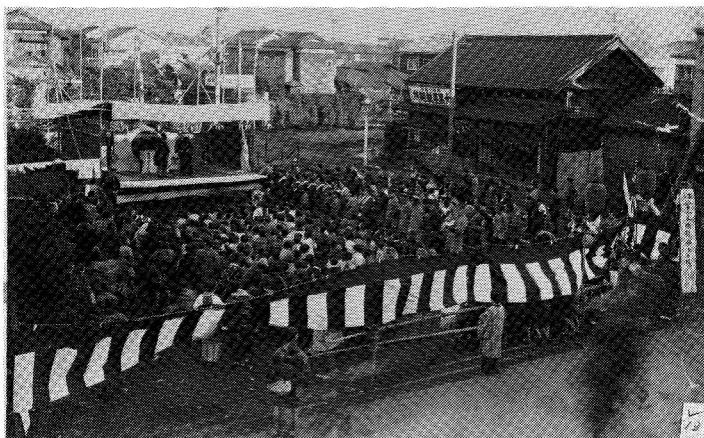
出征



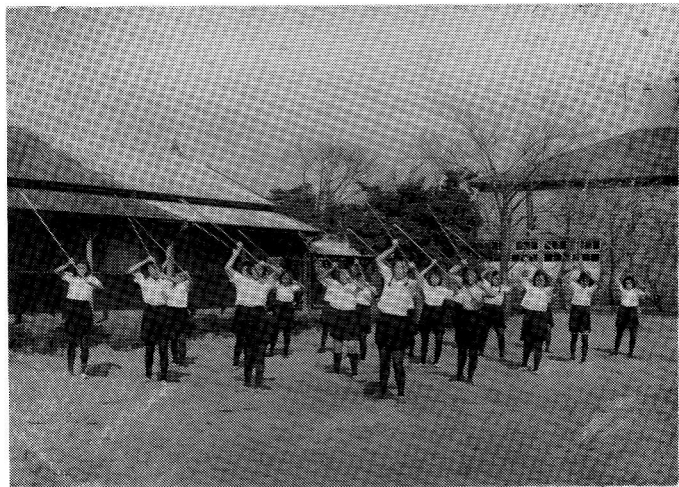
〔当時の三鷹の田園風景（大沢）〕



〔防空演習風景〕



〔出征兵士遺族慰安大会（現在の東洋信託横にあった広場にて）〕



〔女学生の薙刃訓練（昭和19年明星学園）〕



〔当時の子供達〕



〔防空演習（当時の富士見町会の人々）〕

I
市民の見た戦争（体験記録編）

空襲の思い出

生き埋めになった防空壕

金川 富美子

下連雀二丁目当時二十四才

昭和十八年五月に神戸から三鷹に引越してまいりました。其の時丁度長男がお腹に居りまして、十一月末に生まれました。其の頃から度々東京の上空にはB29のお客様が見える様になりました。其の後空襲がはげしくなり、丁度三鷹から東南方面に川崎、鶴見などでの空襲の折は、夜空に眞赤な炎、B29から落とされる焼夷弾のかたまり、途中でバラバラと広がって下に落ち、パツと炎が広がる様はお気の毒ですが、恐ろしいと云ふかきれいに見えました。今でも目に浮んでまいります。

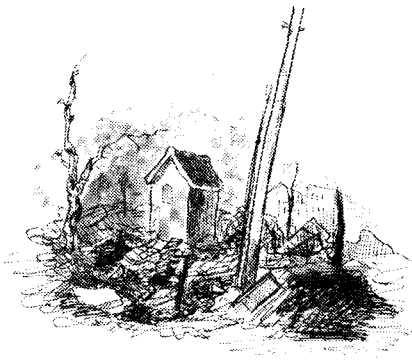
其の後自分にも恐ろしい事が起りました。日増しに空襲がはげしくなり、二十年四月一日(二日午前一時過ぎ)の夜、立川方面に空襲が有りまして、三鷹から西方に当り隣組の方と島に出て見て居りました。眞赤な炎が上がり、次々と飛行機が立川方面に行っていたのが、急に一機が三鷹方面にむかって来ました。丁度私達を目がけて来た感じでした。何をする間もなく照明弾テウがぼかぼかと十コ位でしようか落ちて来たのでびっくり、それとばかりに防空壕にもぐりました。途端に恐ろしい轟音と地ひびきで体中が土にしめつけられ、隣の家はべしゃんこに潰れ瓦は頭の上にとんで来るし「もうおしまいか」と思いました。ところが私の家の防空壕は主人が病気でしたので私とおぢいさんで掘った

もので、浅かった為に、お陰でちよつと体を動かすと自力で出られそうでした。体をもがいてやつと出る事が出来ました。

早く安全な所へと四小のそばの木の下に居りましたが、兵隊さん達がさわがしく隣組の人達をしらべにきました。大変な事にいも穴式に堀った防空壕は全部生埋になり、私の組内でも十二人もの死者が出ました。

亀戸から焼け出されて、わざわざ三鷹に来られた方々は本当にお気の毒でした。急いでそれを堀るにも入口がわからないので、私があちこち入口を探し一時も早くと堀ったのですが、皆圧死状態で堀出され、空地に寝かされ皆で十七、八人亡くなつたと思います。一人一人お線香を上げました。

隣組の馬部さんのお宅は妹さん一家、と自分の家族、十人の遺体を引取られ、御主人だけが守備兵に出られてゐて助かり、本当にお気の毒でした。大沢に実家があるのですが、今どうして居られるでしょうか。後で分かつた事です掛が250Kキの時限爆弾が初めて落されたそうで、未だ不発弾が有るの



で家に入つてはいけないと云う事で、日中は深田様のお庭に皆でござを敷いてお世話になり、夜になつて四小の裁縫室に一週間寝泊りして何も出来ず、おにぎりを頂いて過しました。其の折に大宰様の奥様も子供さん連れて一緒でした。四月二日と申しますと、明方は未だうすら寒いものですから、向い側に阿南大将のお宅が有りまして、家族の方がコンロに火を入れて「お寒いでしょう」と持つて来て下さつたので有難く思いました。

家の方は爆風のため土台からずれて、市役所から住むのは不可能と云はれ、今の所に移転してまいりました。三鷹でもほんの一部にしか空襲を受けなかつたのですが、其の中に入り運が悪いのか、命拾いをしたので運が良かったのかもしれませんが。

隣組で長男と一週間ちがいで生れた子供さんが他に二人いたのですが、私の長男だけが助かり、しかも其の子供が防衛大学を出て自衛隊で活躍してゐるのは何とも言い難い事です。

それから六月には実家の母がB 29の爆風で亡くなり、終戦と同時に主人の病状が悪化して十月にとうとう二十九才の若さで亡くなりました。それも兵隊に行つて病氣になり除隊後の再発でした。

主人の父は盲目で、主人は病氣、二才の子供をかゝえて一時はどうなる事かと、地獄の底に落とされた感じでしたが、主人が亡くなる一週間前に主人の弟が兵隊から帰つてきましたので、それが何よりのすくいでもございました。お陰で子供も立派に育だつてくれました。

注1 (B 29) 米軍の大型爆撃機、日本本土への爆撃はこの機種によってほとんど行われた。

注2 (照明弾) 空中で炸裂し、数分間強い光を発する弾丸、夜間敵情を知るために用いられた。

注3 (250 K 時限爆弾) 時限装置付の爆弾、空襲が終った数時間後に、爆発するため多大な被害が出た。

消防団員として

西田 賞

下連雀二丁目当時三十七才

僅か四十年の歳月が、かの悲惨な状況の一片をも止め得ない事は、五年か十年の経過が記憶を薄らげ、感激も忘却の彼方へ行ってしまう。

思ひ起こすにも、昔日の面影は殆ど無く忘れ去られるのを残念に思はれるので、僅かな記憶を辿って記してみることにする。

小金井街道の現在の南浦十字路には、昭和二十年頃迄は石の橋が架けられて(品川用水にかゝった)居り、北東の袂には松井治郎右門寄贈の約3 m程の高さの石灯籠が立って居り、南東の(現在の洋菓

子屋）袂には火の見櫓が建っていた。頂上には半鐘が取り付けられ火災その他変事の際はそれが打ち鳴らされた。

昭和十九年から二十年にかけて武蔵野市の中島飛行機工場（現在のグリーンパーク）へのB29の空襲の際は、私も残り少ない男性であり、消防団員の関係から、その櫓の頂上から持っていた双眼鏡を以って恰も映画館で映画を見る様な爆弾投下の有様を観測したものである。B29の編隊から次々に落される爆弾は、魚雷の様な形をし、魚の様な物体が次々に落ちる様は他人ごと故だろうが実に見事なものであった。暫くすると、白煙と土埃を巻き上げドーンと云ふ音が聞えてくる。本当に映画を見て

居るのと同じ様子だ。風向きに依って時には工場の伝票や、様々な印刷物等も飛んで来て、昼なお暗しの感有り、敵乍ら天晴あうばれと思ふ。

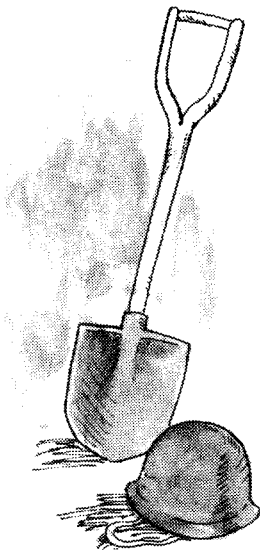
今はその月日を正確には覚えていないが、我が町内会にも沢山の爆弾が落され、現在の平和通りの西側の十数軒の防空壕が埋まり、多数の死傷者が出たのである。

多分午前三時頃であった。私は町会の役員であり、消防団員の関係上壕へは入らず外で見張りを



していた。何か恐しい予感が有り、ズシンズシンと爆弾の響を感じた。壕内に居た家の者に様子をきいたら、重苦しい地響を感じたとか。臆^{おそ}て現在の平和通りの成瀬班長より報告有り、近くに時限爆弾が落ち、可成りの防空壕が埋まってしまった模様なり。急遽^{きん}シャベルを持ち現場に行く。未だ午前四時頃にして灯下管制下の薄暗がりなれば、近所の人々と共に盛り上った土を掘る。大体が屋根の下なれば、作業困難なり。

現在の天理教の佐々木氏の辺より北の方に直線的に何発かの爆弾落されたる如し。殆ど爆発せず震動に依つて防空壕を塞ぎたる様なり。弾に当りての傷にてはなく皆窒息したるなり。後より判つた事なれど、武蔵野の中島飛行機を狙つたものが少し何秒か早くボタンを押した為に我が町内に落ちたる模様なり。皆懸命になつて薄暗がりの中を何ヶ所かの家の壕を掘る。中にピカピカの長靴を履く人有り。何とキザな奴と思ひ、此れも後で判つた事なれど此の人何と後の陸軍大臣阿南大将でありしなり。四m程の通りを隔てて大将の自宅なれば、その筋向の家の盛り上りし土を払ふに務む。



小泉中将の邸には庭先に穴あきたれど無事の様子なり。鑢やぐらて夜明けて通りの南北には、荒繩の非常線張られ、一般の人々の通行は禁止され、役員のみ被害の調査に当る。一戸五名全滅の家等あり、女子供を含めた死者実に二十九名、負傷者も数名あり、破壊家屋十数棟、誠に悲惨の極みなり。以前に此の街道に焼夷弾焼夷弾の落とされた事が有り、其の際は殆ど被害は受けなかつたので左程心も痛めなかつたが、今回の被害の大きさには愕然とする。現在の小金井街道も、その当時は樺の大木が亭々と聳え昼も尚薄暗い程であつた。今の南浦の交差点より大きな声で呼べば、狐久保の十字路迄もきこえた程であつた。三十本程束ねられた焼夷弾が現在の高木材木店の辺りへ落とされ、皆で消火に努めた事等もあつた。最早や記憶も年と共に薄らぎ、感激も無くなつてしまふので思ひ浮べたことを記す。

注1 (焼夷弾) 建物などを焼きはらうための爆弾

戦時中の思い出

渡 辺 鉄次郎

下連雀三丁目当時三七才

私は77才。あと何年生きられるやら。

このたびお話があつたので戦時中のことを断片的に書いてみましょう。

私と三鷹とのつながりは満州事変がおきた昭和6年にはじまります。この年の春大学を卒業して片倉製系の会社に入社した私は日曜日毎に仲間と野球やテニスを楽しむため三鷹の片倉グラウンドに通いました。

そこは現在“下連雀コミュニティセンター”等となっています。当時三鷹駅前には商店、飲食店も少なくて淋しいものでした。

駅からグラウンドに行くとき一軒だけあつたソバ屋に昼食の配達をたのんで一直線の道を4〜500米（現在長崎屋のあるところ）ほど歩くとその先きは荷車のわだちが残る田舎道で、雨のあとなどぬれた草のためズボンが濡れてしまうような道でした。

それから6年、私は軍需会社の役員となりました。

昭和12年は日支事変がおきた年ですが私は軍の勸奨で航空機部品工場を建設することになり、かね

てなじみの深い三鷹を選んだのです。当時東京西部の三鷹、吉祥寺、田無、立川へかけて一大航空機工場が続々建設されていたためでもあります。

現在の大成高校は戦後工場の一部を同校に譲渡したものです。工場は三鷹精機製造株式会社、従業員約1千名の規模でした。

工場の土地は5千坪ほど買収しましたが地価は坪当り12〜13円ほどでした。

昭和16年には対米戦争に突入し工場は24時間フル操業をつゞける状態でした。

戦況は年毎に悪化し、ついに本土も空襲をうけるようになり、三鷹精機もある日突然米艦載機^{注1}の機関銃攻撃をうけました。この日敵機はよほど低空から侵入したのか空襲警報が鳴ると同時にバリバリッと物すごい音響と共に機銃掃射^{掃2}をうけたのです。

工場内は大混乱となりましたが”機械のかけに入れ！”とどなって私もころがるように大型機の下にしゃがみ込むのが精一杯でした。

二、三回射撃をくり返されたように記憶してい



ます。気がつくとも女子従業員が何人も私にしがみついでいました。

当時中島飛行機武蔵野工場は無惨な爆撃をうけ多数の死傷者が出ましたので、その後は空襲警報のたびに従業員が大勢列をつくつて数キロもはなれている三鷹の私共の工場のある地区に避難して来ました。

相模湾上空から侵入してくる米機B 29は丁度私共の工場の眞上あたりでパラパラッと爆弾を落すのです。はじめの頃はそれがとても恐ろしく「あつ爆弾を落としたぞ」と大き過ぎし恐怖にかられたものです。

爆弾は落下速度を早めながら斜め数キロの先に消え数秒を経て大音響が聞えてきます。爆弾の落ちた跡や、爆撃された工場を何回も見舞いましたが言葉では現わせないほど物凄い破壊地獄でした。昭和20年3月の東京大空襲の夜、東の空が眞赤になり空襲警報が断続し東京下町に生まれ育つた私は、そこに住む両親、身内の安否が懸念されて眠ることもできなかつた。

翌朝から行動を起こしてまだ燃えつゝある東京を駆けめぐつたが、本当に無惨な地獄を経験してしまつた。あんなに悲惨な姿を二度と見たくない。

どうやら無事に避難できた両親一族を三鷹に迎え食糧や種々の困難を乗り越えて終戦となつたが、私には100%軍需品工場であつた工場や従業員を平和産業に切替える難事業が待つていました。工場寄宿舎であつた土地建物を大成高校に譲渡したのもその一部分の行為でした。

今やその両親も、戦死した弟二人と共に禅林寺の墓に眠っている。

注1 (艦載機) 大太平洋上の空母から飛来する戦闘機で、超低空で飛行し、機銃掃射攻撃を行った。

注2 (機銃掃射) ここでは、飛行機の機銃による地上への攻撃。

三鷹駅前の小さな検査場

船 木 藤太郎

八王子市緑町当時三六才

昭和十九年十一月二十七日中島飛行機製作所は、米軍機B29によつて空襲をうけ、大きな被害がありました。空襲はこの日に限つたわけではなく、その前から何回となくありました。

この日、いっしょに仕事をしていた片山さん(五六歳ぐらい)が被爆し三鷹駅近くの井之頭病院に運ばれました。このときは空襲警報が鳴つたと同時でした。もう頭上に大きな翼を拡げたB29が迫り、爆弾を落としました。ちょうど昼食のときで、職場にいた工員が食堂へ急いでいたときでした。食堂へ行くには地下道を利用することもできました。

B 29が落とした焼夷爆弾は、この地下道入口に落ち、爆発と同時に大きな炎が拡がり、そこを歩いていた人をなぎ倒しました。十数人の人が炎のなかで苦しいさけび声をあげました。

このなかに片山さんはいたのです。重傷で炎が顔に直接あたって顔が焼けただけ、見るも無惨な姿になりました。すぐに病院に運ばれ治療をうけましたが、のども焼けただけ、たべものもうけつけません。苦しきのあまり咳をすると赤黒い痰を吐くのでした。気管も食道も焼けただれていと聞きました。焼夷爆弾の恐ろしさをまざまざと見せつけられました。「片山さんがんばって、元気になって。」そうした祈りもむなしく数日ののち、亡くなりました。

私の仕事場は、エンジン部品検査場で建物は二〇〇坪ぐらいの大きさですが、半分は倉庫として使っていました。昭和二十年二月のことでした。空襲という声に職場を離れ、防空壕に避難しました。私のはいった防空壕の至近距離に爆弾が落ち壕がくずれ、私はたちまち土砂に胸まで埋められてしまいました。ちょうど土砂のくずれがここで止まったので助りました。すぐに土砂をかき分けてやつとこの地で地上にはいあがることができました。

このときでした。ふと思ひあたることがあったのです。この防空壕の奥のほうに誰かが入っていたことに気がついたのです。私は飛び出すと同時に大声で人を呼びました。「人が埋められている！」数人が集ってきました。早速土砂を取り除く作業が進められました。三尺、五尺と掘りあげたが見つからず、遂には止めてしまうという声がでた。私はもういつべん奥のほうを掘ってみてくれ、とたのみ



艦載機 “グラマン”

ました。そこからさらに奥まったところを掘りさげたとき「あつ、いた！」という声、深い底のところの人にうづくまるようにしていました。引きあげて大勢でかわるがわる人工呼吸をしたが生きかえりませんでした。すでに死んでいたのです。どこの職場の方かもわかりませんでした。こうして工場内の犠牲者も増えていきました。

工場が毎日のように破壊されて仕事が続けられなくなりました。前から工場疎開が始っていましたが、八王子のとなりの西多摩郡浅川町のどうくつの工場でエンジン組立が始まり、ここへ工員が派遣されることになりました。私の職場の作業場も屋根は飛び散り、囲い板も破壊されてしまい、仕事はできなくなっていました。四月のはじめの頃三鷹駅南口前にある木炭販賣店の空家を借りることができて、ここで部品検査の仕事することになりました。三十坪ぐらいの広さに床は板張りでした。男子工員が疎開先の工場へ派遣され、この職場には、長野県、山梨県、千葉県の各方面から徴用された二十才代の女性ばかり四十人となりました。エンジン部品は、三鷹町内の下請け工場や近隣の工場から、リヤカーを利用して運搬され納入されました。これらを検査して、

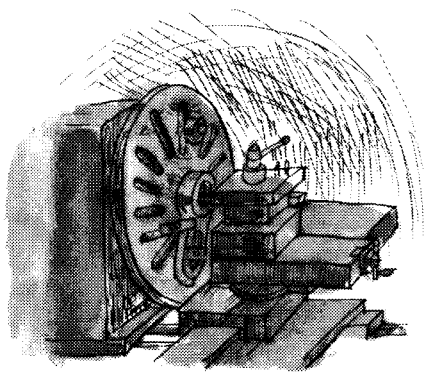
どうくつの工場へ送りました。

八月一日のことでした。どうくつの工場へ女子工員二十名が派遣されることになり、身のまわりの品や衣類などを風呂敷や柳こうりに入れて、電車に乗り運びました。当日はいつたん三鷹に帰り、二日から仕事をする事になっていました。この夜八王子は米軍機B 29の空襲により、軒並み焼失しました。女子工員が荷物をあずけた民家も焼け、着替えも灰となってしまうました。

五日にひとりの女子工員が、着替えの衣類を長野県の実家に取りに行くといつて、三鷹を出て浅川駅発下り列車に乗り、発車して間もなく猪の鼻トネル附近で米軍艦上機の攻撃にあい、機銃に撃たれ、即死したのです。

一五日終戦を聞きました。三鷹駅前の小さな検査場に女子工員の嗚咽がいつまでもつづいていました。

数日にして女子工員は、自分の郷里へそれぞれ帰っていききました。私は暮まで残務整理にここへ通いました。女子工員の給料や貯金など、各自あてに郵送した。こまかい仕事はすべて私の妻にま



かせましたが、こまめによくやつてくれました。

疎開工場という名のこの家に空虚だけが残りました。

空襲

吉野泰平

野崎当時二二才

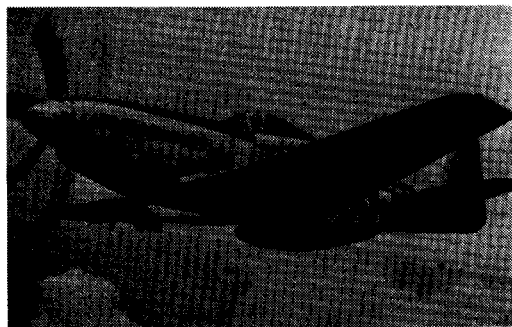
昭和十九年十一月一日、当時私は学生であった。私達は一週間にわたる南多摩郡忠生村（現在の町田市）の、出征兵士の家庭に対する勤労奉仕の稲刈りを終え、近くの神社の境内に集合していた。晴れわたった青空に一条の白雲が細く延びて行く。よく見ると、その先端に飛行機らしいものが見える。飛行機雲を知らなかった当時の私達は、たゞ物珍らしく眺めていた。間もなく空襲警報のサイレンが鳴り響いた。その日は何事もなしに終ったがB 29来襲の最初である。それから間も無い十一月半ば頃からB 29の大編隊による空襲が始まった。先づ中島飛行機の武蔵野工場（現在の武蔵野グリーンパーク

の所に在った)がじゅうたん爆撃を受けた。この爆撃の直後、私達の学校全員が学徒動員され、中島飛行機武蔵野工場でエンジン製作の一翼を担うこととなった。この工場は14気筒の「栄」型と18気筒の「誉」型エンジンを作っていた。私達は空襲警報を合図に玉川上水附近まで退避するように指示されていたが、爆撃が始まるまでの数分間に2キロメートル近く走るのは容易ではない。多くは途中の林の中で倒れ込んでしまった。しかし、工員さん達は夢中で走った。中には井の頭や深大寺近くまでも避難する者もいた。後になって聞いた話では、最初の爆撃の時には工場構内の防空壕に退避していて爆弾の犠牲になった人達が何人かいたとのことであった。工員さん達は本当に爆弾の恐ろしさを知っていたのである。工場近くの住宅密集地に落ちた250キロ爆弾は一度に四軒の家を破壊していた。三鷹駅の北、五日市街道の近くに落ちた一トン爆弾は道路に巨大な穴を開け、道路際にあつた一抱えもある樺並木の三、四本を根こそぎ倒し、周囲に噴き上げた土は二階屋の庇にまで達していた。三鷹、武蔵野附近の上空は最後の防衛線だったようで、調布飛行場から飛び立った「飛燕」戦闘機による体当たり攻撃が見られた。それは鷹に立ち向う雀のようでもあり、その悲愴な姿に祈る様な気持で声援を送ったものである。高射砲の射撃も激しく、砲弾の破片が屋根に落ちてカチンカチンと音を立てることもしばしばであった。

二月に入るとグラマン等の艦載機による爆撃と機銃掃射を受けるようになった。日本の飛行機はさっぱり姿を見せず、全く歯痒い思いをした。超低空からの爆撃は正確で、武蔵野工場の被害は一挙に

大きくなり、私達の職場は小金井の工業学校の実習場や講堂に疎開する破目になった。武蔵野工場に対するB29の爆撃はそれ以後執拗に続けられた。空襲の合間を見計らっては部品の材料を取りに行った。それから間もない三月十日の未明、あの悪夢の様な夜間大空襲となった。

三月九日の夜、私は夜勤で小金井の工場にいた。夜中の十二時頃であったと思う。東の空に青白い



P 51 “ムスタング”

照明弾の光がズラリと並んで投下された。間も無くその照明弾を目標に東京市街に焼夷弾攻撃が始まった。B29の真黒い機影は数メートル先のカラス程の大きさに見え、それが後から飛んで来ては焼夷弾を雨のように投下して行く。焼夷弾が火花のように赤い火を引いて落ちて行くのが見える。照空灯が狂ったようにB29の機影を探し廻る。地上からは曳光弾の光が彼方此方から噴き上るのが望見できる。忽ち東京の上空は雲のような煙に覆われ、煙は猛火の炎に映えて真赤に染まっている。新聞が読める程に明るい。やがて東京を焼く煙は大きな赤黒い入道雲のようになった。まるで地獄絵を見ていくようである。あの雲の下では何万、何十万という人達が右往左往し、苦しんでいるに相違ない。私達には何も手助けをすることが出来ず、ただ空しく見守るばかりであった。夜間の焼夷弾攻撃はこれ

を皮切りに全国の都市に及んで行った。東京の市街は数回の攻撃によって壊滅状態となった。

五月二十六日の未明、焼夷弾は遂に野崎にも襲つて来た。西南の方向、調布飛行場の上空と思われ、る辺りにポツンと現われた黄色い灯は忽ちの中に幾筋もの火の糸となり、傘を拡げるように野崎の空に拡がった。夕立の時のようなザーツという不気味な音が周りに取り囲む。思わず防空壕の中に逃げ込んだ。音が止んで外を眺めて見ると家の屋根の上で数ヶ所、木の枝の彼方此方でもチヨロチヨロと火が燃えている。夢中で火ハタキを持つて屋根に駆け上つて火ハタキで火を叩き消そうとするが、火は火ハタキにくつ付いて燃える。駄目だ。今度は砂バケツを持つて駆け上り、砂を振り掛けて靴で踏みつける。うまく消えた。凡そ十二、三分であつたらうか、屋根の火を消し終えてホツとして見ると人見街道に沿つて大火事になつている。直ぐに防空頭巾を濡らして駆けつけたが熱くて近寄れない。近くの砂川用水に飛び込んで全員ズブ濡れになつて試みたが、それでも火の風上に出ることさえ出来ない。止むを得ず風下に在つた中島飛行機の飯場と大量の木材に延焼するのを防ぐのが精一ぱいの努力であつた。この夜の空襲で野崎十字路から大沢十字路の間の人見街道の南側の家並は大半焼かれてしまった。この日、新川十字路附近も焼けたとのことであつた。

この年の六月、砂川用水に螢が異常に発生した。空襲に備え、例年行われて来た水を止めての川遊びをしなかつたのがその理由であろう。夜間空襲の時にはタバコの灯一つでも屋外に漏らさないように気を配つていたその頃、螢の明りを気に病んだことも、今になつては笑い草である。この頃には戦

局は一段と悪くなつて「本土決戦」が叫ばれ、私の家の近く（今のナンジャモンジャの森）には戦車を隠す大きな壕が三つ掘られたりした。空襲はB 29ばかりではなく、米軍戦闘機P 51^{注4}までが朝夕決まって飛来するようになった。七月に入ると私は浅川（今の高尾）の地下工場に廻され、エンジン「誉」の組立て職場に移った。地下工場と言うので空襲があつても安全だと思つていた。しかし、組立職場は地下ではなく、沢を埋め立てた地上のバラックであつた。P 51は来る度に機銃掃射を加えた。その度に私達は杉の木の蔭に隠れ、被害はまぬがれた。

七月の末頃だつたと思う。通勤電車は八王子の浅川鉄橋近くで止まり、急いで車外に避難するように車掌の指示が出た。P 51の来襲である。車外には出たものの周囲は河原と畠で、身を隠すような物も無い。乗客は出来るだけ電車から離れた所に分散し、草蔭などに身を伏せて隠れ、P 51が通り過ぎてくれることを祈つた。間もなくP 51四機の編隊が北の空に現われ、急に機首を下げたと見るや一斉に機銃掃射をしながら通り過ぎて行つた。一瞬の間であつたが随分永かつた様に感じた。乗



客が全員無事であったのは幸いである。

八月に入って直ぐ、八王子の市街も一夜にして灰燼に帰した。焼け跡にはコンクリートの建物と土蔵とがポツポツ見えるだけで、道路には消防自動車も焼けただれて残されていた。八月六日には広島に特殊新型爆弾（原子爆弾）が投下された。連日のB 29の大編隊の爆撃に慣れっ子になっていた私達は、一機や二機の敵機には驚かなくなっていたが、この日以来、一機の空襲でも必ず防空壕に避難するように指示が出た。相当凄い威力の爆弾なのだとは思ったが、あのように悲惨な状態になっているとは思っても及ばなかった。

八月十五日の朝、平常のように浅川工場に行った私達に、お赤飯と鮭の罐詰一ケづつという思いがけない御馳走が用意されていた。何のお祝いだろうと皆で考えたが分からなかった。食後に「本日正午、重大放送がある。学生諸君はこれより直ちに夫々の学校に集合して放送を聞くように。という命令が出た。

正午、天皇陛下のポツダム宣言受諾の放送により、九年の長きにわたった戦争は終わった。これまでの張りつめた気力は一ぺんに吹っ飛んでしまった。喜こんでいいのか悲しいのか分からなかった。折角無事に復員しながら、自づから命を絶った友人もいた。

戦後四十年の月日が流れ、馬の飼料のようなものを食い、何時家を焼かれ、命を失うか知れなかったような生活も平和の蔭に薄れているようである。しかし、一度^{ひとた}び振り返ってみると昨日の出来事の

ように浮かび上つて来る。とても忘れられるような事ではない。こゝに改めて多くの犠牲者の冥福を祈るとともに、無事に生き延びた幸運に感謝したい。

注1 (じゅうたん爆撃) 指定地域全体に損害を加えるように大量の爆弾を逐次投下すること。

注2 (高射砲) 飛行機を射撃する砲

注3 (グラマン) 米軍の小型戦闘機、太平洋上の空母から飛び立ち、本土を超低空で飛行し、機銃掃射で、対象物をねらいうちした。「艦載機」と呼ばれることも多かった。

注4 (P51) グラマンと同様の攻撃を行った。硫黄島から飛来することが多かった。別名「ムスタング」

調布飛行場

佐伯 時太郎

大沢五丁目当時三七才

聞き書き 榛澤茂量

調布飛行場って言うけど、こつち側は大沢分だ。うちは格納庫のすぐ北だから戦争中はずいぶんおつかない思いをした。年上だったから警防団で飛行場にいった。やっと銃が割り当てられたけど、夕



防空壕入口

マは無かったよ。灯火管制なんてやかましくやってたが、B29から照明弾を西から落とされたことがあったけど、真昼間みてえに明るくなって、何にもなりやしねえ。

艦載機の機銃掃射がたびたびあって、うちの屋根ガワラがめちやくちやにやられ、雨のたびにもってびしょびしょだった。サイパンがやられた時、二個ずつ爆弾をつんで四、五十の飛行機が行ったけど、ぜんぜん帰って来なかった。今調布中学校になっている場所に弾薬庫が三棟あり、そのまわりにドラム缶の燃料が三十から五十づつ置いてあった。サイパンのあと、日は忘れたがB29の編隊が来て、ここに照明弾を落とし、そのあと焼夷弾がバラバラ落ちて来た。明るくて昼間だよ。これがドラム缶に当たってドカンとはね、続いてドカンドカンと誘発し、ぜんぶ火になり一度に爆発した。真赤な炎が巨大に立ち、弾薬が爆発しだした。うちの方までピシーンピシーンと、飛んで来た物が当たった。橋場のカメラさん所の屋根にも何かが飛んで来て火がついた。兵隊は皆逃げた。うちの西側に将校宿舍があったけど、この兵隊も天文台のガケ

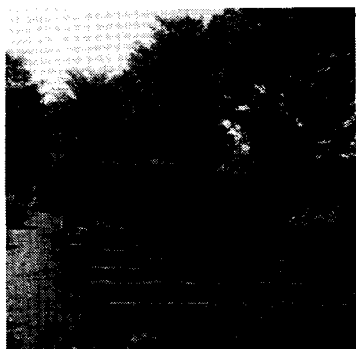
に作った防空壕に逃げ込んだ。今の馬の練習場のかげにあったんだよ。警防団は防空壕に入ってはならねえと言われていたので、外にすることが多かった。伊東峯ちゃんの家は、こころへんから撃つたんだよ。爆弾は、天文台が始まりで、久我山の方までバラバラと落して行つた。天文台ではイチョウが爆風でぬけ、観測するドームにつきささつた。音があんまりすごかつたので飼つていた犬が気がいいになつてしまった。戦争なんて何にもなりやしねえ。

大沢でただ一軒全焼の我が家

伊東峯吉 当時四二才
伊東イト 当時三六才

聞き書き 榛澤茂量

昔の大沢は、のどかない村でした。水田が多く、見わたすかぎりやま(林)だった。清水がいたる所から湧き出て川には魚がたくさんいたし、ワサビ畑もたくさんあつた。この村は、天文台が出来



掩 体 壕

たことが始まりで、ずいぶん変ってしまった。

調布飛行場が出来、すぐに今のコミュニティ通りが出来た。こんな一直線の道はちよつとない。なぜかと言うと、兵隊がやって来てここに道を通すから畑をつぶすと、命令だけで作物のあるなしかかわらず御塔坂の方から目印の棒を見通して直線の道をつくってしまった。

畑より道路が低かったので掩体壕をつくる時、飛行機の翼があるため、又両側をけずり取られた。誘導路として使用された。

その後、今の羽沢小の位置に深いドブ田と言った作りにくい田に、高射砲の本部と椎の実保育園の位置に陣地が、強制借上げで出来た。私は警防団について、空襲のたびに二小に詰め、調布飛行場警護の仕事をした。しかし、空襲のたびに集合しても飛行場に被害がないためと、銃が少しあつたがタマが無いので、もっぱら食糧増産のため自分の畑を一生懸命やるようになった。仲間は、私と竹貞さん、時太郎さん、大義さん、真仲さんと、今いないけど植木やってる佐伯さんだった。

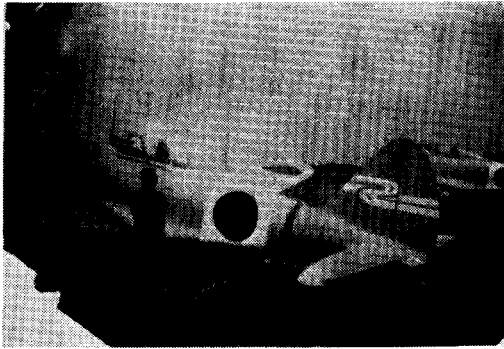
住いが高射砲陣地のすぐ隣りで山の下だったので、危険を感じ早くから防空壕を作っていたが、砲

の発射音がすごく、回りの土がそのたびにパラパラ落ちた。しだいに空襲警報が多くなり着たまま防空壕で寝た。起きるとすぐ、リヤカーにふとんを乗せ、空襲警報になると野川の向こうの畑の穴に運んだ。

二月十六日と次の日は、艦載機が波状に来て、この高射砲や飛行場を蜂の巣の様に何回も何回も機銃掃射をし、高射砲が迎え撃ったが低すぎてあたらず、この撃ちあいのすごさは言葉に出ない。今日で命はおしまいだと思った。竹やぶの竹に真横からタマが貫いている竹がたくさんあり、トタンの庇が穴だらけになっていた。

夜ふとんに入ったら、何か背中にあたるものがあるので何だろうと思った。手でさぐると、機銃のタマが出て来た。もう落ちついで畑などやっついていられなかった。供出はジャガイモ、サツマイモ、麦など割り当て何貫目と決められ農協に出した。割り当に対して不足になると、他から買っても供出しなければならなかった。高射砲の兵隊さんが腹をすかしてくるので、サツマイモをふかしちゃ食べさせた。

四月十九日午前十時十分艦載機の編隊が、二月の時と、同様に



撃ちまくり、曳光弾ほくろがうちの草屋根に命中した。大箱のマッチに火が入ってしまった様にシューと火の手があがり、高射砲の兵隊が助けようと大声で「おぼさーん、おぼさーん」と叫んでいたが、自分の持場の砲を撃っているので離れられず、見る間に全焼してしまった。近所の人は、うちが丸焼けになったのを見て、防空壕を掘り始めた。このあたりは、飛行場を中心に燃料や弾丸があちこちに集積してあったし、砲弾の破片があたり一面落ちてちらばっていた。イオウの臭いがいつもたち込め、今考えると、よく住んでいられたと思つた。

飛行場から飛び立つた飛行機は帰つてこなくなり、白いマフラーの若い人たちが特攻隊でずい分行つた。……そして終戦。

戦争は二度といやだね。

注1 (掩体壕) 大砲や飛行機などをかくしておく壕。

注2 (曳光弾) 弾丸が空中を飛行する時、光を出して、弾道がわかるようにした弾丸

終戦四十年を迎えて

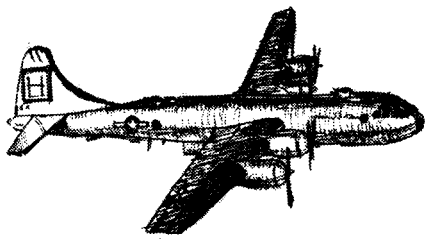
島田 惣八

中原四丁目当時二十七才

昭和十五年一月十二日現役兵として独立混成第三十一大隊第四中隊に入隊特業は山砲、北支派遣軍の部隊である。入隊とはいえ日比谷公園に集合、野戦より迎えに来た将校士官の指揮下に置かれたのである。後で気付いた事であるが前例のないはじめての野戦教育である。現在の東條会館際で軍衣類と三八式歩兵銃及び実弾の支給を受け神田の萬代屋旅館に三泊し、一月十五日「か丸」という暗号の輸送船で芝浦港出帆一月二十三日塘沽^{たんかく}上陸一月二十五日北支河北省正定に到着。同日より初年兵教育を受けながら同地区の警備に当った。そして昭和十八年八月十日陸機密〇号により中国山西省の戦線より満期により復員大東亜戦争も益々我が方にとって不利な状況が見え始め一億総動員による軍事教育の指導員として就任いたしました。兵役をのがれた方達を第二国民兵として、婦女子は国防婦人会員として、連日軍事教育をする軍事教練場所は三鷹東国民学校校庭(一小)、三鷹西国民学校校庭(二小)、三鷹第三国民学校校庭(三小)。万助橋隣り日産厚生園等の広場を使用、教官は三鷹駅前の質屋関口少尉でありました。第二国民兵として私が訓練指導した中には、故男女の川関、三鷹国防婦人会の会長格として時の陸軍大臣故阿南大将夫人、中島中将夫人なども含まれておりました。

昭和十九年「警戒警報発令」九千米の高度で、マリアナ諸島から飛来するB 29の偵察機は、日本の戦闘機の追跡も及ばず、高射砲の弾丸も射程距離不足でとどかず、思うがまゝに偵察され日本の勝利に疑問を持ち始めたのもこの頃であった。「日本本土爆撃始まる」相模湾上空より六機編隊で富士山を目標に波状的に進入するB 29爆撃機は、国鉄中央線沿いに飛来、武蔵野市の中島飛行機製作所を爆撃、東進して千葉県上空から大平洋上に退去する。その爆撃の激しさは四キロメートル離れた中原から爆発音と土煙で空が真黒になるのが望観でき、そのすさまじさを物語っていた。これより先、調布飛行場に待機中の飛燕戦闘隊が発進、立川上空あたりで迎撃、空中戦を演じながら三鷹武蔵野上空を通過する様は映画の一シーンを見る思いであった。

強力で重装備のB 29爆撃機は被弾してもすぐには墜落せず、千葉県から大平洋上に墜落するものが多い。空襲警報は毎日のことであるが、昭和二十年四月七日一時三十分頃「空襲警報発令」中仙川中嶋神社前の警防団詰所では一瞬緊張がみなぎる。今日ほどの方面からと南の空を見上げた時戦闘機に守られたB 29爆撃機が一団となって波状的に飛



来する。高射砲は無力に等しい。高度約九千米、我等の位置からすると咄嗟の判断で、飛行線が西に少しづれてゐる。東に避難しる思わず叫びながら東に五百米春清寺前まで走り茶の木の根元に伏せたときヒュルヒュル無気味な音と共に大音響大地震のように地面は揺れ、前方一面に土煙で真暗、無数の五百キロ爆弾のお見舞、ふと空を見あげた時、仰角四五度ぐらいの空を高射砲に被弾したか片翼のとれたB 29が錐揉み状態で墜落している途中で大爆発をおこし火だるまとなって調布方面に落下する。他の編隊からはB 29一機が離脱だんだん低空となり久我山方面に墜落する。この時の投下された爆弾で驚いたことは墜落したB 29が一度に投下したのか、中原四丁目四番地先、島田桑吉氏と島田泰一氏宅地を含む植木畑と竹林に直径五〇米深さ四〇米のすり鉢形の大きな穴があく。三鷹市全警防団（消防団）の二日間に渡る応援で埋め戻されたことを記憶する。亦、墜落爆発炎上した機体の破片が小住宅の屋根につきささり黒煙をあげたが消火してことなきをえる。爆弾の爆発による振動は五百米四方の家屋の戸障子が吹き飛びあるいははずれて飛散する強力なものであった。附近の畑には直径四〇厘ぐらいの大きな深い穴が多数できて不発弾かと心配されたが爆発時の土塊りの落下跡とわかり安心する。この時の爆弾は畑及び水田に多く落下、中原二丁目二五―八地先に不発弾の落下跡らしきものがあった。

昭和十九年から二十年にわたり空襲も益々激しく、グラマン艦載機の小型爆弾の投下と機関砲の銃撃も加わり、高圧電線の下までくぐりぬける攻撃に驚愕する一幕もあった。日を追うにつれ昼夜の別

なく空襲も激しくなり、ついに星野一郎氏宅焼夷弾で全焼、麻生久太郎氏宅は土蔵に六角形大形焼夷弾の直撃をうけ数名死亡者を出すなど、焼夷弾の雨とたたかううち昭和二十年四月召集令状により小生も応召する。

敵の相模湾上陸に備えて厚木南方用田町でゲリラ陣地の構築。敵の本土上陸作戦に備えていたが日本軍の戦況益々不利になるにつれ、海軍の船舶は殆んどが撃沈された。将兵は陸に上り神奈川県綾瀬及び用田町附近で航空隊の燃料松根油を精製していた。陸海軍ともに服装の違いから階級がわからず欠礼するものが多く争いは絶えない喧嘩の明け暮れであった。今日も厚木航空隊から数少なくなつた戦闘機が発進して行く五機編隊で南の空に消えて行く。いつものことであるが帰還した機は一機もない特攻の出撃である。若い士官が次々に散つて行くただ冥福を祈るのみ。

この様なうちに敵B 29爆撃機及び艦載機グラマン戦闘機の空襲は益々激しさを加え、焼夷弾は東京をはじめ主要都市をつぎつぎに焼きつくし壊滅状態に陥れ、敗戦のやむなきに至つていった。昭和二十年八月六日広島に、九日長崎に原爆投下の報に接し、つづいて陛下の玉音放送に衿を正し不動の姿勢できゝ入る。時に昭和二十年八月十五日、長い間の苦勞も水泡に期したが終戦を迎えてほつとする。しかしこれからの日本はどうなつて行くのか、不安と落胆で皆声なく次の命令を待つうち、夜に入るや厚木航空隊で一部決起に逸る将校の扇動により反乱事件発生、無差別に我等陸軍部隊に機関砲の実弾を乱射、我が方二名死亡。又、用田小学校（部隊本部）にトラックで乗り付け手りゅう弾を投げ込

み逃走する。終戦になってからの死亡は誠にお氣の毒で憤慨に堪えない。

我が部隊は二十年八月十八日作戦といふ名のもとに夜を待ち雷雨をついて青梅まで後退青梅小学校に入り数日して部隊は解散自宅に復帰することができ。

明星学園で戦時体験の断片

原 田 満寿郎

当時明星学園教師

時限爆弾投下の夜半から未明（四月二日）

空襲警報を耳にして学校警備のため私は家を出た。井の頭御殿山のソロの林の道は、一〇年来歩みつづけている明星学園への通勤路であるが、灯火管制下、一度森林の中に入ると、全く手さぐりの状態。三〇五分で通過するところを二〇三分もかゝって、やっと牟礼の街道に出て学校に辿りついた。連日の東京空襲に脅びえて用務員が郷里石川県に疎開して留守となった用務員室に、照井猪一郎初等部長が数日前から二四時間、昼夜ここで籠城。

職員室前庭に椅子を出したが照井先生と私は佇む。極度に悪化してきた戦況と、日本の将来を語り、最悪の予想こそ口にはしなかったが暗黙の中にこのことを意識して、学校・子供達・家族の行末を、静寂な暗闇の中で言葉少なげにしんみりと語っている時、B 29一機が南西から北東に爆音残して消え去った。「サアー」と、何か落としたようにも感ぜられたが、爆発音もなく火焰もおこらず、B 29の去ったあとは再び無気味な静けさで更けていった。

「おかしい、今夜の空襲。B 29の動き。」と照井先生と話し、空襲解除のサイレンを待つて、三時ごろ学校を出た。

帰路は、大盛寺前の辨財天堂参道を経て、石段を下り、辨天堂わきの梅林の坂道を上つて吉祥寺の吾が家に。

ゲートルしたまゝのゴロ寝。足部が冷えきつてぬむれず、ウトウトまどろむこと、しばし。突然の大音響（六時ごろ）に目がさめ、何かかと近所の方と語りながら、音響のあつた方向へと急いだ。

公園プールの南側と、先刻歩いてきた辨財天堂参道に摺鉢状の炸裂した穴が口をあけていた。

三時間前に歩いていたところ、時限爆弾の投下されたその上を、「知らぬが仏」とはいうものの、「生命の安全」だったことを心からかみしめた。

何故この場所に投下されたのか——当時の世評は、次のようなことが、ささやかれていた。

(1) 井の頭の杉、ソロの密林の下に、軍馬と兵士たちが疎開しているのだ。

(2) 中島飛行機工場、その他軍需工場が疎開しているとの米国の推定。

この日、中学部の学校日誌には――

四月二日 (月) 晴 午前二時より五時近くまでB 29一機又は二機宛、吉祥寺・三鷹・田無方面へ。時限爆弾。午前五時半ごろより正午ごろまで爆発に驚かされる。午前九時一機、正午一機。

時限爆弾が投下され爆発したところ――上連雀一丁目・明星学園の北の雑草地・大盛寺前の辨天堂参道・井頭公園のプール・七井の池の北辺・吉祥寺南町一丁目にかけて六個く五個が未明以後爆発した。

P 51の機銃掃射(四月一九日)

警戒警報あつて空襲のサイレン前に超低空で、女学部の平屋の屋根すれすれにP 51数機が、学園の南、千代田光学工場の隣接の森に向つて機銃掃射。児童たちはすでに防空壕に。

職員室から飛び出した私は、四、五〇米先の運動場の防空壕に全力疾走した。走りながらP 51の乗組員の顔が見えた。瞬間、グランドにうつ伏した。その時、右足首の裏



に衝撃を感じた。「ヤラレタ」と逆上し「死」を思った。一、二秒後、痛みのないことを意識し、助つたとホツとした。

衝撃は、機関砲の「葉菜」(弾丸を発射する筒)が落下して足首に当たったのだった。

千代田光学の工員たちの避難途中の群れをみて、P 51は掃射したらしい。工員何人かの軽い負傷ですんだのだった。

この日中学部の学校日誌に——四月一九日(木) よく晴れていた。B 29三機の飛来とP 51二十機からの機銃掃射あり。新校舎に一発当る——との記事あり。

児童たちは、B 29の時は、壕の入口に顔を出して、銀翼をながめ、「きれいだなあー」の私語もあるが、P 51の機銃掃射のダダダ・・・とピュピュピュ・・・と一緒になった音、それに低空飛行の烈しい飛行音には、皆な壕の中で、息を殺し、歯をくいしばってうずくまっていた。

厚木部隊の一部隊、明星学園に

——昭和二〇・八・二二〜三二間移駐——

八月二三日、学校に行く。裏門から初等部職員室へ。途中、井戸がある。(大正一二年創立以来、この井戸水で学園の子どもたちは育った)この井戸端で七、八人の兵士が、炊事の仕度で動きまわっていた。……私は、この状況に全く突然出會つて、吾が眼を疑つた。頭が一寸混乱して、まわりを見わたした。学園関係者は誰れもないが、吾が学園明星にちがいないと確認した。だが、何故、陸軍の兵士たちが明星に……。やおら時間の経過があつて、教室のあるところ、講堂へと足を運んだ。

各教室と講堂には兵士たちが、たむろしていた。

グラランドの西南隅に、竹棹と藁なわで作られた一坪程の立方体の空間に、一人の兵士が立ち、その前に銃を持った兵士二人が監視していた。

これらのことが、八月二三日午前一〇時ごろ私のみた異状な光景の一駒である。

——八月二六日、米軍先遣部隊が厚木に進駐することが決定されたことから、急きよ厚木および周辺の日本の軍隊の退散が命令されたためであらう。

それでその一部隊が、二二日に明星学園に来られ、当分の宿舎を要望されて暫時、貸すことにしたとのこと、後刻、照井先生宅に伺つて知つた。——

グラランド西南隅の珍風景は、二二日の夜、講堂に宿泊した一兵士の失火で、講堂の天井の一部を焦

す程度ではあったが焼いたその罰として、仮設の重^重營倉に入れられていたのであった。

この部隊が、学園に搬入した物資の主なもの、ガソリンのドラム罐三本、味噌、メリケン粉、大豆と数百枚の軍毛布であった。

初等部の学校日誌には、当時のことが次のように記るされている。

八・二〇(月)晴 今週より授業開始

八・二一(火)晴 午後一時より父兄總會を開き「時局に対する学校の見解と教育の将来について」話す。明日より八月末日まで休業とす。

二二(水) 本日、厚木方面より撤収せる部隊の宿舎に初等部の建物を借した。凡そ百数十名。

八・三一(金) 部隊、漸く引き上げた。

九・一(土) 部隊引上げたあとが、ひどくよごれたので、大掃除す。

九・二(日) 日曜日だが昨日に引きつゞいて大掃除を行う。

九・三(月)曇 兵隊の教室あらしには、驚くの外なし。敗戦の原因又ここにあり。

B 29 久我山に墜つ

——二十年五月二十九日——

晴れ、九時半ごろよりB29五〇〇機、小型機一〇〇計六〇〇機、川崎・横浜・帝都に。

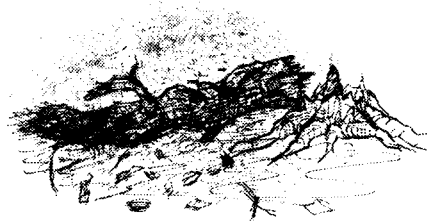
一〇時ごろ、高射砲の砲撃か、日本の戦闘機の攻撃か、兎に角、B29の落下を、明星学園のグラウンドでみた。

帝都線の井の頭公園駅上の見当の上空で、大型の銀翼が、ウーン、アーンとうなりの響き、ゆっくり錐もみしながら落ちていく。

井の頭公園駅をめざして駆けた。しかし、さらに遠くのことと判明し、多くの群衆と共に、墜落現場の久我山に。早期警報が出たので、登校しなかった久我山近隣の明星の児童も二、三人この現場に来ていた。

久我山駅の西北部の墓場・雑木・民家の納屋とあったところ。立木が散乱して折れ、何本か焼けていたようだった。

真黒になった（多分ガソリンの油煙でおおわれた？）乗組員のとても異様な姿・死骸であった。すでに穴に埋められた乗員を多くの群衆が、のぞいていた。死体に足げにしたとか、棒で叩いたと



か、そんな話を、その折、耳にした。

敵愾心に燃えた市民の行動であった。

高橋喜助氏が“鬼畜米英”の記事として、これと似かよったことが書かれている。——国分寺恋ヶ窪に落ちたB 29の乗員の遺体が広範囲に散乱、その死骸をなぐっていた……。当時の偽りない気持だったかと思えます。憎しみをもつてなぐっていたのでしようと、評されている。

なお高橋氏は、久我山に落ちたB 29について、かなり詳しく記されている。

……。胴体着陸の状態で翼を広げて落ちていることや、B 29の乗組員は半袖・半ズボンという服装であったこと。一人が乗員していたこと。七人の遺体を大熊さんの自宅の庭に、ひそかに埋葬したこと、そして米軍の日本占領後、GHQ（連合国軍最高司令官総司令部）から、この行為に対して、感謝状をいただいたことが、記るされている。

この日の中学部の学校日誌は、五月二九日(火) 晴 休(休電日) 午前九・三〇分ごろより一時間半、B 29五〇〇機、小型機一〇〇機、横浜・川崎・帝都に相当の被害——と記るされているが、墜落したB 29の記事なし。

注1 重営倉——旧軍隊で兵を罰するとき、とじこめる建物。

当時の生活

当時の日記からゝ恋人たち

生 田 テ ル

井の頭二丁目当時二十一才

戦前の日本人の生活は、おおむね今では考えられない位つましいものだったけれど、昭和十二年を最高として消費生活は急速に下降していった。

食糧品はお米、砂糖、味噌、醤油、油、肉、魚。衣類は木綿、毛織物。皮革、ゴム製品もろもろの金物類等、どれも生活に必要なものから順に街頭から消えていった。密かに闇で法外な値段をがまんすれば買える頃はまだよかった。

昭和十六年十二月太平洋戦争に突入してからは、国内の物資は根こそぎ戦場へと運ばれ、戦争に係のない生産は一切出来なくなってしまうから、国民生活は窮乏を極めてきた。お金の価値がなくなって、情実か物々交換（相手の欲しい物を持っていなければ駄目）でなくては物が手に入らなくなってしまうた。

そうした中で私の嫁入り支度は整えられた。昭和十七年から十八年にかけての頃だから、反物一つ手に入れるのも、つてを頼って米、酒、煙草、等の交換物資を集めて法外な値段で買入れる他なかつ

だが、大勢の方々の奔走のお蔭でほど満足に調い、挙式の日を待つだけとなった。

万事派手好みの父は、わが家初めての結婚式に「万難を排しても…」などと張り切っていたが、十月過ぎ頃にと先方に云われていた十月に入ったし、荷物の運搬もだんだんむづかしくなる一方なので、早目に打ち合わせたいと彼の家へ出かけていった。

予想外に遅く帰った父は、撫然として、

「結婚式は当分延期したいと言われた。どうも勉君には、おまえと結婚する気持はないとしか思えない。」と告げ「まったく性格異常者だ。」と呟いた。わが娘との結婚に逡巡する奴なんぞに娘は渡せないという気持だったのである。私は体と心から水気がいつべんに干上つて、口がパサパサに乾いて涙も声も出なかった。

——その夜は台風がかすめて通り、凄い風音が私の心をなだめてくれた。

翌日逢いに行く途中、目にふれるものすべてに、この一年の彼との思い出が満ちていた。建ち並ぶ家々、その中に営まれている平和な家庭……。世の中がどうなろうと、みんな躊躇なく夫と妻になつていのように思えるのに、どうして私たちは結婚してはいけないのだろうか？

彼の言う、戦争はこれから加速度的に悪化するから、将来の見通しのつくまで結婚しない方がよい。それがお互いにとって幸せであり、女性にとって最善と思う。これが本当の愛情だというのは、眞実なのだろうか……。

出征、入隊を目前に、一日でもと急いで結婚し、又しようとしている友だちの誰彼を思つて、私はただ羨ましい。

イギリスの大学を卒業し、長いヨーロッパ留学生活を送つた経歴の父のお蔭で、徹底した軍国主義教育のもとで海外の事情に全くうとく、日本を世界最高、最強の帝国とひたすら信じこんでいた周囲の人々より、少しはましな知識をもつていたけれど、太平洋戦争突入後はそんな考えも吹きとばされ、社会の風潮と相まつて私は一途に軍国の乙女となつていった。

世の中の苦勞を知らない若い女達は、愛する男性が心おきなく国家のために死地に赴けるよう、よき妻となり、子を産み、家を守るのが女性として最高の使命であり幸福であると信じこまされていたのである。

一日だつていい、あの人の妻となつて死ねれば本望だと私は思い、暗い絶望的な将来しかない今の時代だからこそ、なおさら一日でも尊く、早く結婚していつしよに暮らしたい。離れ離れで生命を終つちやうなんて絶対いやだ！と心に繰り返した。

三鷹の彼の家の近くの禅林寺は静まりかえつて、先を歩いていく彼の足音さえ消えそうだった。「森林太郎之墓」「森茂子之墓」黒い柔らかな感じの墓石の前に彼は立ち止つた。

「鷗外の墓だよ。こちらは奥さん。」

私はこのまゝこの人とお墓に埋まって死んでしまえたらどんなに幸福だろうなどと思いながら、そこに腰を下ろした。

「君の思っているように戦争は永遠に続くものでもなければ、負けても日本中の人たち全部が死んでしまうなんてこと、絶対にないんだよ。たとえどんなにひどいことがあっても、大部分は生きのびて元のような生活に還る。歴史を勉強すれば誰だって解ることだ。早く結婚するのが幸福とは限らない。結婚って、もっと大事なものに考えたい。その見通しのつくまで、僕たちこのままの状態でした方がよいと思う。一生は長いんだよ離れて暮すこれからの一年なりの期間は、二人にとって還ってこない有意義な月日だと思う。」

「……………」

「今、結婚すると——たとえば来年の今頃、子どもができたとするね。」
彼は照れくさそうにそう云って、

「そうして空襲があつたり、僕が南方に徴兵されたりした時、君や子どもを残して出てゆくなんて、僕には耐えられない。」

——そんなこと何でもない、と私は思う。

「今はみんなその覚悟でお嫁にゆくんです。あなたのお母様だって、あなたがいらつしやらなくなつたらあの病身で、一人ぼっちでどうなるの？今だって私、あなたが死んだら生きていられない気持

だわ。せめて代わりにあなたの子どもがいたら、いくら短くたってあなたと結婚して暮らせた日を思い出に、一生満足して生きられると思うわ。一日だっていい。あなたの奥さんになれば……。それだけだわ。先のことなんかどうなつたつていいわ。」

「そんなの感傷だよ。長い一生を半年ぐらゐの思い出で生きられるものではないんだ。それに子どもは夫の代わりにはならない。僕のいない家庭で、母と二人で留守番をするような結婚なら、しない方がいい！うちの母は賢明だから、一人になつて大変でも、若い君を利用するような結婚を母のために僕がするのを喜ぶわけがない。君は寡婦の惨めさを知らない。夫婦つていうのは、長い間ずっと二人で暮らしてゆく人生の中に意義があるんだよ。あなたさえよければ、自分はどうなつてもと女の人にはよく云うけど、そんなの嫌いだな。自分を大事にしなくちゃ、結局他人との生活も大事にしなくなるからね。死ぬ死ぬつて簡単に云うけど、生きるつていうことの方がずっと大事なことなのだよ。」

「今は僕の友だち——みんな選ばれた秀才だけど、一兵卒になつて戦死してゆく。そういう時代だから、残つた僕たちはもつと生きてゆくことを大切にしなくちゃ。したいことがいっぱいある大事な人たちが、何もかも捨てて出て行き、無意味に死んでゆくんだからね。」

「君は今、両親や弟妹やたくさんのお友だち、みんなに囲まれた境遇なんだもの。有意義に暮らさなくちゃ。毎日僕のことばかり考えて、つまらなく暮らすなんてもつたないじゃないか。」

「僕だつて戦争のために、計画していた勉強も仕事も出来なくなつて、大学を出てから楽しい日は

一日もなかった。それだからといって、結婚して妻や子どもとの生活に楽しみや慰めを求めるようにはなりたくないなあ……。」

私はもう何も云えなかった。

やがて立ち上った彼に促されて、帰り道を歩く私の胸の虚しさを埋めるように、涙が満ち溢れてきた……。



終戦の詔勅が下る迄

福 島 き ん

下連雀三丁目当時三十三才

昭和十六年八月、夫は出征した。疊業、職業に劣等感を持ち乍らも、留守は守ってやって行かなければなりません。職人は疊は作っても運んでは呉れません。自転車乗りはベテランの心算でも、リヤカーは未だ引いたことはなかったので、人に見られたら恥かしい、そんな気持ちで、夜の明けるのを待ち、三才九ヶ月と一才半足らずの子供が寝て居る内にと、新しい疊、四疊半をリヤカーに積んだ。八幡通りを横切り上連雀に入ると、道路は狭くなり坂になって居た。調子よく降りて来たが、どうしたはずみかフワッとした感じがしてリヤカーは横転してしまった。近所の家は何処も寝静まって居るし、人通りはない。誰に頼むことも出来ないが、必死というものは恐ろしいもので、約百疋以上もあるものをどうして起こしたか憶えて居ないが、ともかく起こして、梅林うらばやしの三上さんの貸家に入れて来たのです。帰って見ると、未だ子供達は眠って居た。職人は前ぶれなしで突然やって来る。朝飯を食べ始めたばかり、私は次女を背負ひ、自転車をころがし、職人は道具を担いで、後からついて来る。最初のお得意様の家へ行くと、突然なので都合が悪いと云われ次の家へ行く。ここの都合が悪く、次のお得意様に行き、やっと仕事にありつける頃は九時を過ぎ、帰って来てもう食事をする気にもな

れず、食べずにしまふ事も度々でした。

民生委員の小野さんと云ふ方に何度も足を運んで、扶助が受けられると、ガス等の料金は安くなり、特別な配給物迄戴く事があつた。近所の方々は皆よい方ばかりで、お医者様も無料で診て下さつたり、地主さんも地代を半分にして下さつた。

其の年の十二月八日宣戦布告、第二次世界大戦は勃発した。「とうとうやつた……」私達は当然日本が勝つものと思ひ、小躍りして嬉こんだ。

高円寺の義父が職人を世話したり、表等仕入をして呉れたが、義父は酒好きで、どんな時でも酒を出さなければならなかつた。

翌年の夏、義父の来るのを待つて居たら、お得意様に間にあわない表の注文があつた。電話のない不便さ、家で仕事をして居る職人に長女を頼み、私は次女を背負つて中央線に乗つた。新宿で乗り替え、山手線高田馬場で降り、洋傘を片手に汗を拭きふき、一軒以上も歩いた様な気がする。問屋に畳表の注文をして帰つて来た。表は直ぐ届けて呉れたが、翌日来た義父は怒つた。「自分で勝手に注文するなら、俺はもうみてやらな



いぞ……」私は手をついて謝った。こんな思ひをして得たお金は、義兄も出征して居るとの理由で義父は半分持つて行つて了ふのです。男の居ない世帯には酒の配給がない時があつた。「女世帯には酒の配給がなくなつて了つたのです。」と云ふと、義父は「お前は後家か？」と一喝し、買つて来いと云ふ。仕方なく、出入りの酒屋さんに参拜九拜してやつと一合の酒を分けて貰ひ、義父に出しました。府中の大國魂神社の前の問屋さんにも何度か表の配給を、リヤカーを引いて取りに行きました。或る日私が、お使ひから帰ると、苦笑し乍ら職人が云つた。

「奥さん、美佐子ちゃんには困りましたよ。わたしが帰ると云ふと、おじちゃん帰っちゃいけないつて、わたしを放さないんですよ。おじちゃんはね、お家に坊やが待つて居るから帰るんだよ」と云ふと、じゃあ、うちのおとうちゃんはどうして帰つて来ないんだつて云ふんですよ。」

物資はだんだん乏しくなり、職人もほとんど居なくなつて了つたので、それから自分ですることになりました。或る時、六畳の裏返しをやりましたが、慣れない事とて、夕方迄かかつて了ひました。私は出来上つた畳を積んで、鈴懸け通りにかゝつた時です。薄暗かつたので道路がよく見え、防空壕の盛り土に、片輪を乗り上げて了ひ、またしてもリヤカーは横転、今度もどうして起こしたか記憶がないのです。或る日読売新聞の記者が来て、畳を縫つて居るところを写真に撮つて行きました。「敢闘する女畳屋さん、銃後の守り安泰。」翌日の地方新聞に、私の写真が記事と共に載つて居りました。仕事もほとんどなくなつた。恰幅かつぶくのよい立派な紳士が来ました。紳士は入つて来ると、「奥さんこの

位あればいゝのです。場所を貸して下さい。月七十円出します」と云つて、片足で円を画いた。ガラソとした仕事場。でも私は直ぐには返事が出来ませんでした。すると紳士は財布を出して、中から十円札を抜きとり、ヒラヒラさせたのです。そばに居た次女は飛びついて、十円札を取つて了ひました。仕事のなくなつた今、子供から其の札をもぎとつて、紳士につきかえすには、月七十円と云ふ言葉は魅力がありました。翌日、トラックで厚いボール紙を圧搾した様な、電気の何かに使ふのか、わからないものゝ切端の様なもの置いて行きました。そして時々取替えて行くのです。お金をよこしたのは二ヶ月か三ヶ月、その後は拂つて呉れません。そして、人相のよくない人が四、五人、品物と一緒に来て、お店の四畳半に上り込み、何やら相談をして居ます。私が隣室の六畳に居ると、「奥さん、石鹼要りませんか、お米はありますか。と云ふのです。物資のない時、お米でも石鹼でも喉から手の出る程ほしいのです。けれどそれを貰つたら、どんな難題をふきかけられるか解りません。「要りません。間に合つて居ります。」と私は頑なに断りました。こんな事をして居たら、家迄取られて了ふかも知れないと恐ろしかった。或る日用品物を全部運び出したのを幸ひ、私は前の家の奥さんに頼んで、お店の硝子戸に全部鍵をかけて貰つた。そこへ黒塗りの立派な自動車が止まり、中から以前の紳士の息子と言ふ若い男が降りて来て、明けて呉れと戸を叩くのです。黒井さんの奥さんは、「留守ですから明けられません。」そう云つて頑強に開けなかつたので、とうとう男は帰つて行つた。本当に助かつたと思ひました。

子供を田舎へ疎開させた十九年の十一月二九日、B 29から爆弾が中島飛行機工場に投下された。政府がいくら疎開、疎開と呼びかけても、いっこうに疎開しなかった人々は、あわて、我先にと疎開し始めた。明けて二十年、私も田舎（現、坂戸市）に自転車で四十四軒、荷物を運びました。大きな荷物は田舎の兄がリヤカーで運こんでくれました。所沢の飛行場の中を通って行くので本当に恐いのです。空襲警報が発令されると、中島飛行機工場の工員がトラックで村山の方へ運ばれて行くのです。田無の手前には一トン爆弾が落ち、大きな池の様な穴がほられて居ました。所沢街道では、何度か空襲に逢ひました。亦男の人と抜きつ抜かれつ、自転車競争の様な事もしました。秋津でB 29が墜落した。私も野次馬根性を出して、畠の中の現場へ見に行きました。民家が二軒焼け、墜ちた飛行機からは、ドクドクガソリンが流れ出して居ました。本通りに出ようとしたところで、何にか黒いカタマリがありましたので、足で蹴とばして見ました。多分墜ちた飛行士の股ももの肉だろうと思ひました。空襲は益々激しくなり、町長さんの家にも爆弾



が落ちたと云ふ。「何も町長の家だからと云つて、一番先に落とすことはないじゃあないか。と笑えぬ冗談を云つた。新川の郵便局も焼けた。近所の桜木さんと云ふお家では防空壕に直爆弾を受け、逃げ遅れて防空壕に入れなかつたお婆あさんだけが助かつたと云ふことです。其の時、玉川上水の桜も薙ぎ倒され、上水の北側の武蔵野の家屋も被害に逢ひ、並んで二軒ばかり傾いて居ました。空襲は連日の様に繰り返されたが、三月十日の陸軍記念日に浅草方面の大空襲、五月二十七日海軍記念日の高円寺方面の空襲以外は日を覚えては居ません。或る夜、空襲が終つたばかりの時家の前で小さな風呂敷包みと洋傘を持った小さなお婆あさんが「わたしは焼け出されるのがこれで三度目ですよ」そう云ひ乍ら、道路にしゃがんでしまひました。なんとも気の毒と思ひましたが、どうしてやる事も出来ませんでした。空襲が終ると、駅前の野村さんや春木屋さんの御主人は、頭の上に布団を載せ、青い顔をして井之頭公園の方から帰つて来ました。

我が家の防空壕は家の中なので、前の黒井さんの中へ入れて貰ふことにしました。亦しても空襲、私達はあわて、防空壕に逃げ込みました。ダダダーンと云ふオートバイのエンジンの様な音がして艦載機がなん機も来た様でした。終つて出て見ると、隣りの川口さんの土蔵には、幾つもの弾痕があり、我が家の屋根にもありました。東隣りのアパートは、下の方から入つた弾が二階の柱に突き刺つて居たそうです。八月十四日の熊ヶ谷の空襲を最後に敗戦といふ事実で戦争は終りました。

私が此の地三鷹に来たのは約五十年前、当時は駅前は草原で芒が生えて居りました。横丁に入ると、

雨の日などは高齒が没してふ様な悪路でした。村から町になり、やがて市になりました。今では立派なビルが次から次へと建って居ます。戦争によって、財を得る者、一家の柱を失って不幸な人生を送る者、人の運命は様々ですが、文化を誇り平和な現在に、安楽な日々を送れるのも、戦争で散った数多くの犠牲者のお陰と、感謝の気持を忘れてはならないと思ひます。

注1 (一トン爆弾) 米軍の大型爆弾。

注2 (陸軍記念日) 明治三八年の奉天大会戦における日本軍の勝利を記念して同三九年に制定された。戦時中は各種行事が行われた。

注3 (海軍記念日) 日本海海戦を記念して制定された(明治三九年)。戦時中は各種行事が行われた。

我が家の明暗人生

小峰 みさを

牟礼一丁目当時二十才

私達夫婦は、昭和十七年十二月に当時生後九ヶ月の長男を連れて、ここ八軒家（現在の三鷹市牟礼一丁目）に引越して来ました。これは主人の勤め先の関係で、当時主人は馬力の仕事をしていました。中島飛行機や正田飛行機からエンジンなどを馬で遠くの方まで運んでおりました。朝四時頃から

出かけて、夜半まで帰らないことが多かったので、子供をかゝえてとても心細い思いをしました。

空襲でB29が来る様になっても、はじめの中は怖くてふるえるだけで、とても見ることは出来ませんでした。私の記憶では、三鷹台と富士見ヶ丘方面から岩崎通信機の方向に高射砲を射っていたようです。グリーンパークにあつた中島飛行機の他に、近くには日本無線、新川の今の野村病院のあたりに正田飛行機というのがあり、中島飛行機が井の頭公園に入つたというの



をきいたすぐあと、今のプールのあるところに時限爆弾が落ちて、主人の話では夜みんながやっとほっとしている頃、下からモグラが土を掘るようにムクムクと出てくる感じで爆発するのがとても怖かったそうです。公園の中には他にも何発か時限爆弾が落ちました。

当時困ったことといったら何といつても食糧で、近所の奥さんといっしょに長男長女を乳母車にのせ、鍋を下げて西荻の方まで雑炊を買いに行きました。春は芹や野草をとり、田や山から僅かの食糧や薪をとって暮しました。私は幸いおっぱいが出たので助かりました。近所では、母親が山ごぼうをとりに行った留守に子供がタメ（肥溜）に落ちて死ぬようなことがあって、野草をとりに行く間も子供のこと心配でした。

弁当には、大根でも何でもあるものを刻んでやりました。山内さん（近所の主婦）と手をとり合つて頑張つたものです。疲れはて、夜になると、B29が来る。主人が夜おそく帰ってくるまでローソクもなかったし、豆電球をつけていたら、町会長にひどく叱られました。タバコの火もだめだと云われました。

けれども遂々疎開せず、此処にいました。長女のお産の時は燈火管制下で一晩おき位に空襲があり、お産婆さんもつきつきりできてくれましたが、後産が出なくて生死の境をさまよい近所の奥さん方や皆さんの努力で、一昼夜もかかってやっと助かりました。その後又身ごもりましたが、井の頭の方まで配給をとりに行った帰りに無理がたたって、大変なことになり流産してしまいました。

面白い話といえば、当時は生めよ殖やせよで、長女が生れた時、市役所から「男女みなの川がわ」というお相撲さんが鯉をお渡しするからとりにくるようになっていくということで、バケツを下げてもらいに行つたことがあります。

この辺は現在の三鷹台団地などのところにも何もなく、向うの交番（新川の交番）まで全部見えませんでした。夜は必ずB 29が一機位はきたように思います。（昭和二十年頃か）。B 29が杉並に落ちた時は、私の家の屋根すれすれに廻つていった感じでとても恐ろしく、すぐ憲兵隊の人が来て、飛行機の中のもの一切に手をふれるなど注意して行きました。世田ヶ谷に不発弾が落ちたので、見に行きましたが、大きな池のようになっていました。防空壕はあつても中に入らず、家の前の畑に隣組の人達とよく出ていました。防空演習もよくしましたが、本当に火が消せるのか心配でした。

又或時、空襲で主人が中島飛行機の防空壕に入ったが、何か予感がして次の壕に移つたとたん、爆弾が前の壕に落ちて危うく命びろいし、帰宅して一服している時、気がつくと、腹巻の中が布袋ほくえい様のようになつて上つていのです。見ると土が山のようにつまっていたのです。

又、馬達は火に驚いてみな逃げてしまつたが、あとになつて武蔵境の方でみつかつたという社長さん（馬力の）連絡で、主人は夜半に馬をとりに出かけました。この仕事をしていると、徴用ちようようにかゝらないということでしたが、後には徴用で正田飛行機につとめるようになりませんでした。

やがて艦載機が来るようになってからは、家の中にいても一発当れば死ぬと云われ、主人が帰つて

くるまで寝られず待つていたものです。近所のおじいさんで飛行機が来ても平気で畑などうなつて（耕し）いる人がいましたが、破片が落ちてきて地下足袋の足に刺さったのでそれからはすぐ逃げるようになりました。

当時は、とにかく高射砲陣地の関係か、B 29を新川の品川煉炭（当時中西タービン・機械を作つていた）までのこの空地におびき寄せていた感じで、夜はサーチライト（照空灯）が長くB 29を照らし出してとても怖かつた。

昭和二十年八月一日の夜には、八王子が空襲に会い、新川にも爆弾が落ちて少し焼けました。

医者に近いところには一軒もなく、久我山にもいたそうですが、病氣の時は西荻からよんでもらいました。馬力の社長のところには馬が二十頭おりましたが、藁を切つてかいばにするのがとても大変な仕事で、主人もよく手伝つていましたが、或る時社長の奥さんがこれを手伝つていて馬におつばいを噛まれつり上げられてしまつて騒ぎになり、西荻の医者にみてもらつたことがあります。

主人は昭和十九年七月出征しましたので、私は三ヶ月だけ福島に帰りました。福島では製材所につとめたり、川さらいのモッコかつぎをしたり、重労働をしました。三ヶ月して、突然主人が東京に戻つてきて、馬力の社長さんに会い、相談して福島に電報をくれました。当時は検閲が厳しく電報も自由には打てず、文面も制限されましたので「戦死した」という文面にしたものですから、私は急いで福島から東京に戻つて来ました。三鷹台から歩いて家に帰る途中、葬式のことなど考えていたら後か

ら「おーい、おーい」と呼ぶ声があるので、見ると主人が立っていたのです。とても嬉しかったが、戦死と聞いて田舎での大騒ぎのことを考えると一体何と云い訳けをしたらいゝか困ったような気もしました。(どういうわけで戦死の電報になったのかよく分らないが、当時は電報が二日位はかゝつたように思います)。又汽車の切符は朝早くから吉祥寺の駅まで行つて並んでやつと買うことが出来ました。

ラジオは何とか聞けたが、空襲の前には銀紙みたいなものが落ちてきて(敵の偵察機が電波妨害のため銀紙を降らせた)ラジオが混線して聞こえなくなつたりしました。子供達が面白がつて拾つていました。ラジオにも真空管など豆電球がつくので、風呂敷をかぶせて聞きました。

私は子供達も小さく、年もずい分若かつたので無我夢中で過しましたが、国防婦人会（婦）というようなものに入った記憶はありません。千人針（針）は立教女学院の裏門に立っていると、あつという間に出来上りました。トラ年の女の人は年の数だけ結ぶことが出来ました。衣料切符もありましたが、買うものが何もなかったように思います。

しかし何といつても、当時焼け出されないうことは有難いことだといつも思つておりました。

終戦になつて、電気がつけられると思つた時は本当に嬉しかったが、その後も何回か空襲のサイレンが鳴つて、その度に悪夢をみているように恐ろしいと思ひました。五日位あとにやつと安心して電気がつけられるようになった時は、心からほつとしました。

土地の方々に本当にお世話になって、大変な時代をのり切ることが出来ました。

注1 (国防婦人会) 愛国婦人会と並んで婦人の戦争協力機関として活動

注2 (千人針) 兵隊にいく人の為に女の千人が白地に赤糸の玉を針でぬったもの。弾丸よけになるといわれた。

戦時下の回想

大 関 律 子

上連雀五丁目当時二十一才

その角を曲ると、やがて終着駅の見えるところ迄きたような気がする。長年勤めた職場を定年退職して、再就職の道も開けず何年にもなる。

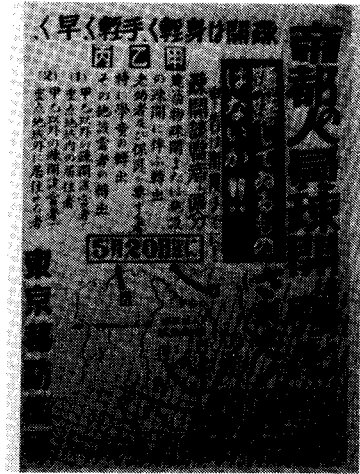
ふり返って見ると戦争中警報が聞える、身仕度を整えて家をとび出し、メガホンを持って「空襲警報発令」と叫んで住宅中を走り廻った。時には幼い子供を背負って防空壕に待避させていたが、もうあの頃の元気はない。

某紙の記者に言わせると、私のように年金で生活している者を「熟年乞食」というそうだ。思えば

戦争を境にして生地獄のような日もあったけれど、人生わずか五十年の時代を経て、今や八十年の時代となった。

現在があるということは、過去があったからで、そして未来も開けるといふもの。このへんで過ぎ去った日々の暮らしをいささか語ってみたい。

その頃曙住宅とはいわなかったけれど、私達一家が渋谷区から現在の家へ移ってきたのは、昭和一九年九月二十三日のこと。当時は人家もまばらで、外灯もなく本当に淋しかった。庭は草茫茫まだ襖も入っていない家だった。町役場へ寄留届に行ったが、田舎道を行けども行けども町役場迄は遠かった。



三鷹へ移ることになったのは戦争中のことで、父がそれ迄勤めていた銀座の会社を辞めて、三鷹の軍需工場で財務を担当することになったからである。「若い人達が大量戦争で命を亡くしている。お父さんの最後のご奉公ということで、工場で働くことを決意した」と言っていたが、今になって思うと身体を酷使して命を縮めてしまったような気がする。今年は父の三十三回忌に当る。

暫らくして秋晴れの空に飛行機雲をたなびかせて、一機飛び去って行くのを見た。それが敵機による偵察とは知るよしもなかった。やがて空襲がはじまった。敵機は南方の基地を飛び発つて富士山を目標に御前崎から本土上空へ、そして三鷹を通過して東京空襲は頻繁になった。現在の日赤武蔵野病院として立派な建物が建っているが、当時は高射砲の陣地で高度一万二千メートルという、日本で一番性能のよいものといわれたが、一発命中その瞬間グラツと大ゆれはしたものの、B29は容易に落せなかった。夜間の空襲は特に怖ろしかった。

生活は食糧不足で極度に貧しかった。テレビに戦争中のドラマが放映されることがある。ついこの間も、向田邦子作「男どき女どき」が八月五日から九日まで五回にわたって写された。その中のひとこまに一升瓶に棒を入れて米をついている場面がでてきた。

その頃「父子家庭」という言葉はなかったが、母のいない私の家では、うす暗い電灯の下で米をつくのは私の仕事だった。

隣組が八軒単位で組織されていた。共同井戸は涸れることもなく、みんなの命をつないでくれた。ガスを引こうという話がまとまって、月々いくらだったか忘れたが積み立てたこともある。しかし足並みが揃わないで、生活費にまわされて残念ながら次の機会を待つことになった。

どこの家でも風呂には困っていたように思う。現在は自宅に風呂があるにもかかわらず私は「曙温泉」と称して近所の銭湯へ行くこともあるが、当時は電車で吉祥寺迄通った。そのあたりに昔の面影は

全くないが、たぶん風呂屋は近鉄の裏あたりだったように思う。阿佐ヶ谷の風呂屋へ行ってきましたといつて近所の奥さんがさわやかな顔をしていたのが印象に残っている。

いろいろなことがあった。末の弟は三鷹へ移る以前に、学童疎開とは別に福島県野沢町の親戚の家へ行っていた。そこへ面会に行った弟は久しく戻ってこない。東京は父と姉、たぶん自分は転校して野沢で暮そうなんて考えていたのか、ところが父から「一郎が帰ってくる」という話があった。文部省からのお達しで、「中学生の疎開は認められない」ということで、兄弟は又別れて暮らすことになった。

当時中学生は戦力だったんですね。――

下駄にまつわる話をひとくさり。町会の配給で下駄が割り当てられる。といつても一人一足などという訳ではない。八世帯に五足ということもある。大人ばかりの世帯に子供の下駄がくることもあった。下駄といつても台だけで鼻緒がない。端切れを探して袋状に縫う。次にハトロン紙に麻紐を二本のせて折りたたみ、先に縫った袋に通す。それを半分に折って前つぼをつけて出来上り。台に上げるのはゆるくてもきつくても具合が悪い。鼻緒作りはかなり技術を要した。

足袋作りもやってみた。近所に若い頃下町で足袋屋をやっていたというおばあさんがいて、教そわりながら型紙を作り、名古屋帯をいって中の芯を足袋底にする。白い布を探して手縫いで仕上げる。古足袋のこはぜをつけて出来上り。ジャムの空瓶に小銭ならぬ足袋のこはぜをざくざく入れていたが、

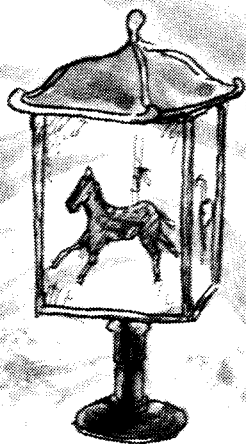
何年か前に不燃物ごみ集集の日に、名残りを惜んで処分した。

どのくらいの期間通ったか忘れてしまったが、中野の友達の家へ洋裁の手伝いに行っていたことがある。四畳半一間の店でいいから独立してやってみたいなどと考えていた。

その家に用心棒として、四谷消防署の署員が同居していた。彼が昭和二十年五月二十五日の空襲でやられて、信濃町の小学校にかつぎこまれているという知らせがあった。早速みんなでお見舞いの品物を持って中野駅へ行った。上り電車は当分来る見込みがないというので、仕方なく線路の上を歩いて信濃町迄行った。上り下り合せて三、四十人位の人が歩いていたように記憶している。町並はずっかり変って、赤茶けたトタンでかこんだ小屋なども点在していた。

彼は救急病院に当てられた小学校の教室に寝かされていた。怪我は軽かったようで、暫らくして退院した。

驚いたのは隣に寝ていた人で、性別はわからな
い。うつろな眼をした顔はとも角、手指の間から
蛆虫がのそりのそり這っていた。聞くところによ



ると、芸人だったが、空襲で丸坊主になってしまった。旦那はびっくり呆れて逃げてしまったということだった。

私達が二度目に面会に行った時は、寝具が片づけられていた。冷たくなって葬むられてしまったんだらうと思う。何とも哀れだった。

空襲におびやかされながら、時は過ぎて行つた。昭和二十年八月十四日、弟が挺身隊として行つていた工場の帰り、新宿で一枚のピラを拾ってきた。半紙四半分の大ききでガリ版刷りだったように思う。「戦争は終つた。日本は戦争に負けたんだ」という意味のことが書いてあつた。

私は心の中で、いよいよお寺の鐘もはずして弾丸造りもはじまつたという報道も以前にあつたし、矢張りと思つたが、声には出せなかつた。暫らくして父から明日は天皇陛下のラジオ放送があると聞かされた。

静かな不気味な夜だった。たしか昭和十九年の暮だつたと思う。夜間の空襲で子供をリヤカーに乗せて逃げた。ここぞと思う安全地帯へたどり着いて、リヤカーをのぞいたら子供の片足は引きちぎれていたというむごい新聞記事。

きょう融資の事で日本銀行に出張したら、帰り空襲にあつて長時間待避した。くもり空で飛行機の姿が見えないというのはどうも、という父の話。

隣りの奥さんと二人でこたつにあたつていたら、突然ピューという飛行機の急降下する音と共にP

51が飛び去った。操縦士の顔も見えた。慌ててこたつぶとんをかきむしるようになっていただき合つてかぶった。この日は鹿島灘で艦砲射撃のあつた日だつたと思う。

頭の中は悪夢のように過ぎ去つた日々の事がらがかけめぐつた。

そして十五日の朝を迎えた。その日は快晴できのうにも増して暑い日だつた。正午少し前に父子三人ラジオの前に正座して、やがて聞こえてくる玉音に耳をかたむけた。

注1 (艦砲射撃) 軍艦に備えつけられた砲による攻撃。

古くなつてゆく記憶

小 高 艶 子

牟礼二丁目当時三十一才

昭和十七年四月八日、その日はよく晴れて雲一つない空だつた。時刻ははつきり覚えていないが、昼少し前だつたように思う。突然東の方で「ドドン」とすごく大きな音がした。その時はただそれ丈

の事だったが、あまりの音の大きさに吃驚したことは確かである。後になってそれはアメリカの爆撃機の日本、本土初空襲の音であったとか。……聞き及んだ。

昭和十八年日本の委任統治地であったサイパン島が陥落し、硫黄島が占拠されて、口には出せなかったが、日本はこの戦争に敗けるのではないかという不安が心の中で拡がっていった。

昭和二十年終戦の年になると敵の大型機 B 29 が頻繁に来襲するようになって、ラジオの警報が「東部軍管区情報―警戒警報発令―空襲警報発令」と、順を追って流れる。B 29 のコースは大方決つていて、駿河湾より進入し富士山を左にみて、コースを東にとり、三鷹の上空を通つて都内方面へ進入していった。

そしてあの三月十日の東京大空襲である。波状攻撃とかで次から次と翔んで来る大型機 (B 29) の編隊によつて、焼夷弾が投下され東京の下町の殆んどが炎の海となった。空襲警報が解除になると同時に、この辺の人はこぞつて裏の丘 (海拔五十六米とか、三鷹では高所) に駆け上り、その焼けるさまを、おののき乍ら見守つた。東の方面から南にかけて東京の空は燃える火によつてまっ赤に染つていた。まだ攻撃が続いているのか、それとも焼夷弾によつて焼かれつつある家の火が次々と移つてゆくのか各所で火の手が上つては燃えひろがる。あの炎の中で右往左往する人々がと恐しさで足がすくんだ。

翌日から翌々日にかけて、その火で焼け出された都内の親戚が……

夫を兵隊として召集され乳児をかゝえた妻がその両親と：歩行困難な八十才の老婆を背負った夫婦が：幼児を連れた夫婦が：幾組も頼つてきた。そして七人家族であつたわが家はたちまち十七人の大人数にふくれ上つた。

当時食管法とかで米は統制され配給制度で、野菜、魚類まで買う量を決められていた。先づ食べ物の心配である。この人達が転入の手続をとつて一切の食糧の配給が受けられるまで人には云えない苦労があつた。幸い、その頃田圃を小作に出していたので、保有米がわずかにあつたので助かつた。一日鉄の大釜で五升の米を炊く。炊き上つてその釜をおろす時は重くて一人では、かまどからおろせなかつた。

野菜も勿論足りる筈がない。一生懸命人を頼つて買出しである。新川から烏山あたりの農家まで歩いて行つた。今でもその頃売つてくれた人々の厚意は忘れられない。

やがて幾日か一緒に過ごしたこの人達も、戦災を受けた自分の土地に仮住居を建てたり、わが家の借家に住みついたり、それぞれが落ちつき、又元の家族にもどつたある日、上空を飛んでゆく敵機B 29の編体の中の一機が異様な飛び方をしてゐると見送つたが、その後久我山に墜落したとの事であつた。その翌日、家の前の道を墜ちたB 29を見に行く人が、ひっきりなしに通つていった。見て来た人に勧められ私も行く事にした。そこへ行くために一生懸命だったためか、途中空襲警報になつたらという考えはなかつたように思う。歩いて三十分位の道のりであつた。現場は民家の上に故障した

B 29が墜ち、その家は丸焼、大きな穴があいていた。簞笥の引出しが燃え残り重なった衣類の中の紅色が妙に印象的だった。

その穴の、真中に墜ちた飛行機の塔乗員の屍が無造作に埋られていたが、土がうすくかぶされてたので、血色のいい顔、太ったたくましい太股がのぞいていた。その頃の日本の国情とは違い、アメリカにはまだまだ食糧が充分にあるんだなと、ひそかに思った。周囲で見ている一人の男の口車にのつて、穴の中で十才位の男の子が竹の棒でその屍をつついていた。死体の冒瀆ぼうとくである。私はその頃弟二人が軍属として、兵隊として外地に出征していたので、もし戦死してこのような目に遭っていたらと思ひ、いたたまれず人々の後で合掌しその場を離れた。戦争とは人の心を何と惨く変えるものか、暗澹たんとした思いであった。

そして間もなく小型機 P 51の来襲がはじまった。今までは空襲警報発令から敵機の来襲まで時間的に余裕があったが、警報が発令されると短時間で襲来した。記憶としては、はつきりしていないが五月か六月の頃ではなかったかと思う。空襲警報の発令と同時に、当時七十才であつて少し足の弱かった舅ぢうとを、続いて三才になる娘を、家から十五米位距つた庭先の防空壕へ入れ、取つて返して家の非常持出しを抱えて飛び出そうとしたところ向つて右側の竹藪やぶがざあつとした音と共になびき、小型機 P 51がきわめて疾い早さで、バリバリという機銃の音と共に、庭の百日紅さくすべりと桜の梢すれすれに翔び去つた。家の後方にも爆音が聞えたので、軒下に立すくんでしまった。確かに飛行機の風防窓の中に人影

がみえた。警報が解除になると近隣の人等が集まって来てお宅は大丈夫だったかと安否を気遣ってくれた。小型機は爆弾は落さず、機銃掃射で人を狙っていたものとおもう。その後、裏山の畑で無数の葉莢^{きょう}が見つかった。

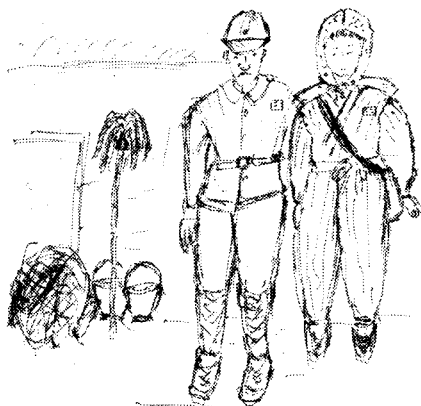
昭和四十三年改築のため本堂を解体した時、屋根のトタン板に無数の弾痕があった。

その頃は口に出しては云えなかったが、この戦争は勝てるとは思わなかった。非戦闘員まで捲き込んでゆく戦争がただただ、恨めしかった。戦意などという言葉はとうに忘れていた。そして遂に八月十五日、ラヂオから流れて来る天皇陛下の終戦の詔勅。神妙に聞き終り、ただ戦争が終ったというほっとした気持が、時がたつにつれ静かなよろこびに変っていったようである。

その頃の家族の中でいま生きているのは、私と長女、夫の妹と、甥と姪である。

昭和十八年生れの長女は、その頃のことを聞いても記憶にないという。

今あの戦争を経験した人は何人位生きているのだ



ろうか、日本の国に……そしてどんな思でいることやら……

因ちなみに私は大正三年十一月生れ、その頃海軍の軍人であつた父は、幼児の私に「お前は日独戦争（第一次世界大戦）で青島陥落の日^にに生れたんだよ。」とよく云つた。何となく戦争に因縁づけられたようであるが、今、このまゝつづく平和の世界で生きつづけたいと思つている。

注1 （波状攻撃）波のように寄せては返し、攻撃すること。

警備召集と野崎の火災

宍戸利武

野崎当時二十五才

昭和十八年六月、私は徴用を受け小金井の横河電機に入社致しました。ここでは飛行機のエンジン部品の仕上工として働いていました。

その時すでにアメリカは、沖縄本土に上陸し、本土もしばしば空襲を受け、戦争は一層激しさを増して来ました。

三鷹でも警備召集という名目で、各学校を使って民間防衛隊を組織するようになり、私も召集を受けて、第二小学校に駐屯とんいたしました。その時の中隊長は、吉野良一先生で、たしか予備役の中尉だったと思いますが、隊員は約三百五十名位いました。

班長には在郷軍人の人がなり、毎日各個教練や、銃剣術、対戦車攻撃（肉迫訓練）の訓練の明け暮れでした。家がすぐ前にあっても帰ることは許されず、教室に寝とまりということで、炊事当



調布飛行場

番も交替でやり、まったく軍隊生活と同じことでした。

ただ着る物と、はくもの等は一応支給されたが、それもあまり上等のものではなく、つぎはぎの当ったものばかりでした。

私が召集されたのは、たしか昭和二十年二月の寒い時だったと思います。ある日大雪が降ったので、調布の飛行場に飛行機が降りれないから、警備召集の者は飛行場の雪踏みに出るようにという命令が出されました。(調布、府中、小金井、三鷹)

その日は零下七・八度の寒さで、なかなか雪がうまく踏み固まらなく、降りてくる日本の飛行機が、着地に失敗して二、三機ひっくりかえったのを見ました。

やがて五月廿四日になると、一時中隊は解散することになりました。これでやつと家族のもとに帰れると思って皆喜こんでいると、その晚十一時五十分から、翌日にかけて、アメリカのB29の飛行機が約五百五十機襲来し、十二時三十分には、野崎の部落に焼夷弾が落され、十五軒が火災をおこし、そのうち五軒が丸焼となりました。

私の家もそのうちの一軒でしたが、幸い一名の死傷者も無かったので、なによりでした。

警備召集が解除になっていなければ、その応援を得て、損害も少なくてすんだかもしれないと、残念に思われました。

その後八月十五日に悲しくも敗戦となり、家族一同全焼という痛手にもめげず、衣食住に懸命な努

力に励みました。そして、ようやく、二十一年三月二十五日に結婚し、山林を開墾し、食料を作り、養豚業にも精を出し、ようやく落ち着いた生活が出来ようになりました。

今はつげの種を蒔き育てる植木業に従事し、三鷹を緑の町にしようと、努力しております。戦争は破壊のみで何も得るものはありません。これからの子供たちには、物を育て、慈しむ、やさしい思いやりのある心を持つてほしいと願っております。

三鷹駅前での戦争体験 座談会

へ当時、三鷹駅前地域に住んでおられたみなさんにお集まりいただき、戦時下の生活や空襲のことなどについて座談会（フリートーク）形式で話し合っていました。市内の各地域と異なり、民家が多く、商業地域であるという特殊性もあり、また違ったお話をうかがうことができました。なお、この集まりは、山本誠さんのお骨折りにより実現したものです。

取材日時 六十年八月三十一日

取材場所 駅前市民館

参加者

山本 誠さん 伊藤 孔介さん

池上 忠雄さん 蔵田 まつ子さん

寒川 礼子さん 相賀 しずさん

五十嵐 優三さん (順不同)

井上編集委員長 事務局

○ 本日はお忙しい中お集まりいただきありがとうございます。戦前から三鷹駅前にお住まいの方に、戦争中のお話をうかがいたいと思ってお集まりいただきました。市内のほかの地域と又違った考え方、ご経験をお持ちかと思しますので、よろしくその点をお願いします。

● どういうことからしゃべっていいか、今の三鷹センターの入り口のところに橋本利一さんの家の門があり、その隣の米屋にいました。そこで空中戦を見ました。外で眺めてたんですが、B 29に日本の戦闘機が体当たりしていくんですが、ほとんどできないうちに射落されて、粉々になって落ちてくるんです。さんさん見ました。高射砲がB 29に命中したことがあって、米兵が落下傘で降りてきまして、自転車で見に行ったんですが、いくら行ってもいきつかない、久我山の坂の上で、はつきりわからないが、すでに墓地に埋められていました。

たまたま、二十年八月に警備召集で、現在の四小につめていました。十五日、現在の西久保のグリーンパークに百キロ爆弾の不発弾が落ちて、一間半くらいほったところで、学校の校庭に戻って、終戦の詔勅を聞きました。その日の午後行つて、掘つたとこ埋めてきちゃいましたが、その後どうなっているのか。

終戦後は配給所にいました。その後、相模原の進駐軍が来て、現在の中あたりにキャバレーができました。ある日兵隊が来て、缶詰をかかえて持つていっちゃったんです。キャバレーに入るのを見届けて、立川のMP^中に電話をしたら、MPが来て、キャバレーで首実験^{首2}して、犯人をつきとめたなんて

こともありました。その後、その兵隊が配給所にやってきましたね、それを見て、裏口から逃げましたよ。それからはこなかったな。

● 女の立場から、一番たいへんだったのは、食糧の確保ですね。着る物はぼろつぎをしてなんとかしのぎました。食糧は配給で、トウモロコシの粉は電気パン^{電3}にしたりして食べました。だけどングリの粉はどうしても喉を通らなかつたですね。買い出しにもよく行きました。最初はどこへ行つてもわけてもらえなくて、



豊田まで行きました。又いもや大根を十一貫もかついで、ちよつとかたむくとたおれちやう、それでも、すこしでも重くなるのがうれしくてね。お米が欲しくて、いなかの栃木の方に買い出しに行きました。着物なんかを持って、頭を下げ下げ、わけてもらつて、それでも途中でつかまつちやうこともあるんですが、石炭車の中で、おまわりさんが来るかと思つて夢中で逃げたり、柵を越えたりしました。つかまつたことも一度ありますが、持つて帰れた時は本当にうれしくて。フスマさえも分けでもらうのがたいへんで、それをおダンゴにして食べました。

弟が神代特攻隊の隊長で死んでおります。ほんとうに二度と戦争はしてはいけないと思います。

三鷹は都内ほどひどい爆撃はなかつたんですけど、駅前に住んでいる方のお嬢さんが、挺身隊で亡くなつたなんていうこともありました。

● 食べるものには苦労しました。物を持つていかないと交換してくれない。疎開で焼け出されてなにもなかつたから苦労しました。

● とにかく食べることに苦労しました。春日部まで行きました。氷川にも行きました。最後には、



炭焼き小屋まで行きました。週に2、3回行っていました。

● 十八年頃から、配給所につとめてました。徴用がきても、のがれられるもんですから、腰かけではいったんですが。配給所では、一度に量売れないから、少しづつ売ってました。売るのも一・二時間で済んじゃって、私は米屋に行っていました。

● 子供に野菜を食べさすのに野の草までね、よくあかぎを摘みにいったりしました。

● 大根なんて、半分ですよ（配給）、うちあたり七人いて、それを二、三日でしょ、どうしても、ヤミのもの買わないとね、それで帰りはこわごわでね。それだけでやせる思いでしたよ。一度は知らないで、立川から、吉祥寺まで、停まらない電車に乗っちゃって、線路に飛び降りましたよ。やせて、おじやが八貫ぐらいありましたか、よく力が出たもんだと思います。

● 配給になったタバコに葉っぱを乾燥させて混ぜて吸いました。すこしでも量を増やそうと思つてね。

● 私は商売してましてね。軍需工場の布団の修理なんです、徴用工の寄宿舎の指定を受けて、大沢の坂下の、最初は「東京飛行機」と言っていたんですが、後に「中島飛行機」になりました。穴のあいたところに糊つけて、ともぎれを貼ってアイロンをかけて、ふさいだなんていう乱暴な仕事もしましたね。儲かったんですよ。お金の苦労はしなかった。よく言うんですけど、十八年までに、家を建てた借金を利息をつけて全部返しましたからね。

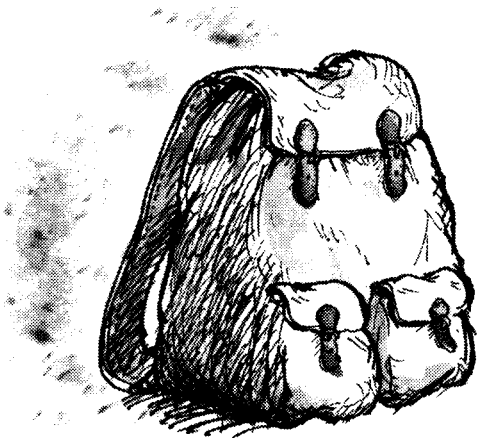
● 終戦までは、勝つまでは、という気持で防空演習で、屋根に登ったり、とにかく、勝つまでは、と張りつめていたから苦労とも思わずがんばれた。終戦になってからは、ただただ、子供達に食べさせたいという思いだけでした。

● 配給の話にもどりますが、糸の販売の実績がありません、配給をしました。終戦になって糸が貴重でね、余分にあまった糸をお米と交換したなんていうこともあったように思います。綿とじやがいもを取りかえたことも一、二回ありました。

● 酒の配給があつて、主人が飲まないから、ためておいて、交換にはよろこばれました。子供が石を投げて、ガラスを割った時など、ガラス屋さんが、なかなかはめにきてくれなくてね、お酒を持って行くとすぐはめてくれたもんですよ。

● 配給所でも、醤油がなくて、醤油の色のもとを使って、煮たきしたこともありました。

● 二月十六日〜十七日に爆撃がありました。昼は艦載機、夜はB29がやってきました。十六日は田無の方で、十七日、今日はなんか変だなと思って、家中で壕に入っていました。境の東の踏切と私の家





男女の川

の間に1t爆弾とんが落ちた。「やった」と思ったら、ワーツと黒煙が来て、カミナリがなるような音がして、獣医学校、関東中学校が機銃掃射をうけて、今度は、三鷹の方にはいつてきた。日赤のところを高射砲陣地があつて、それから中原の方へ飛んでいきました。

● 米屋の倉庫のふし穴から見てたんですけど、艦載機が駅へ向つていったんですが、終わった後で行つて見たら、今の三鷹飯店のあたりからずうっと機銃の跡が残つてました。駅におりた人で、タンカで運ばれた人がいましたが、死にはしなかつたということです。

● 爆音と機銃掃射で、表なんか出ていられなかつた。

● 夜、照明弾が、おとされまして、昼と同じ明るさになるんですよ。

● みんな畑へ逃げましたが、明るさにびっくりしました。

● 帰つてきてる兵隊さんが、びっくりしちゃう、戦地じゃ、そういうことがないから。内地にいる人は知ってるからあわてないけど。

○ あの当時の学校はどうでした。

● 学校はあの時分は、学校から何分で家へ帰れるか

という訓練だけで、勉強なんかできなかつたですわね。弁当は戦争が始まった当時は日の丸弁当でした。戦火がきびしくなつてからは、何分で帰れるかの訓練だけでした。

● 三鷹は、学童疎開が遅くて、三月頃から始まりました。小学生だけですけど。

● 中学生はもう、工場へやられてた。

● 駅前の方で、中島（飛行機）へ行って（動員で）亡くなりましたよ。

● 上水のそばの方達で、防空壕へはいつていて、多くの方々が、時限爆弾で亡くなつたんですよ。

○ 当時、銭湯なんかはどうでした。

● お風呂に入ると、人のお尻のところに顔がいくほどで、芋洗いでした。

● 三鷹に銭湯がなくて、西荻まで行きました。

● お風呂はたいへんでした。

● 石けんは、ヤミのがはいつたんでしょうか。本当に大事に使いました。

● 水は井戸でした。水質が良かったですから。

● 共同井戸でしたので、かめに貯めて使っていました。

● ガスは戦前から有りました。この辺の地域が三鷹で最初に敷かれました。でも戦中はガスも出なくなり、まきを燃やしました。

○ お医者さんはこの辺にはいらつしやいましたか。



- 駅前地域には、小原さん、小山さん、平嶺さん、鈴木さんと、お医者さんは、集中していました。
- おしゃれなんてできませんでしたか
- おしゃれなんて全然、モンペで寝て、モンペで起きてたんですもの。
- 昼間のまま、脚半はいたまま寝てましたね。いつ空襲があるかわからないから。
- 結婚式もモンペでしたものね。モンペをはかないと町を歩けなかったですもの。
- 黒のモンペとお召しのモンペと普段着のモンペと作って、おしゃれといえば、ほんとによそいきのモンペがちよつとあるくらいでしたね。

- 男の人は国民服、あれ一色でした。
- 葬式はどうでしたか。
- あまり多くなかったですね。
- 前のうちの長女が亡くなった時、今の消防署の隣の墓地に土葬したことがあります。
- 私も一度、座棺で、リヤカーで運ぶのを見たことがあります。
- 駅前是新開地でね、お年寄はあまり多くなかったからねー。

- 赤ちゃんのミルクはどうしてました。
- 配給のミルクでは足りなくて、お米をすっておも湯をつくって飲ませたりしました。よく育ちましたねー。命ー生命力といえますかねー。
- 長男と次男は母乳が余るほどだったんですけど、三男からは足らなくて配給を受けました。
- 親は痩せ細ってました。
- よく、配給のお米を一升びんに入れて、つきましたね。
- 石臼もつかってました。
- 長男は「秋はいいね、おいもがでるから、お腹いっぱい食べられるから」なんて言っていました。今では笑い話ですけど。
- 当時、読み物なんかはありました？
- 堅い本しかなかったですね。本を読む余裕なんかなかったですね。
- 新聞だって最後は一枚くらいしかこなかったですよ。
- 当時、情報はほとんどラジオからで、つけっぱなしにしてました。
- 当時、前田さんが町内会長をしてらして、毎月一元二円ですよ、貯蓄がね、それを集めて歩いて、万一空襲っていうと、みなさんからお預りしたお金ですから、そのお金を最初に防空壕に入れて、次に赤ん坊を入れました。今でも忘れないですね。

- 金属の供出もありました。おやじのキセルそんなものまで出しました。
- 結婚指輪から、眼鏡の縁から、帯留まで出しました。ただ出すだけでした。
- 町の鉄製品も全部供出しましたよ。橋の欄干から寺の鐘まで全部出しました。
- 杉の木もお棺にするためにみんな切っちゃったね。
- 徹底した教育をされていたから、疑うことをしなかった。負けるなんて思わなかったですね。
- 情報もはいらなかった。えらい人は先にいろいろ知っていたようだが、一般の人にはなにも知らされていなかった。
- 貴い血が流れて、改めなきやならないものもあつたんでしょう。みんな幸せになるように、二度と繰り返さないように。
- 弟が、航空隊にいておりましたが、最後の出征をする時に、敵の飛行機が一機でもはいたら覚悟してくれって言ってましたが、爆撃を受けても、まだ信じてました。
- このあたりでは大きな被害はなかったが、上水の辺りでは爆弾が落ちてかなり亡くなったかたがいました。
- 東京は高円寺の西側までが焼け野原になりました。
- 三鷹は、空襲がはじめた時に、中島飛行機がねらわれて、空襲多かつたみたいですね。
- 毎日毎日来ました。艦載機が来て、B 29 が来ました。



- 夜、気持ちわるくてね、大群をなしてきました。よく見えるんですよ。
- 私が壕に行った時、空襲警報が出て、そしたら、日本の飛行機が、ぐるぐる飛んでるんですよ。どうしてかって聞いたら、飛行場に置いとくと、ねらわれるから、飛びまわってるんだって言っていました。
- 今度は三鷹がやられるっていうわさがたつてました。
- 終戦後は、アメリカさんはいってきて、若い女がおそわれるなんていうわさが広まって、それじゃかわいそうだっていうんで、娘に薬を持たせたなんて話もきました。
- 外へ出さなかったり、疎開させるなんて話も聞きました。
- 男は軍隊経験者はキンヌキ（去勢）されるなんてうわさがあって、軍隊手帳捨てちゃいました。

● 終戦後も、女は、夜はつきものばかり、手を動かしていない時はなかった。昼は食べ物集めに奔走するという毎日でした。

● 今日は、お忙しいところお集まりいただき、ありがとうございます。最後にこれだけは言っておきたいということがございましたらお願いします。

● そうですね、今の若い人は戦争を知らないから、テレビなんかで戦争がはなやかなものみたいなものがありますが、あれはしてほしくないですね。

○ どうもありがとうございました。

注1 (MP) 米軍憲兵

注2 (首実験) 実際にあってみて、本人かどうか見きわめること。

注3 (電気パン) 家庭で簡単な箱形電熱器をつくり、それで焼いたパン。

天文台と戦争

藤井 茂

武蔵野市吉祥寺南 天文台勤務(当時)

当時二十一才

聞き書き 榛澤茂量

当時、吉祥寺九七番地といったここから、毎日、大沢の天文台まで、自転車を通っていました。バスの時は、武蔵野バスと言って、野崎に車庫があり、電気自動車だったので、ここまでくると、バッテリー全部を交換し、武蔵境まで行っていた。確か女の運転手だったと思う。戦争の終りころは、木炭車に変わった。天文の観測をする者と戦争、何とも、関連づけられないことが始まってしまったが終戦になるまで観測は続けられた。

私は、天文台本館の西にある連合子午儀室で正確な時間の観測をしていた。この正確な時間を軍が使用したことを思う。この時の台長は、関口さんという人で、台長専門の木炭車に、よく同行した。親切で乗せてくれるのかと思つたら、坂道を押す役目だった。

毎月八日になると、観測している学者が皆講義室という所に集つて、朝礼の様なことをした。台長は白い手袋をし





て、うやうやしく何かを話したが、内容は、忘れた。後から思うと、大注1たいしちほうたいげ詔奉戴日だいしちほうたいげだった。天文台と学者と大詔奉戴日、全く相入れず、おかしかった。

B 29 が飛んで来る様になると、学者だ、何んて言っ
ていられなくなり、今のグラウンドを、一人30坪ずつ分
けて、畑を作り、林の中では燃料の枯木さがしをした。
最後には生えている雑木を誰々の分と個人別に分けて
切った。大赤道儀（二十六インチ望遠鏡）の横に爆弾
が落ちた時は、すごかった。百メートルちよつとの所
で見えていたが、苗木畑のいちようが飛んで行って大き
なドームに突きささった。続いて南東にもう一つ、そ
して不発弾があった。映画を見ている様だった。

又、しばらくして、天文台の上を南から北に向って、
低空を三十機程のB 29 が我物顔わがものがおに通ったことがあった。
すごい音だった。その中の一機がピタツと止まった様
に見えた。ずい分長く感じられたが、ゆつくりと落ち



て行った。久我山に落ちたと聞いた。

こんな状態の中でも観測をした。夜、観測しようと思つた時間に曇つてしまい。しかたなく井の頭公園の辺まで帰つてくると、晴れる。又、天文台に引き返して観測した。

日は変わるがB 29に体当たりする日本の飛行機を見た。新聞に馬乗りになって生きて帰つたと記事が出た同じ日だった。大きなB 29に小さな小さな飛行機が体当たり、パツと碎け散つたが、B 29は、そのまま飛んで行ってしまった。天文台の中に、飛行機との通信をする兵隊が三人常にいたが、友人の様になつていた。宇宙を見て研究している者たちの目に、我に言い分あり、彼に言い分ありで引込みがなくなつた戦争がどの様に見えたのか。戦争が終ると、すぐ進駐軍が来て、天文台の中を荒し始めた。台長が進駐軍の親方にかけて合い静かに、外に出てもらつた。天文台の南と東には、大小数多くの防空



当時の天文台全景

壕が掘られ今も、そのままになっている。

注1 (大詔奉戴日) 昭和十七年一月八日から、毎月八日を大詔奉戴日と定め、戦争完遂のための意識啓発活動が行われた。

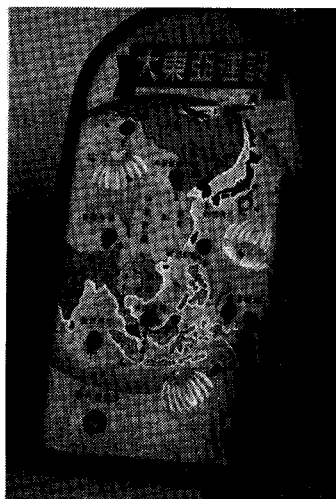
戦時下の子育て

相賀 しず

下連雀三丁目当時三十一才

私は三鷹に住んで満四十六年になります。

昭和十四年六月に上京して、一足早く三月に上京して横河電機に勤めて居りました主人と、現在の所に家を構えました。住所は東京都下北多摩郡三鷹村下連雀二六二番地と言いました。二階は一室下が二室で家賃十九円でした。お米が一升三円八十銭、トウフ一丁五銭、アゲ一枚三銭、サツマイモ一山十銭で買った時代です。昭和五年に三鷹駅が出来て駅前通りと言うのに、道巾二間、雨が降ればどろどろになるでこぼこ道でした。今の長崎屋からつきあたりの小金井街道までの両側は、ところどころ家があつて雑草のおい茂る草原でした。今の桜通りは川が流れていました。マンホールがうめられ其の上が道路になったのは二六・七年頃でした。私も三人の男の子の母になりおだやかな毎日でしたが、十八年頃よりだんだん物資がとほしくなり、配給制度になり、奥の方の農家においもや野菜の買い出しに行きました。三男をおぶつて防空訓練にも出ました。竹槍を持ち消火用のバケツをさげての訓練でした。十九年頃より空襲が始まり、機銃掃射で二階のカワラが割れ、お隣りでは二階の天上板にアナがあくなど、三人の子供をかゝえて、おそろしくなりました。昼間は物の蔭からB29をなら



みつめました。二十年の一・二月の寒い夜中など、寝てる子供をおこし洋服に着がえて防空壕に入る事がたびたびでした。子供は寒いのと眠いので泣き出しますし、なだめたり怒ったりして大変でした。とうとう子供と私と四人、主人の郷里の岡山に疎開する事にして、駅に切符を買いに行列してる時、突然空襲警報がなり夢中で家に帰り、三男をおぶった私と長男は防空壕に入り、次男一人家のおし入れの中で泣いてました。機銃掃射の音と飛行機の爆音が遠ざかった時、ア、生きていたとしみじみ思いました。中島飛行機会社があつたので三鷹もねらわれたのですね。五月の始めに岡山に疎開しましたが、六月二十九日夜空襲にあい、着のみ着のまゝで三鷹に帰って来ました。欲張って持つて行った物全部焼いて仕舞って、子供の着がえすらくお金がいくらあつても足りませんでした。三鷹以外での戦災ですのでここにくわしく書きませんが、三鷹に帰りつくまでの一週間みじめさは口惜しさ、情なさの連続でした。一生忘れる事は出来ません。

家に帰って見れば主人は会社の疎開で新潟の方に行っていて留守でした。こんど空襲があつたら親子一緒に死んでもよいと思ひ防空壕にも入らず、家の中に居ようと思ひました。そして八月十五日終戦、正直なところホツと致しました。世の中が

落付いてからあちこちで聞く、引揚げ者の方々の苦勞、捕虜になった人の話などほんとに大変な事でした。私などの戦災話は軽い方だとつくづく思いました。

二度と子供や孫達には絶対に味合わせたくない事です。



食べ物と子供



榛 澤 は つ

大沢一丁目当時三十才

私の嫁いだのは、勤め人で夫の母親がいて畑が少しある家だった。当時の隣組の会には、防空頭巾ずかんにモンペで、バケツリレの練習とか、供出の割当て、配給の受け取り、などを大変な思いでやって来ました。畑には、サツマ芋、大麦、小麦、などを作り供出の割当てを目標に毎日毎日なれない農作業をしました。畑がある家には、その面積によつて一年の内、何ヶ月と決めて配給が停止されていきましたので、うちのように少しの畑しかない家は、食べ物に困りました。サツマ芋は切り干しにして俵に入れて出す様に言われていましたがその俵を作るのに作り方が分らず四苦八苦しました。

昭和二十年になりますと、二人目の子供がお腹にいて、空襲警報で防空壕に逃げ込む回数が増え、供出用に作っていた畑に

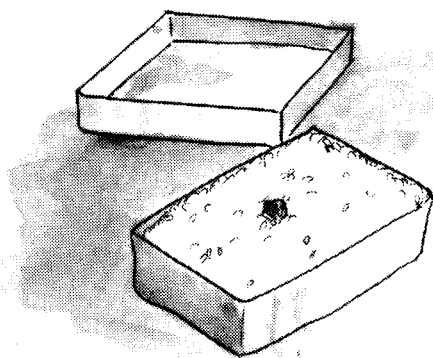
爆弾が落ち大きくなりばち状の穴があいてしまいました。陸軍の使用していた通信所のすぐ西側でした。栗の畑もありましたが、この兵隊が全部食べてしまいました。お腹がすいていたんでしよう。

畑は少ない上に爆弾が落ちて穴があき、お腹の子供はだんだん大きくなるし、艦載機の空襲があった時は、腹帯を引きずりながら、ヨチヨチ歩きの子供の手を引いて防空壕に逃げ込みました。

このころの食べ物、ほんの少しの米、大豆、豆かす、トウモロコシの粉、ぬか、ふすま、サツマ芋の苗を作ったあとの種芋、スケソウダラ、などいづれもほんの少しだった。

この配給を今日は、野崎の吉野さんとか、次は、大沢の角とか、御塔坂の相田さんとか決められた場所に大きな腹をして歩いて受取りに行き、背中にしよって来ましたが、必死で火が出るようでした。

今、二合位のごはんは、十数分ででき、食べられますが、当時は、二合にその時々にあるダイコンの葉とか、サツマ芋のつる、ハコベ、アザミなどをさがし量を増やすために入れ、水をたっぷり加えて時間をかけて雑炊をつくった。おばあさん



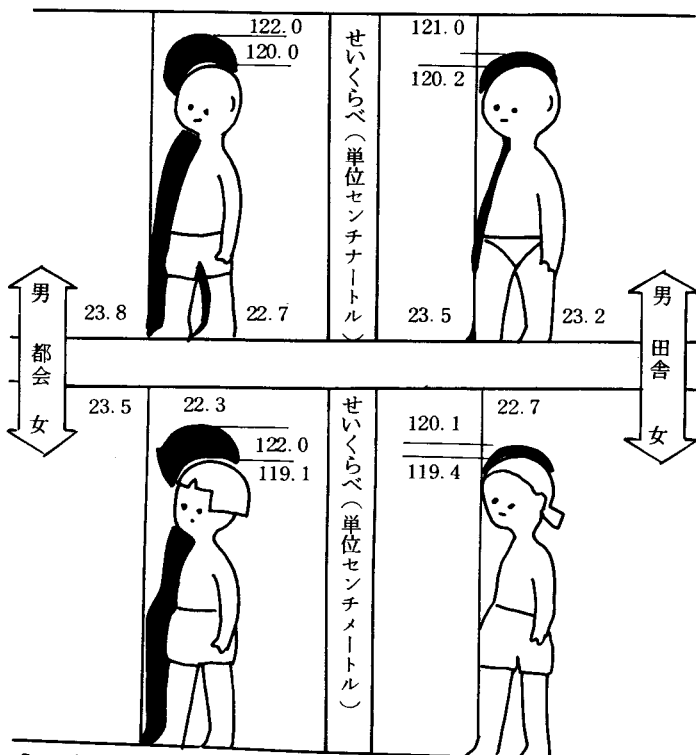


がいましたのでトウモロコシの粉を工夫して何とか食べられるようにしてもらったり、しの竹の竹の子を集めて食べました。どれもこれもうまいものはなかった。それに水同様の雑炊だったので子供は、いくら食べても、満腹感は無かったし親も少し働くとすぐに疲れを感じた。

三鷹の町役場から、『國の寶』と表題した妊産婦加配通帳が手元に来ていました。これには、「いろは」順に購入券票があり、例の隣組の回覧板で通知されることになっていたので一度もその回覧は無かった。戦争も終り近くなっていたのだから無理もないと、今現物の通帳を見ながら思い出しています。

「パン」・「石鹼」のページには、当時を反映して、品切れと書くべきところを、無効と書いてあります。「パン」のページの裏には、妊娠五ヶ月目より出産月まで毎月一回菓子パン三個購入出来ます。とあり「石鹼」

①



昭和12年度の体位

満7年~13年の平均体位

昭和20年度の体位

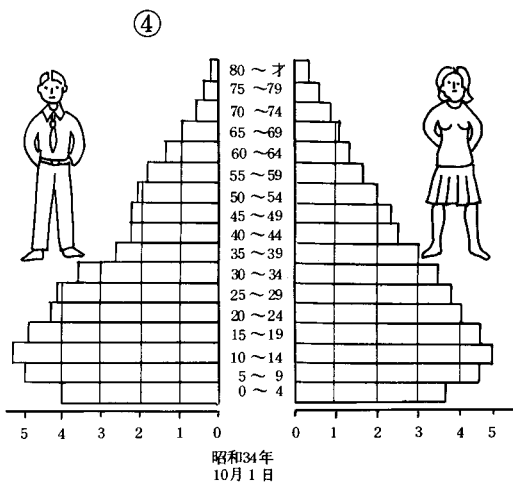
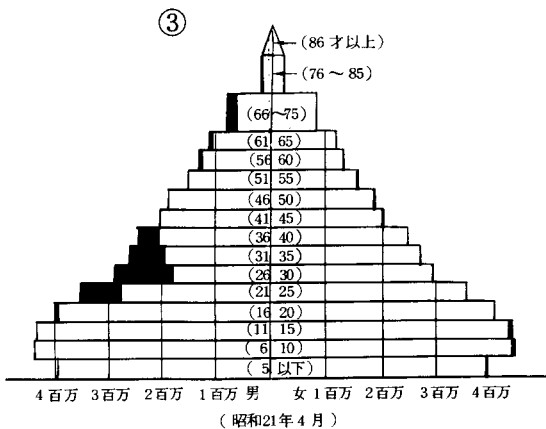
田舎の女兒の体重は変りなし

② 三鷹市のこどもたちのからだ
全国と東京都とのひかく

学校 べつ	学年 べつ	男					
		身 長 cm			体 重 kg		
		三 鷹	東 京	全 国 (41年)	三 鷹	東 京	全 国 (41年)
幼稚園	4才	102.3	103.4	103.4	16.01	16.8	16.6
	5	107.4	109.5	108.8	17.95	18.6	18.2
小 学 校	1年	114.9	114.7	113.6	20.2	20.2	19.7
	2	120.7	120.1	119.1	22.6	22.4	21.9
	3	124.1	125.5	124.3	25.3	25.0	24.3
	4	130.8	130.5	129.1	27.7	27.9	26.7
	5	135.6	135.5	134.0	30.9	30.8	29.5
	6	140.8	141.1	139.0	34.2	34.4	32.6
中 学 校	1	147.9	147.6	145.2	39.5	39.3	37.0
	2	155.1	154.8	152.4	44.5	44.7	42.5
	3	161.1	161.2	158.7	49.8	50.4	48.0
学校 べつ	学年 べつ	女					
		身 長 cm			体 重 kg		
		三 鷹	東 京	全 国 (41年)	三 鷹	東 京	全 国 (41年)
幼稚園	4才	102.7	102.6	102.3	16.17	16.3	16.2
	5	108.0	108.5	107.7	17.54	18.2	17.7
小 学 校	1年	113.6	113.7	112.7	19.5	19.7	19.2
	2	118.6	119.0	118.1	21.8	21.9	21.3
	3	124.6	124.7	123.4	24.9	24.4	23.7
	4	130.9	130.1	128.8	27.5	27.6	26.5
	5	136.3	136.4	134.6	31.0	31.0	29.8
	6	143.0	142.8	141.0	36.0	35.3	34.1
中 学 校	1	148.6	148.7	146.8	40.1	40.7	39.2
	2	152.3	152.4	150.7	44.3	45.3	43.6
	3	154.3	154.3	152.8	48.7	47.9	46.8

の裏ページには、「出産豫定期月になった方に限り購入出来ます。」とありいずれも町会長隣組長に證印が必要でした。

使用できたのは、出産用綿・ガーゼ購入券と出生児衣料切符・木炭特別配給だけでした。ずい分ひどい時代でした。この頃育ち盛りだった子供たちには、食べ物の量と質とがともに劣悪でしたので体格に相当な影響がでたはずと思います。昔読んだ本の図を読み直すと前頁の①図で明らかな様に戦前（昭和十二年）の体格が終戦の昭和二十年を上回っています。また昭和四十二年四月から六月にかけて市立幼稚園児二百五十六人・小学生九千四百五人・中学生三千六百十二人を調べた②図を見ていただきますと、その体格はすばらしく、二十年に比べるとまさに外人並になりました。



次に③図の人口ピラミッドを見ると黒くぬった部分が見え、戦争で亡くなった人たちの年齢別・性別の図で④図の昭和三十四年にも不自然なグラフになっています。戦争の傷あとは、見える姿では無くなりましたが、見えない部分ですと残るはずだと思います。

祈りの血文字

井上治子

深大寺当時十九才

それは日支事変最中、昭和十三年初冬の頃だったと思う。西三鷹小学校（現二小）六年女子の教室には、私を含む三、四人の女生徒が来春女学校受験の為の予習で残っていたが、勉強はそつちのけで、何やら真剣に話し合っていた。「慰問袋^{せもんぶくろ}を貰うより、兵隊さん、早く家へ帰りたいたらうね。」「そうかなあ、うん、天皇のためでもやっぱりに死にたくないよね。」「天皇陛下だって人が殺し合うのは良い事だと思つてないよ、東洋平和の為だから仕方ないよ。」「じゃあ今度は慰問袋送るのやめて、兵隊さんが死なないように、早く平和になるように祈ろうよ。」「多分こんなやりとりの末、女の子達は、親にも云えないすごい事を実行したのである。それは鉛筆けずり用のカミソリで各自の指を切り、その血で半紙の中央に日の丸を染め、右側に「武運長久」左側に「平和を祈る」と血文字を書き上げたのだ。さてこの血染めの半紙の行方だが、私は云い出しつべの責任上預つて、後日焼いたように思ったのだが、この記録を書くのにたしかめたくて、当時一緒にいて今も親しくしているYさんに会い、聞いた所、「覚えてるわよ、切った指が一晚ずきずき痛んで、母にも云えず困ったわ。でもそれは受持の先生が、陸軍省かどこかへ出して、ほうびにたくさんの鉛筆と絵葉書を買ったじゃない。」と全く違った

記憶で譲らない。しかし今私はその事を詮索するつもりはない。聖戦とか神風とか教えられるままに信じて疑わなかった十二才の少女達が、本能的に人間の命の尊さを知っていたという、その事ですべてだと思ふから――。

戦時下の女学生

昭和十四年四月、武蔵野女子学院入学、十六年十二月（三年在学）太平洋戦争勃発、十九年三月、卒業迄の五年間は、空襲こそ受けなかったが、やはり戦時下の女学生生活であった。そのいくつかを思い出してみよう。

千人針と五黄の寅

長細い木綿の布に書かれた武運長久という文字の中を、赤い糸で千個、玉を縫ってうめ、腹巻にして戦地の兵隊さんが、弾よけのお守りにしたという、その千人針は女学校の教室によく回って来たし、道を歩いていても知らない人に頼まれて縫ったものだった。私達の生れ年は五黄の寅で運が強く、千里行つて千里帰るの縁起をかつぎ、他の人は一つしか縫えないのに、私達は自分の年の数だけ縫う事が出来て大得意だった。

軍歌のコーラス

入学した頃は音楽の時間に、「ローレライ」とか「旅愁」とか、女学生らしい歌をうたつたが、太平洋戦争勃発以降、戦争が激しくなるとよく軍歌もうたわれるようになった。と云つても、音楽の先生

が作曲家で全部合唱曲に編曲してくれたので、^{やいは}海ゆかばとか、刃も凍る北海の御楯とたちて二千余士——、とうたいはじめる^グアツツ島玉砕の歌とか、悲壮感に満ちた歌詞や美しいハーモニーに酔ったものである。それは軍歌というよりやはり音楽だったと今は思う。

情けない制服

四年生になると殆どの人が制服を作りかえた。純毛の生地がなくて木綿とスフの混紡だったので、毎夜スカートと寝押しして、朝ピンとすじの通ったスカートをはいて行っても、午後にはお尻の上の方迄無惨にもしわくちやになり情けない思いをした。又、夏冬黒の長靴下ときめられていたが、これも手に入らなくて、ひぎと底に大きなつぎをあててはいたので、和室でするお作法の時間は恐怖であった。なかにはいつも新しい靴下をはいている不思議な人もいたけれど——。

れんげの里の平和の神様

五年生の春（昭和十八年）あきらめていた関西への修学旅行が出来、京都、奈良、伊勢を廻り、旅館へ出すお米持参、お菓子もろくになかったけれど、楽しい想い出をつくる事が出来た。今も目にやきついている光景は、車窓から見た見た見わたすかぎりのれんげの花で、その赤一色に広がる華やかさ、美しさは、一瞬現実を忘れさせる程だった。後日学校へ出す旅行記の中で、「平和の神様はこのれんげの里にかくれているのではないだろうか」と書いたのを覚えている。

勤労働員と青春

昭和十八年頃から立川や新宿の軍需工場へ勤労働員で働きに行くようになった。何の兵器かわからないが、部品らしいものを研いたり選別したりの作業で、けっこう楽しく一生懸命働いたように思う。何しろ男の人には無菌状態であったから、若い男性の指導員さんが珍しく、休み時間や学校へ帰ってから彼の話題で賑やかだった。「きびきびしていてすてきね。」「誰さんの方ばかり見ていたわ。」「卒業したら結婚すれば良いのに。」たわいなく、ささやかな青春だった。

上級学校か挺身隊か

その頃法律で、卒業後は上級学校か、挺身隊として軍需工場へ行くか、家にいる事はゆるされなくなり、上級学校志望者が激増した。当然狭き門となり、私は前から志望だった女子師範を落ちてしまった。父は「女の子は女学校だけでたくさん。」と涼しい顔をし、私は一晩泣きあかした。

「女子挺身隊として中島飛行機へ」

昭和十九年三月、卒業して間もなく、第一回女子挺身隊として、家の近くの中島飛行機に入所した。入所式の日、全従業員の前に並び紹介された時は、晴れがましく感激したのを覚えている。同じ時に入った人の中には、はるばる東北の学校を出た人もいたとか、父母から離れ心細いだろうなと同情した。

いよいよ仕事につくのだが、女学校出は事務の方という事で、何とソロバンも何も出来ない私が会計課に入る事になった。受入れた方こそ大迷惑、はじめての挺身隊とてお客様あつかいで、朝職場

に行く」と指導してくれるTさんが、「よみたい本があればよんで下さい。」とか、「この書類のここへ〇〇課の誰さんの印を押してもらって下さい。ゆっくりで良いですよ。」その〇〇課の建物ははるか離れた所にあり、私は広い敷地の中で野の花をつんだり、四つ葉のクローバをさがしたり時間をつぶして帰って来たのだった。しかし私は内心とても役に立たない事が悲しく、その頃の日記にこんな幼稚な歌を書いてなげいたものだった。『飛行機の翼の先など、この腕で、作り出さんと勇みしものを』
『北の友南の友と手を組み、翼作らんと勇みしものを』

そのうちに私もソロバンと記帳の特訓を受け、少しづつ仕事が出来るようになった頃、はじめての給料日が来た。多額の現金を扱うので、廊下と部屋のかぎをかけ、会計課全員で全従業員の給料を袋につめるのだが、一円の過不足なく夕方終わった時はほんとうにうれしかった。そのうちに給料袋を攜んだ職工さんが、赤鬼のような形相でどなりこんで来た。給料の額その他納得出来ない人が、必らず何人かは、おこつて来るそうで、身体を張って働いている現場の人のきびしさを知らされた



ように思った。

挺身隊には特別に食料や衣類が良く配給されたが、或る時Tさんがここにこしながら、「今日の配給はすごいよ。これで美人になりなさい。」と小さな罐を渡してくれた。中には灰色がかつた油のかたまつたようなものが入っていて、洗顔クリームとの事、その頃石鹼がとぼしく、木灰の上澄み液で衣類の洗濯をしていたが、ためにこのクリーム少量をつけて部分洗いた所、きれいに落ちたので、とうとう全部洗濯に使ってしまつて、美人になる事が出来なかつた。

心の血で平和を

昭和十九年九月、私は家族と共に父の郷里静岡県の伊豆へ疎開した。戦争の一番きびしい時に三鷹になかつた私なので、この記録を書くのをためらう気持もあつたけれど、あえて出すことにしたのは、息子二人、孫三人持つ今、小学六年の時に指を切つて血で書いた「平和を祈る」の文字よりも、もっと強く切なく心の血で、「平和を祈る」と書きたかつたからである。

注1 (慰問袋) 出征兵士などを慰めるため、中に娯楽物や日用品などを入れ送つた袋。

注2 (挺身隊) 国民学校卒業後進学せず家庭にいた独身女性が軍需工場へ動員された。(女子挺身隊)

学びやで

井上スマ子

深大寺當時十才

太平洋戦争の最中の昭和十七年、私は三鷹第二國民学校に入學しました。入學する私の洋服を「こんなワンピースしかなくて。」と母は一日がかりで地味な服を苦勞して求めてきてくれたことを思い出します。そのころすでに生活必需品の主要なものがつきつきに配給制度になり、衣料切符制が導入されて衣料品の種類により点数を決め、小切符を商店で切りとつてもらい購入する方法でした。各家庭では布地を求めるのも困難で、母親は子供のために大切な自分の着物を犠牲にして、上着やもんぺに仕立直して着せてくれました。

通学には、もんぺをはき防空頭布を横にしよい、運動靴は配給で学校の行事にだけはき、普段は下駄で登校しました。登校時は各部落ごとに班を編成し、朝きめられた場所に集合し班長さんの点呼後、整列して登校、放課後に行く掃除、部落の行事、空襲の際の下校も班で行動しました。各家でもそうでしたが、教室の窓ガラスは、白い紙テープを縦横十字に張りつけて、高射砲をうつ振動や爆撃でガラスの破損のないよう補強してありますので、青空も花も景色も見えませんでした。

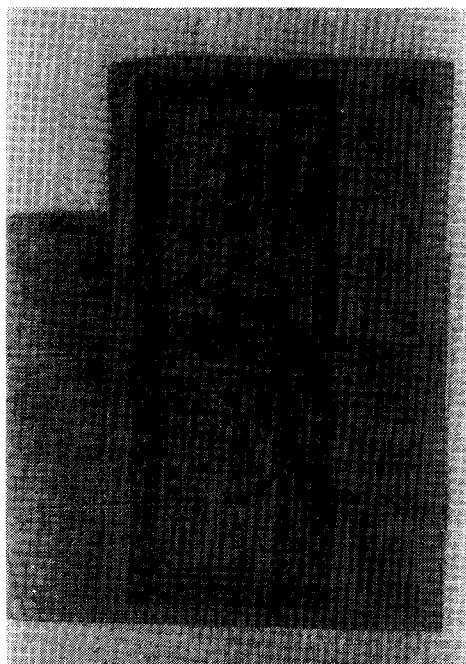
教室の前の黒板の上に戦地で戦っている兵士の大きな油絵が飾っており、授業の前に黙礼して勉強

に入りました。国語の時間には兵隊さんへの慰問文を書きました。親戚や近所の出征兵士に「兵隊さんお元気ですか。」で書きだし元気で戦って下さい。とはがきにいつも決り文句を綴りました。私が手紙を出した方がたは無事帰還しました。

楽しいはずのお弁当時間は食糧不足が深刻で、弁当を持参出来る生徒はよい方で、お昼どき弁当もなくそつと席をはずして運動場に出ている生徒や、飯ごうにおかゆを炊いて、毎日子供の為に運んで

来るお父さんがいました。昭和十九年頃より東野住宅(中島飛行機住宅)に入居する家族が増え、各クラスとも急に転入生で教室は身動き出来ぬ程でした。都心と違い疎開する人はほとんどありませんでした。

頻繁に出される警戒警報や空襲警報で授業は中断し警戒警報のサイレンが鳴ると勉強道具をさつと片付け、防空頭布をかぶり、指定されてある班の場所へ集合、上級生を先頭に家



路に急ぎました。途中で空襲になりますと道端の素掘の防空壕に入り、息を殺して伏せ警報が解除するのを待ちました。こんな時、そつと見上げる上空をB 29が銀翼を輝かせ、白い飛行機雲を引いて青空をゆうゆうと飛んでゆくさまを今も忘れられません。

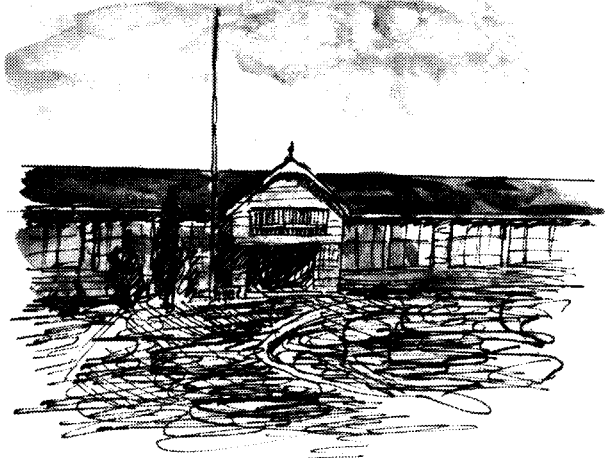
こんなことで授業も中断しがちで、一も二も増産の時、高学年（今の中学一年生）以上は、井口の軍需工場（新興、東邦）へ動員され、飛行機の部品づくりに油まみれになって働き、私達低学年も勤勞奉仕で出征兵士の手不足の農家へ手伝いにいきました。主に畑の除草で暑い最中、真黒になって大きな雑草を抜き、おやつにおばさんがふかしてくれた、小さなじゃいもや南瓜をやかんの水を飲みながら喜んで食べました。勉強より国の為、子供も増産に協力しました。そのいつぼう、遊びは、木のぼり、石けり、縄とびと自然を相手にかけまわっていました。

お金より物が大切な時代で、大切な着物を食糧と交換し、家族のお腹を満す家がほとんどでした。米も減配になり代替配給として、さつまいもや、じゃがいもが主食でした。私の家は農家で作付面積に依じて、麦や、さつまいもの供出がありました。さつまいもも、品質や味より増収を目的とした品種を作り、「おきなわ」というさつまいもはこの沢山作付けされ、甘味も少ない水っぽいものでした。

収穫が終わると麦は俵に、さつまいもは南京袋につめ、食糧庁関係の検査官がみえ、一俵づつ等級をつけ印を押し供出しました。供出の為、朝早くリヤカーに何十俵の重い麦俵を積み、父や姉がリヤカ

一の舵をとり小学生の私達が後を押し、今の農協の本店の倉庫まで何回か往復しました。息が切れ、足が痛みました。生産者の作付より、供出の割が多く農家の手元に残る作物は少なく、十分な食事が出来たと思われがちでしたが、おじやを食べたりして、農家の闇販売などは世間でいわれた程ではありませんでした。

私の家の庭で町内会のさつまいもや、じゃがいもの配給が行われました。大秤にござごろしたいものをのせ、配給通帳に応じて計(量)り、各班長さんが、リュックや、リヤカーで引き取りにみえました。皆大切な食糧と、早くから並びました。小学四年の夏休みの八月十五日に終戦を迎え、父母達が正座して敗戦を告げるラジオ放送を聞いていました。子供心に大人の様子で戦が終わったのだと解り、防空壕に入ったり、逃げまわることもな



くなつてよかつたと思ひました。あの日の暑い一日は忘れられませんが、ともに苦しみ、戦争と共に育つた私達です。再びあつてはならぬ経験です。

戦時下に過ごした青春時代

井上まさ・高橋文子

〈現在、農協婦人部でご活躍なさっている井上まささん、高橋文子さんお二人から当時の思い出を語っていただきました。〉

井上さんは現在深大寺に嫁がれていますが戦時中は中仙川（今の中原周辺）にお住まいでした。高橋さんは現在牟礼に嫁がれていますが、当時は野崎にお住まいで、お二人は学生時代は学校は違つたようですが、陸上競技のライバル同志だったそうです。

取材日 八月二十八日

取材場所 市役所市民相談室

空襲の思い出

○中仙川での空襲

(井上) 当時の町長の高橋さんのお宅が、爆撃で全壊しました。又、ある家では空襲で土倉に避難していたところに爆弾が落ちて、おじいちゃん、お孫さんを残して全員亡くなり、何とも哀れでした。其の二、三軒隣のお宅は、家は全焼してしまいました。家族の方々は全員無事で、ホッといたしました。真赤に燃える炎を目のあたりに見た時は生きた心地はしませんでした。自宅にも寝ている枕許に爆弾の破片が落ちてきました。当時の農家の家は麦わら屋根で、其れを突き抜けて、五段の箆筒も突き抜け、底で止っていました。あと数センチはずれていたらと思うと今でもゾツとします。

艦載機の空襲もとてもおそろしいものでした。まずB 29が上空をカン高い音で、一機二機と去って行き、息もつかぬうち、星のマークがくつきりと見えるほど、大きな艦載機が、地上すれすれに飛行して、機銃掃射をします。本当にこわい思いをしました。

当時の農家の防空壕は浅く貧弱で、年若い人がはいるのは、とてもつらそうでした。何事も勝つまではと、防空壕の中で、家族隣人と助け合い、心の中に仏様を唱えて、「敵機来襲」の情報を聞き入っておりました。父は、日清・日露戦争を戦ってきたガンコな人で、兄三人を戦地に送り、農業一筋にがんばってきました。その父は、家族への愛情でキツと、一步も防空壕へはいらずに、私達を守ってくれました。

○野崎の空襲

(高橋) 昭和二十年五月二十五日(当時十八才)の夜、敵機来襲、空襲警報発令と同時に高射砲の

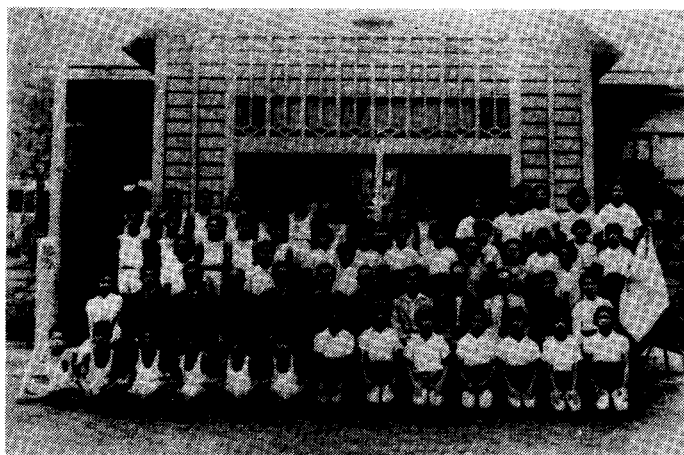
音が響きわたり、高射砲の破片がバラバラ落ちてきて、驚く間もなく、油脂焼夷弾攻撃で焼かれてしまいました。それはB 29の攻撃でした。調布飛行場と中島飛行機研究所が近くにあり、そのそれ弾ではないかという人もいました。新川が焼かれ、同時に野崎が焼かれたと思います。野崎では全焼が五軒、半焼が八軒、私の実家は全焼、一面火の海で、弟は勝手口のそばにあったマナ板一つだけしか持ち出せず、姉が持ち出した風呂敷包は、垣根にひっかかり、破れ、中の物は落ちこぼれてしまいました。当時、第二小学校の裏手に次兄の家がありましたので、そこまで逃げ込み、空襲警報解除になつて、帰つて見ると家はあとかたもなく燃え尽きていました。姉が持ち出した畳付きの下駄も落としたがら逃げたらしく、落ちたままの形で黒焦げになっていました。そして、焼夷弾の空筒が数えきれない程、家に、家の廻りに、そして畑に突きささっていました。実家は農業でしたので焼けた母家の片隅に積んであつた麦俵が焼け崩れ、三日位くすぶり続けていました。

母屋が焼けたので、焼け残つた鶏小屋で当分の間、寝起きもしました。空襲警報がなると防空頭布をかぶり、家が焼かれてからは大きな木の根元で小さくかがみこみ、震えていたものです。

戦時下の生活

○当時の風景

(井上) 現在の航空研究所、消防研究所がある地域一帯、昔は金子、野ヶ谷といつて、田んぼが多くあり、一面の緑の地域でした。田んぼや畑の間には小川が流れ、小川にはどじょうやなまずがいた



ものです。又遠くの方からでも手を振れば見える程でした。季節になると川のふちでねむの花が美しくピンク色に咲き乱れ、しょうぶの花が一輪一輪と川辺で咲く色が何んとも言えず美しく、働くことの喜びや、日々の生活の中での幸福感を感じさせてくれました。ところが、ここにも中央航空研究所ができ、高台のすばらしい畑には、通信の軍隊が陣取り、日夜、農家の軒下にテントを張って、通信の訓練をするようになりました。高台一面が軍隊の陣地となり、早苗の植付も終り、蛙の鳴き声を背にして家路に向う私の中に、陣地の光景を見てふと三人の兄の戦地での姿が思い起され、目頭が熱くなるのを感じました。

○食糧生活物資

(井上) 当時、物資はすべて点数制で、衣料品はたしか駅前「三鷹」「えちごや」呉服店で配給していたと思います。点数切符は、市役所から町会長へと配布され、

隣組長から各家庭にと配布されました。三ヶ月に一度の割合で配布されました。その時は、私が父にかわって、「えちごや」に行ったことをおぼえています。

調味料、お米、魚なども配給制で、家族の人数によって分けていました。点数が何枚かたまると困っている人に差しあげたりしていました。

(高橋) 被災した私の実家では、羅災者の配給、又、物々交換などで、一時を過ごしました。三兄は健康を害し、内地の陸軍病院に還送され、家が焼かれたため、二泊三日の休暇をいただき、月の明かりの下で鋤を持ち、農作業を手伝ってくれました。人手不足だったので助かりました。空襲で家が焼けた後は表俵がくすぶった後の良い所の麦を日干しにして食べましたが、いぶくさくてとてもものどを通るのに時間がかかりました。でもサツマイモやカボチャなどを色々入れて大分食べたのをおぼえています。

戦後の生活

(井上) 当時は交通機関が十分でなく、三鷹でとれた野菜を台車に積んで、淀橋(新宿)神田と運んでいきました。行きは台車にいっぱい野菜を積んで、帰りは桶の中いっぱいのかえを入れて帰って来たものです。あの当時は不平も言わず一日中働いていました。理想とかそういうことじゃなく、働くことに生きがいを感じて、私こそはという思いでした。あの頃は純で若かったです。

一人の兄は戦死しましたが、お陰様で、二人の兄は無事に帰ってまいりました。

希望の失せた空虚な社会にも、軽快なリズムの「リングの歌」が流れ、しだいに明るさを取りもと
し始め、私自身としては、青年団の一人として、戦時中途切れていた盆踊りを復活させたことが、と
ても印象的でした。

現在、希望ある日常生活を送れることを感謝するとともに、戦争の為に不幸になられた幾多のお気
の毒なみなさまのために謙虚な気持で、愛情を捧げたいと念願してやみません。次代の若い人の為に
自由と平和を祈っています。

(高橋) 終戦後は、十五坪位の簡単な家でしばらく住み、父母は、兄達が帰って来て家がなくては
驚くだろうと、前の家と同じ様な家を建てようとしたが、十五坪の家しか許可が取れず、二度の
許可をいただき、建てたそうです。お陰様で、兄三人共元気で復員することができ、ありがたく思っ
ております。

今までのことなどを心に秘め、これからも一生
懸命、明るくたのしく生きたい。そしていつまで
も平和を願っています。



戦死の報らせ

白石 重 雑

中原二丁目当時三十九才

へ当時中仙川に住んでおられた白石さんにお話をうかがいました。弟さんが戦死された時、不思議な体験をなさったそうです。

取材日時 六十年七月二十九日午後

取材場所 市役所市民相談室

私は、当時、大工職をしていました。十八年頃から、緊急動員で中島飛行機（武蔵野）にいました。中島では、飛行機をこさえる作業台や椅子をつくっていました。空襲が、激しくなつて、十九年十二月一日の大空襲で工場が動かなくなり、宇都宮へ移転するので、移転作業を二十年の三月頃まで手伝っていました。空襲でこわい想いをしたのは、境の柳橋の屠場に仕事に行っていた時です。防空壕の中にいたのですけど。外にあった自分の自転車も道具もとばされちゃつて、防空壕の中は地震のようによれました。それ以来、あそこに行くのがいやでねー。当時は働き口がなくても、となり組で助け合つてなんとか生活できたんですよ。うちあたりは、もち米三俵・小麦四、五俵しかとれなくて、こ

れが大事でねー。空襲のたびごとに家から出してました。小麦十五貫を一人でうごかしたもんですよ。今から考えるとよく力が出たもんだ。あの当時、釘一本もない時代で、中島に行くのと、よけいにあるんで、もらつてきて、近所の人にわけたりした。一度こまったことは、焼け釘を買った時、火葬場からの釘（棺桶につかつたもの）で、打つとまん中から曲がっちゃう。そんなこともあった。農家では、ジイさんバアさんがいつ死んでもいいようにと、棺桶の板だけは残していたもんですよ。部落に私一人しか大工職がいなかったから、棺桶も作りました。

五月の空襲で清水屋さん、鈴木さんの本家あの辺一角が全部焼けた。星野カズオさん、麻生ツネジロウさんの倉も焼けました。中央航空研究所をねらったものが流れてきたようです。中央航研っていうのは十六年にできたんですけど、深大寺（調布）、野ヶ谷、新川、本村（中仙川）、中原などの地域で農家が四十軒ぐらいあつたけど土地をとられた人も、ずい分いたらしいですよ。一番大きな空襲は五月二十五日の朝一時から、夜明けまで続いたものです。その後に、大きな穴がほれちゃって、東部の消防士が全部きて、うめてくれました。中原には当時五十軒ぐらいの家がありました、あの辺に落ちたのは、B 29が体当りされて、機内のものを全部落していったのが、落ちてきたようです。B 29は、国領で体当たりされて、久我山に落ちたようです。

うちは、男の兄弟が六人いたんですが、五人が出征し、二人が戦死しました。母親は軍国の母なんて言われてましたけど、たいていのことには平気な人でしたが「これでもし、おまえにいかれたら、

<p>昭和三十八年八月五日 昭和三十八年八月五日 昭和三十八年八月五日</p>	<p>白石藤雄伍長 昭和三十八年八月五日 昭和三十八年八月五日 昭和三十八年八月五日</p>	<p>高橋武雄伍長 昭和三十八年八月五日 昭和三十八年八月五日 昭和三十八年八月五日</p>	<p>田中義伍長 昭和三十八年八月五日 昭和三十八年八月五日 昭和三十八年八月五日</p>
<p>女よしちゃん、こはお前さんの ことじや。</p>	<p>昭和三十八年八月五日 昭和三十八年八月五日 昭和三十八年八月五日</p>	<p>昭和三十八年八月五日 昭和三十八年八月五日 昭和三十八年八月五日</p>	<p>昭和三十八年八月五日 昭和三十八年八月五日 昭和三十八年八月五日</p>

東京日日新聞 昭和13年10月13日府下版

わたしはどうかしちゃうよ」なんていってました。あれが本当の気持だったと思いますよ。一番下の弟は昭和十六年一月十日に横須賀の海兵団に入隊しましたが、十八年九月三日に戦死しました。戦死の報らせは、町村役場から来るんですけど、役場の人も、知らせに行くのがいやだったらしいです。でもうちじやその前にわかっちゃったんですよ。それも四日の晩に。弟がいつも家に帰ってくる時は、

夜十時頃、海軍は外泊が可能だったんで、一航海してくると、帰ってきていました。それが四日ちょうど十時頃起きたんですよ。「今帰ったよ」という声がして。弟はうちに帰ると下の便所にはいるのが習慣だったんで火をおこして待ってたんですが、いつまでたつてもこないですよ。「こりやハマゾウ死んじやったぞ。」「じゃきのうあたり死んだかな。」なんて、母親と話してたんですよ。そうしたらやつぱり三日に戦死しました。

すぐ下の弟の時は、麻生昭夫さんのお父さんが、弟からの手紙を持ってきてくれて、「今、フジちゃん、大活躍してるよ。」なんて、家で話していると、おふくろが便所へ行って、そこでひよっこりフジオに会っちゃったんですよ。「お

前どうしたのよ、こんなところで。話をしたのに。」てきいたら「来るようになったから。」って言ったそうです。それで戦死したことがわかったんです。

次の日、読売の記者が、弟の戦死のことで、取材に来たんですが、もちろん記者は戦死の通知がまだ届いてないから、戦死のことは知らないと思つて来てますから、母親が平気でお茶をいれたりするのにおどろいて、新聞にしっかりと書いたおばあさんと、涙一つこぼさないなんて書いてましたけど、そうじゃないんですよ。前の晩に会っちゃつてるんだもの。私も夢でもいいから会いたいと思ひましたけど会えないもんですネ。おふくろもその時分になると便所に行くんですが、それつきりでしたネ。あんな遠くで死んでも、生まれ故郷というか、母親がいいんでしようねー。母親は四十二年に亡くなりましたが、死ぬちよつと前にこんなことを言つてましたよ。一番下の弟が九才の時に妹が生まれましたけど。おふくろに叱られてるんですよ。なにおこつてるんだってきいたら、「このやろう、こんな大きな図体して、お乳の味わすれたから、ちよつと飲ましてくれ。」ていうんだって、あんな若くして死んじゃうんだったら、あの時、飲ましてやればよかつたって。弟は二十一で死にました。

私は小さい時から、島田正義さんという人と仲が良くてネー。よく遊んだもんですよ。いいんですよー幼友達は、一番仲が良くてねー……。正義のお母さんに言われたことがあります。「正義をしおきして、物置に入れたんだが、おまえに抱きつかれて泣かれた時はよわつた。」なんて。そんな仲の良かった友達も、戦争で死んでしまった。

私はおかげさまで、今年八十になりますが、まだ元気で働いています。

戦死の公報

麻 生 サ キ

中原三丁目当時三十四才

あ、思えば早いもの四十年は過ぎました。私の主人は昭和十八年三月に召集にて出征を致しました。「自分は國の為生死をとわず働いて来る。留守をたのむ」と云い残して皆さんに見守られなつかしの我が家をあとにいさぎよく出発致しました。

入隊は北支でした。北支よりは便りも時々届きました。自分も慰問袋を送ったり、手紙を出したり色々様子もわかり、はげまし合って暮らして居りました。翌年の四月移動の為南方に向ふやうになったので当分は便は出せないと言われ、あわてて子供の写真を送ってやりました。其の便りが最後になつてついに歸らぬ人になつたのです。

戦死をとげた日は昭和十九年四月二十六日です。其の年の八月の末頃でした。市役所の職員の方がお見えになって一枚の紙切れを出しました。

「御主人様の戦死の公報ですよ。」私はたゞ茫然として目の前が真っ黒になり倒れんばかりの驚きでした。どのように自分に言い聞かせても涙が流れてとめようもありませんでした。其の時自分の心に浮んだ事は主人の出征の際に言い残した言葉「生死はとわぬ心配するな」と言われたことを思い出し、心より御苦労様と頭を下げずには居られませんでした。

それから私の苦難は始まりました。糸の切れた凧のようにふわりふわりと何が何だかわからなくなりました。これからは我が家の主人に成り変わり、年老いたおばあさんと一人娘を育て、この先長い人生をかよわい女手一人ですらして暮して行かれようか不安でした。何から何まで我が身一つにかかってまいります。夜はおそく朝は早く、寝る時間も少なく一生懸命に働き、細々と生計を立てて来ました。

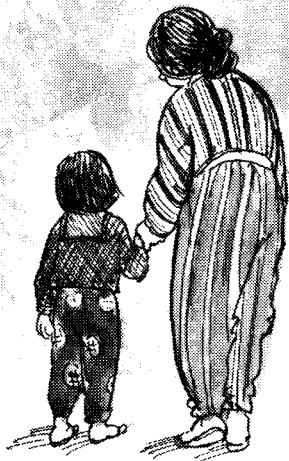
昭和二十年になり戦争はますます苦戦になり、時折空襲がくるようになりました。食べるものはなく、雑すい、又は粥のような物しか食べられず、働くにも力はぬけ毎日毎日不安な日々が続く、夜も寝られず生きている心地はありませんでした。

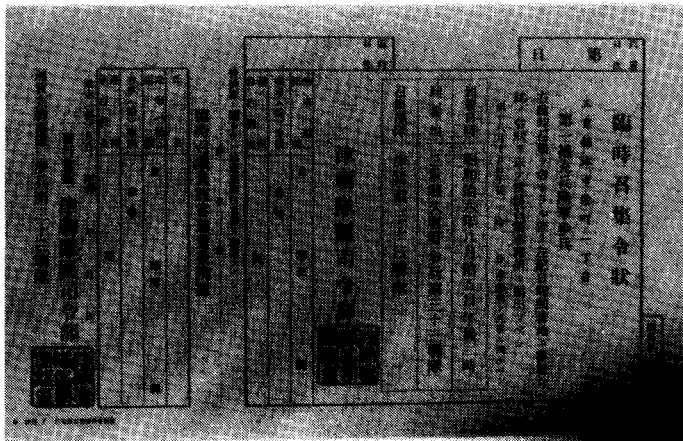
五月二十四日、本土に大空襲があり都内一面火の海になり三鷹の空にも焼夷弾が何箇所にも投下され、あちこちに火災が発生し、空にはB29の飛行機がたえまなく飛廻っていました。ほんとうにこわ

かった。八月には広島に原子爆弾が投下され全市全滅になり死者も多数出ました。最早生きてる心地はありませんでした。この戦争が長くつづくことになる、全日本國民が一人残らず死んでしまうのではないかと心配をするように成りました。

丁度其の時八月十五日には天皇陛下のお言葉がありますと報道されました。其の日は仕事を休みラジオをかこんで待つて居りました。十二時の時報が終ると天皇陛下、自ら終戦の知らせをお下しに成りました。今迄がんばっていた力はぬけ、働く気力もなく主人は戦死、誰をたよる人も無く親子もろとも主人のおそばに行きたい気持でした。それでは主人が戦死して迄ご奉公をして来た事に對し申訳ない。自分も体のつづく限り皆さんのお役に立とうと覚悟をきめました。

人生は、はかないものよ、一枚の紙切れによつて生死を知らせる、何年たつても忘れる事の出来ないあの戦死公報。どうしても心より消えること





なく私は一生心に抱いて、年老いた今でも一日として忘れたことはありません。ほんとうに戦争はこわい。

戦時中の思い出

（昭和十三年～二十一年）

鈴木 ヒロ

深大寺当時二十三才

兄の戦死

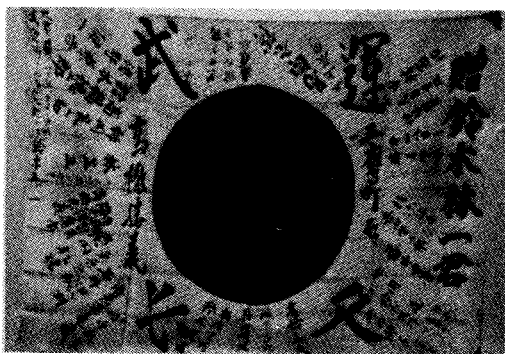
私は深大寺新田の親戚の家で昭和十三年から敗戦後迄の約八年間を少しばかりの農業を手伝いながら家事に従事していました。

日支事変から紀元二六〇〇年、大東亜戦争、空襲下の防空壕生活と苦しい思い出多い暗い青春を感じて居ります。

四人居た男の従兄弟は次々に応召して家に残ったのは女二人だけになってしまいました。私のたった一人の兄も出征して戦死と悲しい思い出があります。

兄は三鷹の役場に勤めながら苦学して学校に行っていました。昭和十五年二十才（かぞえて二十一才）の徴兵検査に腎臓のため不合格になりました。

友人が元気に出征していくのに自分だけがお国のために働けな



いのは情けないと毎日食事に気をつけ再起をはかりました。

当時、成年男子で国家のために兵隊さんとして働けないのは一人前でない、友人に悪いことをしているような後めたさを感じていたようでした。

今の若い人に理解していただけるでしょうか。

そんな思いで体調を整え、次の検査に見事合格して役場の町長さんをはじめ当時の職員の皆さんから日の丸の旗に寄せ書きを頂き、十六年に東部八部隊に入隊致しました。その寄せ書きを同封致しましたが、遺品として送り返されたものです。

満州のハルピンに征き、ついで中支に転戦、十九年戦死。何も腎臓を一生懸命治して兵隊にいかなくともよかつたのにと悔やまれます。

酒の配給

昭和十九年頃になりますと、物資が不足して来て、兵隊さんに出る家しか酒の配給がありませんでした。御塔坂の相田商店迄貰いに参りました。

あそこが三鷹だとは、配給がある迄知りませんでした。召集令状の赤紙が来て、出征する家では大変でした。見送りに来てくれる人の祝い酒を集めるのが大変な仕事でした。

あちこちに依頼して、酒の飲めない人に頼んで貯めた一升酒をわけて頂き、涙ながらに一家の働き手をとられる悲しみを乗りこえてご馳走しました。

最初のうちの長兄達の出征の時（十三年頃）は幟旗を立て、在郷軍人を先頭に愛国婦人会、女子青年団等行列をつくつて軍歌を歌いながら武蔵境迄送つていきましたが、最後の頃の出征者は、敵に知られるということ、身内の者数人で送る程度になりました。

出征するとすぐ戦死

隣りに住んでいた山畑さんは、左官屋でしたが召集令状が来てしまいました。

銃後の家族はどうするのでしょうかと心配しました。昭和十九年だと思います。

出征して一週間もしないうちに電報が来ました。奥さんが驚いて電報を握つてとんできて読んで下さいと言う。それには「門司沖で戦死」と書いてありました。出航間もなく輸送船が魚雷で轟沈させられたらしいのでした。その時の号泣された姿は今も忘れられません。

防空演習

国防婦人会、女子青年団等はよく今の日産厚生園や第三小学校に集められ、整列、番号、行進等をさせられました。

モンペに白鉢巻姿でオイッチニ、オイッチニと歩いたものでした。

その後は、火はたきの使いかた、バケツリレー等消火訓練をして解散をしました。

男の人はよく煙草を吸っていましたが、巻煙草を小さく切ったのや、キザミを煙管に詰めてレンズで火をつけると火種を次々に廻して消えないようにしていた微笑ましい姿も思い出されます。マッチ

は貴重品でしたもの。

主食も職人の手間賃も品物次第

昭和二十年になると、いよいよ食料もなくなり、配給とおいもも足りなくなり誰もがお腹をすかせておりました。

野菜でもおいもでも貴重品でジャガイモや麦は上等で米など宝物扱いでした。相当の闇値がついて、その上、衣類等の贈り物を見せないと売ってくれないので背に腹は換えられず筆筈が空になりました。

非農家でも少しの空地があればカボチャやイモをつくり食料のたしにしておりましたが、昔偉かったおじいさんがモーニングを作業着にして働いている姿を今でも思い出します。

モーニングなどは二度と着られる時代は来ないし丈夫でよいと縞ズボンを指差していました。

当時の家の屋根はトタン屋根でした。コールタールを塗ってサビ止めにしていましたが、これもなかなか手に入らず物々交換でないと売ってくれません。

今日の日赤の処が高射砲陣地で、お腹にズシンと来る音がして屋根にバラバラ砲弾の破片が落ちて来ます。屋根の明り取り^{あか}ガラスは割れ屋根に穴があきます。

当時ブリキ屋さんといわれる屋根屋さんを頼みに行くと、先ず食料は何をくれるかと聞かれます。ジャガイモ、麦をどれだけ、費用はいくらと職人さんを頼むのも食料次第でした。

当然ブリキ屋さんは材料を仕入れるのに食料が交換条件であったわけで、世の中すべて物々交換になつていたのです。

雨もりを直すのに、ブリキヤさんですからハンダで熔接すると思つたら大間違いで、トタン板にコールタールを塗り、その上に布を乗せて又コールタールを塗ると出来上りというわけになります。これでも数年間は雨もりは止まるのでした。

空襲が激しくなり西窪の中島飛行機工場が爆撃されると、真黒い煙が上りました。

風上で煙幕のためにドラム缶のコールタールに火をつけるのだということでした。

煙で工場をかくすつもりだったとは今思うと子供だましに等しいことをやっていたとおかしくなります。

十九年頃は、日本の内外共に負け戦さで、食物も底をつき、今でも思い出すと、気持ちの悪くなるネチネチした甘たるい小麦粉、スイトンにしても、うどんにしても、食べられたものではありません。さつまいもの配給は沖繩というまづいいも、普通は家畜の餌にするのだそうです。

お魚の配給は大沢の魚屋まで行きました。棒ざめ、すけそうだら、みんな独特のいやな臭いのするものばかりです。みんな（ほしがりません、勝つまでは）と、一生懸命でした。

毎日のように、空襲空襲。深大寺、大沢にかけて中島飛行機三鷹研究所が出来はじめ、朝鮮の人が仕事の為、大勢住みついていました。

空襲警報がけたたましく鳴り出したので、急いで防空壕に入ろうと、庭に出ました。すると、とたんに艦載機の集団が頭の上を通り、恐ろしくて、又家に飛び込みました。艦載機は、中島飛行機三鷹研究所をめちやめちやにして飛び去ったそうです。艦載機というのはB29と違って小さい飛行機集団で、低空飛行で、機銃掃射をしますのです。

二十年八月戦争が終り、アメリカが進駐して来ました。

天文台通りは、穴ぼこだらけでしたが、それを今まで見た事もない機械（シヨベルカー）を使って、きれいにけずり、其の上をならし、二日位で立派な道を作ってしまった。

それを見て、とても日本が勝てるわけがないと思いました。

とにかく戦争はいけません。

いつまでも平和でいてほしいものです。

注1（愛国婦人会）戦死者の遺族、傷病軍人の援護等社会事業を行う婦人団体。昭和十七年に大日本婦人会に統合。

注2（魚雷）水中を進行し、船にあたると爆発する武器。

戦時でのお産について
（助産婦として過ごした戦中戦後）

滝田 妙子

新川六丁目当時四十才

物資や薬品のない中、そして空襲中燈火管制の真暗な中でのお産の御苦労を伺いました。

〈取材日時 六十年七月十七日 午前〉



〈取材場所 滝田氏宅〉

当時は、お産に必要な物資ばかりか、すべての物は、配給でした。寒い時には燃料がなくほんとうに困りました。

赤ちゃんの着物どころかオムツが少なく、役場から配給になった一枚のオムツには、三十五、六ものはぎがありしかも一人について四、五枚だったと覚えて居ります。

戦中戦後は、家庭分娩でした。敷き布団の上に油紙を敷いて、その上にお産布団を敷いて生んだものです。

そのお産布団も作るキレも綿もだんだん、無くなりました。私は、工夫して炭俵をもやし紙袋に入れ、紙は、やぶれるからその上に布をかぶせて、お産布団として用いました。

これは、灰が吸取つてくれるので、よごれず同業者も喜んでくれました。

又、飯場や工事現場で働いて居る方の奥さんの出産には、タライがなく木箱を作り代用としましたが何分素人の作ったものですから、お湯がもれます。湯をわかす釜も小さいので次がわくまでには、全部漏れてしまった事もあります。

又、間に合わず、私が行くまでに畳の上に出産する事も何度かありました。その時は、一番私が困りました。後始末するのに私もぞうきんも何もないのですから新聞紙どころではありません。当時は、お便所のチリ紙も不自由でした。そこで私は、自分の家の敷布や浴衣の古くなったものをひまを見ては、良い所は、オムツやお産布団に、小さいところは、あとしまつ用にと区別してお産に呼ばれた時は自転車の後に出産具と一緒に持ち出したものです。そうした厳しい状況の中で不思議な程、異常分娩はありませんでした。

今思うと生む人も生ませる私も本当に真剣な気持ちでお互に信頼し合って居ったからと思います。私の家が三鷹農協のそばで以前は、役場が隣りでした。

農協と役場の間に消防署があつて、その上に空襲警報のサイレンがあり、そのサイレンの音が三鷹中に聞こえる程の大きな音です。

たまたま私がお産で出かけた留守に呼びに来た御主人が、私の家に着いたとたん、警報のサイレンで驚き家の中に飛びこんだそうです。私の子供が毎晩の警報で寝不足なので、その日は、よく眠つていたのでしょあわててはいつてきた御主人に枕をけとばされて驚いて飛び起きたら知らない人が、立つて居たので二人で二度びっくりしたという事もありました。まだその当時は、三鷹には、水道もガスも電話ありませんし、電話はやつと役所か一部のお医者さんぐらいだったでしょう。

家庭でもサラリーマンの家では、子供達の部屋どころか各自の布団ありません。

ある時など、寒い冬の夜、出産を待つ間、奥さんが寒いと思つて布団をよくかけて上げ様と引張つたら子供さんがゾロゾロと二人三人出て来たのであわててかけ直した事もありました。この様なところで出産するなんて、今の人達には、想像もつかない事でしょうね。

比の辺の農家の人達の間には、妊娠、出産に対して迷信があり、特に食べ物に対して色々と言われる様でした。

お産をしても薄暗いところへ寝かせて居りますので、ある時などは、赤ちゃんの顔に何かできてる様に見えたので明いところへつれて見ましたらハエのフンでした。又弱いお母さんも栄養が悪く仲々日立たない（回復が遅い）方も居ります。その様な方には、私から良く家の方に話して少しながく休

ませたり私が内緒でちよつとした物を作つて持つて行つた事もありません。この様な時代でしたが割合にはお乳不足の人が少なかった様に思われます。

あの配給のトーモロコシの粉がよかつた様にも思いますが戦後の食糧不足は、忘れられませんね。皆さん苦労しました。

今ラマーズ法といつて若い妊婦さんにいわれています。(夫が出産に立合つて共に呼吸法をするこゝと)当時の家庭分娩は、今いうラマーズ法なのです。出産する時は、御主人に奥さんの枕元に座つてもらい手をにぎり又は、奥さんが御主人のバンドにつかまり、御主人は奥さんの肩をにぎつて私と三人で呼吸をするのです。私が「ハイ息を深く吸つて止めて、ハイ鼻から吐いて」このくり返しを私の指示にしたがつてやるので安心して生めるのです。赤ちゃんが「オギャー」と泣く声に御主人もお産をした様な気がして感激する様です。奥さんも御主人がそばに居るから安心して居るので夫婦仲も思いやりもお互に増す様でした。出産が夜中になつて帰れない時も度々でした。戦後シラミやノミが多く又栄養不足から皮膚病が多く私もシラミやノミで苦労しました。

この様な時でしたが不思議と異常がありませんでした。でも忘れられないのは、空襲中でカンサイ機が飛んできた時です。工場で働いて居る方達は皆さん農家の竹やぶの中にサイレンと同時にかくれるのですが私は、にげることも出来ません。七ヶ月の方ですが出血多量なのに医者も呼べずこの処置をするのに家の方は、腰がぬけた様で役に立たず私は一人で家中を駆けまわつて居るのです。

私の白い手術着を目あてにタマが飛んでくるのです。夏の日中しかも大きな家でしたから家の中は、開けっぱなし空から見えるのですからこの時ばかりは、私も共に死ぬかと思いました。戦争は、いやです。

二度としては、いけません。



戦時下の尼寺で

長 沢 祖 川

北野四丁目

〔北野にある観音寺で、東堂長沢祖川老尼に、戦争中のお話をうかがいました。〕

観音寺では、当時、託児所を開くなどの活動を行っておられたそうです。〕

取材日時 昭和六十年七月十七日午後

託児所開設

昭和十年二月、福井県の小浜市の発心寺から、長沢祖禅尼（祖川尼の師匠）が三鷹へ来て坐禅の道場を開きました。戦争が激しくなる前は修行が中心の寺で。活字を読んだり、ラジオを聞いたりすることもあまりなく、修行に打ち込んでいました。しかし、戦争の激化にともない、国民として何かお役に立ちたいということから、寺で農繁期に子供達をあずかることになりました。多い時には七十人以上の児童をおあずかりしていましたが、新川、仙川、給田、北野の地域の子供達が多く、新川からは、行列をつくって寺にやってきました。昼の十一時から十二時になると、お弁当の時間ですので、テンテコマイ、寺の人総員でこれにあたりました。十人ぐらいの子供が、一時におネシヨをした時な

どは、尼さんの下着をはかせたりする日々でした。新川まで、泣く子をおんぶしていたり、ドロンの足で走りまわったあとを掃除したりの毎日で、はじめたばかりの頃は、大切な人様のお宝をあずかっているという緊張感から、終ったら責任者だった祖禪尼は二日も三日も寝込むこともありましたが、託児所事業は、都の助成会が主催して行っていました。子供が行儀が良いというので、表彰されたこともありました。又、出征して男手のない農家にお手伝いに行くこともありました。とにかく、戦争という非常事態の中で、精いっぱい取りくみました。

戦時中は、食糧不足で、ハコベなど、野草を粉でつないで、せいろで蒸して食べたり（量が減らないようにあまり蒸さないで）、お茶の葉をお粥の実にしたり、食べられるものはなんでも食べました。でも、尼さんみんなが、ヤミ米は、自分達に子供がいないのだから断わったというのを聞いて、先代の住職祖禪尼が「よう言ってくれた」と言つて、一度もヤミ買いをせずに通しました。

空襲の思い出

中山さんの裏山の松林に焼夷弾が落ちた時に、滝が落ちるような音がして、銀の玉が無数に落ちて来たのに驚きました。又、十二月に村の托鉢をしている時に爆撃があり、お茶の木に身を隠していると爆弾が落ちてきて、その風圧で青い麦が一面に波うつていたのが印象的でした。道路には、小さな家が一軒はいるくらい大きな穴があいていました。爆弾ではありませんが、飛行機からガソリンの空缶が落ちてきて、富沢さんのお宅の大きな檜の木に当って、ガソリンをまきちらしたこともあり

ました。北野地区でもこのような空襲がありました。が、さいわいに人的な被害はありませんでした。

戦後の活動

先代の住職祖禅尼が教育者でしたので、村の青年が立派に育ってほしい、地域意識の高い人になってほしいという願いから、素人演芸の指導を寺で行ったり（これももとでカップルが幾組かできました。）盆おどりを開いて、鶴見の本山での平和音頭の発表会に行っておぼえてきた平和音頭を村の青年や子供達に教えたりして大々的に盆おどりをしましたが此の界限の草分けでした。

戦争が終つて、託児所はやらなくなりましたので、観音寺は本来の坐禅指導の尼僧専門道場（出家在家の女性）として今も現存しております。



戦時下の幼稚園

三鷹幼稚園

戦争の初期に於いては未だ三鷹の人口も少く幼稚園も一園（三鷹幼稚園）のみで園児も百名に満たない状態で、その後の相次ぐ軍需工場の増設に伴う人口増にも充分対処できておりました。

戦争も中期に入ると諸物資の欠乏に加え保育教材の不足も目だってきました。絵本は、戦争がはじまって二年ぐらいでほとんど入手できないような状態でした。遊具もすべり台はベニヤ製で粗末なものでした。ブランコも金属の部分はほとんどないものを使っていました。給食も、もちろん当時はなく弁当でしたが、内容はたいへん質素なものでした。しかし、近隣に散在する自然の観察に重きを置くと日常の保育に支障を来たすことのないよう勤めました。当時置かれた諸状況を斟酌すれば現在のやや自然を失った環境に比べ必ずしも著しく劣った保育内容とは申せないと思えます。

しかしさすがに戦争後期の空襲時代に入りますと、近くの中島飛行機製作所武蔵野工場に対する昼間爆撃の進入路に近い当園も次第に危険になり、その上疎開する児童の数も増すなど状況は困難を極めました。

そこで園舎は一時閉鎖し、中島飛行機附属病院の事務所に転用され、保育の方は園長自宅に於いて

主として近隣の児童に対してのみ行われるようになりました。

この時期に空襲になると園長自ずから児童をつれて帰宅させるなど非常に緊迫した一時期でありました。なお、終戦の年、昭和二十年の春にはすべての保育を中断の止むなきにいたりましたが、終戦の翌月には早くも保育を再開しております。

戦後一、二年の間は戦中にも増す経済混乱の中で園の経営も困難を極め、保育活動にも種々制約が伴いましたが、三年目に至り、人口の増加に伴い入園希望者も急増の一途をたどり始め園側としても当時可能な限りの努力を傾注し諸設備の増強に勤めました。この結果一時的には変形二部授業を行わざるを得ない局面を経験しつつも戦後の一時期地域に於ける唯一の幼児教育施設として機能してまいりました。



戦時下の学校



第二国民学校

国民学校

南満州鉄道の爆破に端を発した昭和六年の満州事変や、翌年の上海事件は局地的紛争であつたが、やがてそれが十二年の蘆溝橋事件の発生により日中間の全面的戦争にまで拡大した。

政府は、十三年に国家総動員法を成立させ、外交面では十五年に日独伊三国軍事同盟を締結する等、着々と臨戦体制を固めていったが、その一環として学校教育の面でも、十六年四月一日に「皇国民の基礎的錬成」を目的とした国民学校令を施行した。

小学校の尋常科（六年間）、高等科（二年間）は、それぞれ国民学校の初等科、高等科に改められ、指導教科は国民科（修身、国語、国史、地理）、理数科（算数、理科）、体錬科（体操、武道）、芸能科（音楽、習字、図画、工作、裁縫）の四教科で、高等科に

佐藤 茂

野崎當時二十四才

はこれに実業科（農業か工業か商業又は水産）が加えられた。

西三鷹国民学校

当時の三鷹町の国民学校は、東三鷹（現第一小学校）と西三鷹（現第二小学校）の二校だけで、その学区は、三鷹駅の西踏切（現立体交叉）を南に向かい八幡神社を経て現市役所に達する八幡通りを境界として、東西に大きく二分されていた。

私の勤務していた西三鷹（野崎）は、北は線路北の堀合地区、南は調布市境、西は小金井市境や府中市境にまで達する広い地域が学区で、所によつては通学時間に子供の足で一時間以上を要した。

幼い一年生が、寒風の吹き荒む中を積雪を踏みしめ、凍える手に息を吹きかけながら、高等科の生徒に抱きかかえられるようにして学校に辿り着いた姿は哀れで、今も臉に焼きついている。

苦しかった遠距離通学にも、反面には今の子供たちには経験できないような楽しみもあったようだ。着物に下駄履きの高等科の生徒を団体長として集団を組んでの登校の途次、年令の枠を超えた上級生と下級生が入り交じつての人的触れ合いが生まれたり、また、恵まれた自然環境に心をひかれてつい道草を食つてしまい、集団で遅刻をして上級生が代表してお目玉を頂戴するなど……

「皇国民の基礎的錬成」という目的から体錬科は極めて重視され、毎月一回は体錬的行事が行われた。

男子が上半身を裸になり禪を締めて相撲体操を演ずれば、女子は戦意昂揚の歌曲に乗ってリズム運

動を運動場いっばいに繰り広げ、また、男子が木刀を振れば、女子は負けじと長刀の裂帛の気合を響かせた。

教材は、欧米から入ってきたことを理由にボール運動が姿を消し、徒手体操、器械運動、陸上競技にウエイトがかけられた。

西三鷹では以前から短距離走やリレーが盛んであったが、ここですますその力を伸ばした。会社や工場の運動会に招かれる学校対抗リレーは、時局柄次第に回数が減っていったが、そのような中で男子、女子がそれぞれ優勝して、学校を挙げて祝ったことがあった。

青年学校

東と西の国民学校にはそれぞれ東三鷹、西三鷹青年学校が併設されていた。高等科を卒業して農業や家事に従事している青年男女を対象とした学校で、(会社、工場にはそれぞれの職場で設置)、主として農閑期の夜間が利用された。武道も盛んに行われたが、軍事教練については二校合同で昼間に行われたこともあった。

勤労奉仕

日中戦争に続く太平洋戦争の勃発により戦線はますます拡大し、それに伴う兵員の補充は、近効農

村であつた三鷹町からも多数の働き手を奪つた。

子供たちの勤労奉仕（畑の除草作業）は、雑草の成長に追いまくられていた農家の方々に大変感謝されたが、それはまた食糧増産という国策の一翼を担うものでもあつた。当初は高等科の生徒と初等科の高学年の児童が主体であつたが、需要の増大によりその対象は中学年にまで下がり、出勤する回数も増していった。

上からは輝く太陽に照りつけられ、下からは蒸し返される炎天下の畑の中を、汗と埃にまみれながら這いまわる作業は重労働であつたが、子供たちはその苦しみによく耐えた。作業終了後農家から出されたおやつ（ふかしたてのジャガイモ）に舌鼓をうち、車座になつて談笑する子供たちの姿を見てわずかに救われる思いがした。

衣料不足を補うため、当時町内の何処にでもあつた桑の木の皮を剥き、校庭一面にひろげて干し供出したこともあつた。供出の見返りとして配給になつてきた学童服は、すぐ皺になるよれよれの粗末なものであつたが、希望者が多く配るのに苦心した。

飛行機の燃料不足を「松根油」で補うということで、高等科の生徒と大沢の林（現在キリスト教大
学構内）に松の根を掘りに行ったこともある。しかしこれは子供たちには荷が重すぎるためすぐ中止

になった。

十九年の学徒勤労動員令により、高等科二年生は軍需工場に動員され、二十年には高等科一年生もこれに続いた。このため勤労奉仕の主体は初等科の児童（三鷹町には学童集団疎開が実施されなかった）に移ったが、この頃になると連日のように警戒警報や空襲警報が発令されるようになり、教室での学習と同様に勤労奉仕にも殆んど出られなくなった。

空襲

調布の飛行場には、陸軍最初の水冷式戦闘機「飛燕」の配属された震天征空隊が駐屯していた。大沢の子供たちは帝都の空を護る若武者と大の仲良しとなった。

「この間遊びに行つた時面白い話をしてくれた兵隊さんが、昨日あの空で、B 29に体当りしちゃつた。」

女の子が声を震わせ、涙を流して訴えてきたことがあつた。

敵の機動部隊接近、艦載機の来襲に備えて滑走路の雪踏みに動員されたことがあつた。飛行場は一面の銀世界、その中を列を作つて一步一步前進する子供たち、

「あの時、敵機が来襲していたら……」

今考えても背筋が寒くなる。

敵の接近は誤報であった。

その後、飛行場の空襲による被害を直ちに復旧させることを目的として、近接する地域の中年以上の男性が「防衛召集」された。学校は宿舍として教室の約三分の一を占拠されて、学習はますます困難となった。

五月二十五日にはB29による夜間空襲があり、学校や周辺の畑に多数の焼夷弾が落下し火の海となった。(この時学校の南にあった農家数軒が全焼した)

幸い校舎(木造平家建)は東北の隅の屋根が燃え上っただけだったので、宿舍の若い教員と老用務員が梯子をかけて登り消しとめた。

召集されていた方々は、たまたまこの日の昼に「自宅待機令」が出て帰宅していたために、それぞれが家の防火にあたった。

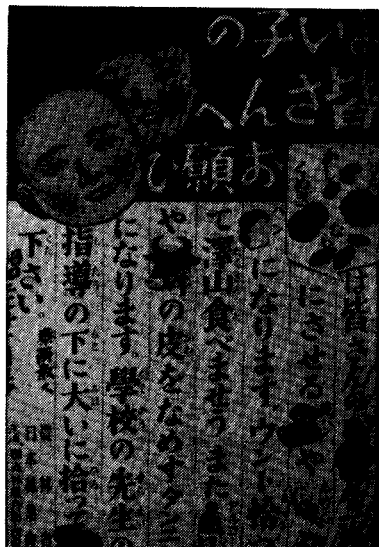
中島飛行機武蔵野工場を空襲した艦載機が急降下したまま上昇せず、操縦する飛行士の姿が見える程の超低空で南下してきたことがあった。学校の北にある東野集団住宅を工場とでも見誤ったか爆弾を落していったため、数人の方が生き埋めになってしまった。この救出作業には召集されていた方々

が活躍した。

終戦・新学制施行

動員された工場で高等科の生徒と一緒に終戦のラジオ放送を聞いた。雑音がひどく聞きとりにくかったが敗戦を告げるものであることは理解できた。

敗戦のショックで虚脱状態の大人に比べ子供たちは一足先に明るさを取り戻した。しかし、食糧、衣料等をはじめ物資は極度に窮乏し生活は苦しかった。



九月、二年ぶりに全校そろって二期の学習を始めたが、昼食の時間になると教室を抜け出し校庭の隅で空腹に耐えて時間を過ごす者がいり、体操等で教室が空になるとその間に弁当が紛失したりすることがあった。

学童用の運動靴が学校を通して配給されたが、数が少なくて個人に渡るのは一年半に一足程度であった。やっと順番が来て配給を受けても材料が粗悪ですぐ破れてしまい、体操の時間には

跣の者が多かった。

二十二年四月、新学制が施行されて国民学校は小学校に戻り新制中学校がスタートした。校舎不足に各自治体は大変苦勞したが三鷹町もその例にもれず、駐留軍兵士の慰安設備として建設したバラックを改装して一中は開校された。

戦争は再びあつてはならない。しかし、ともに苦しみ、喜びも悲しみも分かち合い、裸になつての人的的触れ合いによつて結ばれた師弟間、友人間の心の結び付きは固く、会えば、四十年の空白を全く感じさせない。

戦時下の青年団活動

高橋喜助

牟礼二丁目 当時二十七才

青年団の組織

現在とは大変な違いがありまして、各部落の団員が非常に多人数でした。

その団員もほとんど農家の子供や商売をしている人の子供で、土地の人だけということでもとまりがよかったです。今の青年団の団員はみなさん異った職業についていると思います。だから活動しようと思っても仕事に忙がしくて支障をきたしている状況じゃないでしょうか。しかし私達が青年団活動に入った頃は、すでに戦争に一步一步近づいていました。その頃は学校の先生や兵隊さん、偉い人の言う事に決して疑いを持たずに聞きましたから、まとまりがよかったです。その頃には学校の先生や兵隊さん、一番最初にあった戦争は、昭和六年九月十八日に満州の柳条溝に起った満州事変でした。

それから上海に戦火が飛んだ上海事変が起り、昭和十二年七月七日に日中戦争が始り長い長い戦時下に入ったわけです。

青年団の事務局はどこかの村（現在の市にあたる）でも役場（現在の市役所）の総務課が担当しておりました。縦の系統も非常によくできていました。その中に団長が一人、副団長が二人いて、各部落

に分団があり正副の分団長がおりました。当時は男だけの青年団であり、文化活動的な面は本来にありませんでした。今の青年団の様に自由な色々の活動がなかったということです。

青年団の運動会

でも運動会はよくやりました。秋に部落対抗の点の取り合いです。今のとは形式が違いどうしても軍事的なものとなってしまった記憶があります。例をあげてみますと、(1)服装競走：六、七人で並んで裸でスタート。走った先に軍隊服のようなのが置いてあり、それを着て靴をはく、そしてゲートルを巻く、帯剣をつけて最後に銃を持ち、つけ剣をしてグウワーとやる。今の人はゲートルなんて、なかなか巻けるものじゃないと思うんですが、よく巻きましたね。(2)伝令競走：軍隊そのものの伝令的なもの。(3)重量競走：六十キロの麦俵を作りそれをついで五十メートルの距離を走る。当時は六十キロの俵をかつげないと恥ずかしかつたものです。花形といえば、部落対抗の四百メートルリレーです。これは現在とほとんど変りませんが、十部落の徒競走の早い者を集め四人一組のリレーです。走り幅とび、高とびも、ある時期まではあつたんですが、いつ消えるともなく、なくなりました。

青年団：食糧増産

これは青年団の団員にも食物を余計に作ってくれということ、あいている所があれば部落で開墾し、ジャガイモなりカボチャなりサツマイモなり作るようにということ、当時、私は牟礼青年団の団長をしていて団員も六十人ほどいました。で、皆さんに協力をいただき、現在の井之頭一丁目の

小林佐吉さんの荒地を開墾してジャガイモなどを作りました。又高山町会の板橋宗一さんの荒れやぶ、今は議長の中中義一さんが、お住いになつてゐるところですが、約一ヶ月ほどかかつて開墾し陸稲を作つた事など覚えてゐます。三鷹農協の前組合長の鈴木繁一さんの竹やぶの開墾もよく記憶に残つてゐます。

青年団：兵士の送迎

支那事変が始まりますと、青年団の活動そのものよりも、召集された人を村中の人たちと一緒に、各部落の神社で歓送する式をするようになりました。歓送式の時、分団長という立場から、兵隊に行く人たちに対し祝辞と言ひましようか、はなむけの言葉と申しましようか、いく度となく言つた事を覚えてゐます。当時、兵隊さんを送る時、徴兵検査で合格した人が、決つたように十二月十日と一月十日に現役兵として入営しており、他は予備役に編入されておりましたが、戦争が大きくなるにつれて、予備役の人たちも召集されていきました。毎日のようにあそこに赤紙がきた、この家に召集令状が来たということで、その人たちの出征を送る行事に終始参加しておつたということも覚えてゐます。当時、召集令状が来ると、一家の名誉であるということで、大きな、「祝、出征、何々殿、何君、」と長い幟のぼりみたいなもの作ります。決まつたように在郷軍人会せいの分会長さんが一番先頭に立ち、他の人々は日の丸の小旗を片手に吉祥寺、三鷹の駅まで、軍歌を歌いながら送りました。そうこうしてゐるうちに今度は、送るだけでなく、亡くなつた兵士を迎える様にもなりました。送る時は非常に景気よく

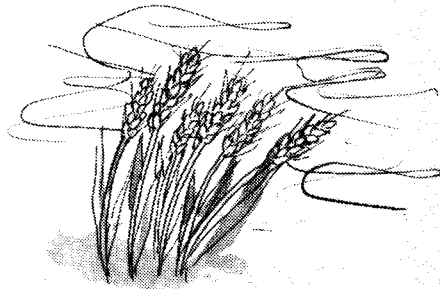
送るのですが、迎える時は厳粛そのもので、あの当時は、英霊という言葉を使い、この人は名譽の戦死をされたのだからと、非常に国民から尊敬の目でもってみられたんです。そういうふうには、出征兵士を送る、そして英霊を出迎えるという毎日が続いておりました。

青年団：留守家族への勤労奉仕

青年団の人たちが、自分の仕事はさておいて留守家族への勤労奉仕という言葉でもって、かり出され、その家の農作業などを手伝った毎日です。終始繰返しておりました。

青年団：村葬

今だに私の頭の中に残っているのは、戦死された人たちが何人かになりますと、決まったように村役場で、村葬をして頂いたことでございます。場所は必ず今の第一小学校か、第二小学校の校庭を使いまして、一回に五人から八人ぐらいでした。それには三鷹^{じゅう}中のお寺の住職をはじめ、あらゆる役職の方々がお葬され、家族の方々に悲しみのうちにも満足感をあたえたようです。非常に多くの人たち



が感謝の気持ちをもって国に命を捧げたんだということで、おごそかに厳肅に行われておりましたが、戦禍が激しくなるにつれて次第にお粗末になってきまして、最後は村葬らしい村葬もなく終戦を迎えたわけです。

青少年団の誕生と女性の参加

昭和十六年青年団が発展的解消となり、一月大日本青少年団となりました。そして本部が現在の青山の日本青年館に置かれ、団長は市町村の長がなり三鷹の場合でも、当時の町長、高橋勝義さんが団長になれば、今までの青年団長が副団長となれば、上は松村光麿東京知事を筆頭に下は市町村まで、戦時体制に入る組織が整いつつあったわけです。制服も出来ました。戦闘帽も整い、記章も鷹の略画をとり入れ、上を大きく下を小さく重ねた簡単な帽章でした。この時に初めて女の方が加わりました。副団長も女子の中からも出て来ました。服装は当時、洋服を着ている人が少く、今の事務服みたいなのを和服の上から着ておりました。その女子の団員も食糧増産、戦地の兵隊さんに対する慰問袋の発送とか、千人針を作り出征兵士の武運長久を祈り、私達と一緒に奉仕的な活動をしておりました。

青年訓練所

三鷹に一ヶ所設置され、毎日曜日に高等小学校卒業生以上（現中学三年）が対象となり軍事訓練をうけておりましたのが、青年学校と改まりました。ここは希望のあるなしにかかわらず、若い人たちがほとんど籍を置かなければいかんということで、軍事訓練そのものでした。指導員というのは現役

を除隊した兵隊さんです。朝八時から夜五時頃までだったと覚えていきます。

青年団：馬の干し草

今の三鷹台団地は牟礼部落の唯一の穀倉地帯でした。水田二十町歩、玉川上水の水を資源に豊かなおいしいお米が私達のお腹をこえさせてくれた處ところです。夜はほたるが飛び、夜ともなると稲のにおいが鼻につき、渡る風がそれはさわやかなものでした。それだけにまたとない干し草の絶好の場でもあったわけです。草を刈って、自分の家の庭に干す。道路一杯に自動車が一台中通れるくらいあけて干す。通行車も少のうございましたが私達の干し草作業には皆協力的でした。乾燥させ梱包して役場に納入するのも青年団の大きな仕事の一つでありました。

私達が若い時代は、唯戦争を遂行する為、又国の為といいましょうか、一つの組織をもつて奉仕する、それが青年団活動ではなかったかなという感じですが。

私は、村から選ばれ、昭和十六年から十七年にかけて内原の満蒙開拓青少年義勇軍の訓練所に於て農業推進隊訓練を受けました。全国からの訓練生五千余名、隊長は所長の加藤完治、理事長に石黒忠篤、総統括は農林省でした。非常に厳しい精神修養と学務、そして戦争遂行上の食糧の重要性をいやという程たたきこまれました。それを又純すいな気持で受けいれ、訓練期間が終り退所する時、井野農林大臣から修練鑑（卒業証書）を頂きました。

おかげで全国に知己が得られたのが生涯の大きな収穫でしたが、忘れもしない昭和二十年六月二十

二日、東京都の經濟部（当時は局でなかった）の山下、原島という事務官が家に来て、満州の黒竜江省東寧報国農場にいつてくれないかと言われた。当時はお國の為なら自己を犠牲にする事などなんでもない時代でしたので仕方がなく承諾して、第二次として日は未定でしたが出発する事になっていた。総勢八十名を二分して第一次を六月三十日都庁の中庭で壮行会を開き、隊長とし都の島津勘助事務官が引率して東京駅を出発した。その時は我々も第二次として出発するからと手を握り合つて別れたが、それが生涯の別れになってしまった。彼等は東寧に着くやいなやソ連の参戦、黒竜江の対岸はソ連である。その後の消息はまったく不明のまま現在にいたつております。私達の第二次出発は延期されそのまま終戦となつてしまつた。人間の運命はどこにどの様な歯車があるのか、はかりしれないものがあります。そしたら日を待たずして特別警備召集が来しました。

復活：青年団

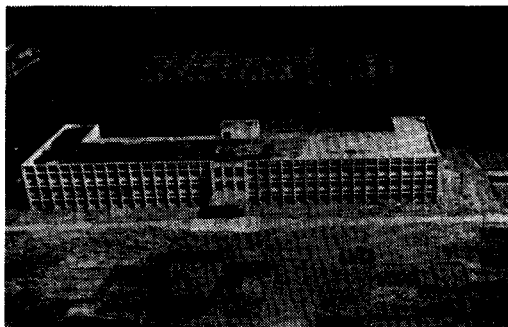
昭和二十四年、二十五年になり、いくらか世の中が落ちついてきますと、同時に青年団活動も徐々に復活して来ました。素人演芸などで、自由に夜明け近くまで、歌つたりおどつたりして楽しんで覚えがあり、年と共に経済にもゆとりがみえはじめましたが、苦しかった過去を思いだし、その時代を知らない人達に語り伝えて、永遠の平和を祈らずにはいられません。

注1（在郷軍人会）平時は生業につき、必要に応じて国防に任ずる人達の組織、帰休兵や退役軍人がこれにあたる
ことが多かった。

町会長だった義父の苦勞

黒川 田鶴子

深大寺當時二十八才



中島飛行機三鷹研究所

戦時中、隣組制度が出来ました時、主人の父は丁度深大寺町会の町会長をしていました。其の頃の町会長は転入・転出の証明書を出し、それで米穀通帳がもらえ、お米の配給があります。お菓子・たばこ等も券が町会長の処へ来て、隣組の組長から皆に配ることになっていました。国債を発行するようになると町会に割当が来るので、義母が町会の方々にお願いして買っていただきました。

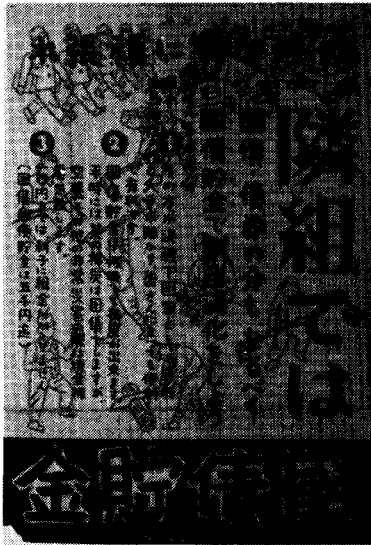
今のキリスト教大学と富士重工は元中島航空研究所で、此処で飛行機を作り調布の飛行場へ誘導する計画で、戦争中に工事が着工されました。この建設の為飯場が出来、方々から人が集って来ました。此の人達は鍋釜を背負って飯場から飯場を渡り歩いていました。其の為、朝は六時頃から夕方は遅くまで証明書を貰いに来る有様でし

た。字の書けない人が多く、手続は義父の代筆が多かったようです。町会の事務所は無く自宅が事務所でした。町会の方が見かねて、中島飛行機工場の仮事務所を（六坪）もらい受け、今の深大寺公会堂の管理人が住んでいる処に、事務所をつくって下さいましたので、時間もきまり家族の者もほっとしました。

飯場では喧嘩の絶えまがなく、怪我をしては証明書を取りに来て病人用の玉子や牛乳の券を要求するので、其の取扱いに困っていました。また、東野に社宅ができ次々に移り住むようになりました。町会は同じ深大寺ですので事務は繁忙を極めたものでした。

御嶽神社には神主がいませんので、神社のお祭り事は小金井から神主に来てもらっていました。町内から出征兵士が出る時も神主が間に合わなく、義父が祝詞を上げて出征兵士を送るような場合もありました。

段々と空襲が激しくなり、中島研究所も敵機の襲撃の的になり、義父は戦時服にゲートルを巻いたままで夜も寝るようになり、自宅に防空壕を掘り、何時でも其処へ逃げ込めるようにし



ました。

昭和二十年一月義父は胃癌で六十二才の生涯を終えました。床についたのは二ヶ月位でした。其の頃は火葬にするにも燃料を持参する有様で、お棺も手に入りにくく、洋服ダンスで作った人もあつたと聞きました。町会の方々のお世話で無事お葬式が出来た事を今でも感謝しております。

元海軍の軍人だった義父は、何事もお国の為、町の為にとつくしていました。生きていたら日本の敗戦をどのように受け止めた事でしょうかといつも思います。

戦時下に町長として生きて

高橋勝義

新川三丁目当時四十五才

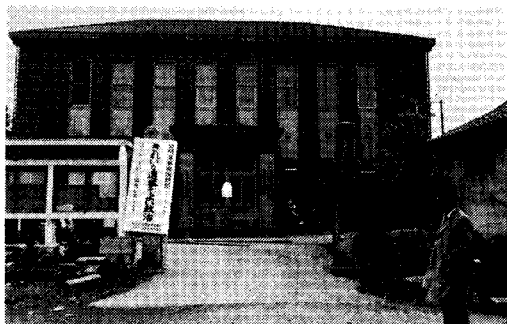
(この体験談は「戦時下のわがまち三鷹」(わだちの会編)に掲載されたものを高橋氏の了解を得て、縮小再掲したものです。なお、高橋氏は昭和六十年十二月二十五日に逝去されました。)

はじめに

実は私が村長として、就任しましたのが昭和十一年です。あの当時の議員は十四名で私がつてから十八名にして、二十名までいきました。私は村会二期、町会二期やりました。

その翌年の昭和十二年に戦争が始まりました。そして十五年に私が町制をひいたわけです。戦争が勃発いたしました、それまでは、ずっと平穏な社会が続いておったわけですが、実は戦争が起ったというだけでも、村民の方々は非常にびっくりしたわけです。

そのうちに毎晩のように昔は動員令と言いましたが、軍隊から召集令状が来るわけです。それがまいりますとすぐその場で、役場の人間が兵事課でくばるんですが、兵事課じゃ足りなくて他の宿直の人も混じえて、どんどんその晩のうちにくばるといふようなことでもございました。二度や三度でなくてあととっつきりなしに、どうしようというくらい来しました。三鷹で一番多く動員令を配布したのは、一回に二、三〇枚配ったと思いますよ。その動員令の赤紙をもらただけで、昔のしっかりした農家のおかみさんたちでも「腰が抜けちゃったわ」なんて話が三つも四つもあつたわけです。



經濟統制

統制經濟に移りましてからはお米なんかも、最後には一日一人、二合三勺と思ひましたね。二合ぐらいの配給じゃ、とても農家の人なんか、いつべんに食っちゃまうんで足りやしません。それで例のヤミなんてことも始まったわけでございますが、何んとしても食糧確保しないことには戦争はできないということ、荒地であるとか、道路のふちでも広く空いている所なんか、どんどん開墾して、自分の食物を作れというようなことが、これは都の方から、あの時は府でありました、東京府の方から毎日のようにいろいろな書類を町役場へ送つて来るわけです。その書類によつて私どもは町民のみなさんをお願いをして歩くんですが、一番困りましたのは米や、衣類の統制より酒屋さんの統制の時が、私には一番大変だつたと思ひます。

三鷹ではどことどこを残してあとはみんな廃業させると、そして「よい子は、生産の増強に努めろ」というようなこととやつてまいりましたけども。統制經濟になつた時も商売やめさせられる人は、あらゆる手段を講じて、「どおして、オレんところを首にするんだ、オレん所じゃ昔からの商人じゃねえか」つて役所に陳情に来る、みんなオレに、けんか売りに来やがるし「だつてこういう書類が来ていてなあ」つて東京都のせいにして断りましたけどね。統制經濟ということは、全く私どもには体験したことがないことで、町民のみなさんも、もちろん憶えないことで、本当に不自由きわまりないことで

した。

町葬

何しても一番気の毒で、かわいそうで、私ども目に涙をこぼすという時があつたんですが、それは送り出した兵隊さんが、戦死をなされて、連隊葬というのがありまして、連隊葬へ私も兵事課の者をつれて立ち合つて、そして、そこで遺骨をもらつて来ます。遺骨をもらつて来ますと、三鷹駅に在郷軍人会三鷹分会の方たちが出迎えてくれた。そして町で日を決めて町葬を行うわけです。全くに結婚して、五年か六年きりたたねえ、二才か三才の子どもが、私の弔辞がすんだあとに、すぐに御遺族の焼香があるわけですが、やっと歩けるくらいの子どもを連れて来てねお母さんが、子どもにお焼香をそえさせてやつたんですが、本当にあの姿、後ろで見て、涙なくつちや見てらんなかつたんです。実際かわいそうでした。

三鷹の交通機関

三鷹の交通機関は今のように循環バスはなく、吉祥寺から新川の十字路へ出て、野崎から調布までのバス一本でした。牟礼あたりは吉祥寺まで歩くんです。新川の本町あたりは京王電車が近いから京王の仙川駅まで出ました。吉祥寺へ一里、仙川へは半里でした。

三鷹に工場が増えた理由

当時軍需工場っていうと、みんな三鷹に来ちまうんで、どうして三鷹に工場がふえるんだろうと考えても、我々百姓にはわからねえ。こりや学者でなくちやわかんねえ。工場を建設する所が都に申請するでしょ。それで都に聞いてみると、東京近辺で大陽の紫外線の10/10取れる所は三鷹つきりないんだそうです。

工場作るがために、空気が汚れて、職工さんが病気になるっちゃ、しょうがねえんで、空気のいい三鷹でということ、三鷹はまだ広いんだから、いくらでもできるってんで、三鷹を、都が指定したらいいですね。ですから、たちまち三鷹市内に、七十いくつかの工場ができちゃったわけなんですよ。軍需工場には、日本人だけじゃなく、韓国の人が飯場にも工場にもかなり働いていたようす。他の国の人は働いてるってことは聞きませんでした。

そんなわけで全てが軍一点ばりで来たんですから、軍需の拡張の為に、工場が沢山でき私が就任した時は、正田飛行機一つしかなかつたんですが、日本無線なんてでかい工場もみんな私になつてから、七十三ヶ所できました。その工場が、みんな日本中から、職工さんを集めて来て、生産を増強したわけです。

私が村長に就任した時には総人口で、八、〇〇〇人と覚えていますが、十年勤めてやめる時には三万五、〇〇〇人〜三万六、〇〇〇人でありました。役場職員全部で十一人でありましたが、やめる時

は三十五、六人いたんです。

土地のねだん（土地の売収）

それで一番お気の毒に思ったのは、戦争が激しくなりまして、中島飛行機の工場が、今の大沢という部落にありました。今のキリスト教大学のあその所へやっぱりこれも数十町歩と思いましたが、買収になって、その日に高射砲隊が大沢にできましたね。あれは買収の日は二ヶ所同じ日だったんですよ。そして片方は中島飛行機で、軍の命令で、予算はあるんだし、どんどん買って工場で、確定しなければ、軍からしかられちまうからね、まあいくらでも金出しちまうわけで。

町役場の二階と下で二組で片方は高射砲の軍隊ですから、将校連中が、長い刀さして来て、「特別に、値よくおまえたちのは買ってやるから、二円だ」なんて言いやがつてね、坪二円ですよ、強制買収で。それで下でもって交渉しててね、中島飛行機は十二円で買うでしょ、 $\frac{1}{6}$ で二階で、取られて、下でもって、六倍で売れてるわけなんだよ。そういう矛盾したことを、政府と軍でやってたわけですね。

大沢の部落の半分ぐらいは高射砲陣地に買収させられちゃった。あの時は国債でなく現金だったと思います。

その時分はずい分、国債を売りつけられたなあ、ひどい目にありました。三鷹じゃ何十万売れと都

からの割当が入るでしょそれで工場へ頼んだり、農家の金持へ頼んだり、そいつを消化して現金を都へ渡さなくちゃなんねえ、そういうことまでさせられました。

徴用工女の死

駅前の小林さんという役場の使いつけの印刷屋の娘ですが、中島飛行機へ徴用されて行っておりまして。その時は中島飛行機専門の空襲でしたから、やっぱり直撃を受けてね、家なんか直撃にあってたんでこっぴどみじんになっちゃって何にも形がなくて、「どうして、おめえ娘が殺されたのかわかつたんだい」ってつたら「この、たび、を、はいておりました、寒い時分でしたから、そのたびに、自分の名前を書いておいたそうです。それで足首がめつかつて、そのたびを見たら小林という名前がなくて、こりあ、うちの娘だというのがわかりましたよ。」と

その当時は中島飛行機が空襲になると、全部「わあゝっ」とえらい勢いで御殿山から井の頭公園へ、逃げたもんです。

我が家がふっとんだ

空襲解除になつて役場にいたら新川の鈴木理三郎さんが、「町長さん大変なことがおこっちゃつた」つてから「なんだよ、おめえ空襲解除になつちやつたじゃねえか」つて「こんな大変なことねえんだ

よ」「なによ」つて言つたら「おめえんとこふつとんじゃった」つてんで「バカ言うなよ、いくらアメリカだったつて来るわけねえ、オレんところは野中の一軒家なんだから、ねらつたつてあたるわけねえじゃねえか、ねぼけたこと言うなよ」つて「じゃあ行つてみればいいじゃねえか、オレは見て来たんだから」つて鈴木さんが言うんだよ。それで役場のヤツがびつくりこいちゃつてね「そりや大変だ、町長さんすぐ行つてくんな、あとはなんとか私たちがやりますから」つて。

それでびつくりしたのは行つてみたら新川の駐在所の所まで行けば見えるからね、オレんところは形の防空壕へ家族みんな入つていた、二月十九日の時だった。

もと屋敷からしゆるの木の大くで一丈も、一丈五尺もあるようなのを持つて来て応接間の周りへどんどん植えて植え込みにしておいた、家がパァッと飛んだらすぐそばだからそのしゆるの木にあつたんでしょ。それで受けきれなくてね、じんわりと防空壕の上へ八、九尺つもつていたね。

それで、しゆるの木が一尺間ぐらいこういうふうにはりになつてまして、オレが家へ行つて見ました。いくらでかい声で呼んでも誰も返事しなかつた、それから防空壕へ行つたところが這い出したあとがあるんだよ「おお、こりやいく人か助かつたなあ」と思った。そしたらなんだね、腰かけて一服やつたらばあさん連中が中研の中の飯場の防空壕へ入つてて、そこへは落ちなくてみんなぞろぞろ帰つて来やがつたけどね。もう口の中から鼻から泥でいっぱいだ。

で「どうして出た？」ってたら「下から見ると真暗でしたけどね、こんな細い太陽が見えるから、そこから中へ泥を、入った者みんなでかきわけて、小さい穴から出た」って、まあ運が良くてね。本当にけが一つしませんでした。

とりとめもなくお話しをしましたが、こうしたお話しはあまりしたくないですね。しかし、今がある事を思えば拭いきれない事実です。ですからそれは事実として残すのも結構でしょうけれど、本当にこうした体験は二度としてはいけないと思います。

第二次世界大戦末期の三鷹町役場での業務の一部

石田 太郎

当時町役場勤務当時三十才

昭和十九年は初春より毎日臨時召集令状の受理と同令状の交付事務が、こゝ木造の小さな町役場の



事務室で、その事務処理が行なわれ、兵事課長以下五人の各職員は公私の区別もなく、いてつく星空の下で令状交付に町内の道路を右往左往し、翌朝午前二時頃交付し終って役場にもどり、異状の有無を報告し三時頃に自宅へ帰るといふ状況であった。町役場の職員数は、町長を除き四十八人、男子二十一人女子二十七人、兵事課は課長以下五人内一人は学務課を兼任。

昭和十九年も初夏を迎える頃には米軍の艦載機が盛んに飛来、機銃掃射等も多くなり、特にB 29大型爆撃機による爆弾及び焼夷弾の攻撃回数が多くなって来た。その頃、国は全国市町村に対し警備召集と称する制度及び組織の設置と結成を求め、これを受けて市町村では、活動の範囲を定め、地元住民の救出及び空襲を受けた家屋の消火事業等を行う組織を設置した。

三鷹町での警備召集部隊について

先ず初めに設置されたのは、現在もある万助橋際の日産厚生園内の部隊本部で、次にその事務局それを処理する職員は、三鷹町役場兵事課内に置くことゝなった。

警備召集の業務は、一般兵の召集と同様で、召集令状により行う。

東部軍司令部より担当警察署（当時三鷹町には警察署は設置されていない）の田無警察署へ令状受理に行き、これを名簿により処理の上各々交付する。

約一ヶ月程遅れて第二小隊が三鷹第二小学校に設置された。

組織

三鷹町警備部隊

本部 日産厚生園に置く

第一小隊 右 同

第二小隊 三鷹町立第二小学校

人事 (敬称略)

本部長 一人 吉野良一少尉

第一小隊長 軍曹 浅野 昇

第二小隊長 少尉 吉野良一



(本部長兼任)

事務局

主任 主事 田中磯吉

主事補 石田太郎

警備召集部隊の活動概要

昭和十九年秋、米軍艦載機による機関砲・機関銃による掃射があつた。当時調布飛行場には、日本軍の戦闘機隊があつたために連日艦載機の空襲があつたがここで主な空襲とそれに対処した警備部隊の活動状況を記しておく。

一、昭和十九年秋（九月頃）新川方面に爆弾投下、運輸研究所、船舶研究所付近から、元三鷹町長高橋勝義氏自宅付近。

第二次発令、約三十人召集処理す。

二、昭和二十年四月頃下連雀現在三丁目及び四丁目に時限爆弾多量に投下あり同地域の町民多数死亡及び負傷す。

第一次発令、約三百人召集出動し救出等に努力す。

三、昭和二十年五月二十五日早朝、米空軍による焼夷弾攻撃により野崎一二九番地白井誠一氏宅より

野崎二二八番地地区東西にわたり十一戸に落下内五戸全焼す。

警備召集第一次発令、地区消防団に協力消火につとめた。

こうしてこの無意味な戦いも昭和二十年八月十五日で終結したが、こののち行路病者が続発、東京空襲により焼け出され離散した人々が近くにたよる者なくさ迷ううちに餓死するもの、死にいたらぬも餓死寸前の男、女、子供が毎日のように三鷹町内で歩けなくなつて路上にたおれ又そのまゝ死亡する等でこれ等の人々を助け処理するために当三鷹町でも夜間（当直）の職員特に男子を二人であつたものを八人ないし十人に増員、夜間リヤカーにて交代でこの行路病者の救助に従事した。一夜で多い時には三人から四人の病者又は死亡者が居り、役場の収容室に入りきれぬ日もあつた。生きてゐる行路病者には、食事をあたえ、医薬をあたえて朝を待ち保健所又は警察その他身寄りをさがす等の処置を行つた、こうした事柄は翌昭和二十一年秋まで続き昭和二十三年頃にはどうにか行路病者もなくなつた。今考えると誠に一時の悪夢の如くに思える。戦争はしたくないものである。

町役場職員として体験したことども

栗山

たかし
巍

当時三鷹町役場勤務 当時三十四才

この一文は、栗山さんが当時を回想して語って頂いたことをテープに録音し、それを文章化したものです。

役場の庶務係り当時

戦争当時の想い出ということですが、七十四才になつたいまは記憶もかなり薄れてしまいましたね。私は昭和十六年十二月十日から役場に勤めはじめ、昭和四十三年まで在職しました。ですから戦争中は、まだ若く、最初は庶務の仕事させられました。その頃で一番記憶にあるのは選挙人名簿づくりでした。名簿に登載されていない人が多く、折角提出してもらつた申告書も保管が悪くて、十分な整理ができなかつたもんだから、投票日の当日、朝から昼までドナられたり、苦情の応待に大童したことです。

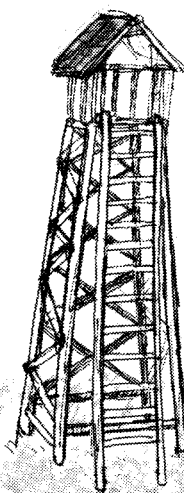
ようやく戦争の足音が町民の生活にも響いてくるようになって、景気をあげるため、頑張ろうというような会合を開いたりした関係で、町民の方々と顔なじみも多くなつたわけですが、今度は町内会を担当する係ができて戦争遂行のため警防団のことや貯蓄増強と国債の割当、配給事務、隣組の組織

づくりなどをやらされました。

当時は町会といっても部落単位で、しかも世話好きの人が町会長になっていて、区域もバラバラで九十いくつもあったわけです。それを東京都からの指導もあつて五十ぐらいに減らすため、折衝に駆けまわつて大変でした。抵抗する所があつたり、闇討ちをするという噂も出たり、何とか五十までに整理ができ、配給事務などをしてきたんですが、三鷹には大きな商店がなかったため、田無や調布、府中の大商店には配給品が優先される傾向が強く、配給となると三鷹は不利だった面もありましたよ。

三回の爆撃と阿南陸相の想い出

戦争の話というと、三鷹は総じて戦火に遭っていない町といえるようですね。B29の編隊がきても、田無方面とか、区部の方で被害をうけて三鷹には及んできませんでした。一番最初の爆撃は昭和二十二年二月十九日の空襲で、その次は四月三日の時限爆弾、五月二十五日の野崎、新川宿の三回ぐらいでしたか。



二月十九日の空襲では、防護団長の立場でみんなに避難を呼びかけ、防空壕に退避させた高橋勝義さんと一緒になった際、(一しきり爆音があつて)「アッ！ オレの家に落ちた！」と大声でおつしやつた。すぐ自転車で駆けつけたところ、やっぱり高橋さんの家はありませんでした。二五〇キロ爆弾が直撃したのです。その時は、南は中原、東の方は井上利明さんのそばあたりの範囲に爆弾が落ちられました。鉄塔が倒れ、高圧線が切断されたのみならず、敵機が、天文台か中央航空研究所を狙い、その爆弾が流れたものと思われませんが、地面がすり鉢状になった炸裂のあとのみみましたが、どこへ何個落ち、死んだ人、怪我をした人などはわかりません。

四月三日の夜明けの空襲の時は、牟礼、井の頭、下連雀第二丁目町会などに時限爆弾が落され、翌日の昼ごろまで破裂していましたけれど、そう大勢の人が死んではいないことが不幸中の幸いだったですね。被害の数などは浅野昇さん(前市助役)の方が詳しいと思います。私は、この時分は自転車で一里(約四軒)の道を登庁し、役場の望楼からあちら、こちらを眺めていました。三月十日の東京大空襲や、五月二十五日の雨の降る中、新宿方面が火の海になったのも見ました。

四月三日は、空襲警報と警戒警報が同時に生まれて、朝、役場に行けない状態でした。昼ごろ解除になったので自転車で役場に行ったところ、高橋町長さん石井助役さんは、(被害が)何もないということで帰られたあとでした。そうしているうちに、「爆弾が落ちてくる。役場は何をしているんだ。」など、いろいろな情報が入って、町長に知らせたり、幹部を非常召集かけて集めたり。

その頃、陸軍大臣阿南さんが三鷹に住んでおられたのですが、阿南さんの家にも落ちていたということで、六時：七時ごろだと思えますが、町長と一緒に御見舞いに行きました。阿南さんの庭の方から入って行って、町長がお見舞いを申し上げると「申しわけありません。私どもが行届きませんでした」と大臣自身が謝られました。実際に大臣にお目にかかってあいさつを受けたのが初めてだったので非常に印象に深く残っています。

この時限爆弾で亡くなった人を担架で中村医院に運びましたが重いなという感じをもった覚えがあります、そのほかにはそれほど大きな被害はなかったように思います。三鷹に時限爆弾が落ちたのはこの一回だけだったと思います。

五月二十五日の夜九時ごろ空襲警報になったときには野崎方面と新川の正田飛行機の道場（いまの日産自動車の東側）附近に落ちてその道場が焼け、鈴木繁一さんの家にも焼夷弾が落ちて、部落の何軒かが焼けたようです。それから野崎の四つ辻を通って大沢の十字路までの中間に落ちたように思っています。

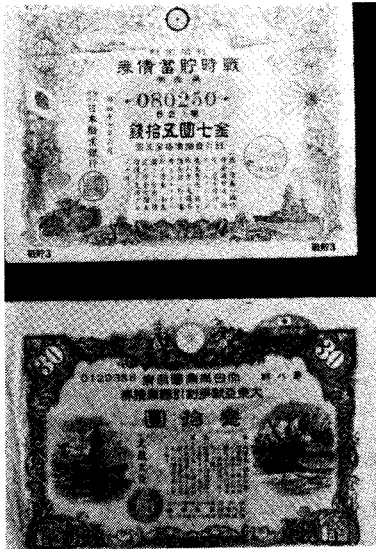
統計的な正確な数字はわかりません。数字は秘密になっているようで、一般の人にはわからなかったと思います。

三鷹といえば飛行機工場の町

戦争中、三鷹には沢山の軍需工場が次々とできまして、日本無線は三鷹の代表的な工場の一つで、

主に船舶関係の無線機の仕事で、かなり盛んでした。そのほかはほとんど飛行機関係の工場だったと思います。正田飛行機製作所、三鷹航空株式会社、中西航空というところが想い出されます。その関連工場も多く、光学機械の工場もありました。だから三鷹といえば飛行機工場といわれるくらいでありました。

私の仕事の中で貯蓄関係をもっておりましたから国の貯蓄債券を会社に割当てて、会社に買ってもらうということもありまして、三鷹航空や中島飛行機に行つて債券をお願いした記憶があります。



中島飛行機で想い出しましたが、戦争も押しつまつた頃でしたが、大沢の三軒屋という崖つ縁のところ、「中島飛行機研究所（実際は飛行機工場ではないか）」ができて、大きな飛行機の製造を始めたのです。聞くところによると、六発（エンジンが六個）の飛行機を作つて太平洋を横断してアメリカを爆撃しようという計画が考えられ、その大きい飛行機が出入りできる建物、調布飛行場へ運ぶ誘導路の計画も進められていたらしいですが、その資材やいろいろなことで無理だったのか、どこまで進んだのか知りません

が、その計画が変更になって、一番小さな、体当り用の特攻機、帰って来なくていい簡単な飛行機を作ることになったらしく私も工場に入りその飛行機を感慨深く見せてもらいました。

営団住宅と配給のお米

工場が大きくなるとその社員住宅やアパートが次々と建てられるようになって、都営住宅などでもきて、沢山の住宅が建つてきました。一番大きいのは山中住宅か、深大寺の東野住宅営団だったと思います。それぞれに隣組や町内会があつて、町会長さんは常会の仕事、配給の仕事などあつて忙しい、私もあつちこつちの町内会に行つてはいろいろな話を聞いたものです。中に変つた町会長がいましたよ。やはり中島飛行機の関係ですが、この飛行機を作るために大勢の人を雇いますから、労務者が集まります。その中の人夫頭に当る人……確か小川さんとおっしゃいましたか、町会長になつて中島飛行機工場関係を全部一括してやつておられました。非常に真面目というか、正直な方で、労務者の数が、帳面上の数と実際に働いている人数とに喰い違いがある場合が多いのですが、お米を配給する時はキチンと人数を確認して渡すものですから、食い違う分だけお米が残るのです。「私を取りしきつて以上、不正や無駄なことではできない」ということでしよう。あるとき、「このお米、役場で必要なら使つて下さい。」という話になつて、私は町長と相談して、一俵二十円か二十二、三円かの公定価額（国が定めたお米の値段）で売ってもらい、牛車で運び役場に保管しておきました。そして空襲が烈しくなつて役場の宿直も一人ではいけないということで最高一晩六人も当直したということが長

く続きました。その職員の夕食と朝食のために活用させてもらったり、また、阿南陸軍大臣の家で、軍の幹部や参謀がしじゅう来て夜遅くまで、あるいは泊っていかれるのに、配給のお米だけで奥さんが困っているということを聞きましたので、町長と相談して一俵提供して使って頂くなど公用のために有効に使わせていただいたこともありました。

供出の話・三題

戦争の末期になりますと、国の方からいろいろなことをいつてきました。供出のことですが、私が直接農家の人に働きかけたのは、馬の飼料に使う干草ほしくさ、これを割当ててきました。何とか供出してもらうように頼み回って、規格どおり縛って野積みにして取りに来てもらいましたが、これがなかなか簡単なようでむずかしい問題でした。特に夏は夕立ちで濡れるのを防ぐためにシートをかけた走り回りましたが、どうしようもなかったということがありましたね。

それから、松根油、三鷹にはまだまだ雑木林があり赤松もありました。これも町会に割当てて、赤松の根っこを堀って出しました。これもなかなか実際には大変で、人手もなくなってきたところで、すから「そうですか。お国のために」といって勤労奉仕してくれる人もなく、当時三鷹に多かった樺の屋敷林を手がけている商売人や組合に頼みました。餅屋は餅屋といいますが、さすが根っこを堀るのは早かったですね。

その次は、艦船の骨組みに使う樺、それも関東地方の樺がいいということで、三鷹には屋敷林に樺

が多いというんで「供出するように」と割当てが来まして、私も、またまた農家の人に頼むよりしようがないと思ひ頼んで回りました。やはり「お国のために切ろう」という人はいません。樗は、先祖からお預りした大事な物だし、後世に残すのだという。いはばその家の象徴でもあったのでしよう。中には「大事な息子を戦死させているんだ。その上に木を切れとは何ごとだ。」と怒鳴られて帰つてきた想い出もあります。

どれもこれも農家や組合にお頼みして出してもらいましたが、むずかしいもんだなーという思いをし、少量ながらも出しまして、お国のために尽したつもりでございます。

戦時中のお話しをといわれ、いろいろと想い出そうと思つてもなかなか出てきません。参考にならないでしょうが、また想い出したら追加させていただきます。

三鷹を中心とした空襲と医療事情

〜日華事変と太平洋戦争時の思い出〜

平 嶺 辰 美

下連雀三丁目当時四十一才

戦後四十年を経て、各地に戦争中の状況又は体験を記録して戦争を知らない世代に又後世に伝えようという動きが盛んになったようである。三鷹市に於ても、その例にもれず何か戦争中の記録をと云うことで、小生にも原稿用紙が届けられた。

中国残留孤児も、戦後四十年にして始めて肉親探しが始まった。四十年というのは大きな節目であるのであろうか。「四十(才)にして惑わず」と云う言葉があり又人生も初老ということでは健康診査の対象になっている。「国破れて山河あり」と云うが、四十年も経つと、当今は山河も変り、社会構造も大変革して、人間の記憶も薄れてしまう年数である。従って当時の記録がなければ、その詳細と確実は期し難いが当時の記録は既に散逸し、又終戦時、軍隊にいた者は軍に関する書類、書籍、日誌等は総べて「焼却せよ」との命令で部隊内に於て焼却した。あの時は敗戦のショックと命令で無意識に焼いてしまったのであるが誠に惜しいことだったと残念に思っている。

戦時中と云えば、普通、日華事変勃発(昭和十二年七月)から太平洋戦争終結(昭和二十年八月)



まで約八年間を云うのであろうが、それより以前、満州事変、又所謂、五・一五事件、二・二六事件と戦争の前触れとも云うべき事件が次々に起り、日本国中、何となく騒然たる様相を呈していた。国民の知らぬ間に、軍部に於ては既に臨戦体勢となっていたのである。

日華事変が始まると、国民は漸次あらゆる束縛を受けるようになった。事変が拡大、長期化するに従って諸物資、食品、衣料品その他凡てのもの逼迫し配給制となった。医療界に於ても、昭和十四年六月から医薬品、衛生材料等の配給事務が開始された。然し一般社会は、時々召集された出征兵士を送る風景を見るだけで、まだ平穩無事と思われた。

昭和十五年二月一日、三鷹村、町制施行

人口、二六九九六人。当時町内医院八、病院二、であった。

戦争と三鷹医師会との関り合いは、昭和十五年十一

月、今は亡き前三鷹市長、鈴木平三郎氏に召集令状が来た時に始まる。鈴木氏は三鷹医師会員の召集第一号であった。その後、戦線拡大により軍医の不足を来し、開業医が次々に召集された。小生も昭和十六年六月召集され、関東軍特別演習と称して、北方守備のため秘密動員とやらで、歓呼の声を聞くことなく満州（今の中国東北地区）に送られた。

昭和十六年十二月八日、対米英戦開始

御承知のハワイ真珠湾奇襲攻撃、南方戦線進攻、初期、連戦連勝で戦勝気分盛んであった。

戦争の長期化に伴い軍需品、多量生産の必要あり、当三鷹地区に軍需工場が多数建設され、工場は病院又は診療所を併設するよう義務づけられ、日本無線株式会社、中島飛行機三鷹研究所（現在富士重工三鷹製作所）正田飛行機製作所、中西製作所等には勤務医師が配属された。

昭和十八年十二月、戦争益々熾烈となり、医師会は各地区毎に救護班を編成した。この頃から物資欠乏一層甚だしく総てのもの統制配給制となる。医薬品欠乏のため麻酔を施すことなく外科手術が行われ、痛い思いをした患者さんも数多くあった。

尚、病人又は妊産婦に対する主食並びに必需品の配給、乳児に対する乳製品の割当て等、規定以上ものは、凡て医師の診断書を必要とした。この制度は、終戦後も暫く物資の出廻るまで続いた。

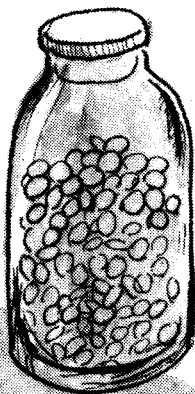
昭和十九年十一月四日、米軍重爆撃機、B 29、第一回東京空襲、武蔵野町西窪、中島飛行機製作所（当時日本一の飛行機製造工場）に多大の損害を与えた。当時小生は、東部軍司令部、東京西部警備

隊（本部井の頭公園日産厚生園）の軍医として召集されていたので、空襲による民間傷者を収容する病院の必要を認め、部隊副官と共に井の頭病院、中村病院を訪ね、軍の指定病院として御承諾をいただき、その契約を結び万全を期することとした。後日度々行われた大空襲による傷者の救護活動をしていただいた両病院に感謝申し上げる次第である。

昭和二十年になると、米機東京空襲は、周知の如く頻繁を極めた。約壹週間か十日の間隔をおいて、B 29の大編隊、三鷹上空、西南方より飛来、中島飛行機製作所に爆撃を繰り返し多大の損害を与えた。三鷹地区もこの余波によって相当の被害を受けた。

東京都区部その他の市街地は焼夷弾により火災を起して焼野ヶ原と化し、当地区は工場爆破のため大型爆弾（普通は五十キロ乃至一〇〇キロ、時には五〇〇キロ乃至一〇〇〇キロ）が投下され、工場の他、一般民家や防空壕が破壊され、生埋め、そして傷害、死亡という例が多く、一壕に一名乃至数名の犠牲者であった。

災害は、誠に皮肉なもので、防空壕に避難していて壕が爆破され、家屋は無事であった例、逆に



家屋は掃いたように吹き飛ばされたが壕に避難の家族は無事であった例、運命の岐路、実に微妙と云うべきであろうか。

警備隊本部は、空襲警報、敵機襲来後直ちに、爆撃現場の調査及び報告を受け、被害状況を、東部軍司令部に報告した。例によつて被害甚大であつても「被害僅少なり」と云う報告が多かつた。又井の頭公園内に時限爆弾が投下され、一日中バーンバーンと破裂し部隊での調査で八十余発を数えた。

爆撃で最も印象深く残っているのは、昭年二十年四月二日早暁のB 29の大編隊による三鷹地区（現在の下連雀二丁目）から武蔵野、中島飛行機製作所に到る絨毯爆撃によるものであつた。この地区に於ける民家、防空壕の破壊、生埋め十数ヶ所、死者も十余名を数えた。私はこの中の三、四ヶ所を巡廻視察した。この巡視を終えて部隊本部に到着するや部隊副官が血想^{注1}変えて出勤が遅いと叱責した。理由を聞くと下連雀二丁目（現在の）の陸軍〇〇局長H将宅の防空壕が爆破され御子息が生埋めとなつたので至急軍医を寄せとの中将閣下自ら乗り込んでのきつい命令であつたという。私は前記の如く拙宅から部隊に行く途中、爆破されて生埋めの人、又負傷した人を見ては、そのまゝ通り過ぎることも出来ず何等かの指示助言を与えていたのでかなりの時間を経て部隊に着いたのであつた。聞けば中将閣下の現場には所属衛生下士官が駆けつけ、軍医携帯裏に収納されている適応薬の総てを使用し、救命処置を施したが遂に無効であつたとのことであつた。

当時、三鷹には周知の如く時の陸軍大臣、阿南大将、前記のH中将その他高官が在住しておられた。

終戦後、二將軍とも自刃されたことは御承知の方も多いことと思う。

昭和二十年四月頃からは、米海軍、艦載戦闘機による空襲が頻繁に行われ、中島飛行機製作所乃至三鷹駅上空周辺に於て味方機との熾烈な空中戦も行われ駅附近は機銃の掃射を受けた。人畜の被害は聞かなかつたが、家屋に弾痕をとどめた家が何軒かあつた。小生宅も屋根瓦が割られ又送電線に命中したらしく停電となり一瞬、肝を冷やした。隣の質屋さん宅の倉庫には何発かの弾が、あの厚い壁に孔を開け一発は反対側の壁まで突き抜けていた。倉庫に貫通銃創を負わせたのである。

尚、空襲爆撃による被害状況、負傷者、死亡者等の正確な数字は町当局（当時）の記録に倚ることとする。

私は前記の如く、赤紙召集され（戦時中現役以外の国民が兵隊に召集される令状は赤紙であつた）二年間満州に、帰還後は三鷹に、昭和二十年六月から終戦まで南九州に、米軍上陸部隊の迎撃部隊に配属されて最後の決戦ということであつたが、本土決戦とならず「ボツダム宣言」受諾で戦争終結となつたことは当然の帰結であつたと思う。私達の部隊は熊本県の田舎の小学校の駐屯地で天皇陛下の御言葉聞いた。部隊の大部分は駐屯地を出発し目的地鹿児島に向け行進中であつた。

終戦、連合軍上陸、日本国占領、当初は、流言飛語が乱れ飛び相当の混乱が思われたが予想した程の混乱もなく、終戦後暫くの間、窮乏生活乍ら平和への道を進み、国民総勤勉現在の繁栄に向つたことは御同慶の至りであつた。そして戦争の悲惨さ愚かさ、平和と自由の有り難さをつくづく感ずる

今日である。

終戦時 三鷹町人口、四〇二五三

医療機関 病院 二 医院 六

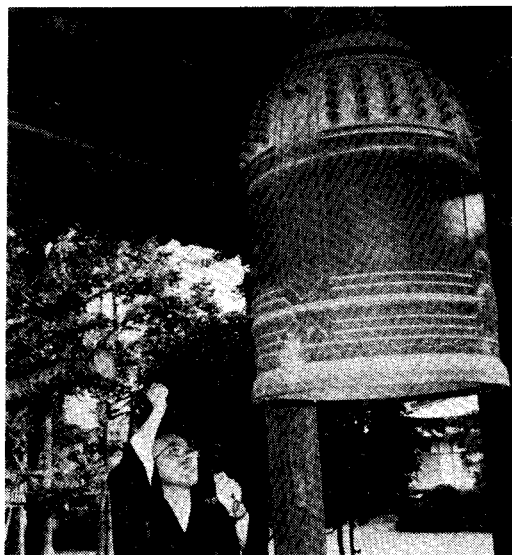
終戦直後帰還 三人

応召未帰還 五人

右のような状態であつた。

注1 四月二日の爆撃による死亡者は三鷹町全体で二十八名という公式発表があつたが、それ以上であるという説もある。

応召した梵鐘のこと等



福井英昭

大沢二丁目

毎年大晦日に打ち鳴らされる除夜の鐘。長久寺にも年々初詣を兼ねて除夜の鐘を撞きに来る人が増えているが、美しい鐘の音を響かせるこの梵鐘にも戦争にまつわる歴史の一頁がある。戦争が進むにつれて物資の乏しい日本は、神社仏閣に対して武器・弾丸にする為に仏具や火鉢など金属品の供出を要請してきたのである。ここに財団法人戦時物資活用協会より長久寺宛の一枚の感謝状がある。「本協会主唱ノ寺院教会等退蔵金属品献納運動ニ御協力相成国防資材ヲ陸海軍ニ献納被致候段報国ノ御志洵ニ感銘ニ堪へス茲ニ深く謝意ヲ表シ候」

そしてついに口径七十cm、重量約四百キログラムの長久寺の梵鐘もお国の為に供出する時がきた。「情々以レバ大東亞戦争勃発以来茲ニ二年ヲ迎ヘ皇軍ノ戦果ハ宇内ニ輝キ、必勝不敗ノ態勢ハ茲ニ定マレリ、一億国民一丸トナリテ聖戦目的完遂ニ邁進セントスルトキ、我長久寺梵鐘、時機到来、応召セラレテ將ニ是ノ靈場ヲ去ラントス。是レ即チ国難ニ殉ゼントスルモノナリ。依テ関係者一同茲ニ会シテ惜別ノ式典ヲ執行ス。

抑々同梵鐘ハ天保十一年ノ鑄造ニカ、リ、爾來妙音ヲ放ツテ人ノ心ヲ浄メ、又時ヲ報ジテ郷土ヲ益ス。萬人ノ此ノ梵鐘ニ親ムコト甚ダ深キモノアリ。崇高ナル其形体ハ今此ノ鐘樓ヨリ消ユルト雖モ直ニ破邪顕正ノ劍トナリ、彈丸トナリ、又武器トナリテ戦場ニ活躍セントス。茲ニ広召ニ当リテ聊カ慷慨ヲ述べ以テ訣別ノ辞トナス。云々」昭和十七年十二月の寒い冬の日であつた。鐘樓の周辺には檀家の人や近所の人が沢山集り、祖父が導師となつて式典を執行、ここに梵鐘を送り出し、一旦町役場に持つていったのである。もう少し戦争が長びけば、彈丸となり武器となり戦場の露となつて消えていく運命にあつたのだが、幸いにも町役場に保管中に敗戦となり、終戦後間もなく無事長久寺にもどつてきて、今は何事もなかつたかのように毎夕鐘の音を響かせている。このように一小寺院にも戦争は色々な形で暗い影を落していた。

これより先昭和十四年には調布飛行場が建設される為、長久寺が管理する下原墓地も再度の移転を迫まれていた。長久寺では従前よりある墓地を拡張して改葬せしめたのである。そして陽春三月同

所墓地内に於て移転記念式典が挙行された。「梅花開キテ香リヲ漂ハシ、草樹將ニ新芽ヲ生セントスルトキ長久寺墓地移転記念碑ノ除幕式ヲ挙ゲラル。下原墓主一同茲ニ会シ関係者ヲ招ジテ其式典ヲ挙グルヲ得タル誠ニ慶賀に堪ヘザル所ナリ。

懐古スレバ曩ニ東京天文台ノ建設アルヤ下原檀徒協力シ明治四十四年墓地ヲ改葬セラル。実ニ祖先崇敬ノ靈地永ヘニ子孫ニ伝ハル可キ所ナリ。然ルニ国運の進展ハ一日ヲ休止スル所ヲ知ラズ。幽翠ノ地トシテ誇リシ下原ノ地ハ今ヤ忽チニシテ飛行場ト化セントシ国防土隨一ノ地トナレリ。爾來月變リ年移リ春秋茲ニ二十九年地下ニ眠レル英靈ハ再ビ靈地ヲ變ヘ給ハントシ小字武蔵野長久寺墓地ヲ擴張シテ祖先安住ノ地ト定メ昭和十四年三月再ビ改葬セラル。本尊ノ加護八日々夜々相離ルルコトナク其宝域ヲ守護シ給フ。総面積三百坪清浄ニシテ静寂真如法界ニ至ル所阿字ノ本宮ナリ。祖先精靈清浄ノ月輪ニ住シテ阿耨菩提ヲ成ゼン。心源空寂ノ月ハ大菩提ニ朗カニ香煙絶ユルノ時ナカル可シ。

時昭和十四年三月十七日

応神山長久寺住職福井亮範敬テ白ス

時降^{くだ}つて大沢に中島飛行機の工場が建設されることになり、その用地買収にかゝつて、通称三軒屋のとつづきの所にあつた応神山長久寺が鎮守の青龍権現二塚神社も移転を余儀なくされ、昭和十九年に現在地に遷宮したものである。長久寺もさることながらこの軍事産業の中島飛行機工場の建設と調布飛行場ができたことにより莫大な土地を買いあげられた大沢住民、特に農家の人は大きな打撃をう

けたと云われている。

戦時体制という非常時下にあつて葬式はともかく、追善法要もままならぬ時代であつた。それでも四十九日等の法要の際には必ず墓まいの折、卒塔婆を建てていたようである。しかし悲しいかな材木がなくなり塔婆も手に入らなくなつた。そこで止むを得ず木の塔婆の代りに窮余の策として竹で塔婆をつくつたものである。幸い本堂の裏に竹藪があつて沢山竹があつたものだから、それを切り倒し三尺程の長さに切つて半分にさき、穴があかないように細心の注意を払つてけづり、一本の竹で二本の塔婆をようよう何時間もかかつて住職自らがつくつていた。この竹の塔婆の時代は終戦後にかけてしばらく続いたのであつた。

戦争末期、一般の住家に比して広い寺の本堂には沢山の兵隊さんが長い間駐留していた。子ども心に、ものかげで上官が直立不動の若い兵隊をもつていたが、それでも往復ビンタをくらわしているのを何度か見て、とてもこわいイメージをもっていたが、それでも子ども達には、ひまな時にサーベルをさわらせてくれたり遊んだりしてくれて、やさしい兵隊さんであつた。その兵隊さん達が引き揚げて一人もいなくなつて間もなく、戦争は終つたのである。

昭和五十二年三月十日、本日はT家の三十三回忌の法事である。T家に於てはようやく三十三年目にして墓地が整備され、石塔が建立されてのむしろお目出度い法要である。しかし、墓誌には父母、弟妹三人計五人の戒名が刻まれていて、死亡年月日はいづれも昭和二十年三月十日。東京大空襲で中

野から大沢の親戚に疎開していた三年生と四年生の長男長女を除いて一家五人一瞬の中に死んでいった日である。あれから三十三年、一緒に遊んだT家のKさんが施主となって父母はじめ弟妹の三十三回忌の合同追善法要を営んだ訳である。こんな所にも悲惨な戦争の爪跡が残っているのを窺い知ることができる。

農作物の供出

峯 岸 徳太郎

大沢六丁目当時四十四才

へ大沢で代々農業を営んでいらつしやる峯岸さんに当時の農作物の供出についてうかがいました。

取材日時 六〇年十二月六日

取材場所 峯岸氏宅

当時、畑で作っていたのは麦の他に「オキナワ」と呼ばれるサツマイモと、「アカメジャガ」という

じゃがいもなどを多く作っていました。どれも味より、量が多く取れて、早くできるものばかりでした。供出の割り当ては、一反についていくらというようにきまっていました。男手のない農家や、食べ盛りの子供のいる農家では、供出の割りあてが出しきれないで、まわりの農家で余裕のあるところが出し合つてなんとかしのいだりしたこともありました。又、土地によって同じ広さでも取れる量がちがつていて、大沢は特に土地が良かったこともあつて、供出の割りあても多い方でした。

肥料の割当ては、農地の面積によってきめられていたので、一定量以上作るのはむずかしいことでした。

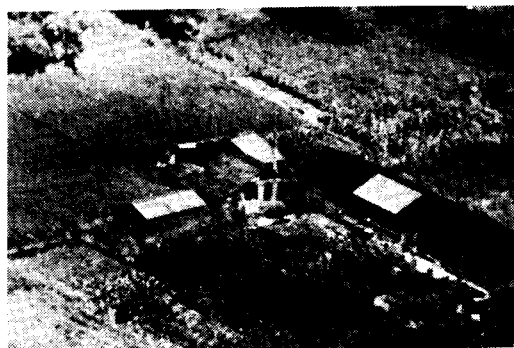
供出する作物の計量は、台秤で計れないので持ち上げたりして、目分量で多い少ないなんていうふうでした。供出があつた時分は、なかなか人に分けるほど作物が取れなくて、それでも都内の人が、ほんとに朝早くから来てお願いにこられるんで、おわけしたこともありました。その頃の人達で今もおつき合いをしている方々もいます。



組合（農業）に特別の供出の話しや、債券の割り合てが来た時は、どの農家がどのくらい持つかを決めるのがたいへんで、大きな農家の人が最初にどのくらい持つから、〇〇さんともこのくらい出してよなんていうふうにして決めてました。

まだ戦争が激しくなかった頃、大きなお屋敷に招かれて、その頃はほとんどめずらしかったケーキ

なんかを食べさせてもらったんですが、そこのお宅の娘さんですが、そこのお宅の娘さんが、戦局がきびしくなつて、うちに来て、大きなボールくらいの八頭やっがしらをペロリと食べて、「家族にも持つて帰りたい」と言った時など、なんとも哀れでしたね。そんな時代でした。



農家の暮らし

伊藤 美太郎

北野一丁目当時四十一才

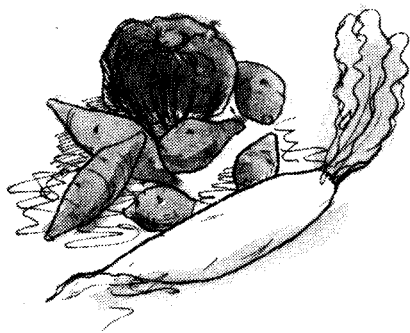
へ北野で農業を営んでいらつしやる伊藤さんに戦中の農業のおはなしをうかがいました。

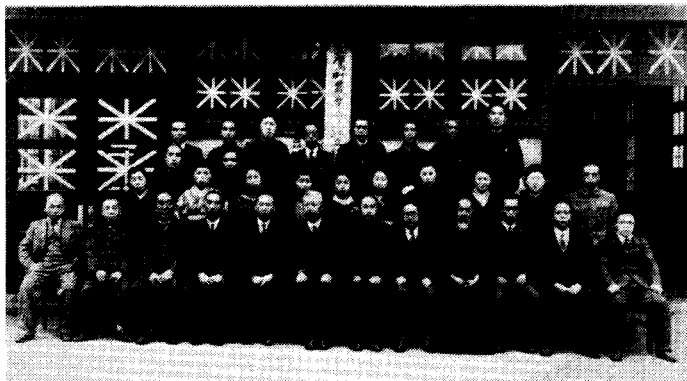
取材日時 六〇年十二月二七日

取材場所 伊藤氏宅

北野では蔬菜（青もの）と麦の生産が主でした。麦は肥料を多くやれば、多く取れるのですが、質が落ちてしまいます。一俵というのは十五貫なんです。つぶがいい（品質が良い）のは俵が細くても十五貫あるといった具合で、土地によって取る量というのはあまりかわらないものなんです。

戦時中は、農作物の供出が有まして、北野では下連雀のむらさき橋付近の町会に蔬菜を持って行ってました。当時の供出というのは、農地の





農業会設立当時

ない地域に、農地のある地域から、一定量の農作物を持っていてお分けするというかたちでした。農業会の組合で供出の割り当てを決めていましたが、組合ですべての供出物資をまとめ、どこに分けるというのではなくて、出す地域と受ける地域を決めて、直接その地域間で農作物のやり取りをするというやり方でした。出す方はいい作物を供出すればいいのですが、人の欲というものもあり、なかなか品質の良いものばかりという訳にはいかなかったのですが、受け取る側は本当に喜んでくれました。食べ物がなかった時代ですから、どんなものでもおいしく食べられたんだと思います。

畑では、作物を取った後の外葉を、神奈川あたりから、取りにくる人達も大勢いました。蔬菜は、きゅうり、なす、はくさい、秋はさつま、などを多く作っていました。

農家でも食事は質素で、昔からですが、麦を主体に米は二割ぐらい混ぜるのが一般的でした。米は、三鷹では、牟礼・北野・新川・中原で若干取れましたが、「おかほ」が多かったようで

す。うちでも烏山幹線から引いたせまい川のまわりに田があり親戚の人が米を作っていました。

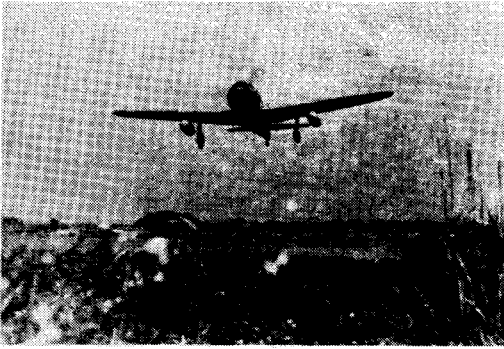
木材の供出もありました。指定された松や杉を切ったんですが、運搬しないうちに終戦をむかえて、終戦後、いつとはなしに運び去られてしまったなんていうこともありました。戦後も供出はすこしの間続きました。供出がなくなっても、昭和二十四年ぐらいまで統制価格があつて、自由な売買はなかなかできませんでした。

今思えば、供出の時なんかでも、出す側がみんな、少しでも相手の立場に立って、してあげればよかったと思います。人のよろこびが自分のよろこびだと感じられるようになれば、平和な生活を続けていくことができるのではないのでしょうか。

軍事施設

(市内の軍・軍備工場・土地買収・防空壕)

一兵士の述懐



本間 紅

大沢高射砲陣地(当時)

私は三鷹市大沢の調布飛行場を見下ろす丘の上に在った高射砲陣地で、通信兵として、又はリーダー要員として二年近く服務しておりました。

しかし、その間B 29より機関砲爆弾による攻撃を受け、二月十六日・十七日は米艦載機による波状攻撃(六〇機集団)を受け戦死四名、負傷者多数を出しましたが、米機にも多大の損害を与えました。

その頃の手帖から強く記憶に残る一文を想い出すまま記述致しました。

太平洋戦争も後半になると米機動部隊が南方洋上に姿を現し徐々に戦力を増強しつつありました。やがて日本本土に対する空

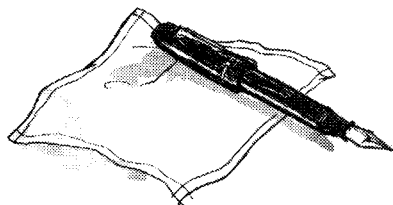
海からの攻撃が始まる頃より調布飛行場から特攻機が出撃するようになったと思います。

私達は丘の上から対空用眼鏡で見おろしているのですから一目瞭然でありました。

調布飛行場には高々度で侵入してくる敵機に備えてメツサーシュミット型の三式戦闘機が多く見られました。南方での戦闘が激化するにしろ、その数も目に見えて減少して行きました。そこへ型の変った戦闘機が数機づつ飛んで来ては、数日の内に南の空へと飛び去って行き再び戻っては来ないことが度々ありました。

航空無線を傍受していると暗号や略号ながら九州方面の飛行場を基地として南方へ特攻機として出撃して行ったものと思われました。

その頃の或る朝、飛行場脇の金網の張られた高い柵にしがみついている数人の人影を見つけました。さっそく眼鏡で覗くと、防空頭布を右から布呂敷包を左から背負った老夫婦と、赤子を背負い手提袋をもった若い婦人とが、一心に滑走路の北端に整列している三機の飛行機の方を見つめている様子



がよく判りました。

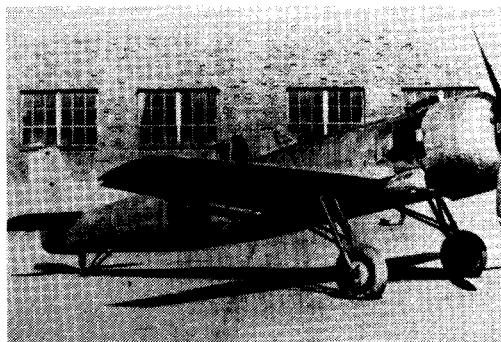
いづれの機も補助タンクと魚雷型のものを胴体につけていました。やがて機は離陸して飛行場上空を二周すると翼を振り乍ら南の方向へと飛び去って行きました。その時老夫婦は手を振り若い婦人は白いハンカチを高々と上げて振っていました。おそらく最後の面会に来て帰るに帰れず見送りとなつたのであろうと思われました。

私達は、この光景の陰にはいろいろのドラマがあるであろうが、決して明るなものではないことは確かであると終日心が重かった。自分達のことを考える余裕さえなかつた程のショックでありました。その後も同じ様な光景が何回かありましたが再び眼鏡を覗く気にはなれませんでした。

キ 115

そんな或る日、公用で外出した私は飛行場外柵の方から出て来た老婦人と調布駅まで一緒に歩いて行きました。その婦人は私に次の様な話をしてくれました。

「昨日午後一時から息子に面会できるとの通知があったので仙台から夢中で出て来ました。息子は一人子で母一人で育て上げ大卒まで進み、あと一年で卒業という時、学徒動員で航空学校へ入



りました。昨日は一年ぶりで日焼けした丈夫そうな息子の顔を見ることができました。会うまでは、顔が見たい声が聞きたいの一心でしたが、会った瞬間から新しい大きな心配が増えて来ました。

息子の態度に何か異様なものを感じたのです。親の直感です。一時間の面会が終って帰る時息子が学生時代から大事にしていた万年筆を無言で私に渡してよこしたのです。私も無意識の内に握りしめていた白いハンカチを息子に渡したのです。息子はそれを小さくたたんで内ポケットにしまい、挙手の礼をして足早やに兵舎の方へ行っていました。

面会人はほかに五組ありました。門を出た処で挨拶をしながらいろいろとお話しをいたしました。その中の父親らしい人が『明朝どこかへ飛びたつらしいので、私達夫婦は近くの農家へ泊めて貰い息子を見送つてから山梨へ帰ります。』とのことでしたので私も無理に頼んで農家へ泊めていただき、今朝は夜明け前から外柵の処で三時間も待つていました。霜が下りてかなりきびしかったです。丁度九時に三機が次々と飛び立ち、上空を二周すると翼を振り乍ら南の空へ飛んで行っていました。

女手一つで育てて来た息子を軍国の母なるが故に涙一粒も見せずに見送つて来たのです、明日からは何をたよりに生きていたらよいのか判りません。家へ帰るまでは決して泣きません。家へ帰ったら独りで思いきり泣かさせていただきます。母親なんですから。」

私は前に見た光景と共に頭に焼きついてしまいました。この母親と息子は何回もの別れの涙を流したり将来の夢が次々と飛びさってしまったことでしょうか。戦争はほんとうに惨いものだと感じました。

敵も味方もない兵士はみんな同じ思いをしているのです。何とか人間同志が殺し合う事をやめて、平和に生きる事を探究するのが、生き残った私達の共通のつとめであり、又それが多くの戦争犠牲者に対する回向でもあると思います。

調布飛行場

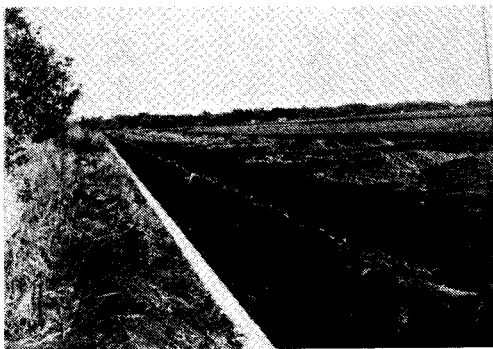
海老沢 竹 貞

キ ン

当時四十五才・四十二才 聞き書き 榛澤茂量

戦争が始まるとすぐに兵隊が来て今のコミニティー通りを強制的に作った。これで畑ややま（林）をとられ掩体壕で又とられた。絶対服従で少しでも反論すれば非国民と言われた。飛行場の入口の畑には、宮様の飛行機を入れるため、屋根を竹でこしらえた掩体壕を作り、空襲になると引いて来ました。誘導路は畑の中心を通り、家のすぐ前を横切っていたし、野川の向こうに高射砲の大隊本部ができたので危険を感じ、この倉と榎の木の間に防空壕を作った。杉丸太がたくさんあったので、がん

調布飛行場



けちまった。

警防団と農会の支部長をやっていたけど、空襲になると八幡神社の消防器具置場まで自転車で飛んで行った。兵隊がうちの壕に入っているのによ。又サツマ芋の供出の立ち会いの時は、うちに持って来て土のついたまま一人につき、いくつって分けたんですよ。皆、供出するのをいやがって、全くいや

じょうで八帖位の大きさのを作った。中に米を五、六俵入れ、タタミを敷いた。壕のそばのサツマ芋の室になっていた所の窪地にタタミを敷き、火鉢を置いて子供たちを寝かせておいた。飛行場にいた兵隊は空襲になる前に情報が入るため、サーベルを手でおさえながらうちの防空壕に逃げて来た。しばらくすると空襲警報が鳴り出した。「こんな事していたら負けちまうぜ。」と言っていたら、案の定負

な思いをした、

高射砲を撃ち始めると、草ぶき屋根だったのでススがバラバラ落ち、大昔からあつたケヤキの大木も飛行機と高射砲のじゃまになると言うので切られてしまった。

B 29の編隊が低空で来た時は、照明弾を落されほんとうに明るくなつた。機銃は撃つし、焼夷弾は落すし、防空壕にはたくさん兵隊が逃げ込んで来ていた。申し訳なさそうに塩とか砂糖を持参して。朝、家の回りを見ると幅十五センチ、長さ六十センチ、厚さ一センチの鉄製の重い板が二十本以上落ちていた。あれがよく人に当らなかつたと思うよ。物置の屋根に照明弾があたり燃え出したけど、火タタキなんて役に立たなかつた。終戦になると間もなく進駐軍が来て大変緊張した。女のいる家に多量の洗たく物を持って来て洗濯してくれて言うんですよ。タライと洗濯板でやりましたけど、大変な量でした。日本の軍隊とアメリカが入れ替つただけだった。

電波探知基地

伯^う母^ぼ豊・亥之助

当時十三才・十一才 聞き書き 榛澤茂量

昭和十八年の秋だっと思ったけど、兵隊が突然やってきて、住いの南側に杭を打ち込み、今から軍で使用するので立入禁止にすると口頭で伝え、一町歩の畑全部強制借上げで取られてしまった。たくさんの兵隊が畑を堀りに堀り、大きな大きな穴を作り、残土を穴のまわりにぐるりと盛り上げた。穴の中央に線路を敷き、中が五間位の建物に車輪があり、この上に乗っていた。これが今で言うレールで、電波を出す時は、この大きな家を動かして使用し、終ると元に戻っていた。この機械の南には、半地下の兵舎を三棟作った。これでうちの畑は穴だらけになった。大隊本部（羽沢小）から降りするななめの坂のガケ側は、小さな防空壕がたくさんあった。

そのころ学徒動員で、義一さんと同級で倉敷飛行機に行き、翼に布を張る仕事をしていた。二枚羽根の黄色い練習機だった。場所は野水橋を渡って右側に工場があり、橋の手前に生徒の寮があった。この寮のガケ側に大きな防空壕があった。

しばらくして中島飛行機に行くようになった。今のキリスト教大学を正門から入り、奥まで行って右側が本館、左側にあった格納庫で戦闘機の胴体のリベット打ちの手伝いをしていた。空襲になり、

工場から逃げ帰って来た時、黒い飛行機の編隊が機銃掃射し始めたので、茶の木にもぐった。見上げると三機が行き過ぎ、又三機が後から機銃掃射して行った。爆弾が天文台から久我山の方に落ちた時は、中島にいて知らなかったけど、帰ってから見て恐ろしかった。天文台に不発弾が落ちて穴を見に行ったけど、九十センチ位の穴だけで気持悪かった。処理したのかなあ。

高射砲が撃ち始めると、音がすごいので家がバリバリと揺れ、古い家だったのでススがそのたびに落ちた。艦載機がこの基地をねらって来た日は、高射砲を一日中撃ちつ放しだったし、調布中学の所と西の府中の辺がやられた時は、南も西も真赤になり、いよいよ今晚だめかな、と思った。焼夷弾のバンドが木にひっかかったり、そこらに落ちたりで、たくさん見つけた。

中島では毎日毎日手伝い、完成した飛行機を皆で調布飛行場まで引いて行き、軍に渡した。又大雪が降った時は、三鷹・調布・府中の学徒が全員飛行場に行き、横列に並んで、何列も何列もで雪ふみをした。その時着陸しようとした飛行機が滑走しないでバッテリーと背中を下にひっくり返った。



寒かったけど皆やった。

今の第二小学校にグライダー^キが二機あり、一機を神代植物公園に持って行って、皆で練習したこともあった。三センチ位のゴムに布をまいたロープ二本で引いて上げたけど、「かもく地上滑走」と言っ
て、少し浮かぶ程度であつた。色々恐しい思いをしたけど、うちは八月十五日過ぎてからも大変だつ
た。

軍隊が使つた所は、そのまま返されたので、大きな穴があいた畑、地中に半ば入つた兵舎、家族
が多かつたので、毎日毎日手で土を運び昭和二十四年までまる四年間かかつた。

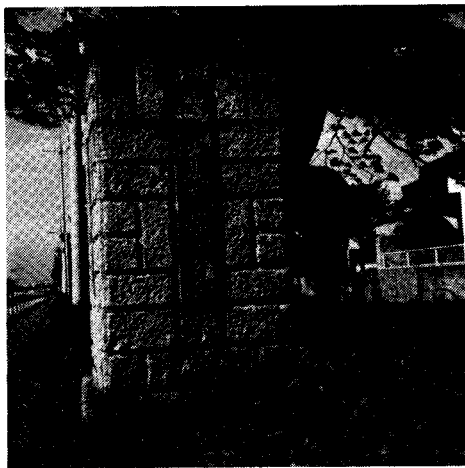
注1 (グライダー) 動力をもたない飛行機。ここでは、生徒達が、戦闘機操縦の練習用につかつたもの

帝都防空作戦

山本茂男

元第10飛行師団参謀陸軍少佐 当時二十九才 聞き書き 榛澤茂量

東京防空のための主戦力で調布飛行場にあつた部隊は、第十七司令部偵察中隊、飛行第十八戦隊、
飛行二四四戦隊、第一、第二対空無線隊、第十三航空通信連隊(深大寺)、飛行場大隊があり、各監視^{注1}
哨の情報、ことごとく東部軍作戦室(麴町代官町)に集められ、その戦闘指揮は、調布作戦室を通



じて行なわれた。天文台道路を西調布方向に行った現在の調布中学の両側に第十飛行師団の司令部があり、浜松から以東の東日本の指揮を行なっていた。当時の所属飛行機とその上昇限度は、百式司偵（二万一千五百八十メートル）で最高、次いで一式戦隼、二式戦鍾馗が一万一千メートル、三式戦飛燕、二式複戦屠竜が一万五百メートルがやつとというところであった。B 29の情報は、専門の調査班の努力により、十九年にはいって正確になった。実用上昇限度一万二千五百メートル。日本の戦闘機

は、地上では、夏服の時、下着には、ニクロム線のはいつた電熱服を着用し、帽子、手袋などの冬仕度をして、酸素マスクをかけ、潜水夫のようなかっこうで、乗り込む。五千メートルまでは、十分、酸素吸入開始。ここは酷寒の冬。呼吸が早くなる。八千メートルまで二十分、空気が稀薄でレバーを全開しても馬力の低下がはつきりわかる。車の運転で例えると、クラッチ板のすり減った車で坂を上がる時と似ている。九千五百メートル以上は、なかなか上らない。温度低下のため手足が痛い。四十分で一万メートル。急旋回をやるごとに二・三百メートル落ちる。気圧低下のため頭痛が



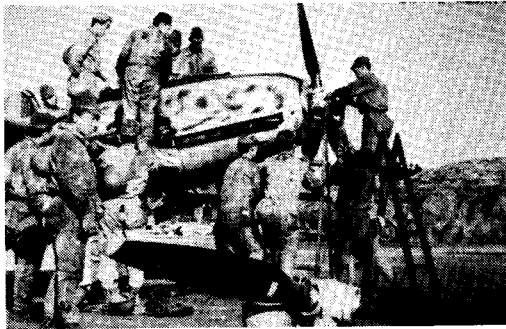
し、あくびが次々とでる。順調な時で四十分。普通は五十分から六十分であった。六月十五日、サイパン陥落。東条大將は、「まだ硫黄島があるから」と奪回作戦を断念させたが、航空部隊のゲリラ攻撃は、敗戦まで続いた。まったく天からの目葉に過ぎなかった。B 29 に対する戦闘準備と併行して、飛行場に、誘導路および掩体を早急に構築する様大本営の指示があった。飛行場大隊長とともに、位置を指示して回った。多摩霊園の樹間にも飛行機を秘匿した。畑で一生懸命働いている農家の人に「道路にしなければならぬのですが・・・」、にこやかにこちらを見ていたおじさんの顔が、急に青ざめ、口もとが硬直した。・・・やがて気を取り直したおじさんが、「苦勞さんです。なに、構いませんよ、早く戦争に勝って下さい」と言ってくれた。急に目頭が熱くなった。調布飛行場には、莫大な費用と労力をかけ、鉄筋コンクリートの特殊掩体を数多く構築した。総理と参謀長兼任の飛ぶ鳥をも射落す東条大將は、政略と戦



略をそのつど使い分け、七月初頭、命令一下飛行し得る飛行機約三百を東京周辺に配置し、高射砲五百六十門、照空灯二百五十を配置した。中旬、風速五〇メートルの突風が吹きまくり、雷雨と大粒の雹。十数機の飛行機が大破した。七月二十日、東条内閣総辞職と満州およびフィリピンへの兵力転進にともない、東京航空要塞の航空威力も弱体化せざるを得ない運命となった。十一月一日、B 29一機現われた。一万メートルは、予期した高度であるが、手も足も出ない。卑近な例をあげて説明すると、スピードの速い甲と、おそい乙と鬼ゴッコをしているのと同じで、スピードのおそい乙が鬼になった時には、絶対、甲を捕えることができない。これが立体になった場合には、推して知るべしである。飛行機の旋回角速度と二移動体の幾何学的立体会合法を研究したことがある者は、体当りがいかにむずかしく、奇跡に近いことがわかるであろう。飛行場にいたものは、口惜しさ、無念さだけであった。

そこで一切の重量装備を取りはずし、軽装によって高空性能を向上させた特攻体当り機の震天制空隊の編成をした。(東京直掩戦隊である二四四戦隊には、特に必墜を期するよう指示された。) 東京中心部を絶対死守しなければならぬ師団としては、一万メートルで六十〜七十メートルの風速がある偏西風と爆撃弾道を考え、少なくとも調布飛行場より東にB 29を通過させてはならない計算が出来上がり体当りで必墜しなければならなかった。

防空の苦しさは、二十四時間中待機しなければならぬことである。攻撃がなによりも有効な防禦の身になって考えればよく理解できる。昭和二十年二月十六日、早朝より午後四時ごろに至るまで七次にわたり延千機に近い数百機の来襲であった。翌十七日も早朝より午後一時ごろまで四次にわたり、三百〜四百機の来襲があった。約62機撃墜、27機撃破の戦果に対し、わが損害も相当であった。硫黄島上陸のため関東地区航空戦力撃滅戦ということになるのだが、調布飛行場の損害は、きわめて少なかった。空中戦闘および天候による事故墜落がはなはだしかったのである。戦果が相当あるような数字であったが、実際は十数機に過ぎなかった。日本の戦闘機の自爆や敵機の急降下などを撃墜と間違ったものが非常に多かった。悪天候に阻害され、戦果はきわめて悪かった。十八日、防衛総司令部より命令があった。「防空飛行部隊は、B 29の来襲に対してのみ邀撃し、小型機来襲に対してはつとめて、兵力を温存すべし」、この時すでに本土決戦の構想ができ、一万機の特攻機を温存しなければならなかった。電波警戒機では、大型機か小型機かがわからないため、汗を流しながら、やっと森林や掩



体に押し込んで油を抜くと、また出撃準備だという。体力消耗はなほだしい。近所の人たちからは、「調布の飛行機は、空襲警報がなると姿を消す、何とだらしない」とたびたび言われた。二月二十二日、大雪が降った。二十五日も終日雪。二十六日夕方やつと雪がやんだ。積雪は三十センチを越えていた。気象管制のため一般には秘していたが明二十七日は快晴。空襲は必ずある。飛行場滑走路の除

雪ならびに踏固めの命令がある。朝までに終了しなければならなかった。

近所の人も手伝った。しかし二十八日、空襲は無かった。昼、子供たちに雪ふみをしてもらった。『決号作戦』（特攻部隊）

- 一、特別攻撃隊をなるべく多く編成訓練する。
- 二、と号機専用の飛匿飛行場を整備し、弾薬燃料などを分散秘匿する。

- 三、分散のための誘導路、掩体、偽飛行機などを構築する。

- 四、施設は、なるべく地下に移行する。

調布飛行場でも二十〜三十機の偽飛行機を作った。五月中旬のよく晴れた日、P51数十機が多摩墓地の森すれすれに、低空銃砲撃をやりながら、飛行場に突進してきた。格納庫の屋上に備えた高射機

関銃がもうれつに反撃するが、当らない。硫黄島からやつとのことで飛んで来るから、爆弾は持つていない。偽飛行機が相当傷ついた。実飛行機は、森や掩体の中で安泰だった。このころの兵隊は、教育訓練が不十分な上に給与がよくなかったため、腹のすいた兵隊が、付近の田畑や民家を荒すのだった。上司の達示や注意があつても、にわか召集のぼう大な兵隊の中には、少なからぬ不心得者がいた。兵隊さんだといふので一般民家でも、できる限りのサービスをしたであろうが、それに甘えるばかりでなく、強要し、あるいは強盗する者すらあつたと聞く。表で忠節な兵隊が陰で兵匪とすら呼ばれた。富岳は、日本一の山であり、泰山は中国一の山であるが、これが、新超重爆撃機の試作名であつた。

富岳は、飛行場の北にある中島飛行機三鷹研究所で作る予定であつた。飛行場は、さらに北に延長し滑走路は、厚さ五十センチのコンクリートに改装する計画であつた。しかし空襲激化と燃料欠乏のため遂に中止となり工場は戦闘機工場に切り換えられた。八月六日広島に原爆。八月八日(大詔奉載日)午後B 29七十機が調布飛行場その他工場を空襲した。皆、原爆じゃないかと思つていた。九日、長崎原爆。

八月十一日、陸相布告があつた。

全軍將兵ニ告グ。ソ連遂ニ皇国ニ寇ス。明文如何ニ粉飾スト雖モ、大東亜ヲ侵略制覇セントスル野望歴然タリ。事茲ニ至ル又何ヲカ言ハン。断乎神州護持ノ聖戦ニ戦ヒ抜カンノミ。仮令草ヲ喰ミ土ヲ啗リ野ニ伏スルトモ、断ジテ戦フ所、死中自ラ活アルヲ信ズ。是レ即チ七生報国・・・(略)

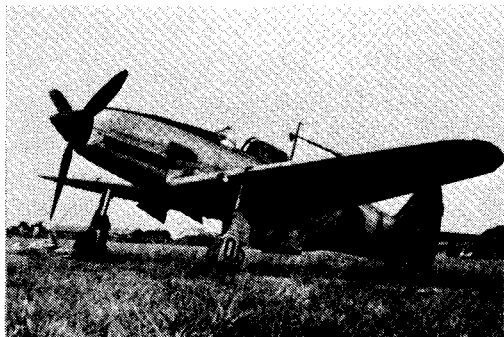


玉碎か和平か？それは私たちには、わからなかった。しかし陸相の布告には忠実でなければならぬ。大命は謹んでこれを奉載しなければならぬ。それが私たちのすべてであった。そして、八月十五日、早朝より空襲があった。しかし、第二波の来襲機は、引き返して行つた。午前十時以降艦載機は、すべて姿を消した。正午、玉音放送拝聴で全都沈黙の上空をB29がただ一機が、飛んでいた。二十日以降一切の飛行は禁止された。マッカーサ元帥が厚木に到着したのが二八日。そして二日後の三十日に調布飛行場に米軍が進駐した。・・・四十年後の現在も歴史のくりかえしで、世界のあちこちで悲惨な戦争が起きている。

「日本は二度と戦つてはならない」

注1 (監視哨) 主として一地にとどまり敵の動静を見張りするところ。

二四四戦隊



川田 静二郎

二四四戦隊副官(当時) 当時二十五才 聞き書き 榛澤茂量

私は、昭和十七年三月より敗戦までの間、ずっと調布飛行場におりました。戦隊本部は、現在残っている格納庫の南側角で奥のロータリーの左先にあり木造三階建てでした。一階は、風呂場、休憩室、事務室。二階は、戦隊長室。宿直室。そして三階が戦闘指揮室で私はここにいました。当時、東京を護る戦闘機の数は、各隊あわせて二百機位でした。二四四戦隊の最も充実した時期は、昭和十九年十二月ごろからで、五十五機配置され、五機の予備機がありました。配置された三式戦闘機飛燕は、液冷^液エンジンだったため故障が多かった。機関砲は、ドイツ製で二十ミリ。葉きようを含めて二十センチ位の大きさがあつた。

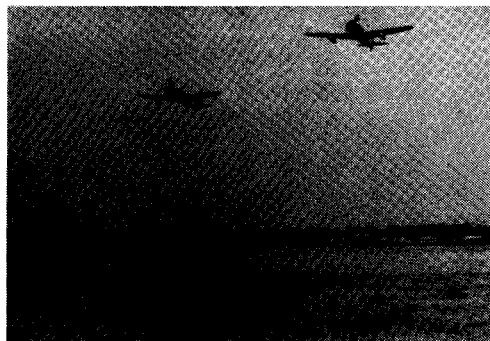
飛行場の北西(大沢六丁目十八番)にあつた射撃場で天文台のガケを的にこの機関砲の調整をし、B 29 に対する迎撃準備をして

いた。

一万メートルに昇るのがむずかしいため結局は、機関砲一門につき三百発の弾丸を五十発に減らし、重い物を可能な限り取りはずした。これによって上昇力は少しよくなったが、攻撃力の低下は、精神力と体当りで補わねばならなくなった。十九年十二月二十七日、B 29の来襲は、七次に及んだ。一次から四次までは六機から八機で五次も八機だったが、少し進路をかえて、西南部から中央を横切ろうとした。高射砲の炸裂音がとまった瞬間に一機の戦闘機が最後尾のB 29に突っ込んだ。『パッ』と白い煙りをはいた。編隊を乱し少しづつおくれはじめた。高度も一万メートルの上空からぐんぐん下ってくる。B 29は、ゆるくらせん形の円をえがきながら六分後、東京湾に墜落した。

又、二月十六、十七日には、機動部隊による艦載機の来襲があり、二四四戦隊は一日五回の出動を余儀なくされた。四十機全部が出動したものの、故障が多く、第二回目は二十五・六機、第五回目には、たった三機だった。当日の損害は、八機で他はいずれも故障によるものだった。まったく情けない。東京を守るために必死で戦った二四四戦隊の震天制空隊は通算（敗戦まで）B 29の撃墜73機撃破92機グラマンF 6 F撃墜10機撃破16機、SB 2型1機、コルセア撃破9機であった。

話が変わりますが、例えばB 29が来た時には、師団司令部から直通電話で方向、位置を受けてから、飛びたつのですが、当時の飛行機には、セルモーターがなく、トラックのシャフトからユニバーサルジョイントを使って上に、そして前に突き出して、飛行機のプロペラの位置に持っていき、フックで



連結して始動をするため、手ぎわよくしないとすぐには、飛び立
てなかった。又通信で使う無線も送受信機をそばに置くとお互に
干渉して使用できないため受信は飛行場でやるが送信は、天文台
の東側（大沢一丁目四番十一号）とそこから北東五百メートルに
送信所を作り飛行機との通信を行なった。出力は二百ワット位で
飛行場からは、黄色の通信線で結んだが、多芯のコードがなかつ
たため電話一本に対し必ず一本の通信線を引いたのでやたらに目
立った。アンテナは、木の電柱を三本結んだ高さのものであった。
兵隊の数は、飛行場大隊が三百人位、二四四戦隊が二百人位でし
た。

飛行場の被害は、竹製の掩体が焼夷弾で燃えたり、調布中にな
っている所の兵舎が燃えた時に、ドラム缶（ガソリン）が爆発し
た位で直接爆弾が落ちたことは無かった。

四十年たった今、おそらく世界で一番平和な国だと思う。しかし平和を愛するには、ただ無邪気に
子供のようにこれを楽しむだけでなく、戦争とは、いかに悲惨な結果をもたらすか。問題意識をも
たなければならぬ、特に若者は、……。

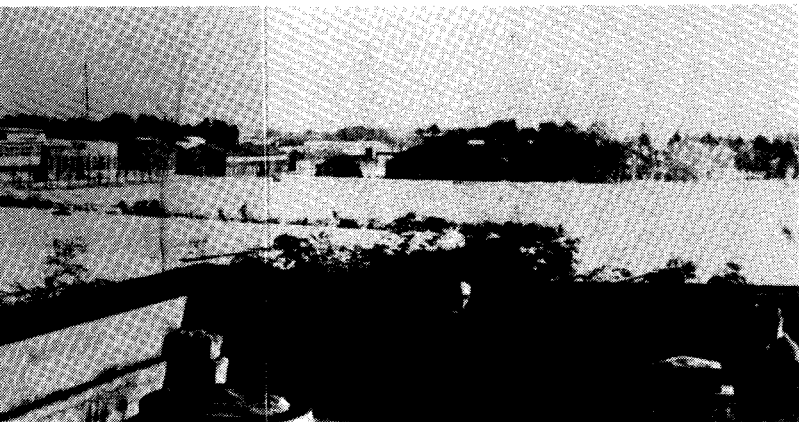
注1 (液冷エンジン) エンジンを冷却するのに液体を用いたもの。

注2 (震天制空隊) 部隊の名称

大日本航空中央航空研究所

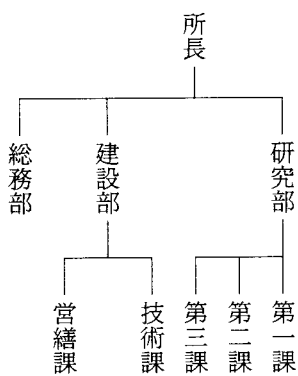
大日本航空株式会社(研究所の前身) 社史より

新川の中央航空研究所は、総坪数三十二万坪であった。昭和七年頃より陸海軍航空関係者の間に、戦争の勝敗は、航空兵力の優劣によって決せられるとの意見が強く、その増強の成否は、航空製造会社の育成強化にあった。軍用機は、従来の外国模倣の弊をなくし、強力に国産化を推進するという基本方針が確立された。そのため航空機製造会社の技術開発並びに指導のために軍自体の研究機関である陸軍航空技術研究所の拡充と海軍航空廠(海軍航空技術廠)が開設発足した。これとともに航空局でも民間航空事業の発展を期するため総合研究機関を設置する必要を認め、昭和十三年六月、航空局に中央航空研究所設立の準備を進め、昭和十四年四月一日、逓信省の外局として中央航空研究所の設立を見た。そして、同年六月一日より東京府三鷹町新川で業務を開始した。



昭和十四年四月一日勅令百五十七号により中央航空研究所官制となる。

組織表



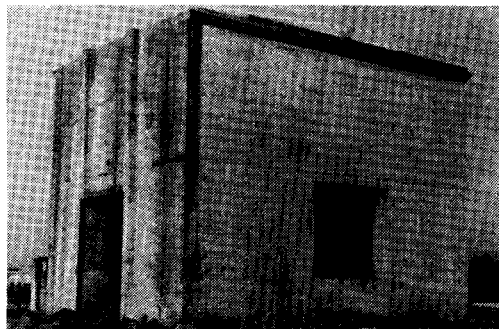
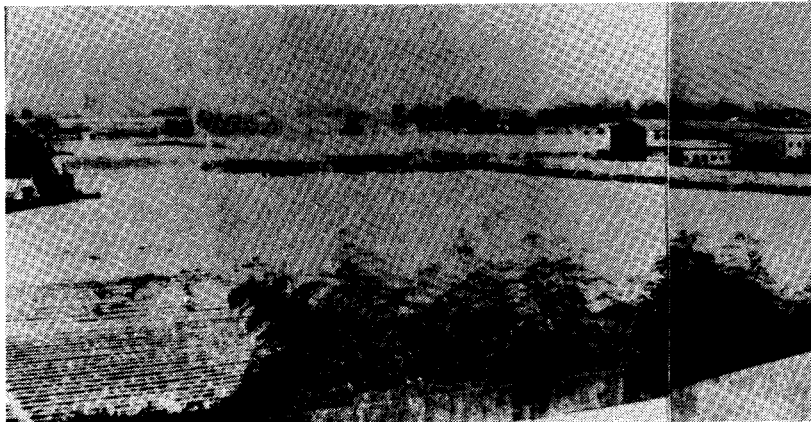
第一課①航空機ノ流体力学的研究。

②航空ニ関スル測定ノ研究。

③飛行ノ研究

④部中他課ニ属セザル研究

第二課①航空機ノ機体ノ構造力学的研究。



第三課 ①航空機用発動機の研究。
②航空機用燃料ノ研究。

③航空機用燃料ノ研究

当時の金額で五千万円の総予算が承認され、すでに第一部より第五部までの各施設が建設中であり、吹口口径五メートルのプロペラ風洞や成層圏用の低温低圧実験室ができた。さらに、実物風洞の吹口口径十五メートルの大風洞の新設を企図した。

又飛行機の修理に関しては、現在の大沢六丁目にある航空宇宙技術研究所分室の南東で野水橋の手前左側にあった東京飛行機製作所を買収して行なわれた。(倉敷飛行機)

中島飛行機三鷹研究所



中島飛行機三鷹研究所全景

東京飛行機

宮田 栄次郎

大沢当時二十九才 聞き書き 榛澤茂量

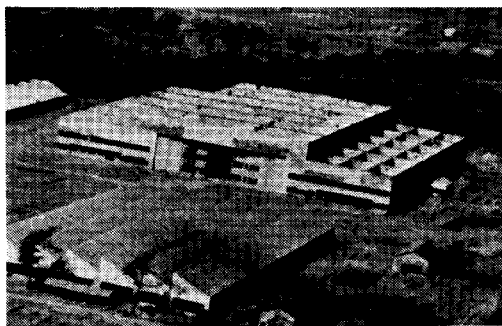
昭和十八年四月十二日、浅草より大沢に移つて来ました。六月二十一日より、調布飛行場と野川の間にあつた東京飛行機という会社に勤務しました。民間飛行機の修理会社で木工場・機械工場・修理工場がありました。間もなく赤紙が来て、横須賀の海兵団に九月一日入団し、千葉の館山海軍航空隊で三ヶ月訓練を受けてから衛生兵として八丈島に行きましたが、戦局が押されつばなしで、潜水艦にやられた海軍の兵隊の死体が毎日毎日流れつき、三十七体まで数えました。ここに飛行場をつくるために、陸軍二千五百人、海軍六十人がいて、作業は民間の菅原組でしたが、そのほとんどが韓国人の人たちでした。

十九年六月末、フィリピン行きが決まり、本隊復帰し、館山の砲術学校に三鎮合同で待機訓練をしていました。いよいよ九月十五日が出発の日と決められ、私物を送り返して、死ぬことを覚悟しました。出発日が一日一日とせまりましたが、突然帰環命令が出され、大沢に帰ったのです。うれしかったヨ。このよろこびは想像できないだろうなア。

かわりに仙台の吉田と言う人がフィリピンに行き途中で船がやられ沈んでしまった。(言葉がつまり涙)

九月より倉敷飛行機(東京飛行機と同じだが名前が変っていた)に勤務。しばらく守衛をやっていますと、甲府から囚人が来るって言うんで、看守をやってくれと言われ、府中刑務所で講習を受け、10月中旬に囚人が三百人ぐらい来た。水色の服を着て左胸に番号をつけ、練習機の赤トンボ(色は黄色)を生産していた。従業員は、囚人の他に学徒を含め三百人ぐらいいました。工場の周囲は囚人が逃げないようにコンクリートの壁で囲まれ、近くに憲兵の分遣隊があり、いつも五、六人の人が監視に来ていました。毎日毎日増産にはげんでいました。

二十年二月十六、七日、グラマンが二十から二十五機の編隊で、ほんとの低空で来て、工場や飛行場、高射砲などをめちやくちやに射ちまくった。ノコギリ屋根の工場のストレートはくだけ散り、バラバラと落ち、コンクリートに弾がくい込んだ。囚人を防空壕(工場の中)に入れ、逃げたら射てとピストルを持たされ入口に立っていました。朝から夕方まで波状に何回もやって来ました。弾が立つ



ている前と後にあたり、囚人のたくさんいる防空ごうの中にころがり込んだ。もう少しで命がなかった。あとで見ると十五センチ位の葉きょうがたくさん工場の中に落ちていた。このころはB 29が定期便の様に来て、空襲警報が鳴ると、龍源寺に行く坂の両わきにあったたくさんの方空ごうに逃げ込んだ。夜でも、ゲートルを巻きっぱなしでゴロ寝をした。

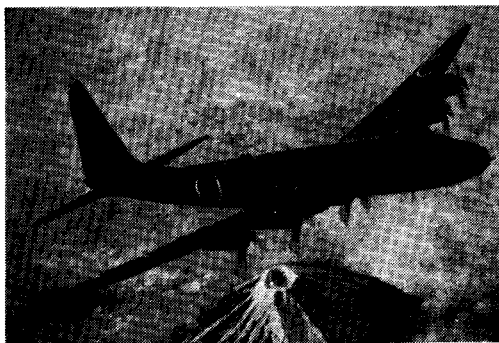
当時の配給所は、大沢の米屋のとなりであり、トウモロコシの粉、豆板ずいたなどで食べたものではなかったけれど、他にはなかったので食べた。米は一日一合だったろうか。毎日雑炊で、ダイコンの葉があるうちはいいけど、草なども入れた。

日は忘れたけれど、飛行場から飛び立った小さい飛行機がB 29の背中に乗っかりキリモミで落ちて行くのを見たヨ。B 29はけむりを出しながら東へ行ってしまった。

三月になり倉敷飛行機は中島飛行機に買収された。

〈中島飛行機三鷹研究所〉

現在のキリスト教大学の入口が三鷹研究所の入口で、守衛所が左側にありました。ここの守衛を終戦までやっていました。キリスト教大の校舎が中島の本館でありました。ここで設計などが行



富岳予想図

なわれていた。この屋上には、防空監視所があり、一般人は入れなかった。六十万坪と言われた敷地は広すぎて巡回するのに自転車で行ったが、それでも広いので駐在する場所をあちこちに作った。ここでは部品とか試作品をつくっていたが、奥の大きな格納庫でこれが飛ぶのかと思う程バカでかい飛行機を作っているのを見るとはなしに見てしまった。脚の部分、特にタイヤの大きさは今のジャンボ機位大きかった。完成しないうちに負けてしまった。

学徒の人は防空頭巾を持って歩調をとって大勢正門から出入りした。一軒となりの娘さんもいた。十五才より下だった。

この頃は、B 29が来ても日本の飛行機は出ないで隠してあったので、我物顔で爆弾を落したり機銃を射って行った。今の女子寮の辺へ大きな爆弾が落ち、四く五人死んでるはずだ。

空地をあちこち開墾して、ナス・キュウリ・マクワウリ・栗などを作ってたけれど腹をすかせた工員が盗むので「コラッー。」なんてどなったこともあった。夜になると、地元の人たちに見えないように、出来上った試作機を調布飛行場まで人力で押して行くのを見かけた。これは普通の大きさだった。

調整したりするためだろうと思つた。

その後もB 29の定期便は続き、高射砲は当たらないし、スズの箔を落しながら自由に飛んでいた。

そして敗戦。大沢では進駐軍が来るという話がどこからともなく伝わり、震え上つた。町会では女子供を疎開させろと指示が出た。大沢は、戦争が終つてもまだまだ緊張する日が続きました。

注1 (豆板) 油をしぼつた豆かすをかためたもの

無我夢中だつた学徒動員

中村義一

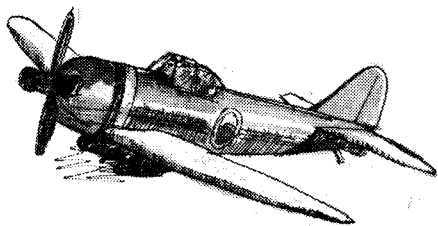
当時十四才 聞き書き 榛澤藤雄

高等一年の時、僕は調布飛行場の倉敷飛行機へいかされた。倉敷飛行機は練習用の飛行機を造つていた。僕はたまたま飛行機の方へ回された。仕事は翼づくりであつた。翼づくりの仕事をしているのは僕だけで、他の友達は別の仕事をしていた。だから昼食時が楽しみだつた。飯食う時はみんな一諸で「オレ、今日何々やつてんだ。オメエ何をやつてんだ。」と常にみんなと話した。

僕のところは、うるさくて厭しかつた。だから昼食時はみんなと会えるので、その時が一番楽しか

った。ある時、こんなこともあった。兵隊さんが「年齢はいくつなんだ？そうか、十四か……。俺の子供もこんなことさせられているのかなあ……。可愛想だな。このパンやろう。持っていて食べる。」といって箱ごとくれた。それを憲兵に見つからないようにみんなのところへ持って行き、みんなで食った。

飛行機が完成すると、エンジン調整のために実際に飛び立った。その時、僕も始めて乗った。操縦兵と整備士は背中にパラシュートを背負い、僕は消火器を背中に背負った。そして飛んだのである。今、考えると、エンジンが火を吹いた時、僕は消火器の役割で他の乗員はパラシュートがですが僕はではありません。しかし、全然怖さなど感じませんでした。骨組は鉄製でほかは木製の飛行機でした。倉敷飛行機は約一年間ぐらいであったと思います。高等二年の時、中島飛行機へ回されました。ここでの仕事はエンジンカバー造りでした。専門学校生は一人、大学生一人、僕と三人一組の作業でした。毎日、戦闘機に乗って作業していました。いつまでも、出来なかつたりすると、棒ではたかかれている班もあつた。こうして一ヶ月三十円の給料でした。



そして中島飛行機を途中でやめて田舎へ疎開した。

私の学徒動員

昭和二十年は、私達は高等科一年でした。二十年の五月から終戦の八月十五日までの期間、光洋精鋼へ行きました。

終戦を工場内で知らされ、何もわからずただ泣きながら帰ってきました。工場では仕事は何もありませんでした。軍歌を習い、勉強をしていました。給料は、一度貰ってきたと思います。職工さん



鈴木静子
当時十三才
聞き書き
榛澤藤雄

と同じ二十五円でした。当時、運動靴が一足十五銭から一円で、その運動靴も一学級一足ぐらいの割当でした。ですからくじ引きで買いました。防空頭巾かぶとを離さない毎日でした。

忘れ難い二十年

金子 トシ子

当時十四才 聞き書き 榛澤藤雄

当時、高等二年の私は、毎日防空頭巾を持って学徒動員として「新興」という工場へいきました。確か二十年の二月のことです。雪が降り、履いてゆくものがないので高下駄で歩き、下駄の裏に雪が大きくつき、幾度も幾度も転び、又雪取りをしながら行きました。

仕事は直径五・六センチの部品を研磨する仕事で、常に班長のおじさんが虫メガネで検査してくれました。

もう一つの仕事は、手動のプレス型抜きでした。この仕事で私は左手の人差し指の先を切り落してしまいました。この会社には十八ぐらいの女工さんが大勢来ておりました。給料は一ヶ月二十数円だったと思います。そして警戒警報が鳴ると家へ帰されました。すると、決って井口の八幡社の所でB

29が編隊で飛んで来ました。その凄まじい爆音と恐怖感で八幡社の丸太小屋の陰に身をひそめて、爆撃機の通り過ぎるのを待ったものです。通り過ぎると駆け足で帰って来るのです。

—このような日が毎日毎日続くのです。そして帰って来てからは、もうその日は工場へ行きませんでした。自家製の標準服と防空頭巾、そして指先のけがは厳しかった十四才の私の思い出です。



三鷹戦時の記録

金子 義雄

上連雀八丁目当時二十七才

想えば私が三鷹に住むようになったのは昭和十七年十二月でした。それまでは墨田区向島の実家から杉並区荻窪の中島飛行機製作所、東京工場へ通っていましたが、遠くて大変なので工場の近くにアパートを借りて勤めていました。

戦争が長期化する酷しい状況のなかで飛行機を質的量的にも増産しなければならなかったため、三鷹の大沢に、中島飛行機中央研究所試作工場が出来ました。

私は会社の命令で東京工場よりここに転勤することになったのが三鷹に永住するきっかけになったのです。当時の三鷹はのどかな農村地帯で駅前には商店が少しと市場があり、桜通りには小川が流れ、私の住まいから近くには、野崎に食料品店などある程度で人家もまばらで、ほとんどが島であったと記憶しております。

そのうち戦争も益々激化するなかで、飛行機増産のため昼夜ぶつ通しで徹夜につぐ徹夜で、工員の誰もが疲れていたのが思われます。しかしこういう酷しいなかにも楽しみもありました。それは残業をすると特別に雑炊が食べられるからです。



当時の食糧事情は大変悪く、すべてが配給制度で食糧難のときだけに家族が助かったものです。また徹夜明けには七十萬坪もある（現、キリスト教大学一帯）工場裏へ行き、栗を取ったり、寝そべったりしたのも楽しみのひとつでした。

三鷹には中島のほかに、新川に、正田飛行機、下連雀に日本無線など大きな工場のほか小さな工場もありましたが、そのほとんどが軍関係の仕事をしていました。軍に関係のない仕事をしている人は徴用で私達の働いている職場にも大勢きました。そのほか杉並区の学校から女子中学生が学徒動員で勤労奉仕に来たのもちょうどこの頃です。

私達はこれらの人を指導し、増産に励む毎日でしたが、初戦の戦果もむなしく、まもなく東

京にも空襲があったと言う、ニュースがでたものです。最初は空襲といっても飛来する程度でしたが、なぜか日本の将来にいやな予感がしました。

この頃三鷹に警備召集制度が出来ました。この制度は警戒警報が鳴ると同時に、職場からでも家に居る時でも直ちに特定の場所に集合し、軍服に着替え、町の治安を守ることです。

三鷹では、日産厚生園（現、井の頭西園）本部と第四小学校の一部が仮兵舎でした。

私はこれ以前の昭和十三年九月東京麻布の歩兵（陸軍）第三連隊に臨時召集を受け入隊し、中支戦々に参加し十五年に除隊になり、再び同年七月召集され風雲急な「ソ満」国境北安の警備につきましました。その軍歴により三鷹町役場から警備召集令状をもらいました。召集令状は普通赤紙と言いますが、警備召集の場合は赤紙でなく桃色の用紙でした。令状を受けてからの毎日は、仕事をしている時も家に居る時も気が落ちつきませんでした。

最初のうちは時々警報が鳴る程度でしたが、だんだん空襲が激しくなり、B 29爆撃機が毎日、本土を空襲するようになり、仕事どころではなく、十日間交替で、四小に常駐するようになりました。

その頃、私の工場にもグラマン戦闘爆撃機や、P 51戦闘機により三名が犠牲になりましたが、日本もまだ戦力があつたのでB 29を迎撃して打ち落したり、損害をあたえたものです。

或る時、久我山の町にB 29が落され出動したこともありました。空襲のないときは軍時訓練や不発弾処理の応援に行くこともあり、それは忙しい毎日でした。

三鷹には四小の近くに、時の陸軍大臣阿南大将の大きくて質素な家があり、巡察の途中一度お会いしたことがあります。それは大変なもので、馬上豊かに堂々とお通りになりました。我々は直立不動の捧げ銃の最敬礼で、大変緊張したものです。

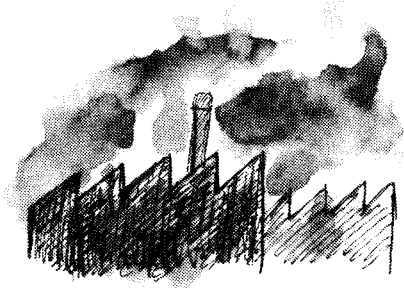
もうこの頃は空襲で三鷹武蔵野地区の軍需工場を目標に、爆弾投下のそれは激しいもので、とくに、中島飛行機武蔵野工場などは一トン爆弾が連日落されました。

そしてあの三月十日（陸軍記念日）の下町方面の大空襲で、夜半から明け方まで、東京の空は真っ赤でした。続いて二十四、五日は八王子方面より東京への空襲の途中、野崎にも少し焼夷弾が落ちて、樺並木の一部が焼かれました。

その後戦況も悪く、学童疎開のように、工場の一部が秋田県湯沢町に疎開することになり、私も工場と共に秋田へ行くことになり、そこで間もなく終戦を迎えました。

あとがき

終戦後二、三ヶ月でまた三鷹にもどりましたが、警備召集時代の仲間が多勢いると思います。記憶



ちがいがあつたら御指摘下さい。

東京帝国大学文学部勤労報国隊

国立歴史民俗博物館

菱刈隆 永当時二十三才

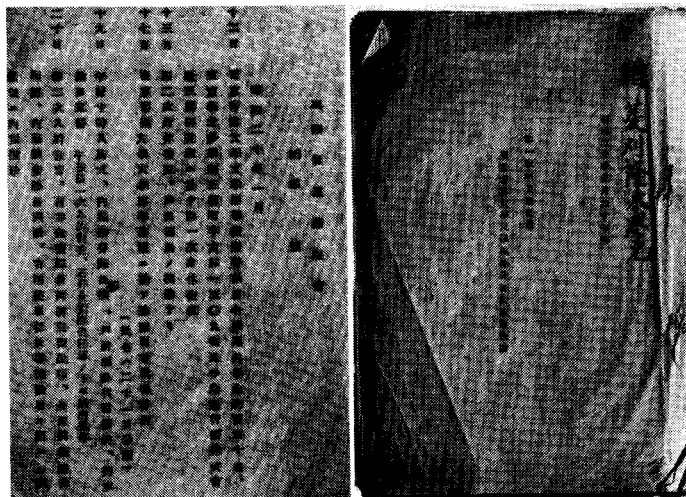
東京大学附属図書館

黒住 武当時二十四才

中島飛行機三鷹研究所勤務(当時) 聞き書き 榛澤茂量

手元に「第一軍需工廠配属、東京帝国大学文学部勤労報国隊報告書」というタイプ謄写七十ページ足らずの記録がある。

それには、「昭和十六年十二月八日大東亜戦争勃発シ国民勤労令ノ発布ニ伴ヒ東京帝国大学文学部勤労報国隊(司法令適用除外学生)ハ昭和二十年一月九日中島飛行機株式会社三鷹研究所ニ動員セラレ爾後七箇月余或ハ武蔵野ニ或ハ遠ク東北ノ地ニ営々努力報告ノ誠ヲ尽ス。昭和二十年八月十五日同戦争終結ニ関スル大詔降り同月二十日勤労動員解除セラル。其間隊員ノ勤行ヲ記録ニ留メ斯動員ニ関ス



ル報告ヲ為スト共ニ東京帝国大学生ノ戦時ニ於ケル至誠ヲ永ク大学史ニ残サンガ為ス報告書ヲ編ス」とある。

昭和十八年十二月に学徒出陣がありました。文学部関係は徴兵年令に達していれば延期が出来ず、徴兵検査の結果、丈夫な者は兵隊に行つた。残っている者は、満二十才に達していない者か、身体の弱い者か、であつた。黒住は「第三乙種合格」、菱刈は「丙種合格」であつたので赤紙に接することはなかつた。

昭和二十年一月十二日、三鷹の中島研究所で、学徒勤労令適用外の学生が身体検査を受けて、そのうち任に堪えられるとされた者によつて編成され、隊員は八十名であつた。

三鷹研究所の組織は、機体・発動機・設計・総務の四部門からなり、新設計の試作機を作るのが

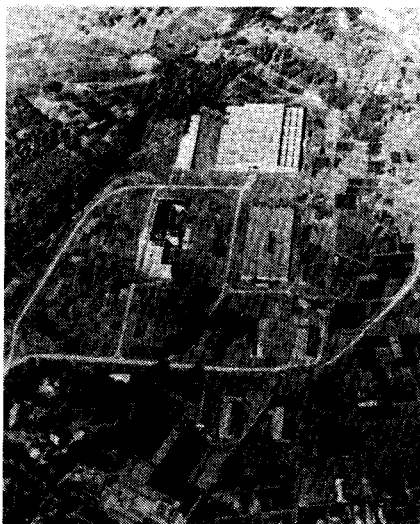
目的であつた。試作に成功すると量産工場に移して生産する。

入所当時は、一万メートルの上空を飛来するB 29を^{邀撃す}べく、短時間で一万メートルに上昇できる戦闘機「キ八七」を試作していた。又、ここで「キ一一五」の試作に成功し量産計画に入った。大型爆弾を胴にかかえて、離陸すると両脚を落して敵艦に突っ込むと学生仲間が噂をした単葉単発の中間機だつた。二月十七日、艦載機グラマンの来襲があり、研究所も襲われて、防空壕に爆弾が落ち、工員四名が生き埋めになつた。その葬儀が深大寺で行なわれた。黒住は、副社長と軍需監督官の二通

りの弔辞原稿を頼まれ、しかも副社長、中島乙未平の方をより哀悼の意をこめて書くようにとのことであつた。

四月一日、中島飛行機株式会社は、国营に移管され第一軍需工廠となり、三鷹研究所は、この第二十二製造廠となつた。

兵隊に行かなかつた者にとつて、飛行機を作つて国の役に立つと言うことで、張切つて仕事をした。「キ一一五・剣」をいかに生産するか我々なりに懸命に計画した。たくさんの人たちが動



員で働いていたが直接顔を会わせることは、少なかった。ある時、赤い御飯だったので何か良いことがあったんだなあ。と思つていたらコーリヤン飯だった。

そのうち生産する計画機数の水増しが行なわれ、生産能力を大中に上回る計画が出はじめて来て、疑問に思つた。

空襲を避けて研究所内の谷の方に避難していた時、石井企画課長からZ機の話聞いたことがあつた。連合軍が本土に接近するにおよんで、もつぱら戦闘機を作ろうと主張する陸軍の意見に対して、社長中島知久平は、渡洋爆撃機三千機を作ることと主張した。高度一万メートル飛行可能の六発大型爆撃機二千機で米本土を襲撃する。目標はアメリカの主要な多目的ダム五十箇所。この爆撃によつて電力源の壊滅かいめつと洪水による農作物への打撃をはかる。二千機のうち半数を失つても、一千機はドイツに着陸する。そこでさらにもう一度、日本から一千機が飛び立ち、ドイツの一千機とともに再空襲をはかる。という構想でその設計試作は、ある程度できていると聞いたのである。

身体が弱くて戦列に加われぬ我々は、戦場で闘う友を偲びつつ、飛行機生産の仕事の一端に、青春の一時を打ち込んだ。

玉音放送を聞いて、身体からひどく力の抜けるような感じをもつた。これから先どうするかは、見当がつかなかったが、たしかに敗けたのだという実感をもつた。解散式が八月二十日挙行され、動員解除となつた。

新川本町の強制買収



大木 秋 男 海老沢 清

中原三丁目 当時五才・十三才 聞き書き 榛澤茂量

当時、私は、まだ子供だったので正確に思い出す様に兄と話しながら書きました。

ここらは、畑やたんぼがある純農村で何代も続く旧来の家があるだけでした。三鷹村は、貧しく、何か村で誘致して少しでもこの貧しさから脱出しようと村役場で考えたらしく、昭和十三年の十二月ごろから顔役が動き出し、根回しらしきことが始まった。次の年は、夏に今で言う土地収用法と言ふ法律を村役場で決め、秋には、賛成派、反対派が入り乱れ、それに銀行も加わって大変なさわぎになった。『研究所』がこの辺一体に出来るという話だ。移転させられる家は、大小の

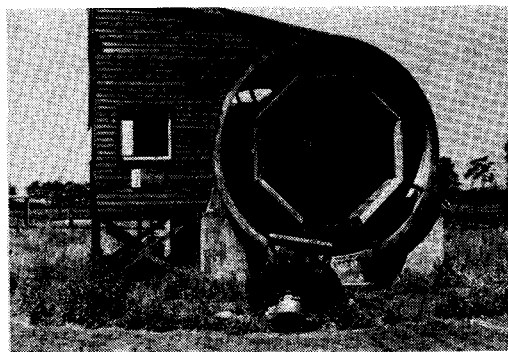


木炭車

地主三十三軒か三十四軒だった。調布町の野ヶ谷がすぐ隣なので調布を含めての軒数である。総坪数三十万坪。畑やたんぼをすべて買収される人もいたし、家用に少しの畑しかない人もいた。篤農家であった村太郎・久八・富士松・六蔵・信乃^{しの}・音吉氏たちは、弁護士をたてて反対したが、がんばること六ヶ月で、時代の流れとあきらめ反対派の希望が消滅した。全く畑のなくなった人たちは、研究所で雇ってもらった。大きな研究所だったので、雑役として働く人がたくさんいた。土地代金の内、いやおうなく国債を買わされた。三鷹や調布のえらい人達が組んでこの研究所を呼んだと言う噂が中原に広まっていた。月日が立つうちに水道のタンクやガスタンク・一千坪工場と言われた巨大な工場・発動機研究所・風胴などができ、研究所の外側に桧丸太と角材を使った塀をぐるりとめぐらしたため、子供たちは、この外をまわって学校に行かねばならなくなった。一小から中原までの直線の道は当時作った軍用道路だった。ここで使用されていた自動車は、ガソリンで走っていたが、戦争が押されて来たころは、クヌギやナラと言ったガス木^き（固くて火力の強い材）で走っていた。

今は、キーを入れればすぐスタートできるが、この木炭ガスの

車は、かれこれ一時間位かかってやっと走れる様な車だった。そのうちに研究所の周囲には塀が完全に出来上がり、それまで必死で畑にしがみついた人も、通りぬけの人も出入が出来なくなつたためその後に出来た全天候試験工場その他は、不明なことが多い。マイナス七十度までなるとか言つていたこの塀は、大人は通れないが子供は横になって通ることができたので守衛におこられながら中の栗とか何かをとつた。



ここのエンジン工場が順調に動き出した時点で、調布飛行場にある研究所の分室（昭和六十年八月墜落した日本航空のジャンボ機の隔壁が運び込まれた所）とここを軍用道路もしくは誘導路で結ぶ計画があつた。土地の高低を考えれば、今の三十メートル道路が当時出来ていた可能性が強くある。

二十年二月十九日の空襲では研究所の外に7、8発、内にはかなり落ちたが、棚ごしに見えるだけで数は不明。

戦争が終つた時には、米軍が来て重要な所はすべて大きなハンマーで破壊しつくして以後航空機の研究一切が長く禁止された。大きな全天候試験場は無事であつたため、ブリキで型をつくり、マイナス七十度になる所で氷をつくり都内へ売りに行った人もい

た。近所の人は、燃料であるマキが不足していたので研究所の周囲の塀をはずしてこれを燃料として使用した。

ふるさと三軒屋

竹内 幸助 竹内 キヨ

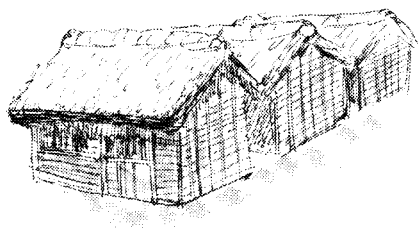
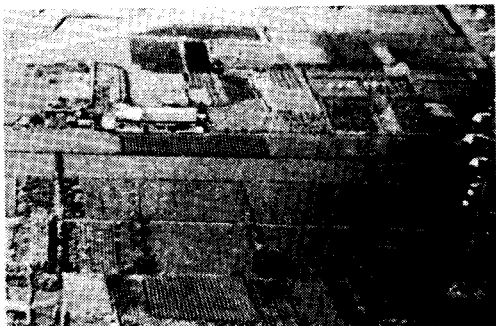
深大寺 当時四十一才・四十才 聞き書き 榛澤茂量

代々三軒屋に住み、十町近く土地を持っていた。竹内姓がかたまつて本家分家を作り、のどかに農業をしていた。今の若い人は三軒屋つて場所は知らないと思うよ。富士重工とキリスト教大学と野川公園の一部のことですよ。ここに中島飛行機の工場や研究所を建てるからと言う話を聞いた時は、いやだったねえ。国が軍か知らないけど、勝手に決めて地主に対し入れ替り立替わりいろんな人が来て、話をまとめようとしていた。

うちは売らないと決めた。そのうち大地主の藤棚あたりの契約を済ませ、今度は小さい地主をせめ

て契約していった。あちこち虫が喰った様に買収されて行き、町役場から呼び出されることが何度もあった。逃げまわったよ。四年間がんばったけど、とうとう十九年に今の場所に移った。ほんの少しの代替地だった。

なぜ移って来たかと言うと、契約も話もないのに引込線（引）を畑に作ってしまったたり、格納庫や本館の



建設が始まってしまった。ここは新川さんの畑だった。地鎮祭は勝よしさんとところでやった。うちの土地は、坪5銭で借り上げられることになった。

肥料もないのに、代替の畑で作物ができる訳がない。供出の割当にサツマ芋や麦などを出したが、バケツに少ししか肥料がもらえなかった。警防団で二小に行ったこともあった。全部で五十人位いた。この辺に爆弾が落ちたのは栗山と東野住宅、中島の本館のそばの三つだった。今でも大沢のうちがなつかしいよ。

注1 (引込線) この場合は物資輸送のため、本線(現在の西部多摩川線)から引き込んだ線路

防空壕

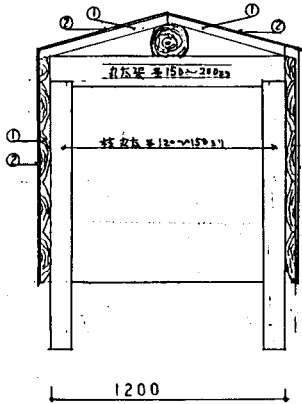
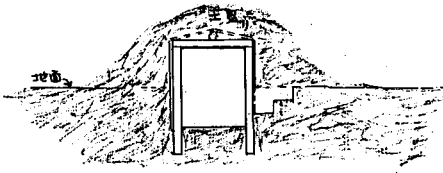
榛澤藤雄

大沢五丁目

木枠造り防空壕は昭和十八年(月日不明)に作った。当家は平坦な場所に地面より二尺(約六十七

ンチ) ぐらい掘り、図のような方法で作った。そして一・五尺(四十五センチ) ぐらい土盛りして出来上った。床は土間にスノコ板を敷き、その上にむしろ(わらを編んだもの) を敷いた。家族の避難用として使った。

コンクリート造りの防空壕は、昭和二十年五月に空襲が激しくなつて来たので、家財道具を入れるために造った。内部面積は六畳間であった。これが出来てから、夜の空襲の時は主として避難用として使った。床から天井まで中央は一・八メートルで、中央に換気穴(径十八センチ) がついている。正面に通風兼明かり取りの小窓(タテ・ヨコ四十センチ) がついているものだった。



防空壕

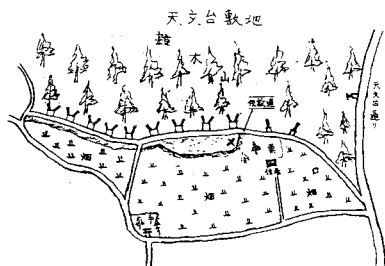
榛 澤 ミ ツ

大沢五丁目 当時三十四才

私の家は大澤の東京天文台敷地南側の山の下にあります。左の絵のような横穴壕横は確か昭和十九年に大勢の兵隊さんに依つて短期間で堀られました。何よりも飛行場に近いこと、そして山の急斜面を利用した横穴壕なのです。山は雑木山で落葉樹がほとんどです。又、穴の深さはいろいろで浅いものは六メートルぐらいいからあります。この横穴壕は、東側面一ヶ所南側面二十ヶ所で全部で三十一本有ります。これは、ほとんどの穴がドラムカンの置場に使われていました。おそらく航空燃料でしょう。仮設道の平担部には、ドラムカンの空かんがいっぱいありました。私の家のすぐ裏の穴は二ヶ所爆弾がしまわれていました。そして、昼夜見張りがいました。私の家は、一番近かつたわけですが、近くへ寄つて見た事は一度もありません。軍隊が優先で兵隊さんが恐いくらいでした。

この様な事も有ります。兵隊さんがドラムカンを取りに来た時のことです。兵隊さん下痢をしてしまい「薬を下さい」と言つて来たこともあります。当時私の家では、富山の行商の薬が有りましたのでそれを分けてあげたこともあります。又、私の家から三百メートルほど離れた所に、倉敷飛行機の会社がありました。ここには、東北から出て来た十五、六才の少年が働いていました。十五、六才の

成長盛りの男子ですから、与えられた食事では腹がすいてすいてたまらないでしょう。幾度か「何か食べ物を売って下さい」と言つて来ました。私の家も、年寄りも我が子も多くおりましたので、戦時中の食糧事情は、大変なものでしたが、その時は何か少しでも分けてあげました。部落での防火訓練もやりました。これは皆が留守を守る女衆でした。バケツの手渡し法などが主でした。防火訓練は、戦争が激しくなつてからは出る事がなかつたです。たしか、二十年の二月十九日のことと思います。私の家の裏に爆弾が落ちました。この時は、子供達と姑は、防空壕に入っていました。私は空襲でありながら仕事をしていました。その時、何か電車が走つて来るような『ゴ・ゴ・ゴ』というようなもの凄いい音がしました。私は、あわてて防空壕に飛び込みました。と同時に物凄いい地響きで生きた心持ちはありませんでした。僅か四十メートルほど離れた横穴壕の近くに爆弾が落ちたのです。そこは小さい笹のはえた空地でした。家の中は棚の上の物は全て落ちて、又、ゴミ煤は物凄く落ち、一瞬にして力が抜けました。この時は死ぬなら家族全部一諸にと思つたほどです。



防空壕配置図 ×は爆弾落下位置

二十年の五月〜七月は非常に、空襲が激しく朝は九時から夕方五時まで、そして夜は九時から朝五時迄と眠ることも出来ず、昼は、働くことも出来なく、それでも畑を耕作したのです。本当に生きることに激闘の戦時中でした。

注1 (横穴壕) 山腹などに掘った横穴式の防空壕

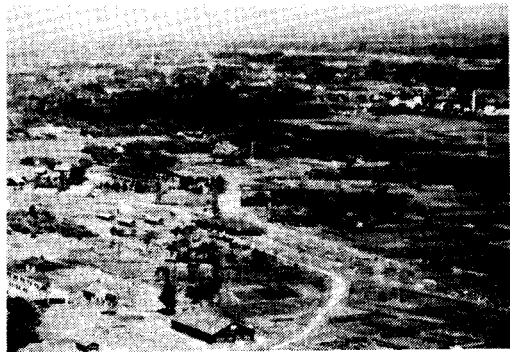
屋敷の下に防空壕

指 田 要 輔

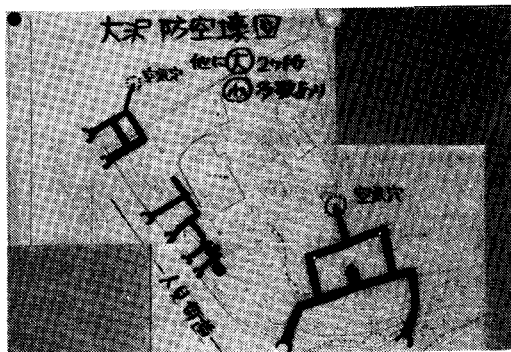
大沢二丁目 当時三十四才 聞き書き 榛澤茂量

私の家は人見街道を大沢の十字路から西へ行くと切通しのように両側が「ガケ」になっている所の左側「ガケ」上にあります。(今は整備されて昔の様子はわかりませんが)急な「ガケ」で、七中の入口も坂でなく三十五段もある石段でした。

青年団の団長をしていて戦争中は警防団。警備召集されてからは、今の二小に詰めたり、飛行場の



兵舎に詰めたりしていた。ここいらは、調布飛行場と中島飛行機三鷹研究所の間で東南が天文台なので戦争が押されればなしになった頃、飛行場の兵隊が、いやおうなく三十五段ある石段の両側から防空壕を掘り六、七間先で両方の壕が通じる様にし（石段の真下）地下に大きな医務室を作った。奥の左側から、となりの家（指田友吉宅）の家の畑に通気・通路の穴が板の段々で作られ地上に出ることができた。しかし、中に入れる備品が大きすぎたため、入れられず医務室として使用しなかった。一番大きな壕は、坂を下って左側に掘った穴で奥行は、戦後自分で歩いて確認した距離で、60間以上あった。入口は二ヶ所で、中間で南東に行く天文台の「ガケ」上へ出口がつづき、奥は、私の家の敷地近くに、通気口らしき出口があった。壕の中は、板が椅子の様に両側にある、座れる様になっていた。こんな立派な穴があっても、ここは兵隊さん用で、近くの人たちは、使用できず、お互いに助けあって人見街道の反対側のガケを防空壕にした。浅くて身をかくす程度のものが沢山あった。中島飛行機の中とか多摩墓地の中にある松から油をつくると言うんで、太い松を切ったり切り株の残っているのを掘り起したりした。ガソリンの代用として、この松根油と言うのをまぜ



て使ったらしい。ずい分切ったり掘ったりした。あんなのが役に立ったんですかね。何でも松の根二百個で飛行機一機を一時間飛ばすことができるって言った。負けるわけだよ。話は前後するけど、二十年の二月の大雪は、近年に無い程積った。警備召集で詰めていた第二中隊と調布の隊がスコップを持って飛行場の雪かきに行った。午前二時だったことを思い出す。雪をかこうと思っても積りすぎ

ているので雪かきが出来ず横に並んで肩をくみ、雪ふみで固める様にした。これは、大変な作業だった。途中でにぎりめしが配られたが、皿もないので皆スコップに福神づけを乗せてもらって食べた。朝まで作業を続け、昼間になってから、学校の子供たちがたくさん来て横一列になって同じく雪ふみをしたのを、今でも良くおぼえていますよ。飛行場から飛び立とうとした飛行機が見る前でひっくり返ってしまう。ここには、いくつかの部隊があつて雪を固めた所を使えない飛行機もあつた。戦争なのに縄ばりがあるのかねえ。せつかく子供たちもがんばって固めたのに。艦載機の機銃掃射が一段とはげしくなつて、この辺に住んでるのがいやになつた位だ。誰が戦争始めたか知らないけど、戦争がいいなんて思う人は、いなかつたヨ。言えなかつたけど。

「松根油」——収量は、原料の生乾、伐採後の新旧によつて変わるが、赤松、黒松、ヒノキ、ヒバ、エゾ松、トド松の順。

巨大防空壕

川口三八

調布市仙川 当時十二才 聞き書き 榛澤茂量

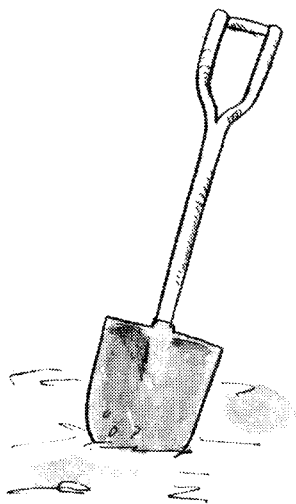
私の家の畑や林は、中原一丁目にくささんあり、戦争中は、青年団の活動として、中仙川と一諸になつてやつていた。北側がガケでその上に畑がある。今の愛泉幼稚園の西には、湧水があり、中島神社の弁天様があつた。のどかな農村に、陸軍の部隊が出来（四丁目の都の住宅がある所）通信のアンテナ七く八本が二丁目の清水さんの畑に立ち（木の電柱を三本継いだ高さ）一丁目のテニススコートの南西の角と北西の角に、半地下で、堀つた土を回りに積み上げた十二坪位の通信所が出来た。畑の持ち主には、通告だけで、何も言えなかつた。

昭和十九年の秋ごろ、どこから来たかは、知らなかったが、朝鮮の人たちが、陸軍に使われ、この一丁目のガケに壕を掘り始めた。ガケは、今、宅地になりだいたい後退したが、昔は、二十メートル位先まであり自然の傾きをしていた。防空壕の入口は、うちの林から松を勝手に切り、木組で固め、トロッコで中の土を運び出して、ガケの前の谷に道路を作った。枕木に使う松を切った時は、私の親が、相当腹を立てたのを思い出す。子供たちは、作業の飯場に近よらない様に、何度も何度も注意されていた。

巾は三メートルから四メートル五十センチ入口は八ヶ所、壕の総延長は、九百メートル位あった。サツマ芋を作っていた畑の中に通気穴があった。(二間四方)

巨大な防空壕は、調布飛行場の燃料を入れるために作られた。戦後すぐに中に入って見た時、北には、ガソリンのドラム缶がたくさんあり、南は、日用雑貨、文房具、などが入っていた。

多量のドラム缶は、戦後、三鷹の町役場に馬力で何度も何度も往復して運んだが、あれは、どうな

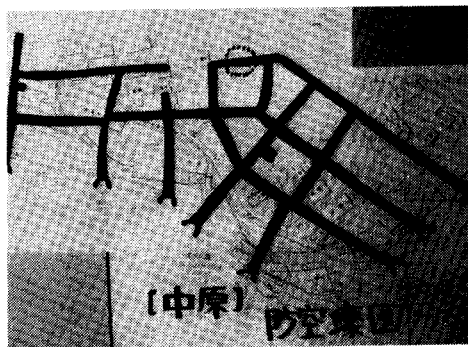


ったのかなア。

文房具は小学校に運んだ。

戦争のために掘られた壕は、完全に利用されずに、終戦となったが、畑の持ち主は、草とりの草、イモのツル、など通気穴から投げ入れても、埋まる大きさでは、無かった。

現在は、埋戻しが行なわれ、一安心しています。



野川公園の松と中島知久平

村越 惣十郎

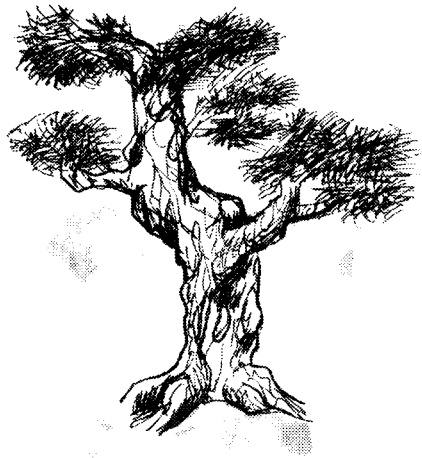
府中市多磨町当時三十五才

聞き書き 榛澤茂量

飛行場の中心部分に押立山谷という村があり15軒の農家が二百メートル位の間をおいて散在し、わずかに、その回りが畑だったが、大部分は、松やナラ、クヌギの太木が茂った昼でも暗い森が大沢から調布にかけてずっと続いていた。昭和十三年十二月三十日、降ってわいた様に、ここに飛行場を作るので土地の所有者は、「ハンコ」を持って集まれと命令が来て、大沢を始めまわりの人たちが調布の小学校に集まった。現在、いろいろな書物には、民間飛行場としてスタートなどと言われているが、これはちがう。小学校では軍人が一も二もなくハンコを押させ十四年の三月末日までに一切を移転させる旨の指示があった。自分たちの行き先を決め、自分たちで移転した。建物を引いた人、建て直した人、いろいろでまず移転先の林の開墾から始まり徳寿院の移転、各屋敷内にあった墓の移転。大沢では、天文台が出来るので、飛行場に墓を移転し、又調布の蓮慶寺れんけいに移した。まあ、お国のためって言うけれど大変な苦労だった。すぐ隣にあった宮川さんや藤田さんなどもその後、同じ様に移転させられた。代金は、宅地が六円、畑が三元、林やまが二元五十銭で立木とか建物とか、作物とかを計算する

と各々二倍位の価格になった。ただちに飛行場建設が始まったが、工事には一般の人は一切関係しなかった。立木は各々所有者が始末をし、工事は、青い服を着た囚人が十人位の単位に監視が一人の組で行なった。多磨墓地の玉川さんの所に軍の人の詰め所があつて指示した。いよいよ戦争が始まり、最初は良かったがすぐに不利になつて来た。

そこで勤労奉仕で飛行場の回りにコンクリートの掩体壕を作った。大沢の人たちも含め飛行場の回りに五十コ位作つたと思う。作り方が又、幼稚で、まず回りの土を掘つて中心に固めながら盛り上げ、紙を敷いて薄くコンクリートで型をつくり、鉄筋を入れて厚くコンクリートに乗せる。出来上がると中の土を掘り出す。掩体の上はこの土に乗せたのもあるし、回りに積んだのもあつた。一組二十人位で次々作つた。人見街道の坂下の先、西武線の踏切の手前には、ガソリンを集積する穴をたくさん掘つた。ここに来るまでの右側には、宮川さんの植木畑があつた。そして誘導路は、多磨墓地の土手を切つて中に飛行機を引いて行つた。松林では、太木にななめにノコメを入れて松ヤニとりをさかんに行つた。今、残っている木に、キズのあるのは、



その時のものだ。

飛行場が使われだした頃の話にもどるけど、中島飛行機が所有していた土地は、現在のキリスト教大学と富士重工と野川公園とあと少しと言えば、今の人にも分かると思う。この野川公園の部分に胴回り四十五センチ二メートルの松が沢山あったが、防空司令部から研究所の松が、飛行機の離着陸に邪魔だから、切れと命令された。中島知久平さんは、大沢のこの自然を好み「泰山荘」を作って住んでいた程だったが、何度も何度も命令されたので、切らせることはしなかったが移植を始めた。この知久平さんは、小柄ででっぷりとし人柄はすごく良かった。私が頭で^{かしら}仕事をしていたが、金が無く



なると、泰山荘までもらいに行った。移植はオカグラと言って今で言うウインチの様なもの各々設置して四百五十本余りをコロで引き移した。季節に関係なく作業するため「ハダムシ」がすぐついてしまう。このため新聞紙を沢山買い集めておいて長くつなぎ二つに折って幹まきをした。毎日百二十人位の人が作業をしたが、このころ民間の仕事が無くなって来ていたため人集めは楽だった。民間で二円から二円五十銭

の日当だったのを四円払ったので、沢山集まった。朝鮮の人は山の中に飯場を作って使用した。これらの費用は全部知久平さんが支払った。野川公園では、日曜日にとくさん子供たちが遊んでいるけど、当時、移植した松が残っているのを知ったらびっくりするだろうね。

広大な林に川、田、わさび畑、西武線を通った小さな小さな蒸気機関車、ここに泰山荘を作り大自然を好み、軍の威光をカサに着た軍人たちに対し一貫して自分の意見を通した。

当時としての平和をきつと願っていたと思う。松の木を見ると、思い出す。

第一大隊東部一九〇三部隊

本間 誠

内山 勝 広

聞き書き 高畑キヤ子 榛澤茂量

現在の羽沢小学校に第一大隊の本部、正門の坂を上った右側（前鈴木市長宅）の『椎の実こどもの家』に一九〇三部隊、この北側百メートルの位置（伯母定夫宅の畑）に電波探知所（レーダー基地）がありました。部隊は、昭和十八年六月に編成を完了し、九月に軍令陸甲第五十一号により第四中隊

に変更、代々木から通つて陣地を構築しました。羽沢小学校の所には、すでに田を埋めて建物がありました。砲を設置する所（椎の実子供の家）には、赤松の太木が六十本位あり、東家あずまかがあり、建築関係の仕事をしていた公爵か男爵かの別邸があり、その取りこわしと松の伐採でもめた。陣地は、飛行場を守るためのものなので左撃型砲列ひだりうちかたまづれにすべき所、どう決つたのか右撃型砲列に設置することになつた。九月中旬、ここに移動。砲は、八八式七センチ野戦高射砲六門で固定台座であつた。砲の回りには直方体のコンクリート掩体があり、一門に対し三つずつ作つた。羽沢小の方は、幹部候補生、下士官候補者、士官候補生などの集合教育を行う所でもあつた。そして電波探知器（レーダー）タ号が設置され高射砲と連導射撃体制に入つた。兵隊の数は、百八十七名。B 29がくる前の陣地の日々は、……「定位につけ！」と叫ぶような隊長の号令に素早く軍装を整え一目散に兵舎（羽沢小）を飛び出し、砲座や測高機のある陣地（椎の実子供の家）へかけ上がる。『○○分隊準備よし』全神経がピリピリした。又山林を開拓して甘藷を作つたり、豚を飼育して食糧の自給を図つたりもした。

この頃、神代植物公園の駐車場から東側一帯に照空部隊注1ができ、一九〇三の東二百メートルに高射砲陣地ができた。昭和十八年十月に東条英機首相の視察があり、お偉方一行の前での訓練を行なつたが、目標機に計算上、砲が向かず、真反対に向いてしまったハプニングがあつた。近所の農家の屋敷林が砲弾の邪魔になるので切つたり、楯にするケヤキを野崎あたりから供出してもらつたり、毎日、作業、訓練、駆足、架線、延線、撤去などくり返しているうちB 29が初めて来襲した。高々度のため

この時は発射しなかった。

昭和十九年の十一月以降は、さかんに来襲する様になり昭和二十年に入ってから、一機を撃墜した。落ちた機体を調べて見ると、秒針のついた腕時計を生存者がしていた。当時、この型の時計は、日本に無かった。又配線を見ると、日本では、ゴムの被覆線と決っていたが、ナイロン被覆で細い線でしかも色別になっていた。リレーと言う部品も小さく出来ていて、びっくりした。墜落地の近所の人たちは、B 29が、今の旅客機のように気密になっていた事も知らず、米兵があまりの軽装なのにおどろき、きつと着る物が無いんだ、などと言っていた。又B 29の残骸の中から精密な航空写真にナンバーの○印が入った爆撃目標図が出て来た。当陣地の爆撃目標は二〇四であった。陣地にあった電波探知器は、II型と言ひ、ガソリンの発電車で電源を得ていたが、四つのアンテナを動かして、目標方向がとうとう、ブラウン管に焦点があう様になるもので、全て真空管だったため大きな装置になっていた。レーダーと高射砲は有線で結び計算所で参考にして指示に使ったが、あまり信頼できるもの

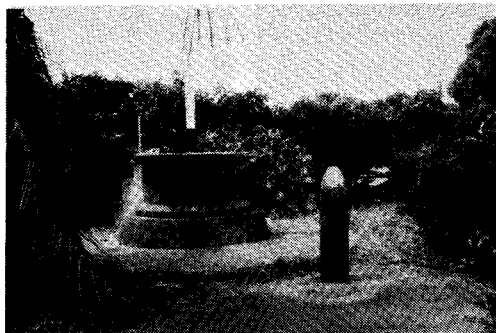


ではなかった。

昭和二十年二月十六、十七日、米機動部隊より発進したF6Fグラマンが、大挙来襲した。突如観測班が、敵編隊を発見した。『四八〇〇方向より敵機侵入！』。三六〇度を六四〇〇に割って方向を示していた。北を〇とすると、時計の針の方向に廻って東が一六〇〇、南が三二〇〇、西が四八〇〇、

北へ戻って六四〇〇である。四八〇〇は、西方である。天文台の方角から低空でグラマンの編隊が陣地を直指して突入してくる。

高度をみるみる下げ一機ずつ、どでかい爆音と共に機関銃・機関砲をつぎつぎと撃ち込んできた。真管しんかんを零秒にして、号令が叫ばれるたびに撃ちまくった。高射砲の炸烈音、グラマンの爆音、発射音、地上に立ち上る敵弾の土埃り、砲弾の空箱を放り出す音、弾薬庫（太田宅裏）から運び上げる者の声。煙煙煙・音音音・埃埃埃、大沢の風景はたちまち阿修羅の巷と化した。皆、夢中であつた。命令しなくても砲身は次から次へと襲いかかるグラマンを西から東へ西から東へ、高く低く、高く低く繰り返し追いつづけた。何波にも分かれて来た。グラマンが去った後は、嘘のように静かになり、四名が戦死しているのがわかった。四名の部隊葬を



現在も残る高射砲台座

十八日に行ったが、最中にP51の来襲があり応戦する高射砲と機銃の地鳴り、地響で一面もうもうとした砂埃と煙が舞い上り、葬式に来ていた遺族もかけ出して逃げた。この位置の高射砲陣地が、よほど邪魔であったらしい。十六日から十九日まで第一師団の発射数は一〇三八三発であった。大沢の人は、今日で終りと思つたでしょう。

昭和二十年の四月末に、大沢陣地には、丸太で作つた偽の高射砲を作つて、日本海側に残された唯一の食糧補給港である伏木港援護のため富山県の新湊に移動した。

現在陣地跡には、前鈴木市長に碑を建てさせていただき、毎年八月十五日に仲間が集り、不戦の誓いをしています。

注1 (照空部隊) サーチライト等によつて、夜の空襲時に攻撃機を照らす部隊



II

資料編

資料編

1、学校日誌に見る戦時下の三鷹

(1) 昭和二十年年度の三鷹第二国民学校の学校日誌から（四月～八月）

四月 二日	入学式並に始業式
四月 七日	午前七時二十分警戒警報発令児童登校せず 午前九時四十分空襲附近に投弾せり
四月十一日	午前十一時三十分警戒警報発令 児童清掃作業中止帰宅せしむ
四月十二日	高一男（高等科一年男子）並職員防空壕作製又他の作業をなす 午前八時二十分警戒警報発令児童帰宅
四月十三日	午前九時四十分空襲、敵約三十機京浜西南方より侵入吉祥寺方面に投弾せり 防空壕作製……午前十時より正午迄
四月十四日	午前九時迄防空壕掘児童職員協同作業

四月十六日	級長任命式 「高射砲の破片は先生に出すこと」
四月十九日	戦果発表、午後より防空壕作製
四月二十日	午後〇時三十分警戒警報発令 職員児童協同で防空壕作製
四月二一日	授業二時限にて一斉下校
四月二三日	班別にて空襲時に対する場合の下校訓練を行う 午前兵隊の訓練校庭にて行はる
四月二四日	午前八時三十分頃空襲、立川方面に投弾 午後兵隊の訓練あり
四月二五日	靖国神社臨時大祭について教頭朝礼訓話、少年団役員任命
四月二九日	午前八時三十分天長節祝賀式挙行
四月三十日	午前九時三十分、十時三十分、午後〇時三十分警戒警報発令 始業前（八時十五分）警報発令せられ、続いて空襲、職員は直ちに防空待機の位置につく

※四月中の警戒警報発令日

三日、四日、七日、八日、十一日、十二日、十三日、十四日、十五日、十七日、十九日、二十日、
 二十四日、二十五日、二十八日、二十九日、三十日（計十七日）

五月 一日	滑空訓練始式一〇時三十分開催予定なるも、警戒警報発令のため中止
五月 九日	教頭疎開について朝礼訓話す
五月十八日	高一女（高等科一年女子）島田七郎宅へ勤労奉仕
五月二一日	午後一時より野崎児童高一男参加
五月二二日	本日より防衛召集宿泊
五月二三日	五男六男高一男東部一二〇部隊勤労奉仕
五月二五日	軍隊教室使用のため、四年以下下校
	午前八時警戒警報発令、児童緊急下校
	午前十一時警戒警報発令空襲となる
	午後十時五五分空襲警報発令焼夷弾投下、野崎部落に火災生ず
	本校投下されたるも宿直員これを消し止む
五月二八日	大空襲直後、児童は沈着冷静学業にいそしむ様訓示あり

五月三十一日 午後一時三十分より三時三十分迄耕作実習（職員）

※五月中の警戒警報発令

一日、三日、四日、五日、六日、七日、八日、十日、十一日、十二日、十三日、十六日、十七日、十八日、十九日、二十日、二十一日、二十二日、二十四日、二十五日、二十六日、二十八日、二十九日、三十一日、（計二十四日）

六月 一日 午後全職員作業（陸稲の蒔付をなす）

六月 二日 戦勝祈願遥拜式、後援会副会長参列

六月 四日 本日より部落ごとの班別学習を再開始

六月 五日 「敵」という題ニテ説明を加え、敵機写生図を五枚揭示す

六月 九日 滑空訓練実施（六男）

六月 一八日 五年以上松根運搬（三研より武蔵境松根油製造所）

六月 一九日 初五以上学校借用地除草

高一男滑空訓練

六月 二二日 役場より吏員来校、疎開ニ関する事務をなす

防衛召集隊来校

六月二五日

勤勞奉仕初五六女

茶摘初四女五六男高一女

※六月中警戒警報発令日

三日、七日、八日、九日、十日、十一日、十三日、十四日、十九日、二三日（計十日）

七月 二日

午後〇時三十分より松根割……職員

七月 三日

勤勞奉仕（初四五六名女、初六高一男女）

午後〇時三十分より松根割……職員

勤勞奉仕慰勞会……午後六時より

七月 十日

艦載機来襲航空基地攻撃

七月 二十日

朝礼にて、校長先生訓話、夏季休業廃止について

七月 二十一日

本日より三時間授業

七月 三十日

空襲警報発令のため児童登校せず

高一学級本日より光洋精機工業会社へ動員に出動、入所式を行う。

※七月中の警戒警報発令日

三日、四日、六日、九日、十日、十二日、十三日、十五日、十六日、十七日、十八日、十九日、二十日、二十一日、二十三日、二十四日、二十五日、二十六日、二十七日、二十八日、二十九日、三十日、三十一日(計三三日)

八月 一日	各部落英霊参拜
八月 四日	朝礼訓話並び注意 一、勤労奉仕について、 二、班学習について
八月 六日	本日より初四以上勤労奉仕なるも、警報発令の為下校す
八月 八日	大詔奉載日
八月 九日	朝礼訓話、空襲にさいしての注意
八月 十日	職員学校農園作業
八月十五日	十時頃空襲となる、町内及その付近異常なし 児童休業
	午前六時三十分警戒警報発令、正午頃に至るまで敵艦載機来襲 正午、天皇陛下の放送あり、遂に戦争終結の詔勅下賜さる、皆涙なくして聞くものなし

※八月中(一五日まで)の警戒警報発令日

一日、二日、三日、四日、五日、六日、七日、八日、九日、十日、十一日、十二日、十三日(計十二日)

八月十六日

教頭大詔について訓話あり

八月十八日

流言飛語に惑わず学業に励め……教頭訓話

八月三十一日

第一学期終了式

(2) 明星学園の学校日誌から

小学部学校日誌、(昭和十七年一月から三月まで)

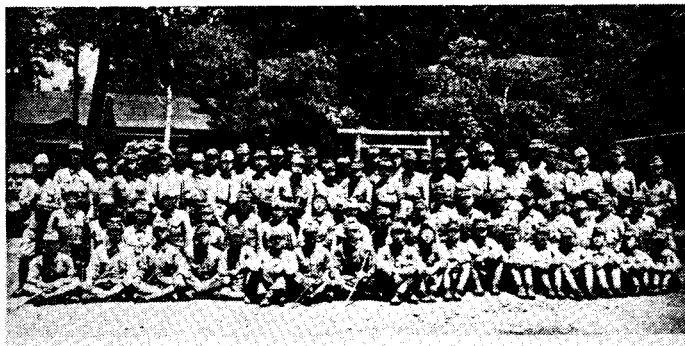
—小学部の学校日誌は、学園創立同人の一人、照井ゲン氏によって大学ノートに記されている。—

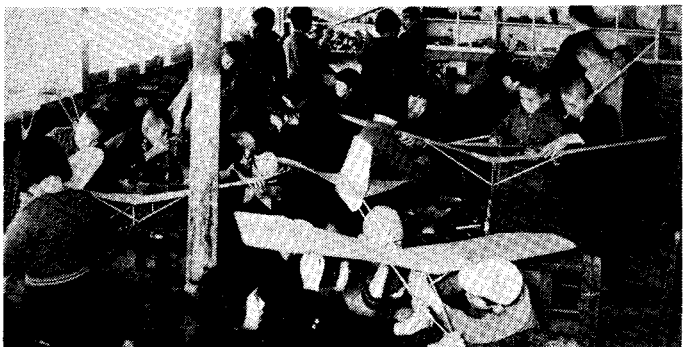
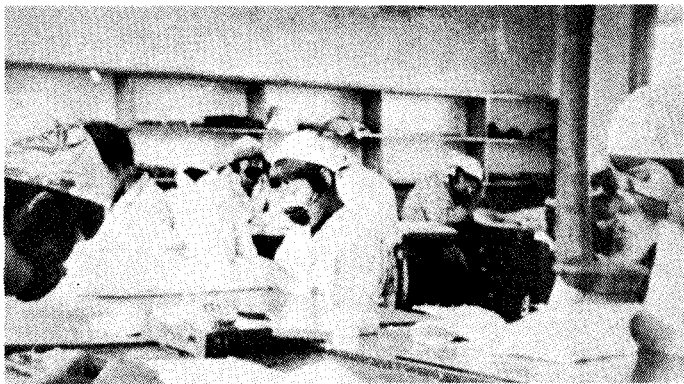
昭和十七年

一月

一月一日

(木) 戦捷の輝かしい元旦を迎えた。





一月 九日

午前九時、小・中・女三部合同にて挙式。終つて奉祝劇の会開催。

(金) 晴 授業二時限、部隊編成、非常時の徒歩帰宅演習。(国電中央線および帝都井の頭線沿線の児童)

一月二六日

(日) 晴 昨年一二月二六日行う予定の祈願と感謝の巡拝、本日举行う。

二月

二月 二日

(月) 曇 昨日は大雪だった。今日は朝からドンドン山(牟礼の高山・現在三鷹三中、東京女子短大の丘)に全児童行軍し、戦争ごっこ(雪合戦)行う。

二月十六日

(月) 晴 昨夜シンガポール無条件降伏せり。

二月十八日

(水) 晴 大東亜戦第一次奉祝につき奉祝式挙行。

二月二十日

(金) 晴 慰問袋に入れるものを買うため先生方一同二時より出かける。

二月二一日

(土) 晴 慰問袋作り午後行う。

二月二三日

(月) 晴 午前十一時、六年生七名、自転車隊を組織して、慰問袋を海軍省に献納。

三月

三月 五日

(木) 雨 中等部卒業式六年参列、この朝八時ごろ空襲警報発令、一時間にして解除になった。

三月十二日

(木) 晴 ジャワ島蘭軍無条件降伏につき第二次奉祝日、式後、村(三鷹村牟礼)の神明様に旗行進を行う。

——以下省略す——

昭・和・十・七・年・の・世・相

毎月八日の興亜奉公日を大詔奉戴日とする。衣料切符制実施。大本営発表だけが報道。木炭パーマ出現。うめよふやせよ運動。文部省「臣民の道」発行、B 29始めて東京空襲。

中学部学校日誌から(昭和二十年一月から八月まで)

——中学部の学校日誌は、当時の中学部長上田八一郎氏の手記で、大学ノートに日々の事が淡々と記されている。

昭和二十年

一月

一月 一日

(月) 晴 中・女一・二年生および初等部全員で元旦の挙式。昨夜より今朝にかけてB 29一機宛三回来襲。

一月十五日

(月) 晴 豊受大神宮空襲。

二月

二月 二日

(金) 曇 ドイツ 独逸東部戦線危機。 フライレン 比島 戦線重大化。

二月 二三日

(火) 晴 三鷹航空、学校(明星)にて作業開始。学校工場の責任者、溝部氏。

急に学校らしくなくなった。

二月 二六日

(金) 快晴 午前七時より午後五時頃まで機動部隊による初の本土空襲、波状に依る攻撃、延千機以上、主として飛行場、軍施設、一方更に有力な機動部隊、硫黄島に艦砲射撃、既に上陸せり？

二月 二七日

(土) 快晴温暖 昨日に引つゞき、小型機編隊、中島製作所に急降下せる時の物凄さ、吉祥寺自宅の濠内で第一線の気分を味得した。

二月 十九日

(月) 晴 敵遂に硫黄島に上陸、時局重大。

二月二六日

(木) 雪 十一時半B 29一機来る。荻窪以西停電、豊和重工から電話、午後三時半、学徒を徒歩帰宅させることとす。

△二月のB 29、艦載機の空襲の記事は一、七、十、十一、十二、十四、十五、十六、十七、十九、二十、二五、二七日に記載あり▽

三月

三月二三日

三月二四日

(金) 曇のち晴 堀淳二(歴史科担当)に召集令来り夜出発。佐世保西部七五部隊。
(出) 午前B 29一機恐ろしく長い時間に亘って各地巡回偵察。学徒の学校への配置
転換、豊和重工の工場長に談じ込む。

三月二五日

(日) 家屋の強制疎開で世間あわたましい。

三月二八日

(水) 快晴温暖 第十三回生、第十四回生卒業式。

三月三十日

(金) 豊和重工に行き、工場長と配置転換につき交渉したるも妥協つかず。蒙古徳王より勤労学徒に牛肉配給。

四月

四月 二日

四月 七日

四月十九日

四月二三日

四月二十九日

△三月の空襲の記事は四、八、十、十一、十二、十四、十五、十七、十八、十九、二十、二十一、二十四、二十八、二十九日に。三月十日B 29一三十機、帝都の夜間爆撃は、最初のもの。深川、荒川、本所、日本橋等灰燼、罹災者は勿論相当の死傷者らしい。と記るされている。▽

(月) 晴 午前二時より五時近くまでB 29一機又は二機宛吉祥寺・三鷹・田無方面へ時限爆弾。午前五時半ごろより正午まで爆発、驚かさる。

(出) 快晴 午前九時から十一時、B 29を主隊としてP 51初見参。百機内外が明星学園の上空を大編隊にて飛行。高射砲の破片多数グラウンドに落下す。

(休) 晴 B 29三機とP 51二十機。P 51の機銃掃射、新校舎に一発当る。

(月) 晴 豊和重工の学徒の配置転換は不可能となったこと話す。学徒たちがっかりす。

(日) 天長節儀式挙行。豊和重工と船舶無線に動員されている学徒来会、全生徒顔を合わすこととした。

五月

五月二六日

△四月の空襲の記事、二、三、四、五、六、七、九、十、十二、十三、十四、十六、十七、十九、二二、二四、二八、三十日に記載されている。▽

五月 一日以後、右のような空襲の状況並に事項の記事断続す。

(出) 小雨、曇、晴 昨夜十時十分B 29一機又は少数機の波状攻撃。明星学園の上空を通過せるもの全部で四百機位。阿佐ヶ谷・高円寺・帝都井の頭沿線に広範囲に焼夷弾による火災発生。停電となりラヂオ止まり様子不明。

八時半生徒登校。一年八十名中三五名。二年五十名中十八名。阿佐谷の松田の家全焼、横川氏(教師)宅は奇蹟的に無事。船山氏(教師)宅不明、案ぜられる。荻窪駅以東中央線不通。帝都井の頭線も不通。豊和重工業本館焼失、倉庫、更衣室も半潰、停電のため作業中止。動員学徒帰宅せりとのこと藤本来校されて知る。

三鷹航空・正田飛行機・日本無線にも焼夷弾落下せるも消火したとのこと。なお新川方面若干焼失。空襲が漸次明星学園にも近づきつゝ、あるを感じる。

(四) 赤井学園長の実母、新宿にて空襲をうけ窒息死。戦災全焼生徒、可なり多く出るようだ。

五月二七日

六月

六月の日記も空襲状況を始め、いままでのような事項の継続である。

七月

七月 一日

(ロ) 曇 本日より豊和、第一軍需工廠と併合。特別幹部候補生・少年航空兵・幼年学校志願者の書類作製。転入・転出生徒の取扱、多忙を極む。

七月十七日

(ハ) 最近、艦載機・B 29・P 51・艦砲射撃・中小都市爆撃・伝单落下・「常在警報」記載に堪へず。(この記事から七月の空襲、その他戦事下の状況推測できるので十八日以后省略す。)

七月十八日

(ニ) 学校農場のジャガイモ盗まれる。一畑収穫して生徒に分配。

七月十九日

(ホ) 学校農場の人参収穫し生徒に分配す。

八月

八月 四日

(ヒ) 暑し 豊和の生徒全員を学校に召集し、軍に供出する銃器手入れと員数調べ。

八月 七日

(フ) 晴 七回卒業生恩地昌郎、昨朝、P 51編隊の機銃掃射に厚木の望楼上で戦死。

八月 九日

(ヘ) 暑気甚し 日ソ開戦。六日広島市原子爆弾で死者一五万。

八月十二日

(ト) 暑気甚し 昨日辺りより敵機来たらず、気味悪し……………。銃器買上、供出検査官来校。

八月十四日

(ク) 曇 二年生以上登校。東部第一七部隊へ銃器運搬。

八月十五日

(外) 曇 昨夜七時ラヂオ報道后放送なし。無気味なり。昨夜九時報道（原子バクダンに関するトルーマン発表）前后——明日正午重大ナル発表ノ放送がアリマス——と伝う。

昨夜九時半警戒警報、十時半空襲警報、B 29大挙来襲——午前三時解除。今朝六時警戒警報発令直ちに空襲警報。艦載機三つの波。延一九十機。八時前空襲解除。

報道に曰く「本日正午大詔が渙発サレマス。天皇陛下御自ラ御放送ヲ御行ハセラレマス。有難き御放送ハ正午デアリマス」。

正午。戸塚君（教師）と二人で御放送を謹聴。正午を境として旧日本を送り新日本を迎う。しかもこの新日本は忍従・苦難・末速きイバラの道。屈辱終に大日本帝国は戦に敗れたり。

原子爆弾の出現とソ聯の対日宣戦は急速に……………停戦へ。聖断下る。

(内) 国粹聯盟の連中の首相邸焼打ち。現地軍の不承知。海軍航空隊の戦闘中止を肯ぜざる等。色々のデマ乱れ飛ぶ。明治維新前後を思わせる。

八月一六日

豊和重工、一六・一七・一八の三日間、学徒家庭に待機。船舶無線は一六・一七の二日間家庭待機。一・二年生のみ暫く作業を続けることにす。

——以下省略す（・・・傍点のところ、加筆）——

(3) 学徒動員日誌（明星学園）

——明星学園中等部の学徒勤労働員 一九年に「学徒勤労働員」が発令され、明星学園の中・女学部の三・四・五年生は、学業を放棄し、豊和重工業・昭和飛行機・船舶無線・千代田光学・三鷹航空等で、また拝島・西八王子で農作業に挺身した。これは豊和重工業勤労働員における動員日誌から左の記事を抜粋する。——

昭和一九年

五月 四日

(休) 五年生二五名、北多摩郡田無下向台一〇一〇の豊和重工業株式会社東京工場に出勤内定書来る。

五月二五日

(休) 晴 付添上田八一郎、入所式十時 工場朝礼場にて式挙行。

(式次第)

- 一 工場長に敬礼
 - 二 国旗掲揚
 - 三 君が代奉唱一回
 - 四 明治神宮遙拝
 - 五 宮城遙拝
 - 六 祈念
 - 七 詔書奉読
 - 八 工場長挨拶
 - 九 来賓訓辞
 - 十 学徒代表宣誓
 - 一一 聖寿万歳
 - 一二 解散
- 宣誓 決戦ノ現段階ニ即応シ吾等二五名ノ学徒ハ尽忠ノ至誠ヲ結集シ、勤勞ニ挺身以テ戦力ノ増強ニ邁進セムコトヲ期ス

昭和一九年五月二五日

明星学園中学校勤勞報国際隊

代表 石橋敏男

昼食後、靴貸与、工場案内、タイムレコード、食券の取扱、ソノ他諸注意(勞務課安達氏)。二時半より監督官陸軍少尉上柳昇平氏より約一時間半に亘り、工場内に於ける勤勞学徒の態度につき諸注意。

(録) 晴 付添 上田八一郎

五月二六日

本日より六時五十分境駅前集合とす。六時五五分出発、七時二十分入門。七時二五分朝礼場に集合。七時半朝礼。

(六月一日まで勤務内容についてのオリエンテーションがある。実務を始めたのは六月十二日)

主な仕事は一、ヤスリ仕上げ 二、フライス盤 三、ノコ盤 四、研磨盤 五、材料運搬等。勤務時間七時半より午後五時まで。

(日曜日も出勤)

七月二日

(金) 雨 付添 上田八一郎

三・四年生入所式、雨のため青年学校教室にて挙行。来賓動員署長代理、警察所長代理、式次第は五年生入所式に同じ。

七月二三日

(出) 付添 横川尚

三・四年生基礎教育第一日、付添の横川尚に公用の報あり(召集令状か?)二時帰宅されたるにつき横川君に代つて上田記録す。停電のため五年作業出来ず、防空施設の手伝をす。三・四年生は予定通り基礎教育進行す。

八月 三日

(休) 晴 付添 上田八一郎

昼食后、五年生を集め入所当時の気持を保持し現場全般に清新の気を横溢せしむること。

尚、やがて、現場に出動する三・四年生に対し先輩としての好模範を示すよう注意す。

工場側に対し、医務室整備と待避濠完備とを要求す。

豊和重工のこのあとの状況については、動員日記と学校日誌によると次のような経過である。

八月の後半ごろから学徒の手待ち時間が多くなり色々の故障が発生。

二十年の二月には機械部門が二交代制になったこと、三月に学徒の学校工場への配置転換交渉も空襲のため延期、四月二三日に至って不可能となる。

(金) 夜の空襲で豊和重工の本館・倉庫全焼更衣室半焼、停電のため作業出来ず学徒帰宅。

(出) 電気まだ駄目、学徒は防空壕掘り、

(回) 本日より豊和と第一軍需工廠併合

昭和二十年

五月二五日

六月 二日

七月 一日

七月二六日

(木) 豊和、第一軍需工廠第二五支廠として出発、一部浅川へ疎開。

八月に入り戦局いよいよ重大化し、学徒の戦闘隊編成の動きも出てき、学校教練の銃器を東部第一七部隊へ出すことになる。

八月 四日

(土) 豊和の学徒を全員、学校に召集し銃器の手入れ、員数調べをした。

八月十五日の終戦の翌一六日、豊和は一六、一七、一八日の三日間、学徒は家庭に待機となる。

(4) 保護者への「お知らせ」

——明星学園初等部父兄へのお知らせ——

非常時対策 (一九・一一・二四)

——防空壕・非常用食料——

去る二一日(一九年十一月)父兄会に於てご懇談申し上げました防空設備その他の非常時対策については即刻着手いたします。

待避壕整備については別項のとおり資材集荷および運送の方法により即行、今月中に完成の予定でありますからご協力願います。新しい壕も相当増設される上に、主労働力は六年生中心の子供相手のこととて相当困難を覚悟しております。については全職員陣頭指揮のため手が廻りかねますので、今月中は、四・三・二・一年は授業は午前中に帰宅させ、午後は防空施設に専念いたしますから、低学年の家庭学習の方は学校指示に基づき然るべくご誘導願います。なお待避壕一とおり完成の上は、三日間の授業休止期間をおき、この機会を勤労児童の休養、校舎内外の整備、職員各自の家庭および身の整理に充当し、心静かに来るべきものに備えることにしました。

非常用食料品については、先般も申し上げましたし、父兄会席上でもご了解いただきましたとおり、児童一名につき米を二合、豆一合、ウドン粉飯茶碗に一杯宛供出を願います。ただし豆、ウドン粉は都より未配給の向きに於てお手持ちなき方は、ご入手のあとでよろしゅうございます。

○第一次待避壕掩盖用材料供出計画

一 供出期間 一月二八日まで学校に

二 供出材規格

イ、材質は何にてもよし

ロ、長さと形

・丸太、角材、たるき、ぬき、板片、その他何にても可。

・なるべく六尺以上のもの、板片は二尺五寸以上。

・石油箱、林檎箱等は分解して板に。

・竹材直径二寸以上なら可。

三 持寄搬入方法（バケツリレー方式）

・児童非常徒歩の帰宅の逆コース基本。

□印のお宅へ持ちよる。

・最終班は学校へ搬入。

・量が「手車」一杯以上になった場合、逡送回送を増す。

四 班別と運搬担当者

五 運搬具、運搬担当者の都合で期間内に完了不能の場合は学校と協議願います

明星学園 初等部

保護者様

(5) 戦線への慰問文と戦線からの返礼(明星学園)

澤庵を送りたい——昭和一五・二・一——

六年 成田 幸子

内地は毎日々々青空続きでお天気です。その青空の下に私達は元気よく体操をしたり勉強をしたりして暮して居ります。

内地ではまだ雪が降りません。いつもならばもう雪が降っていますが、今年はまだちつとも降りません。私も叔父ちやまが昨年病気で内地へ帰っていらつしやいました。叔父ちやまのお話ではあまり戦地が寒いので口から吐く息気が氷つてしまふそうですね。

温かなお汁で御飯を食べる時にはあゝ此のお汁を兵隊さんに食べさせたいな—と思います。此の間ニュースで兵隊さんがとても、澤庵を食べたいと言っているのを見ました。でも澤庵の罐詰がないから戦地に送ることが出来ないでせう。若しも、届けたらどんなにかと思ひます。私はその日はそんな事ばかり考へて寝ました。

そしたら夢にこんな事がありました。「それはね、私が道を歩いてゐると、山のような澤庵の罐詰が

あります。それを戦地に送るのだと人々が言っているのです。私はもう嬉しくて飛廻った夢を見ましたが、夢ではなんにもなりませんね。」

夢で御めんない。

北支北満の兵隊さんへ——昭和一五年・一・二五——

六年 宮原昭二

兵隊さん紀元二千六百年の新年おめでたう。と言つても此の手紙の届く頃はもう僕達は小学校を巣立ち中学校へ入る頃でせうか。

「肩を並べて兄さんと」といふ歌の様に安心して勉強出来るのも兵隊さん方のお蔭です。有難う御座います。東京は此の頃やつと冬らしくなりました。それでも零下六・七度しか下りません。遠く北満・北支の兵隊さんのことを思へばこの位のことは何でもありません。

国内では今阿部内閣が総辞職の決意を発表し近衛さんが国民から胴上げされてゐますが「ならない」と固く言つてゐますので誰がなるか？です。大相撲春場所は今日で四日目です。東西制になりましたので興味が深くなりました。双葉は依然として動かず全勝です。外に男女の川。新大関羽黒山。五ツ島新入幕九ヶ錦等も全勝です。得点合計四八対四八で同点です。僕は東の方が好きです。

東京は今節米時代でデパートの御飯も前の半分位になっています。家では一升につき二合位麦を入れてゐます。

世界の様子は新聞やニュースに依りますと、英佛と獨は依然として、マヂノ・ジークフリード線でのにらみ合ひです。

又フィンランドはソビエトを押し捲くつてソビエト内に侵入してゐます。実に愉快です。

近く新南京政府が成立することです。

では呉々も御体に気を付け軍務にお励み下さい。ではお元気で。さようなら。

私の願い

六年 横川 春子

此の寒空に兵隊さんはどんな生活をしていらつしやるだらう。雪の中に入つて震えながら夜を過ごすのかしらと思ふと居ても立つても居られないほど心配です。どうしてこんなに心配になるのだらうか。それは日本人は誰も日本魂と言ふ物が有るからだらう。

私は顔も名前も何も知らない白衣の勇士を見ると何だか心の緊張をおぼえる。それはきつと兵隊さんに何か慰めてやりたい願が私と兵隊さんを繋いでゐるのだらう。

戦線からの返札

此子園の答へ

大変や悪汁が飲したか夢を元氣に合男女中學生として
新し記章や制服に希望に満ちた樂し、日を勉強に専ん
や居られるのよしやう

艦中下階の船室に於ける海軍にも振らぞ此地到
着以来早も五月月、あつた若輩は前より四月雷降下の
大地に日裡元氣な此中、は精勵勤し居りゆき使わら
ず男心をなす

昨日と別れ、この終なき慰問もや、激勵の名文を感
激、勤し居りゆき

後、この居ると、昔しからの旅、行の事や、年季の中、大規模や、
心を健進、若きを旅、行をしなうなる、なうて、甲斐に、候し、かつ、
た、り、し、ね

早速、お前も、と思つて、さう、後、一、物、な、は、あ、か、ま、た、お、う、た、か、い、
英、礼、に、向、し、た、甲、許、し、た、ま、い、之、か、ら、は、お、お、あ、り、ま、す、御、り、御、り、御、り、御、り、

2、当時の新聞記事から

『代用食・食べ方いろいろ』 トウモロコシ、甘藷、大豆、野草

昭和二〇年七月五日（朝日新聞）

食べにくいものをどうしたら食べやすくなるかを工夫せねばならない。

△トウモロコシ▽

長く煮ることが第一です。何とか燃料を工面して、とろ火で二時間以上煮ること、煮る前に水に十時間位つけておくことが必要です。急ぐときはすぐ煮てもよいが三時間位かかる。つまり水につけるのは火の節約になるのです。かうして煮たのを御飯にたき込むと味はずつとよくなる。すり鉢で潰して、そのまま塩味の団子にしてもうまく、黄粉をつけるとなほうまいし、油でいためるとさらに味がいい、小麦粉一、二割を加えて団子にし油でいため黄粉をつけたものは最も優秀だ。又小麦粉を半分以上ませ重曹と酢を少々入れて蒸しパンも作れる。

△大豆▽

飯にまぜてたく時、まず煎ってまだ熱いうちに水に投込んでジュンといはせることが秘訣だ。熱いのが急に水につけられた時、組織が破壊されて非常に柔くなる。どの家でもやっている煎豆、あれ

はまづ夏で四時間、冬で八時間位水にひたした後、強火で煎る、この際ほうろくではだめで金網に入れて煎るのである。金網で強火で煎ることが必要で、これだと老人にも食べられる程柔かくなる。ただこの方法の欠点は、燃料が余計いることです。生の大豆粉、これは一番仕末が悪いが、よく乾燥するか、冷くしてよく砕いて小麦粉をまぜてむしパンやホットケーキをつくるのだが、これも小麦粉が必要となる。

△甘藷▽

そのままでも結構な代用食だが、これの切干し、切干しにもむし切干しと普通の切干しの二通りある。むし切干しは、そのままでもうまく、あぶつて食べばさらに甘い、ただの切干しの方は、飯にたき込むがこれではさっぱり甘味がない、折角の甘藷の甘味をなくしてたべたのでは勿体ないので、次のやうにすればよい。

まづ、よく乾燥して出来るだけ細かい粉にして団子にするととても甘い、このときさらにうまくするには、粉をねる場合に水でねらないで湯でねること、また粉をねるとき臼でつくとも最もうまく出来る。

△野草▽

タンポポ、はこべ、よもぎ、あかぎ、いたどり、など三百八十八種類に上る食糧野草がある。粉化をすることを勧奨したい。粉化以外で食べる時は、一般に固くアクが強いからゆでて水につけアク抜きをすることが大切です。

《その他》

芋の葉、つる。桑の葉、芋粕、豆粕。

『団栗』はいまが最盛期

児童と父兄に呼かく

昭和一九年十一月三十日読売報知〔三多摩〕

決戦下、重要な物資団栗は、都関係の国民学校児童が昨年二千七百石を拾い集めているが、六十七%が北郡下の戦果で、なほ本年度軍需省の樹実採取目標によると都へ三万五千石を割当られ各国民学校全力をあげている。

向ふ十日間が採取の最盛期で児童の中には、ややだれ気味もみられるので、北郡地方事務所教育課では、廿日一時からの校長会席上、横山課長から団栗拾ひの総突撃を展開することを指示し一般父兄と学童に呼びかけることになった。

『松根油を採れ』

昭和一九年十一月二九日（三多摩）

松根油の大量供出につき、都農業会経済部でも指示にもとづき三多摩郡市町村農業会に呼びかけ遅くも一月一杯までには、目標二十万貫突破を目指して強力な運動を展開することになり二九日次のポスター一万枚を各部落会に発送した。

『埋れる戦力、松の根掘り出せ』

油がつづかぬと戦争に勝てません、油のきれた飛行機や軍艦は、ただのかざりものと同じことになります。油を断やさずに送ることも銃後の大切な役目です。松の根は、この大切な油を澤山ふくんでいます。飛行機や軍艦を動かす重油やガソリンを含んでいるのです。これを見逃してなるものですか、サア皆さんの『松根』をみんな供出して御国のお役に立てませう。

芋藪や蕨藪等で食用粉

これより早くお米は百選の位上
 食用粉の製造は、芋藪や蕨藪等から抽出する。この食用粉は、お米の代りとして、お粥やお餅などに用いられる。また、お菓子やパンの材料としても、非常に適している。お米の不足を補うため、この食用粉の生産が盛んに行われている。

現代 食べ方いろいろ 玉蜀黍、甘藷、大豆、野草

食生活の多様化に伴い、現代では食べ方がいろいろと変わってきた。玉蜀黍、甘藷、大豆、野草など、昔はあまり食べなかった食材が、今では食卓に欠かせないものとなっている。これらの食材は、栄養豊富で、健康に良い。また、調理法も多岐にわたる。例えば、玉蜀黍は炊いたり、揚げたり、甘藷は煮たり、大豆は煮たり、野草は炒めたり、など。食生活の多様化は、健康と幸福の鍵である。

その名も「北極兵隊」

北極兵隊の物語は、多くの人々に愛されている。その名も「北極兵隊」である。この物語は、北極圏での探検隊の冒険を描いている。隊員たちは、極寒の環境の中で、生き残り、探検を成功させる。この物語は、勇気と友情、そして探検の精神を伝える。多くの人々に愛されている理由がある。それは、北極兵隊の物語が、私たちの心に勇気と希望を注入してくれるからだ。

昭和二十年七月五日（朝日新聞）

「團栗」はいまが最盛期

児童と父兄に 呼かく

以下調査の結果、團栗は、團栗の
 団栗は、毎年三月五日左右に
 収穫されてゐるが、六十ではなほ
 収穫が盛んである。これは、団栗の
 団栗は、毎年三月五日左右に
 収穫されてゐるが、六十ではなほ
 収穫が盛んである。これは、団栗の
 団栗は、毎年三月五日左右に
 収穫されてゐるが、六十ではなほ
 収穫が盛んである。これは、団栗の

松根油を採れ

調査でも十分に採れる上、多摩郡
 市町村農業會に採り取り、一月
 二月にわたって、団栗の採り取りを
 目標として、団栗の採り取りを
 とになり、廿九日次の水スキー
 団栗を各地に採り取りした
 採り取りの能力、松の採り取りは、
 油がついとかねと採り取りしてま
 ん、油のきれいな採り取りや採り
 たりの採り取りの採り取りと採り
 なります。油の採り取りと採り
 ることも採り取りの採り取りと採り
 採り取りの採り取りの採り取りと採り
 くんたあま、採り取りの採り取り
 採り取りの採り取りの採り取りと採り
 なるのですか、採り取りの採り取り

採り取りと採り

採り取りの採り

採り取りの採り

採り取りの採り

採り取りの採り

採り取りの採り

採り取りの採り

採り取りの採り

採り取りの採り

採り取りの採り

採り取りの採り

採り取りの採り

採り取りの採り

採り取りの採り

採り取りの採り

採り取りの採り

採り取りの採り

採り取りの採り

昭和十九年十一月三十日 (読売報知多摩版)

3、カルタに見る『戦争と平和』

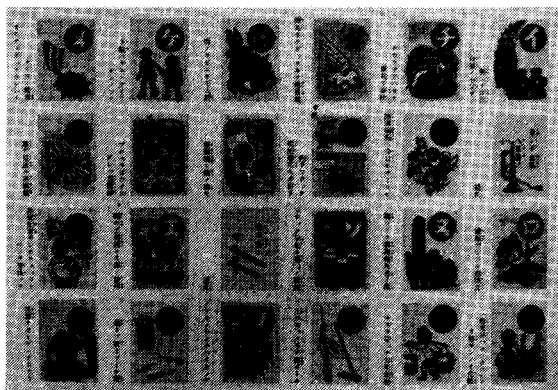
低学年用

(1) 愛国コドモカルタ

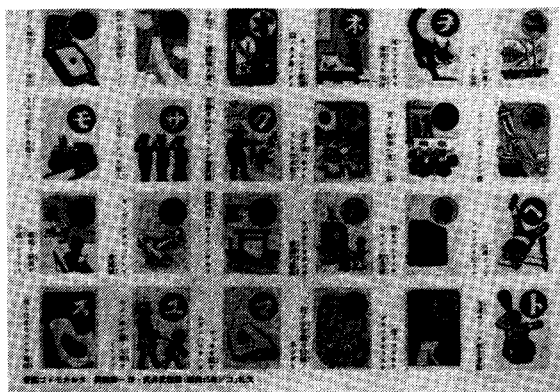
○ 與田準一 作
○ 武井武雄 画
○ 昭和十五年

い 勇んで出征八百屋のおじさん
ろ 炉ばたでつづる慰問文
は 「舶来品はよしたわ」とお姉さんのお化粧
に ニュース映画で父さんと面会
ほ ほまれの家になびく旗
へ 兵隊ごっこころんでも泣くな
と 友達さそつて献金運動
ち 力をあわせて麦刈り奉仕
り 陸軍病院へ今日もおみまい
ぬ ぬかずに参拝戦死者の墓

るすを守って少年魚屋
 を尾をふりながら軍用犬も出征
 わ笑って戦地へ笑わし隊
 か買いいいやめてじまんの貯金箱
 よ夜のまだからあかりをもらすな
 た弾丸をくぐってきた伝書ぽと
 れ列をつくって明治神宮へお祈り
 そそろって早起き第二の国民
 つ土を堀った手で銃をとる
 ね熱心な勉強国のため身のため
 ななきむしはきらいみんな日本男子
 らラジオでおぼえた愛国行進曲
 む村の少年団が田植の手つだい
 う馬のくびにも千人針
 ゐいもん袋にぼくの絵も
 の乗りものやめてハイキング



お お母さんは国防婦人会へ
 く 空襲だ砂だマスクだ警防団
 や やすくに神社はサクラのさかり
 ま マッチも紙もむだには使わぬ
 け ゲタバき ス・フ入りなんのその
 ふ プロペラがうなるあれはアラワシ隊
 こ 欠札
 え 駅々でバンザイとお茶の接待
 て 鉄くず紙くず みな たから
 あ あおげ富士山ほくらのノゾミ
 さ 三人兄弟そろって軍人
 き 銀紙がたまつて飛ぶ愛国号
 ゆ 夢の中でテキの大將をいけどり
 め メイヨのクン章オモチャだつてうれしい
 み 港で見送る軍艦旗
 し 新聞記者さんもリュックとペンをせおつて



あ え顔もヒゲの中から
ひ 日の丸べんとうおいしいべんとう
も 木炭自動車も食糧を運ぶ
せ 戦地と銃後で手紙のやりとり
す 進む日本かがやく地球

(2) 三鷹平和カルタ

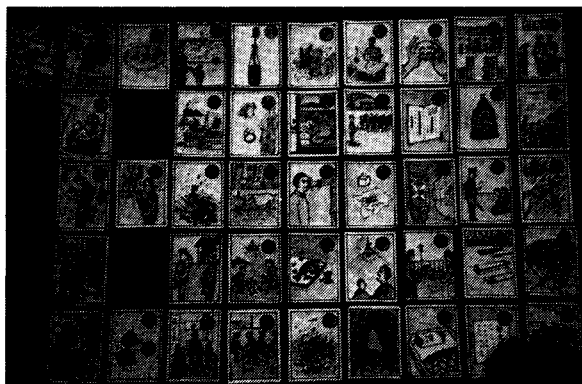
○作製 轍(わだち)の会編
○監修 川村善二郎
○昭和六十年十二月完成

(このカルタは東社会教育会館の歴史講座から出発した市民グループ「わだちの会」のメンバーが平和を願って作ったものです。)

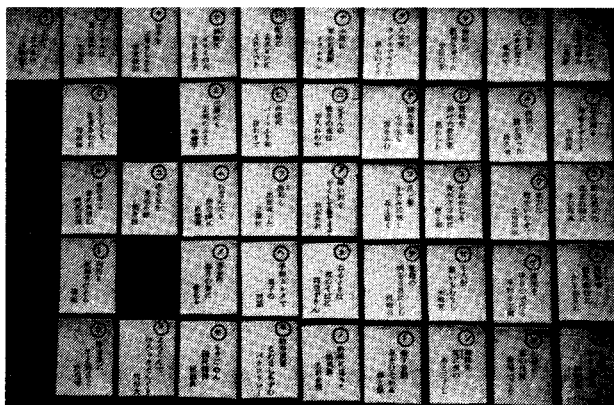
あ あいついで遺骨で帰る三鷹駅
い 芋を掘る母あとずさり不発弾
う 飢え死にの兵士の胸に子の写真
え 掩体壕勤労奉仕にかり出され
お 大沢に今でも残る陣地跡
か 学校を兵舎に使う戦時中

(仮祝言あげて夫は出征し)

き 供出の鐘が戻った長久寺
く 軍刀にものをいわせて土地買収
け 憲法を守りつづける平和な三鷹
こ 公園の杉の伐採棺桶かへづくり
さ 残留の孤児を育てた中国の愛
し 侵略を助けた教科書墨ぬられ
す すねかじる我が子学徒に銃と剣
せ 千人針願ねざしいもむなし夫戦死
そ 疎開先 枕まくらに涙のあと三すじ
た 大本営ラジオでうその勝ちいくさ
ち 調布基地小学生も雪をふむ
つ (ちりぢりの家族をさがす東京空襲)
爪と髪かたみに残し兵士逝ゆく
て 電燈の明るさ目にしむ終戦日
と 燈火管制息をころして顔と顔



な 中原に軍の貯蔵庫ドラムカン
 に 兄さんの戦死の夜は押入れの中
 む 縫い針をなくしてあやまる兵ぶたれ
 (縫う指に無事を祈願のお守り袋)
 ね ねる時は枕のそばに防空ずきん
 の 野崎に落ちた焼夷弾五軒全焼
 は 配給の玄米ビンに入れてつき
 ひ 非国民パーマふり袖指わまで
 ふ 豚殺し出征祝った三鷹村^{ぶた}
 へ 平和カルタで親子の対話
 ほ 防空演習こわさしらずのバケツリレー
 (防空壕一般市民は後まわし)
 ま 舞鶴にダモイの夫今日も見ず^{まいづる}
 み 三鷹にも工場のふえた戦時中
 む むざんにも防空壕に直撃弾
 め 目と鼻と耳をふさいで待避壕



(面会所臨月の妻に敬礼し)

も もうごめん国民精神総動員

や 焼き芋を三等分したる学童疎開

ゆ ゆく兄を見送る妹挺身隊

よ よろこんでひろったどんぐり代用食

ら ラーゲルは雪の荒野の生地獄

り りりしくも若者あわれ特攻隊

る 留守守る妻に無情の戦死公報

れ 列つくり配給受けとる隣組

ろ 路地裏に芋と南瓜と防空壕

わ わ忘れてならない原爆投下

(以上四十四首)

※会員のほか一般の方からの投稿が十五名ありました。そのままの形で採用したものは二首(や・ひ)だけでしたが同じ意味の句は一部分を活用させていただきました。

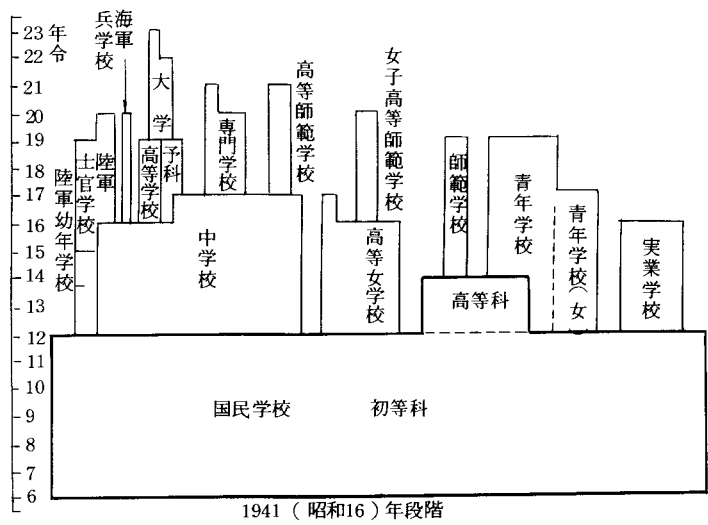
え 掩体壕——大砲や飛行機などをかくしておくあな
ほ 防空壕——飛行機の銃爆撃をさけるためのほらあな
せ 千人針——兵隊にいく人のために女の千人が白地の布に赤糸の玉を針でぬったもの、これを腹にまいていと弾
よけになるといわれていた
ま ダモイ——ソ連の抑留生活が終つて日本の故国に帰ること
そ 疎開——戦争中空襲をさけるために都会からいなかへのがれ住んだこと
ゆ 挺身隊——戦争中まだ学生だった者が進んで働きに出ること
と 燈火管制——飛行機の爆撃目標にならないよう電灯を暗くすること
の 焼夷弾——建物などを焼きはらうための爆弾
ら ラーゲル——ソ連の強制労働者収容所のこと
た 大本営——最高の戦争指導者会議をするところ

☆カルタ選定の基準

- 一、平和の願い（尊さ）を表わすもの
- 二、戦争の悲惨さを表わすもの
- 三、地域の特色を表わすもの
- 四、若い世代に理解（共感）されるもの

4、その他

(1) 戦時下の学校系統図



(2) 戦時下の町内会

『終戦前後の町内会役員』

『野崎地区』

- ① 町内会長
- ② 副会長・庶務部長
- ③ 副会長・神社部長
- ④ 経済部長・神社副部長
- ⑤ 貯蓄納税部長・神社部委員
- ⑥ 防務軍事援護部長
- ⑦ 健民部長・防空班長
- ⑧ 婦人部長（女性）
- ⑨ 会計部長
- ⑩ 会計部委員・防空班長

昭和一九年三月
調査 榛澤茂量

吉野 奥次郎
吉野
吉野 英一
本多 金市
吉野 関太郎
吉野
島村 佐市
吉野（女性）
吉野 泰三
菅野 幸五郎

- ① 會計部委員・貯蓄納税部委員
- ② 健民部委員・貯蓄納税部委員
- ③ 青少年部委員
- ④ 〃
- ⑤ 〃
- ⑥ 庶務部委員・神社部委員
- ⑦ 兵事部委員・神社部委員
- ⑧ 神社部副部長
- ⑨ 神社部委員・會計監事
- ⑩ 經濟部委員・防空指導部委員
- ⑪ 經濟部委員
- ⑫ 經濟部委員・健民部委員
- ⑬ 貯蓄納税部委員
- ⑭ 〃
- ⑮ 警防委員
- ⑯ 防空指導部委員
- ⑰ 兵事部委員

吉野七郎	吉野太郎	吉野(女性)	吉野(女性)	穴戸(女性)	島村伊太郎	穴戸幸七	淺野軍次郎	石井只且	白井誠一	清木正七	吉野由岐郎	吉野新八	穴戸清藏	吉野次郎吉	穴戸亥藏
------	------	--------	--------	--------	-------	------	-------	------	------	------	-------	------	------	-------	------

②6 郷軍委員・奉仕部委員

②7 奉仕部委員

②8 //

②9 婦人部委員

③0 //

③1 //

③2 防空班長

③3 会計監事

吉野喜市	本多金松	本多愛子	吉野イツ	吉野艶子	吉野一夫	榎本秀次郎	吉野宇一
------	------	------	------	------	------	-------	------

(3) 武蔵野新聞連載記事から

三鷹の歴史

三鷹をめぐる多摩の歩み

穴戸幸七

昭和一九年B二九空襲が始まる

昭和一九年初の三鷹町の人口は四九、五六三である。一月二三日下連雀の万助橋近くにあった三鷹

第一国民学校の分教場が三鷹町第四国民学校として開校する。二月一日には小平村が町制をしいて町となる。四月には立川市に立川税務署が設置される。従来三多摩における国税事務は、八王子一カ所であつて、三鷹地方の者も八王子税務署の管下にあつたのが、三多摩が軍需工場地帯化し、人口と職場が増加してきたため、立川に新税務署が設置され、北多摩郡の国税事務を八王子税務署から移管する。

戦局の窮迫に伴つて学徒総動員は強化され、学徒のみならず学校施設も軍事に転用されている。三月二十二日には小平の津田英学塾の生徒控室と体育館が工場に転化し、日立製作所の作業が開始される。六月には武蔵野町吉祥寺の成蹊学園においても体育館が学校工場に転用される。

七月十六日、日本軍の南方最重要基地であるサイパン島が陥落し日本人の居留民は婦女子まで海に身を投じて玉砕した報に接する。東京空襲はいよいよ接近してきたことが痛感されてくる。翌十七日には東京市内の小学生が集団疎開することに決定され、翌十八日には開戦の責任者東条内閣が重大時局の責任を負つて総辞職する。

九月には満十七歳以上の男子が兵役に編入される。井の頭公園に接する日産厚生園および三鷹町西部の第二国民学校に特設警備部隊が配置される。さる四月調布多摩川原の大映撮影所内に東部一三、三三〇部隊という特別部隊が設置されたが、その支所ともいふべき中隊である。この部隊は多摩川北部の軍事施設に対する警備を目的とするもので、土地の未召集者を随時召集して配置した。日産厚生

園の中隊は武蔵野町民を主とする部隊で中島飛行機工場の警備を目的とし、第二国民学校の中隊は三鷹町民の未召集者を召集し、調布飛行場の警備を主目的とした。

十一月二十四日午後三時頃である。私はこの警備召集によって第二国民学校の校庭で訓練を受けていた。すると突如として西方より敵機らしい大編隊が爆音高く姿を現し、みる間に東北方に去つたと思ふ間もなく、濛々たる黒煙が立ち上がり、殆んど同時に豪音と激しい震動が伴つてきた。これは過日奪取したサイパン島を基地として発進した米軍の重爆B 29爆撃隊による初めての本土大空襲であつて、その鋒先がわが国飛行機製作の重要拠点である武蔵野町関前の中島飛行機武蔵野製作所に向けられたのである。初めての空襲で空襲警報も間に合わず、爆撃が終つてから空襲警報が出た始末。中島飛行機では多数の死傷者を出した。これより連日B 29の大編隊により中島飛行機に対する爆撃が続き、町の人びとは毎日空襲警報におびやかされるようになる。十二月には立川・武蔵野・三鷹・田無・保谷が疎開地域に追加指定される。

樹木金属類の供出が強化され井の頭公園も裸になった。井の頭公園は明治十五年に水源確保の目的で多数の杉が植林され、これが井の頭公園の幽すいさを保つていたのであるが、供出により殆んど伐採され、池は丸裸にされた。町の人はこれを木材不足のため死者の棺桶（かんおけ）を作るための供出だと噂する。この頃より都下の杉、樺、榿等また各家庭の金物トタンべいまで強制的に伐採されるいは供出が始まる。稲城村の多摩川梨畑も強制伐木を命ぜられ、戦前の十分の一となる。高尾山、

御獄山の登山鉄道ケーブルのレールも撤去される。

作家の吉川英治氏が奥多摩の吉野村に、俳人水原秋桜子が八王子市に、経済学者大内兵衛、美濃部亮吉、有沢広巳、荒川実蔵氏らが元八王子村に疎開してくる。一般の男子は殆んど頭髪を斬ってイカグリ頭となる。背広や和服の姿はなくなり、カーキ色の国防服にゲートル、戦闘帽の姿となる。どこの家にも防空壕が整備される。

民間飛行場として出発した調布飛行場も、陸軍特別攻撃隊震天制空場の基地となり、敵機襲来と共に隼戦闘機隊が迎撃して飛び立つ。天文台東側の羽沢台地、武蔵境の南方（日赤病院の場所）その他各地に高射砲陣地が構築される。

昭和二十年終戦

二月一日 前夜より雪が降り続く。空襲もなく久しぶりに静かな夜、夜半かすかに半鐘がなる。南方天文台の方角少し明るい。夜が明けてより天文台の本館が全焼したことを知る。降りしきる雪のため近所でも殆ど知る者が無い。

二月十六日 米軍機動隊による艦載機鹿島灘より侵入し、機銃掃射を始める。

二月二十九日 午後三鷹町大沢から神代村、中央航空研究所、新川へかけてB二九の爆撃を受ける。畑の中に点々と爆弾が落下する。新川の元名主で「玄関」といわれていた町長の高橋勝義氏の自宅もこの直撃弾を受けて飛散する。

三月三日 祖父の葬式なれど、今日も艦載機の空襲にてなかなか出棺出来ず。

三月十日 夜半東京に大空襲。主として本所、深川の下町方面一帯にB29の一三〇機の大編隊による無差別じゅたん大爆撃が行われた。このため三鷹町東方一帯の夜空は真赤となり、三鷹町の暗夜は明るくなり、家々のガラス窓は赤く照り輝く。焼失家屋二十三万余戸、死傷者十二万、罹災者百余万といわれた。

三月十四日 国民学校の初等科を除き、学校の授業が一カ年停止となる。

三月十七日 硫黄島の日本軍玉砕する。

三月 成蹊学園に陸軍航空本部、本土空襲はいよいよ激化され、成蹊学園では本館初め多くの施設が陸軍航空本部に使用されることとなる。軍の倉庫や宿舎のバラックが建設される。本館と理科館の地下には縦横に待避壕が掘りめぐらされる。前庭にも防空壕が構築され、空地はほとんどいも畑となっている。(成蹊学園五十年のあゆみ)。

四月一日 沖繩本島に米軍一万八千上陸開始する。

四月 各家庭に対し各町内会を通じ、高射砲防備用材として樺、杉等目通り七寸以上の用材の献納が要求される。また各家庭に飛行機献納のための寄附が要請される。

四月 武蔵野の町役場では役場事務の一部を井の頭に疎開する。三鷹町でもこれにならって疎開の案が出たが中止となる(大野金次郎氏談)。

五月六日 国立の商大専門部寄宿舎に駐屯していた東部第九二部隊が、小平の津田英学塾の校舎と寮に移ってくる。(本部は商大予科)

五月二十日 町内各神社において入敵撃援の祈願祭が執行される。

五月二十五日 夜半より米空軍 B 29 の大編隊による開戦以来最も大規模な東京空襲が行われる。敵機はあとからあとから恰も黒い鳥の如く富士のほうより三鷹の上空を東へ飛んでゆく。そのうち敵機の焼夷弾攻撃は次第に近くなり、焼夷弾の落下するのがよく見えるようになる。高射砲弾の破片がバラバラ落ちてくる。やがて敵機による照明弾が落下され、あたりが白昼のようになる。間もなく上空よりゴォーとしゅう雨のような音がしてきたかと思うと、焼夷弾が雨の如く落下し、あたり一面の樹木に火の花が咲いた。大沢の十字路に近い私の家のあたりから始まって屋敷林の樹森をめぐって野崎の十字路近くまで焼夷弾攻撃を受け、軒並み出火した。続いて新川宿方面もやられる同時に牟礼、井の頭公園およびその付近には時限爆弾が投下された今回の空襲によって皇居も炎上し都内の中心部はほとんど焼野原となる。都民生活も軍需産業も崩潰状態に陥入る。

五月二十九日 各部落に国民義勇隊の小隊が結成される。即ち各隣組が班となり、数班を合わせて分隊を結成、各分隊を合わせて町会を小隊に組織した。各班、分隊ごとに男子隊と女子隊が分れた。更にそれぞれの中から老人や年少者を除き戦闘隊が結成される。小隊は中隊に、中隊は大隊に組織され、これによって三鷹町国民義勇隊が組織された。三鷹町も全町民が挙って戦闘態制に突入した。

六月一日 田無登記所（八王子区裁判所田無出張所）が爆撃によって崩潰したため武蔵野町吉祥寺に武蔵野出張所として開設する。

六月二十一日 沖繩地上部隊が全滅する。

七月十一日 食糧の配給が一割減となる。

この頃敵機より降伏勧告のビラがまかれる。警察からはこのビラ読むべからず、すぐ届けよとの指令がくる。

中小都市に対する爆撃が激化してくる。

八月二日 夜八王子市が敵機B 29により焼夷弾攻撃を受け、市街が全焼する。罹災一万户、死者三

三〇、負傷五〇〇名。

八月六日 広島に原子爆弾投下され、二十万以上の死者が出る。

八月十五日正午 終戦を告げる陛下の詔勅がラジオ放送される。

敗戦の苦しみ始まる

昭和二十年八月十五日正午、終戦を告げる陛下のラジオ放送によって空襲警報はきかれなくなり、全くそのような静けさとなる。

連日連夜、日に何回となく、長い間聞きなれてしまった警戒警報や空襲警報のサイレンが鳴らなく

なると、連続した緊張の生活から解放された何か物足らぬような虚脱感に陥る。

やがて厚木の飛行場に進駐軍が上陸してくる噂が伝わってくる。三鷹町方面にもこれが進駐してくるから婦女子は逃げた方がよいと町民は不安を口にする。

三鷹町役場でも進駐軍が進駐してきて調べられる不安をいだいたものらしい。連日にわたって兵事や警防に関する書類を中心とした各種の文書が焼却された。三鷹の役場では昭和十年におきた火災と今度の文書の焼却によって、各種の貴重な文書が大半焼失してしまった。小金井町役場の兵事主任をしていた鴨下氏は兵事の書類を処分するにしのびず、秘かに自宅へ持ち帰って屋根裏へ保管していたといわれる。これがいまや貴重な資料となっている。

敗戦によって、国民義勇隊の組織や在郷軍人分会も解散する。各軍務組織も解散し、軍需工場は閉鎖となる。召集された者は一人二人と荷物を背負って復員してくる。地方から軍需工場に動員され或は就職してきた人も、各自郷里へ帰ってゆく。戦争末期から三鷹の工場も地方へ疎開していったものもあり、また工場閉鎖による帰郷によって、軍需工場地帯化によって急激に増加した三鷹の人口は昭和十九年十二月四二、〇六三が終戦の昭和二十年八月三十一日には三四、一三四と半年余りで二割も減少していった。

敗戦によって戦時中の精神の緊張を失い、人々は精神的弛緩を生じてきた。軍事施設や軍需工場或は軍用資材の貯蔵所から附近の民家へ或はいずこへか物資や資材が運び去られ、隠とくされていった。

私の家の倉庫には調布飛行場の軍隊によつて多量の貴重な医薬品が保管されていたが、軍医らしい者がトラックで全部持ち去つていった。恐らく自分の家へトラックぐるみ持ち帰つていったものと噂された。五十万坪の敷地を有する大沢の中島飛行機三鷹研究所は富士産業株式会社と改組され、第二次の人員整理を行い、残つた者で航空機の部品を用いマドロスパイプや家庭用手回しの製粉器の生産を始める。三鷹町役場でも、役場の機構改革が考えられ、軍事、兵事、振興の三課を廃して社会課が新設された。

九月十日は村の祭礼の季節である。各神社の祭礼には終戦報告会が行われた。特にこの秋の祭礼は久しぶりにどこも活気にみちみちていた。ながい戦争による空襲と不安の連続から解放された町民たち、特に喜びや楽しみを忘れさせられていた若人たちは、町の祭礼にその爆発を求めた。

町の祭礼には余興がつきもので余興といえ芝居であつた。例年ならば田舎役者を雇つて舞台をつくつて踊らせるのだが勿論出来る時節ではない。そこで各部落の青年たちは自分らで毎夜芝居の稽古を始めた。かくてどこの神社の祭礼も青年の素人芝居によつて久しぶりに平和な村のなごやかさがただよつた。

十一月になると俄然国内の政治活動が活発になつてきた。十一月二日には片山哲氏の総裁によつて日本社会党が、十一月九日には鳩山一郎氏総裁による日本自由党が、同十六日には日本進歩党が、十二月一日には日本共産党、同十八日には日本協同党が結成される。

十一月十一日には選挙法が改正され、男女同権、選挙年齢が従来の二十五歳から二十歳となる。労働組合が盛んに結成され、全国に労働争議が激化してくる。

GHQは日本の民主化のため国家と神道の分離を指令し、学校で修身や地理、歴史を教えることが禁止された。農村の民主化のため農地開放の指令が出される。米作は大凶作だと発表される。臨時軍事費の支出によってインフレが漸次激化し、物価が上がってくる。並木みち子によって「リング可愛や」の歌がうたいまくられる。

(4)米軍機から投下された伝單（宣伝ビラ）

①

日本國民に告ぐ、あなたは、自分や親兄弟友達の命を助けようとは思ひませんか。助けたければこのビラをよく読んで下さい。

数日の内に裏面の都市の内全部若くは若干の都市にある軍事施設を米空軍は爆撃します。この都市には、軍事施設や軍需品を製造する工場があります。軍部がこの勝目のない戦争を長引かせる為に使ふ兵器を米空軍は全部破壊しますけれども爆弾には眼がありませんからどこに落ちるか分かりません。御承知の様に人道主義のアメリカは、罪のない人達を傷つけたくはありませんです

から裏に書いてある都市から避難して下さい。

アメリカの敵はあなた方ではありません。あなた方を戦争に引つ張り込んでゐる軍部こそ敵です。アメリカの考へてゐる平和といふのは、ただ軍部の圧迫からあなた方を解放する事です。さうすればもつとよい新日本が出来上るんです。

戦争を止める様な新指導者を樹てて平和を回復したらどうですか。

この裏に書いてある都市でなくても爆撃されるかも知れませんが、少なくともこの裏に書いてある都市の内必ず全部若くは若干は爆撃します。

予め注意しておきますから裏に書いてある都市から避難して下さい。

②

日本国民に告ぐ。即刻都市より退避せよ。このビラに書いてあることを注意して読みなさい。米国は今や何人もなし得なかつた極めて強力な爆薬を発明するに至つた。今回発明せられた原子爆弾は只その一個を以てしても、優にあの巨大なB 29二千機が一回塔載し得た爆弾に匹敵する。この恐るべき事実は諸君がよく考えなければならぬ事であり我等は誓つてこのことが絶対事実で

あることを保証するものである。我等は今や日本々土に対して此の武器を使用し始めた。若し諸君が尚疑があるならばこの原子爆弾が唯一箇広島に投下された際如何なる状態を惹起したか調べてごらんなさい。

(裏面)

この無益な戦争を長引かせている軍事上の凡ゆる原動力を此の爆弾を以て破壊する前に我等は諸君が此の戦争を止める様陛下に請願することを望む。米国大統領は曩に名譽ある降伏に關する十三ヶ条の概略を諸君に述べたこの条項を承諾しより良い平和を愛好する新日本の建設を開始する様我等は慫慂するものである。諸君は直ちに武力抵抗を中止すべく措置を講ぜねばならぬ。然らざれば我等は断乎この爆弾並びに其の他凡ゆる優秀なる武器を使用し戦争を迅速且つ強力に終結せしむるであろう。即刻都市より退避せよ。

5、年 表

(昭和十二年～二十年)

西曆	一九三七	年号 (昭和) 十二
三鷹村(町)の動き	<p>四、一 三鷹村社会事業助成会 設立</p> <p>八、一 第一師団、「満洲」出動(東京出動将 士後援会の資金募集、三鷹村割当二 〇三七戸・六二一九〇円)</p> <p>九、一 愛国婦人会三鷹村分会設立</p> <p>九、十二 三鷹村へ武運長久祈禱法要を挙行 (井の頭大盛寺)</p> <p>十、十五 飛行機献納動員実施</p> <p>十二 三鷹村国民精神総動員 実行委員会結成</p>	日本と世界の動き
日本と世界の動き	<p>二、二 林銑十郎内閣</p> <p>六、四 第一次近衛文麿内閣</p> <p>七、七 蘆溝橋事件、日中戦争勃 発</p> <p>— 各地で千人針・慰問袋さ かん</p> <p>十一、六 イタリア、日独防共協 定に参加</p> <p>十二、十三 日本軍、南京占領 (大虐殺事件)</p>	

一九三八	十三	日本無線電信電話(株)が移転 中西機械製作所(下連雀) 一、三鷹村仏教会設立 三、二二 下連雀に東三鷹小学校の分教場を定める(現市立第四小学校の前身) 東三鷹尋常高等小学校、二部授業開始	十二、十五 人民戦線事件
一九三九	十四	東邦製作所移転(井口) 四、東邦計器製作所創設 一〇、一 村内東西二学区制を廃止 三、二九 三鷹村警防団設置(消防組を改組) 十五分団六四六名、のち十六分団六七四名	四、一 国家総動員法公布 四、一 中島飛行機、武蔵野製作所を建設(武蔵野町) 七、一一 張鼓峰事件 九、二九 ミュンヘン会談 一〇、二七 日本軍、漢口占領 一、五 平沼騏一郎内閣 五、十二 ノモンハン事件

四、一 国立中央航空研究所開設（新川）	七、八 国民徴用令公布
四、二二 調布飛行場の地鎮祭挙行	八、三〇 阿部信行内閣
六、一六 百億円貯蓄強調週間倍加運動（信用組合団体積立状況、計九二万二一四一円）	九、三 第二次世界大戦勃発
七、十二、十八 防空訓練実施（警防団指導）	十、十八 価格等統制令公布
一〇、五〇十一 銃後後援強化週間	
一〇、二四〇三〇 東京府防空訓練実施	
—— 南工業所（日本無線系）移転	
—— 共栄製作所（中島系）創設	
二、十一 三鷹町制施行（高橋勝義、初代町長に就任）	一、十六 米内光政内閣
八、七 三鷹町隣組防空群訓練（警防団）（八二五、三〇、十、一、五）（十二、一、二防火デー）	七、二二 第二次近衛文麿内閣
	九、二七 日独伊三国軍事同盟調印
一九四〇 十五	

一九四一	十六	一、十六 三鷹駅北口が開設	一〇、十二 大政翼賛会発足
		三、一 立川国民職業指導所三鷹分所設置(一九四二年独立)	十一、一 「紀元二六〇〇年」 祝賀行事
		九四二年独立)	(砂糖、マツチ切符制、 ビール配給制)
		四、三 三鷹町成年団結成	一、十六 大日本青少年団結成
		七、七 大政翼賛会三鷹町支部結成	三、一 国民学校令公布
		七、一 関東軍特別演習の大動員	四、十三 日ソ中立条約調印
		九、一 第三国民学校開設、木造二階十一教室(現在の第三小学校の前身)	四、十六 日米交渉開始
		十二、八 大沢に中島飛行機(株)三鷹研究所の建設開始	六、二二 独ソ戦争勃発
			七、十八 第三次近衛文麿内閣
			九、四 翼賛壯年団結成
			十、十八 東条英機内閣

一九四二	十七	<p>—— 野崎町(内)会—隣組十三</p> <p>三、十一 三鷹町初の警械警報、空襲警報発令</p> <p>四、—— 三鷹町翼賛壮年団結成</p> <p>—— 若尾電気製作所創立(下連雀)</p> <p>—— 川口屋銃器製作所創立(上連雀)</p> <p>—— 軽電気器具製造の工場設立(東邦系)</p> <p>—— 軍需品のゲージ製造工場設立(中島系)</p> <p>九、六 三鷹町防空学校を開催</p> <p>—— 各国民学校で町葬とり行われる</p>	<p>十二、八 太平洋戦争勃発 (米の通帳制)</p> <p>一、十八 日独伊新軍事協定調印</p> <p>二、十五 シンガポール占領</p> <p>六、五 ミッドウェー海戦</p> <p>(味噌、醤油の通帳制、中 高校学年短縮決定)</p> <p>二、一 ガダルカナル島撤退</p> <p>四、一八 山本五十六連合艦隊司令長官戦死</p> <p>九、八 イタリア無条件降伏</p> <p>十二、一 学徒出陣</p>
一九四三	十八		

一九四四	十九	一、二三 町立第四国民学校開校	六、六 連合軍、ノルマンディー上陸
		八、十二 高橋勝義、三鷹町町長に再就任	七、七 サイパン島陥落
		九、—— 日産厚生園と町立第二国民学校に特設警備隊が配置	七、二三 小磯昭内閣
		十二、—— 疎開地域に指定(立川、三鷹、田無、武蔵野、保谷)	八、二三 学徒勤労令公布
		—— 能美防災(株)三鷹工場設立	十、—— 米軍、レイテ島上陸
		井の頭公園池畔の杉並木立伐採	十一、二四 B29の東京初空襲(武蔵野町の中島飛行機武蔵野製作所が目標)
		—— 須賀谷製作所(日産)、植田製作所、吉川メッキ工場(東邦)など設立	

一月〜八月

警防団の警備出勤人数、延三万二七七六名、戦災援護件数二五四二件

二、八 東京天文台本館焼失

二、十六 三鷹町空襲(三鷹駅車庫、深大寺・

北野、大沢に爆弾投下と機銃掃射)

二、十九 三鷹町空襲(新川の高橋勝義町長宅や中央航空研究所に爆弾投下)

三、二八 町議会、国民学校校舎増築・新築

の件、青年学校新築の件を議決

四、二 三鷹町空襲(境浄水場、下連雀二丁目死者二八名)

四、四 三鷹町空襲

二、四 米英ソのヤルタ会談

三、九〜十 東京下町大空襲

三、十七 硫黄島の守備隊全滅

四、一 米軍、沖縄本島に上陸

四、七 鈴木貫太郎内閣

五、七〜八 ドイツ無条件降伏

七、十七 米英ソのポツダム会議

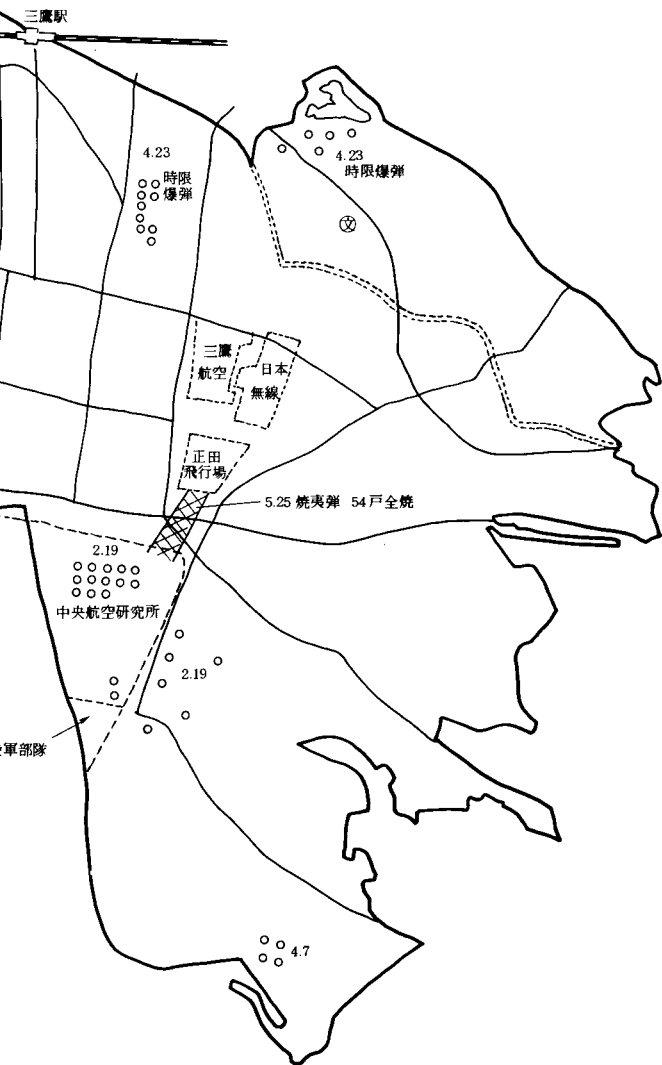
七、二六 ポツダム宣言発表

八、六 広島に原子爆弾投下

		<p>四、七 三鷹町空襲（中仙川、正田飛行機）</p> <p>五、二五 三鷹町空襲（野崎、全焼五半焼九、新川全焼五四戸）</p> <p>五、二九 三鷹町国民義勇隊を編成、野崎小隊（町義勇隊第五大隊第一中隊所屬）は各隣組が一班を組織し、一〜四班で第一分隊、五〜九班で第二分隊、十〜十三班で第三分隊を編成</p> <p>七、二八 三鷹町空襲</p> <p>八、十五 中島飛行機（株）解散</p>	<p>八、八 ソ連、対日参戦</p> <p>八、九 長崎に原子爆弾投下</p> <p>八、十五 ポツダム宣言受諾（太平洋戦争終結）</p> <p>八、十七 東久邇宮稔彦内閣</p> <p>九、二 降伏文書に調印</p>
--	--	---	---

駅北 1500 m

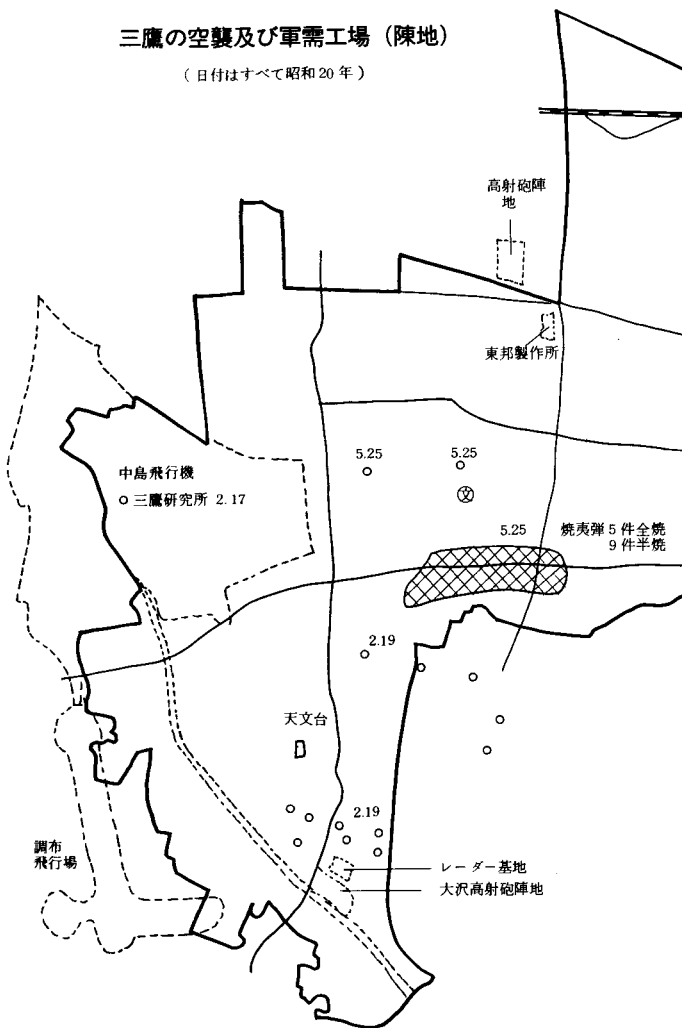
中島飛行機武蔵野製作所



6. 被災地図

三鷹の空襲及び軍需工場（陳地）

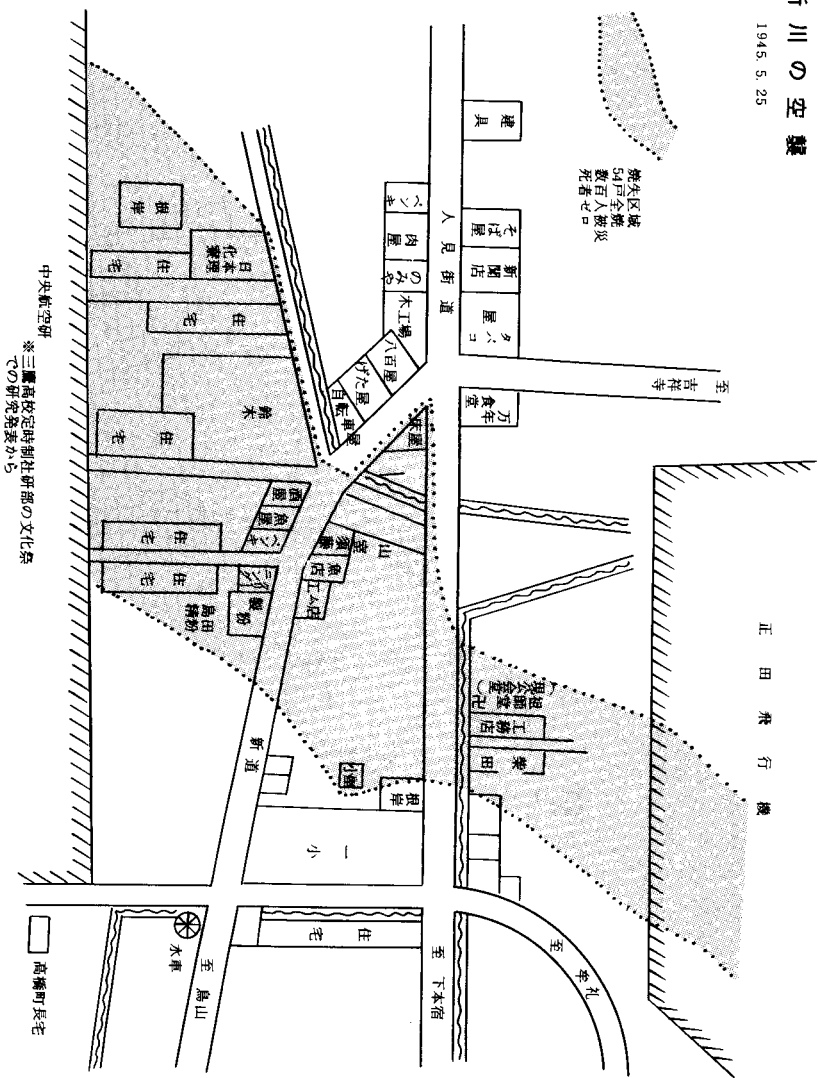
（日付はすべて昭和20年）



新川の空襲

1945. 5. 25

焼失区域
54戸全壊
数百人被災
死者ゼロ

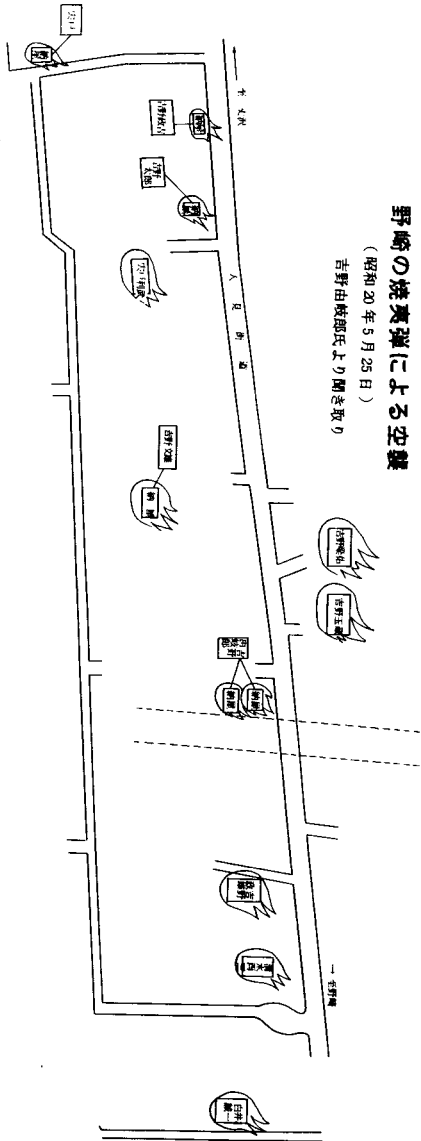


中央航空研
*三鷹高校定時制社研部の文化祭
での研究発表から

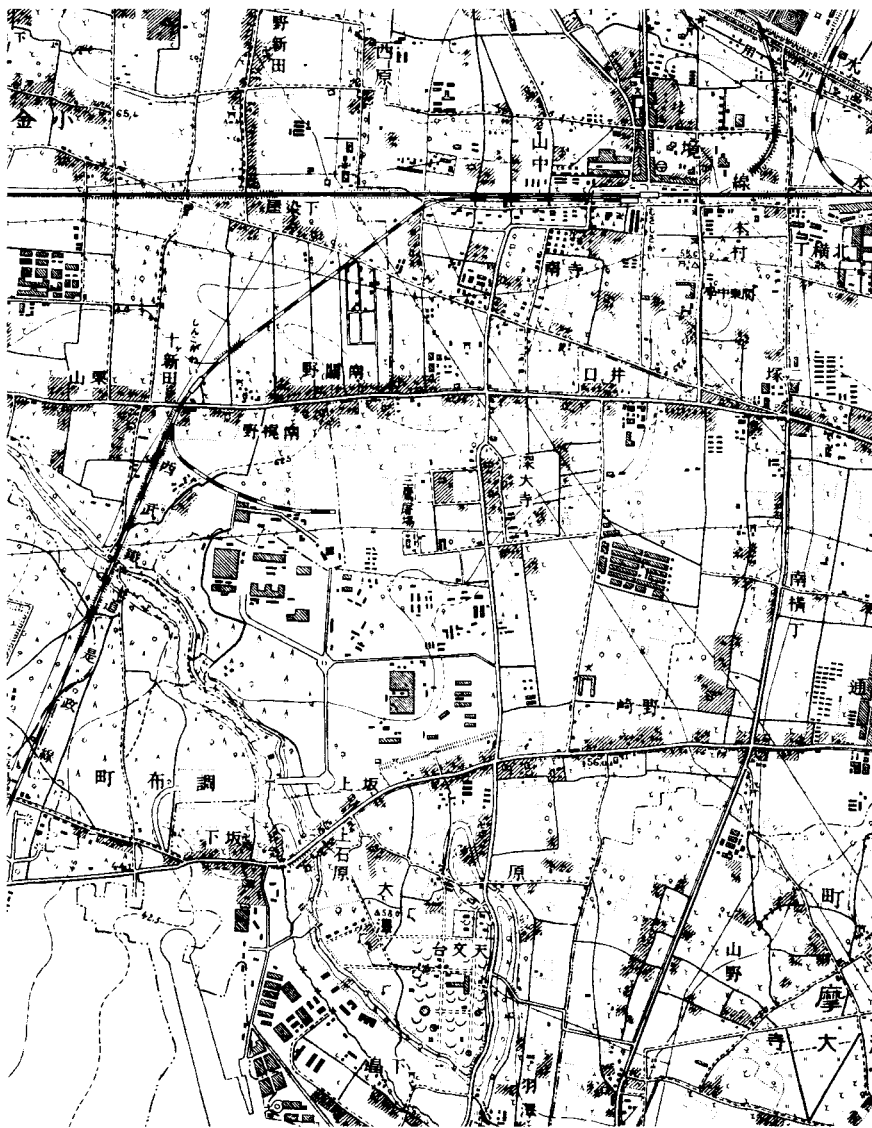
野崎の焼夷弾による空襲

(昭和20年5月25日)

吉野由枝郎氏より聞き取り







編集後記

杉山育三

◆このたび、ようやく念願の戦争体験記録集が出来あがり、戦中派の一人として、その編集に携わってよかったという実感を味わっています。

私は戦時中、沖繩の宮古島守備隊（歩兵三〇連隊）として、出征していたので、いわゆる銃後の守りの苦勞については、余りよく知らなかったわけです。こんど三鷹市民の体験記を読ませていただき思ったことは、戦争による本当の被害者は、老人、そして女や子供たちではなかったかということです。

今年には国際平和年に当りますが、真の平和は、弱い者への慈しみの心をお互いが持つことから始まるのだと思います。

そして、あのいまわしい戦争を再び引き起こさない為に、この体験記録が、若い世代の多くの人々の目にふれ、不戦の誓いとして受け継がれることを願うものです。

尚大沢地区在住の榛澤氏の郷土を愛する心と、若き探究心による資料の発掘に対し敬意を表すると共に、感謝を申しあげたいと思います。

◆三鷹戦時下の記録の編集委員をと依頼があった時、一も二もなくお受けした。

私事にわたるが、私は過去に、中島飛行機の記録、武蔵野市の空襲の記録を発表したことがある。

「では三鷹市に住んでおりながら三鷹のはどうなのか」という意見も聞いておつたので何時かは、三鷹のことも書いてみたいと思つていたからである。それで最初の編集委員会の時、三鷹の中島研究所のことも調べてみたいなどと発言したものであつた。しかし実際になつて見ると、思つたことは出来なくてとうとう時間がたつてしまった。

全く慙愧にたえない。「いま語り伝えたいこと」全体としては三鷹市民の関心が高く予想した以上に原稿が集り改めて市民の平和への意識の強いことを認識した次第。

渡辺 ミドリ

◆今年、ちょうど戦後四十年にあたり。戦後に区切りなどという年はないけれども、振り返つてみる一つの時期ではある。もうひとつ、今年、防衛費一パーセント枠云々で大いにゆれた年でもある。これを考えるに際しても、あの第二次世界大戦とは何だったのかを、もう一度見直してみる価値は大いと思う。

といつても戦後生まれの私である。私個人の経験から言えば、あの戦争のことはほとんど知らずに

育った。あえて話してくれる大人も回りにはいなかったし、こちらの方も「戦争」というものがどんなものか認識もできないでいた。それが、市の社会教育の講座「戦中戦後を考える会」（その後、わたちの会という自主グループになる）に、参加して講師の川村善二郎先生の話と、三鷹に住んでいらつしやる方々の体験談を少しづつ聞くにつれ、ことの重大さがわかりかけてきた。そして、この『いま、語り伝えたいこと』の編集に立ち合い、さらに体験談のもつ、なまなましさ、信憑性に圧倒された次第である。

今回は、市民相談室の努力で進められたわけだが、これに続いて、市民の自然のもりあがりから編まれる本がどんどん作られることを強く希望する。

戦争の問題は、今日に続くものだからである。

原 田 満寿郎

◆○終戦時に上層部の指令で、どの官庁も戦時にかゝる記録・資料は焼却されました。三鷹町役場も同様とのこと。個人の体験記と公的な記録・資料とを表裏併せ、事実の正確さを配慮した提案は、必然的に無となりました。

○本土空襲まで「前線と銃後」といわれていました。本土空襲によって銃後は前線と化し、三鷹町民も戦争に直接捲き込まれました。戦いの惨酷さ、悲惨さの苦渋を全面的にうけ、その状況が克明に生々

しく記るされている貴重な体験記で綴られることになりました。

○どの体験記にも共通する意識と感覚と願いとあったものは「反戦」そのものと「平和への祈り」でした。このことが、当然のことながら、この本の主軸になっています。

○人間が理性を失って人間でなくなる戦争は、恐ろしい悲惨の極限です。このことを、戦争を知らない世代に伝え、平和を何んとしてでも守らせた願いを、かみしめ、この仕事にかゝわってきました。

黒田みや

◆今回編集委員の末席に加えていたことは私にとつて大変貴重な体験であった。

終戦の時十七才だった私は戦中戦後の苦勞も人並に味わったが、今やその記憶も大分風化しかけているように思う。

そんな時、市民の方々によつて丹念に綴られた沢山の体験記を読ませていただいた。そのひとつひとつが、四十年の歲月にも消えることのない戦争の日々の苦しみをまざまざと訴えかけている。戦争については語りつくせるものではないが『いま語りつたえなければならぬこと』を本にすることが出来たのはすばらしいと思う。三鷹のことをもっと知りたいと願っている私にとつては特に大切なことであった。

そして又考えるのだが、戦争の証人としての私達の世代の責任は、日常の中にこそ、平和を破るも

のの兆しをきびしく見つけて行くことではないかと。

三鷹戦時下の記録編集委員会委員（敬称略）

井上 五郎（委員長） 杉山 育三（副委員長）

栗田 良平 渡辺ミドリ 原田満寿郎

黒田 みや



写真等資料提供者（順不同・敬称略）

宮川 元克

橋本 晃

榛澤 藤雄

小川 秀男

川田静二郎

榛澤 茂量

丹生 吉彦

国際基督教大学図書館

運輸省船舶技術研究所

科学技術庁航空宇宙技術研究所

東京大学東京天文台

明星学園

第二小学校

都立三鷹高校

朝日新聞・読売新聞

わたちの会

富士重工業(株)

いま語り伝えたいこと

～三鷹戦時下の体験～

昭和61年3月24日発行

発行 三鷹市（三鷹市野崎3-1）

編集 三鷹戦時下の記録編集委員会
三鷹市総務部市長室市民相談担当

印刷 社会福祉法人
東京コロニー東村山印刷所

—— 三鷹市民憲章 ——

わたくしたちは、郷土三鷹を愛し、平和な、みどり豊かなまちをつくることを願い、この憲章を定めます。

- 1 互いに助け合い、ともに生きるよろこびを分かち合うまちをつくります。
- 2 清潔な環境を保ち、心身ともにすこやかに暮らせるまちをつくります。
- 3 社会のきまりを尊重し、明るいまちをつくります。
- 4 歴史を大切にし、新しい文化をそだてるまちをつくります。
- 5 自治をになう市民としての自覚を深め、互いに学び合うまちをつくります。

●いま語り伝えたいこと